

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第219集

三千束遺跡群 ITIMITI

## 市道遺跡Ⅴ

平馬塚遺跡群 HEIMADUKA

## 平馬塚遺跡Ⅱ

北裏遺跡群 KITAULA

## 北裏遺跡Ⅱ

宮浦遺跡群 MIYAULA

## 宮浦遺跡Ⅰ

北畑遺跡群 KITABATAKE

## 北畑遺跡Ⅲ

2014.3

佐久建設事務所  
佐久市教育委員会

三千束遺跡群 ITIMITI

## 市道遺跡Ⅴ

平馬塚遺跡群 HEIMADUKA

## 平馬塚遺跡Ⅱ

北裏遺跡群 KITAULA

## 北裏遺跡Ⅱ

宮浦遺跡群 MIYAULA

## 宮浦遺跡Ⅰ

北畑遺跡群 KITABATAKE

## 北畑遺跡Ⅲ

2014.3

佐久建設事務所

佐久市教育委員会





遺跡周辺空中写真（株）こうそく撮影・作成



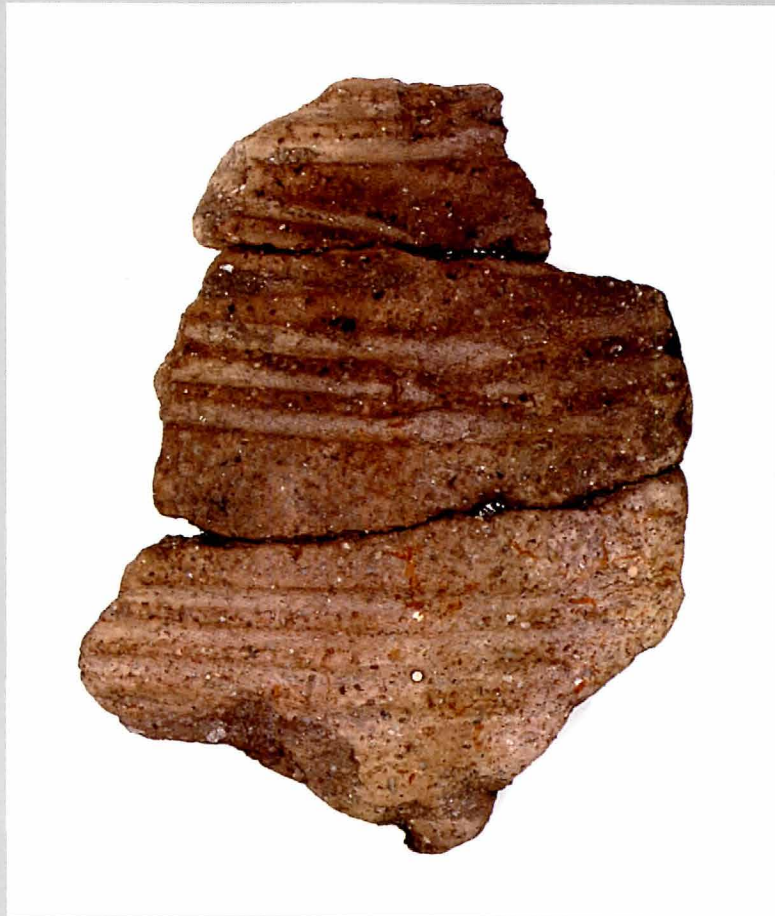
宮浦遺跡Ⅰ・北畑遺跡Ⅲ空中写真（池田測量設計(有)撮影・作成）



宮浦遺跡 I 出土 弥生時代中期の土器



宮浦遺跡 I 出土 弥生時代中期の土器



平馬塚遺跡 II 出土 弥生時代前期の土器



北畑遺跡Ⅲ Ta1 出土 青磁碗 (中国龍泉窯 13C)



北畑遺跡Ⅲ Ta1 出土 青磁盤 (中国龍泉窯 13C)

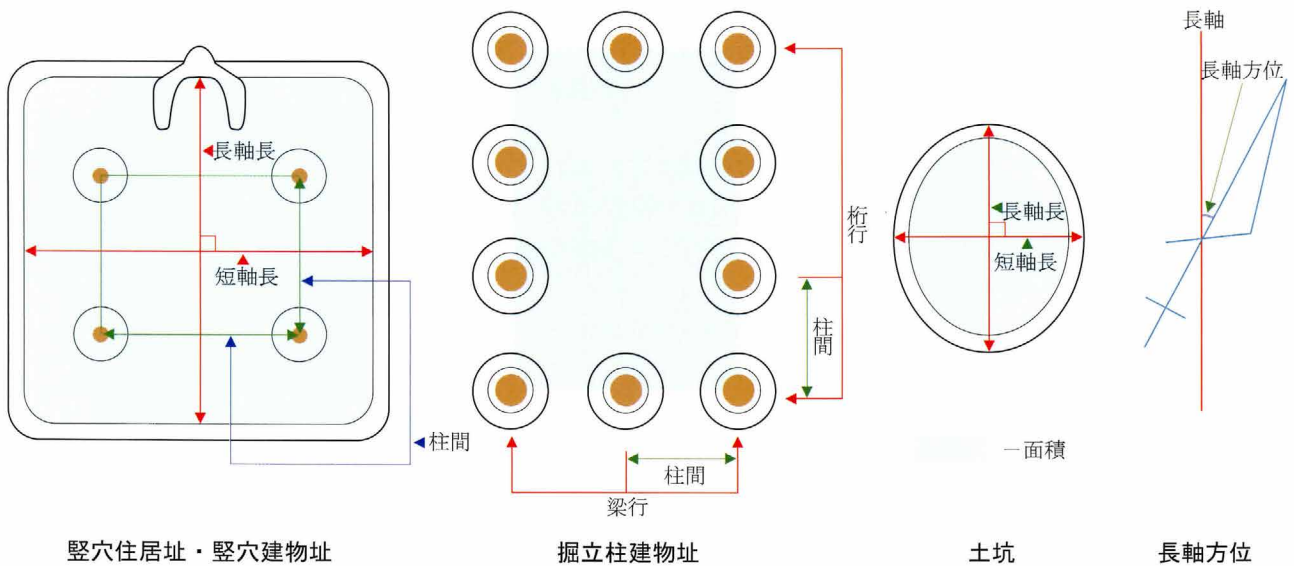
## 例 言

- 1 本書は長野県佐久市に所在する三千束遺跡群市道遺跡Ⅴ・平馬塚遺跡群平馬塚遺跡Ⅱ・北裏遺跡群北裏遺跡Ⅱ・宮浦遺跡群宮浦遺跡Ⅰ・北畑遺跡群北畑遺跡Ⅲの発掘調査報告書である。
- 2 調査は平成18年度：国補道路改良事業（国道142号佐久市佐久南拡幅(1)）、平成19年度：国補道路改築事業（(国)142号佐久市佐久南拡幅(1)）に伴い、記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名及び所在地  
市道遺跡Ⅴ（IMV） 佐久市三塚  
平馬塚遺跡Ⅱ（HMTⅡ） 佐久市桜井  
北裏遺跡Ⅱ（TKUⅡ） 佐久市伴野  
宮浦遺跡Ⅰ（SMRⅠ） 佐久市桜井  
北畑遺跡Ⅲ（SKBⅢ） 佐久市桜井
- 4 調査期間及び面積  
平成18年度  
発掘調査 平成18年10月25日～12月12日  
整 理 平成18年12月13日～平成19年3月20日  
開発面積 33,365.7㎡ 調査面積 4,000㎡  
平成19年度  
発掘調査 平成19年4月16日から10月16日  
整 理 平成19年10月17日～平成20年3月19日  
開発面積 11,600㎡ 調査面積 3,400㎡  
平成24年度  
整 理 平成24年10月5日～平成25年3月21日  
平成25年度  
整 理 平成25年7月1日～平成26年3月17日
- 5 当遺跡の発掘調査概要は佐久市教育委員会文化財課「年報16」・「年報17」でも報告しているが、本書が最終報告である。
- 6 本書に掲載した地図は佐久市発行の都市計画図（1：2,500）、佐久市教育委員会作成の遺跡詳細分布図（1：5,000）である。
- 7 本書で扱っている座標は旧測地系である。
- 8 本書の作成は小林真寿が行った。
- 9 出土遺物の自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
- 10 空中写真撮影及びこれをもとにした、遺跡全体図作成は平成18年度は（株）こうそく、平成19年度は池田測量設計有限会社が行った。
- 11 本書及び図面・写真などの調査記録、出土遺物は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

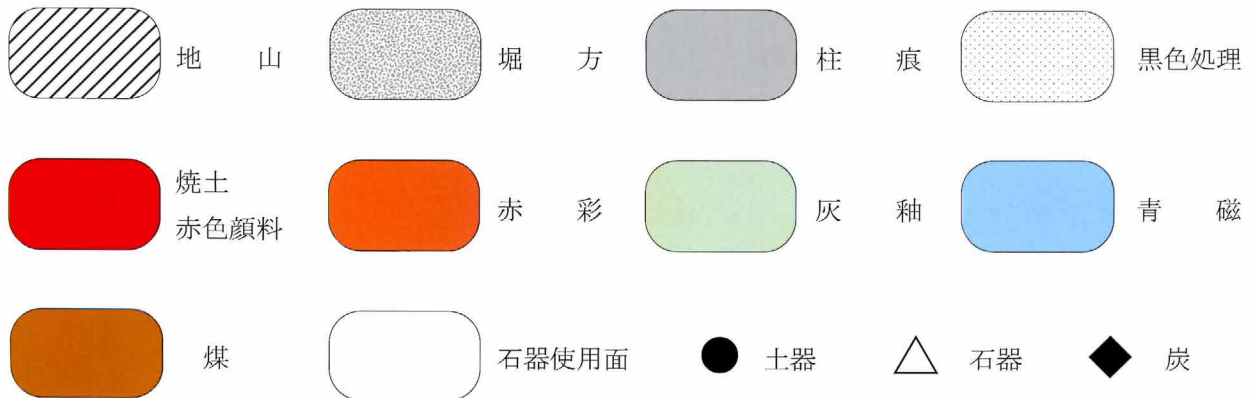


## 凡 例

- 1 遺構の略記号は竪穴建物址－H、掘立柱建物址－F、竪穴建物址－T a、土坑－D、溝址－M、ピット－Pである。
- 2 全ての挿図には縮尺を記した。（基準値は、遺構－1/80、遺物－1/40である。）
- 3 遺構の海拔標高は遺構毎に統一し、水系標高をスケール上に「標高」として記してある。
- 4 土層の色調は1999年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
- 5 遺物の挿図・写真・観察表番号は一致する。単位はcmである。
- 6 調査区の区割は公共座標にしたがい、4×4mの間隔に設定した。
- 7 遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。遺構の面積は床面積である。深度（壁残高）は最大値である。



- 8 挿図中における網掛は以下の表現である。



- 9 古代の土器の時期区分については、2005年 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第126集「聖原」第5分冊の区分・呼称を用いた。

# 目 次

口絵 1～4

例言

凡例

目次

第 I 章 発掘調査の経緯 .....	1
第 1 節 調査の経緯 .....	1
1 発掘調査に至る経緯 .....	1
2 調査の経緯 .....	4
第 2 節 遺跡周辺の環境 .....	5
1 遺跡の地理的環境 .....	5
2 遺跡の歴史的環境 .....	6
第 3 節 調査の方法 .....	8
第 4 節 試掘調査 .....	12
第 5 節 基本層序 .....	12
第 6 節 検出遺構・遺物の概要 .....	13
第 II 章 市道遺跡 .....	13
第 1 節 住居址 .....	13
第 2 節 土坑 .....	16
第 3 節 ピット .....	20
第 4 節 水田址 .....	21
第 5 節 遺構外出土遺物 .....	23
第 III 章 平馬塚遺跡 II .....	27
第 1 節 溝址 .....	27
第 2 節 土坑 .....	30
第 3 節 ピット .....	30
第 IV 章 北裏遺跡 II .....	34
第 1 節 溝址 .....	34
第 2 節 遺構外出土遺物 .....	36
第 V 章 宮浦遺跡 I .....	38
第 1 節 住居址 .....	38
第 2 節 掘立柱建物址 .....	72
第 3 節 土坑 .....	72
第 4 節 溝址 .....	83

第5節	ピット	90
第6節	遺構外出土遺物	103
第VI章 北畑遺跡Ⅲ		115
第1節	住居址	115
第2節	竪穴建物址	116
第3節	土坑	120
第4節	ピット	124
第5節	遺構外出土遺物	128
第VII章 まとめ		129
付編		132

#### 写真図版

1	市道遺跡Ⅴ	H1、H2号住居址
2	市道遺跡Ⅴ	H3号住居址、遺物出土状況
3	市道遺跡Ⅴ	D1、D2号土坑、水田址
4	市道遺跡Ⅴ	全景（西から）、全景（北から）
5	市道遺跡Ⅴ	H1、H2号住居址出土遺物
6	市道遺跡Ⅴ	H2、H3号住居址出土遺物
7	市道遺跡Ⅴ	H3号住居址出土遺物、遺構外出土遺物
8	市道遺跡Ⅴ	遺構外出土遺物
9	平馬塚遺跡Ⅱ	D1、D2号土坑
10	平馬塚遺跡Ⅱ	D3号土坑、M1号溝址
11	平馬塚遺跡Ⅱ	M2号、M4号溝址
12	平馬塚遺跡Ⅱ	M3号溝址、全景（西半）
13	平馬塚遺跡Ⅱ	全景（東半）、M2号溝址出土遺物
14	平馬塚遺跡Ⅱ	M2号、M4号溝址出土遺物
15	平馬塚遺跡Ⅱ	M3号溝址出土遺物
16	北裏遺跡Ⅱ	M1・M2号溝址（西から）、M1・M2号溝址（東から）
17	宮浦遺跡Ⅰ	全景（北から）、M1号溝址、M2号溝址出土遺物
18	宮浦遺跡Ⅰ	H1号、H2号住居址
19	宮浦遺跡Ⅰ	H3号、H4号住居址
20	宮浦遺跡Ⅰ	H5号住居址、カマド
21	宮浦遺跡Ⅰ	H6号、H7号住居址
22	宮浦遺跡Ⅰ	H7号住居址カマド、H8号住居址
23	宮浦遺跡Ⅰ	H9号住居址、カマド
24	宮浦遺跡Ⅰ	H10号・11号住居址、H10号住居址カマド
25	宮浦遺跡Ⅰ	H12号、H13号住居址
26	宮浦遺跡Ⅰ	H14号、H15号住居址
27	宮浦遺跡Ⅰ	H16号、H17号住居址
28	宮浦遺跡Ⅰ	H18号、H19号住居址
29	宮浦遺跡Ⅰ	H19号住居址カマド、H20号住居址

- 30 宮浦遺跡Ⅰ F1号、F2号、F3号掘立柱建物址
- 31 宮浦遺跡Ⅰ F4号掘立柱建物址、D1号土坑
- 32 宮浦遺跡Ⅰ D2号、D3号土坑
- 33 宮浦遺跡Ⅰ D4号、D5号土坑
- 34 宮浦遺跡Ⅰ D6号、D7号土坑
- 35 宮浦遺跡Ⅰ D9号、D10号土坑
- 36 宮浦遺跡Ⅰ D11号、D12号土坑
- 37 宮浦遺跡Ⅰ D13号、D14号土坑
- 38 宮浦遺跡Ⅰ D15号、D16号土坑
- 39 宮浦遺跡Ⅰ D17号、D18号土坑
- 40 宮浦遺跡Ⅰ M1号、M2号溝址（南半）
- 41 宮浦遺跡Ⅰ M2号溝址（北半）、M2号溝址礫検出状況（北半）
- 42 宮浦遺跡Ⅰ 全景（南から）、（東から）
- 43 宮浦遺跡Ⅰ H1号、H2号、H3号、H4号住居址出土遺物
- 44 宮浦遺跡Ⅰ H5号、H7号住居址出土遺物
- 45 宮浦遺跡Ⅰ H7号住居址出土遺物
- 46 宮浦遺跡Ⅰ H7号、H8号、H9号住居址出土遺物
- 47 宮浦遺跡Ⅰ H9号住居址出土遺物
- 48 宮浦遺跡Ⅰ H9号、H10号住居址出土遺物
- 49 宮浦遺跡Ⅰ H11号、H12号、H13号、H14号住居址出土遺物
- 50 宮浦遺跡Ⅰ H14号住居址出土遺物
- 51 宮浦遺跡Ⅰ H16号、H17号、H18号、H19号、H20号住居址出土遺物、掘立柱建物址出土遺物
- 52 宮浦遺跡Ⅰ D1号、D2号、D3号、D5号土坑出土遺物、D6号、D7号、D9号、D10号土坑出土遺物
- 53 宮浦遺跡Ⅰ D11号、D12号、D13号、D18号土坑出土遺物、M1号溝址出土遺物
- 54 宮浦遺跡Ⅰ M1号、M2号溝址出土遺物
- 55 宮浦遺跡Ⅰ M2号溝址出土遺物
- 56 宮浦遺跡Ⅰ M2号溝址出土遺物
- 57 宮浦遺跡Ⅰ M2号溝址出土遺物
- 58 宮浦遺跡Ⅰ M2号溝址出土遺物
- 59 宮浦遺跡Ⅰ M2号溝址出土遺物
- 60 宮浦遺跡Ⅰ M2号、M3号、M4号、Pit6、8、9、15、16出土遺物
- 61 宮浦遺跡Ⅰ Pit10、18、22、51、52、62、63、73、76、77、78、80、81、83、87、120、121出土遺物
- 62 宮浦遺跡Ⅰ 試掘出土遺物、遺構外出土遺物
- 63 北畑遺跡Ⅲ H1号、H2号住居址
- 64 北畑遺跡Ⅲ H2号住居址カマド、H3号住居址
- 65 北畑遺跡Ⅲ H4号住居址、Ta2号、Ta1号竪穴建物址
- 66 北畑遺跡Ⅲ D1号、D2号土坑
- 67 北畑遺跡Ⅲ D3号、D4号土坑
- 68 北畑遺跡Ⅲ D5号、D6号土坑
- 69 北畑遺跡Ⅲ D7号、D8号、D9号土坑
- 70 北畑遺跡Ⅲ D10号、D11号土坑
- 71 北畑遺跡Ⅲ 全景（西から）、（南から）
- 72 北畑遺跡Ⅲ H1号、H2号住居址出土遺物
- 73 北畑遺跡Ⅲ H3号住居址、Ta1号竪穴建物址、土坑、Pit、遺構外出土遺物



# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 調査の経緯

### 1 発掘調査に至る経緯

中部横断自動車道佐久南 I C の設置が決まり、佐久建設事務所は I C と国道 1 4 2 号線への接続道路の施行と、4 車線化工事を計画した。これに伴い、用地買収が終了した部分から佐久建設事務所と調整を行い、平成 1 4 年～平成 2 1 年にかけて 7 回の試掘調査を実施した。その日程は以下のとおりであり、調査の詳細については日程下段に記載した調査報告書に掲載されている。

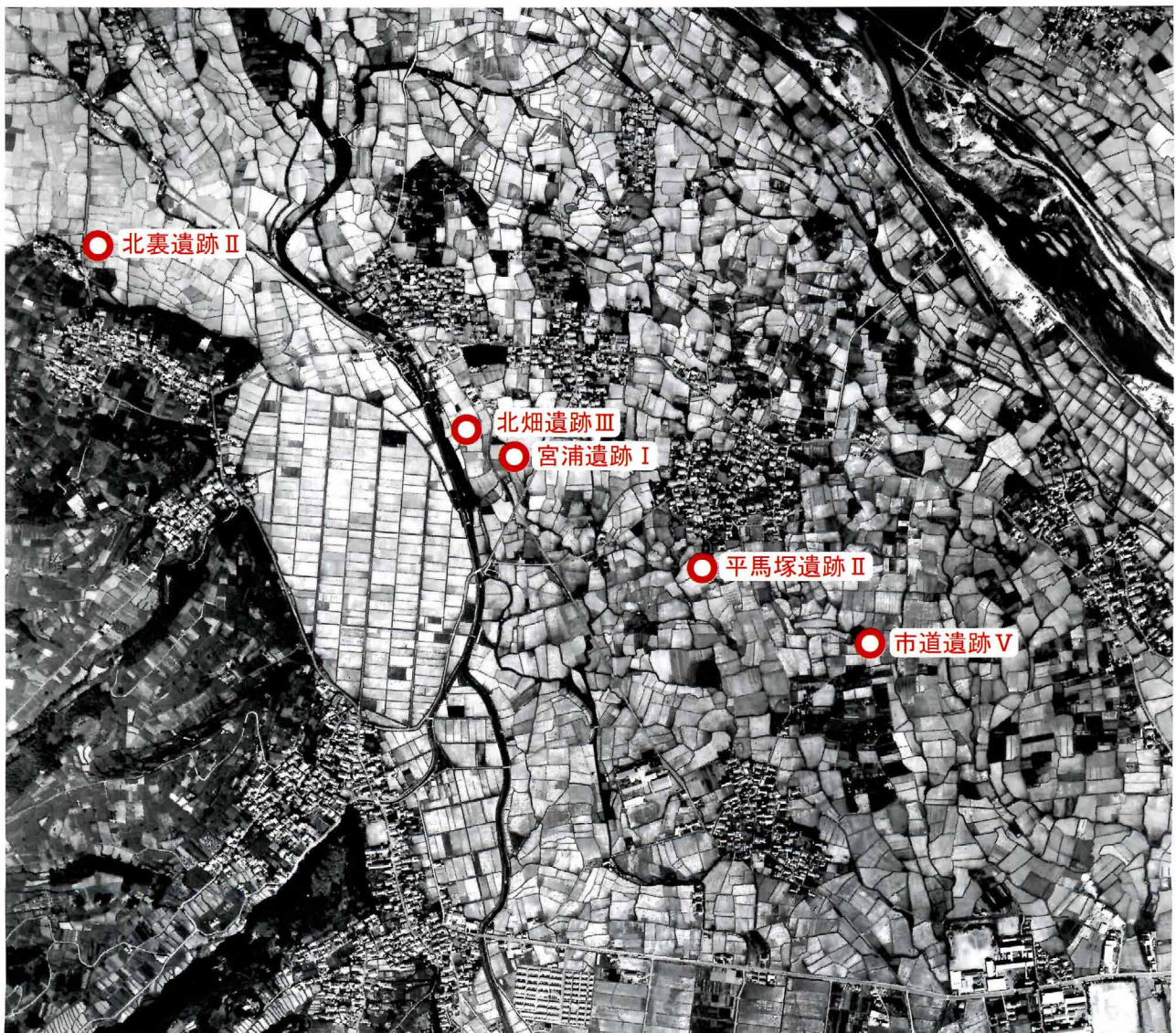
1. 未周知 - 平成 1 4 年 7 月 1 日～ 4・23・24 日  
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 1 2 0 集 「市内遺跡発掘調査報告書 2 0 0 2」
2. 北裏遺跡群（隣接） - 平成 1 5 年 1 1 月 1 8 日～ 2 1 日  
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 1 2 4 集 「市内遺跡発掘調査報告書 2 0 0 3」
3. 宮浦遺跡群 2 - 平成 1 7 年 1 2 月 5 日～ 1 0 日  
平成 1 8 年 3 月 1 7 日～ 2 3 日



第 1 図 市道遺跡 V・平馬塚遺跡 II・北裏遺跡 II・宮浦遺跡 I・北畑遺跡 III 位置図 (1 : 50,000)

- 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第143集 「市内遺跡発掘調査報告書2005」
4. 三千束遺跡群3－平成18年3月13日～16日  
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第143集 「市内遺跡発掘調査報告書2005」
5. 町田遺跡群3－平成18年6月1日  
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第152集 「市内遺跡発掘調査報告書2006」
6. 宮浦遺跡群3・平馬塚遺跡群4－平成20年12月17日～19日  
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第171集 「市内遺跡発掘調査報告書2008」
7. 平馬塚遺跡群5－平成21年7月21・22日  
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第184集 「市内遺跡発掘調査報告書2009」

以上の試掘調査の結果をふまえ、試掘調査毎に調査終了後、佐久建設事務所と保護協議を行い遺跡の保存を図ったが、遺跡の破壊は回避出来なかったため、平成18年10月25日～12月12日にかけて三千束遺跡群（三千束遺跡群市道遺跡Ⅴ・平馬塚遺跡群平馬塚遺跡Ⅱ、北裏遺跡群北裏遺跡Ⅱ）〔佐久建設事務所から佐久市教育委員会に発掘調査依頼：94条第1項－平成18年3月1日、佐久市教育委員会から長野県教育委員会に試掘調査の意見書を添えて副申－平成18年3月2日、長野県教育委員会から佐久市教育委員会に発掘調査の通知－平成18年3月6日、佐久市教育委員会から長野県教育委員



遺跡周辺の地形（昭和47年当時の航空写真（株）東洋航空事業撮影）

会・佐久建設事務所に試掘調査終了・結果報告ー平成18年4月4日、佐久建設事務所から佐久市教育委員会に発掘調査費の見積り依頼ー平成18年7月11日、佐久市教育委員会から佐久建設事務所に発掘調査費の見積り回答ー平成18年7月13日、佐久市教育委員会と佐久建設事務所間で埋蔵文化財発掘調査の契約締結ー平成18年8月3日]、平成19年4月16日～10月16日にかけて宮浦遺跡群他（宮浦遺跡群宮浦遺跡Ⅰ・北畑遺跡群北畑遺跡Ⅲ）[佐久建設事務所から依頼：94条第1項ー平成17年10月28日、佐久市教育委員会から長野県教育委員会に試掘調査の意見書を添えて副申ー平成17年11月1日、長野県教育委員会から佐久市教育委員会に発掘調査の通知ー平成17年11月14日、佐久市教育委員会から長野県教育委員会・佐久建設事務所に試掘調査終了・結果報告ー平成18年4月4日、佐久建設事務所から佐久市教育委員会に発掘調査費の見積り依頼ー平成19年4月3日、佐久市教育委員会から佐久建設事務所に発掘調査費の見積り回答ー平成19年4月4日、佐久市教育委員会と佐久建設事務所間で埋蔵文化財発掘調査の契約締結ー平成19年4月16日]の記録保存調査を実施した。また、現国道下については調査中の安全確保が困難であること、工事が遺構面に達しない等の状況により協議の結果、調査は行わない事となった。

平成24年10月5日報告書作成のため、佐久建設事務所と受託契約を締結。整理調査を再開する。[佐久市教育委員会から佐久建設事務所に調査着手可能な通知ー平成24年8月27日、佐久建設事務所から佐久市教育委員会に整理調査費の概算見積り依頼ー平成24年8月29日、回答ー平成24年9月7日、佐久建設事務所から佐久市教育委員会に整理調査費の見積り依頼ー平成24年9月24日、回答ー平成24年9月28日、佐久建設事務所から佐久市教育委員会に埋蔵文化財調査委託契約の依頼ー平成24年10月4日、受託契約ー平成24年10月5日（期間：平成24年10月5日～平成25年3月21日）]平成25年7月1日佐久建設事務所と受託契約を締結。平成26年3月17日すべての調査を終了し、報告書を刊行。

## 2 調査体制

### 平成18年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	三石 昌彦			
事務局	社会教育部長	柳澤 義春				
	文化財課長	中山 悟				
	文化財調査係長	高柳 正人				
	文化財調査係	林 幸彦	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也	
		富沢 一明	神津 格	上原 学	出澤 力	

### 平成19年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	木内 清			
事務局	社会教育部長	柳澤 義春				
	社会教育次長	山崎 明敏				
	文化財課長	中山 悟（平成19年6月18日退職）				
		森角 吉晴（平成19年7月1日就任）				
	文化財調査係長	高柳 正人				
	文化財調査係	林 幸彦	並木 節子（平成19年10月～）	須藤 隆司		
		小林 眞寿	羽毛田卓也	富沢 一明	神津 格	
		上原 学	出澤 力			

### 平成24・25年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	土屋 盛夫		
事務局	社会教育部長	伊藤 明弘（平成24年度）	矢野 光宏（平成25年度）		
	文化財課長	吉澤 隆（平成24年度）	三石 宗一（平成25年度）		
	文化財調査係長	三石 宗一（平成24年度）	比田井清美（平成25年度）		
	文化財調査係	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也（平成24年度）	
		富沢 一明	上原 学	神津 一明	久保浩一郎
		並木 節子（平成24年度）			
	嘱託職員	林 幸彦			



調査体制	調査担当者	小林 眞寿			
	調査員	甘利 隆雄	有賀 晴美	池田勝吉郎	上原 幸子
		加藤 信一	狩野小百合	小林喜久子	小林 幸子
		小林 敏雄	小山 功	堺 益子	清水 律子
		田中ひさ子	花岡美津子	広瀬梨恵子	堀籠 滋子
		堀籠 保子	宮川真紀子	宮川百合子	百瀬 秋男
		山口ひとみ	山田 叔正	山田 英輝	山村 容子
		柳沢 孝子	柳澤千賀子	油井 満芳	渡辺久美子

## 2 調査の経緯

平成18年度

平成18年

- 8月 3日 佐久建設事務所、佐久市教育委員会間で埋蔵文化財発掘調査契約を締結。
- 10月 2日 重機による表土除去開始。
- 10月25日 市道遺跡－調査員による遺構検出・掘り下げ・記録を開始。測量基準点設定開始。
- 10月31日 測量基準点設定終了。
- 11月 9日 市道遺跡調査終了。平馬塚遺跡－遺構検出・掘り下げ・記録着手。
- 11月15日 平馬塚遺跡調査終了。
- 12月 4日 北裏遺跡－遺構検出・掘り下げ・記録着手。
- 12月 4日 市道遺跡未調査部分の試掘→遺構は存在しない。
- 12月 6日 市道遺跡・平馬塚遺跡空撮・空測。
- 12月 8日 終了。
- 12月11日 機材撤収。
- 12月12日 北裏遺跡空撮・空測。現場調査の終了を佐久建設事務所に連絡。
- 12月13日 発掘調査終了報告書を長野県教育委員会に、埋蔵文化財発見届けを佐久警察に提出。

平成19年

- 1月 5日 整理作業－遺物の洗浄・注記・接合、記録（図面・写真等）の整理。
- 2月13日 空中写真測量図の校正。
- 2月14日 現場埋め戻し・水口の復旧着手。
- 2月23日 現場埋め戻し・水口の復旧終了。
- 2月28日 空中写真測量図完成・納品。
- 3月20日 平成18年度の調査終了。

平成19年度

平成19年

- 4月16日 佐久建設事務所、佐久市教育委員会間で埋蔵文化財発掘調査契約を締結。  
重機による表土除去開始。
- 4月25日 エステアザレア前の境界杭が抜かれていたため、地権者立ち会いのもと復旧。
- 4月26日 調査員による遺構検出・掘り下げ・記録開始（R142号線北側）。測量基準点設定。
- 5月11日 調査区北側の水田から出水により、土手が崩壊する危険が認められたため、木杭・コンパネによる補強を行う。
- 5月17日 仮設電気工事。
- 5月23日 調査員の遺構測量システム操作研修（メーカーによる）1日目。
- 5月24日 調査員の遺構測量システム操作研修（メーカーによる）2日目。
- 5月26日 大雨による増水で、R142号線北側西端部分の用水路が決壊危険が認められたため、調査区内の遺構が存在しない部分を埋め戻し、用水路の補強を行う。
- 5月30日 野沢中学生6名職場体験で発掘調査を行う。
- 7月23日 R142号線南側の調査に着手。
- 8月 8日 R142号線北側の調査終了。
- 9月19日 空中写真撮影のための全面清掃着手。

- 10月16日 ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。現場調査終了。
- 10月17日 整理作業－遺物の洗浄・注記。
- 10月26日 遺跡の埋め戻し開始。
- 11月27日 遺跡の埋め戻し終了。

平成20年

- 1月7日 整理作業－遺物の接合・復元・拓本・実測、遺構図面の修正、写真の整理。空中写真測量図の校正。
- 2月15日 空中写真測量図・写真の納品。
- 3月19日 平成19年度の調査終了。

平成24年度

平成24年

- 10月5日 報告書作成のため、佐久建設事務所と佐久市教育委員会間で契約を締結。報告書作成のための整理調査再開。

平成25年

- 3月21日 平成24年度の調査終了。

平成25年度

平成25年

- 7月1日 平成25年度の調査開始。

平成26年

- 3月17日すべての調査・作業終了。報告書刊行。

## 第2節 遺跡周辺の環境

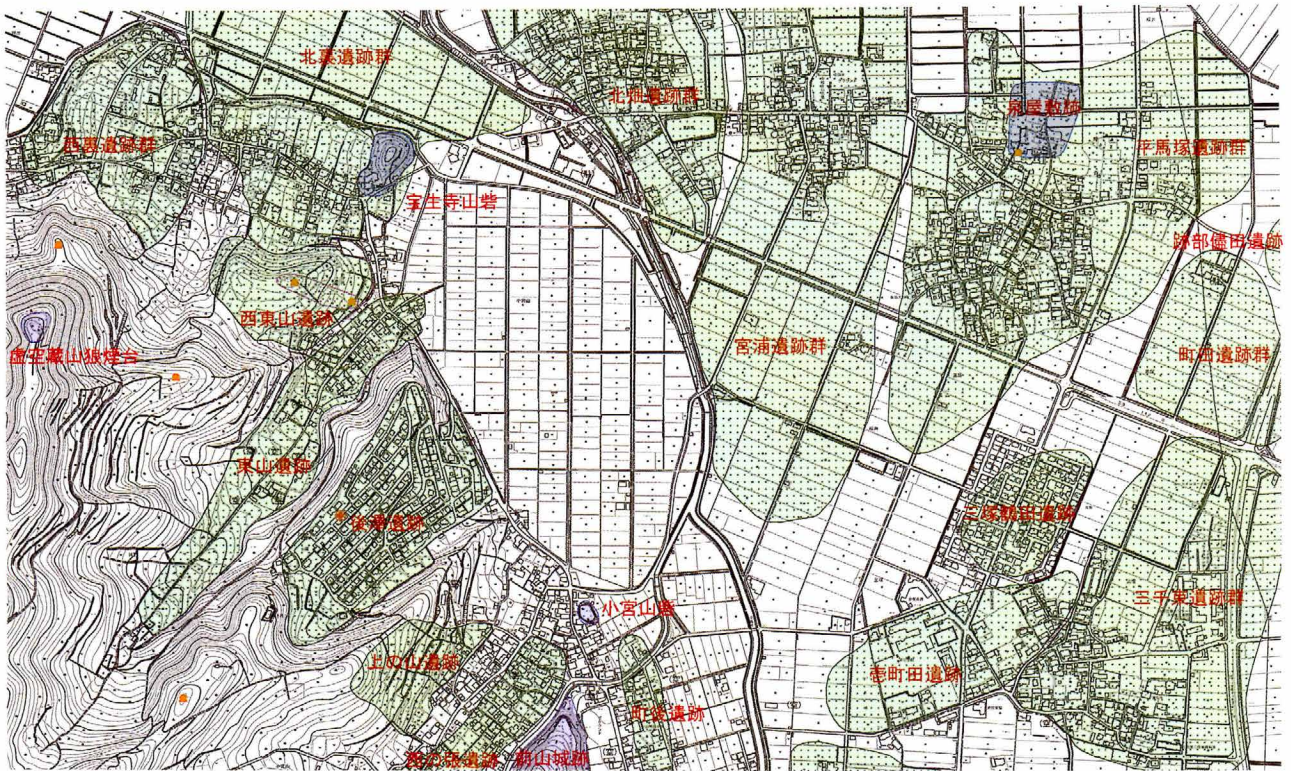
### 1 遺跡の地理的環境

新生「佐久市」は平成17年4月1日、旧佐久市、白田町、浅科村、望月町が合併し誕生した。位置的には長野県の東部にあり、群馬県境を有する。日本で最も海から遠い地点が市内に存在する内陸の市であり、高燥冷涼で寒暖の差が大きい気候で、年間降水量は1,000mm前後と少なく、年間日照時間2,000時間前後の晴天率の高い地域でもある。

今回調査を実施した市道、平馬塚、北裏、宮浦、北畑遺跡は佐久市のほぼ中央に位置し、標高650m前後を測る。北側を南東から北西に流れる千曲川と、これに平行するように遺跡の北側を流れる片貝川に挟まれた河岸段丘上の、両河川が形成した氾濫源沖積地微高地上に展開する。現在は基盤整備事業が終了した平坦な水田地帯であるが、旧地形は微高地が複雑に展開しており、微高地上は居住地域、低地部分は水田として利用されていた可能性が強い。地質



市道遺跡から浅間山を臨む



第2図 周辺遺跡分布図

的には湖沼堆積層である瓜生坂累層の上に、八ヶ岳火山の初期噴出物の一つである春日火山岩類が堆積し、更にこの上に堆積した河川堆積物で構成されている。また、土壌的には細粒灰色低地土壌（灰褐色系）、中粗粒灰色低地土壌（灰褐色系）、礫質粒灰色低地土壌（灰褐色系）が入り組んでいる。植生は水田の雑草群落である。なお、原始・古代の片貝川は、現在よりも規模が大きな河川であった可能性が近年の発掘調査により高くなってきた。

## 2 遺跡の歴史的環境

調査を実施した5遺跡が展開する泉野、桜井、伴野地域周辺の遺跡の様相を時代別に概観する。これらの遺跡が存在する平地部分には旧石器時代の遺跡は発見されていない。周辺部では伴野の多福寺の南東山頂に位置する虚空蔵山猿煙台で中世の竪穴建物址の覆土中から黒曜石製のナイフ形石器や両面調整の先頭器などが出土している。また、当遺跡から山頂に向かい6 kmほど上った美笹の別荘地には、23,000年以前の年代が推定された立科F遺跡が存在する。根岸の榛名平遺跡でも19点の旧石器が出土しているが、後の時代の遺物包含層や遺構覆土からの出土であり、原位置からの出土ではない。以上のように、旧石器時代の遺跡は今のところ山間部でしか発見されていないため、当時の人々は山間部を尾根づたいに移動しながら生活をしていたものと推測される。

縄文時代の遺跡は、小宮山の後沢遺跡や、旧石器時代でも記述した根岸の榛名平遺跡などで、早期末～前期の花積下層式～関山式にかけての集落が発見されている。両遺跡は、山体から平野部に突き出した尾根間の緩斜面に形成されており、このような地形を好んで選択しているようである。関山期以降の前期から、中期中葉までの遺跡は周辺部では今のところ明瞭ではないが、中期後半になると根岸の日向集落で中村、筒村B、山法師B遺跡が調査されている。後期の遺跡は、桜井の北河遺跡Ⅰ・Ⅱの調査から、現下桜井集落の地下に存在する可能性が極めて高く、その時期は、前期まで遡るものと思われる。また、前山の瀧の下遺跡では敷石住居址が検出されているが加曾利B式が下限であり、これ以降の後期・晩期の遺跡は不明である。

弥生時代の遺跡は、野沢中学校の改築に伴う調査で、2基の土坑から前期の土器群が出土している。中期では伴野の北裏遺跡Ⅰにおいて、栗林期の溝内から石戈が出土している。また、この地点南方の同遺跡の台地からは、中部横断自動車道関連の長野県埋文センターの調査において周溝墓群が検出されている。集落遺跡は西裏・竹田峯遺跡、後沢遺跡で検出されている。後期の遺跡は前述した西裏・竹田峯遺跡、後沢遺跡で中期に継続して集落が営まれる他、



児子塚・中塚・聖塚である。これが古墳に起因するものならば、佐久市北部山中の群集墳に対して、南部の平野部では古墳築造に際しての選地観が異なっていたこととなる。もうひとつ気になる点として、従来から居館跡として考えられている「和泉屋敷」地籍とは別に、今回の調査で中世遺構が検出された北畑遺跡Ⅲの近くに、「北屋敷」と呼ばれる長方形の字地が存在する。その南隣接地には「町」という字地も存在しており、今回の調査の成果をふまえると、この場所には中世に「館」あるいは「屋敷」が存在した可能性が強いものとする。

## 第3節 調査の方法

### 遺跡名・調査区

佐久市詳細分布図の遺跡に照らし合わせ、三千束遺跡群市道遺跡Ⅴ・平馬塚遺跡群平馬塚遺跡Ⅱ、北裏遺跡群北裏遺跡Ⅱ、宮浦遺跡群宮浦遺跡Ⅰ・北畑遺跡群北畑遺跡Ⅲとした。末尾のローマ数字は調査回数である。

調査区を網羅するように、4×4mのグリットを最小単位とし、国家座標に沿って40×40mの区画を設定した。この40mの区画は北東隅を起点に西方向にア、イ、ウ、エ・・・南方向に1、2、3、4・・・とグリット単位に記号をふり、各グリットの北東隅をグリット名とした。

### 遺跡略記号・遺構略記号

遺跡略記号はIMV・HMTⅡ・TKUⅡ・SMRⅠ・SKBⅢである。これは以下の決まりに従い付けられている。

- アルファベット3文字の先頭は旧大字のローマ字表記の頭文字である。
- アルファベット3文字の2番目は遺跡名のローマ字表記の頭文字である。
- アルファベット3文字の3番目は遺跡名のローマ字表記の任意の文字である。
- 末尾のローマ数字は発掘調査回数を表す。

ただし、IM・HMTは上記の限りではない。

遺構略記号は以下のとおりであり、佐久市共通である。

- H＝住居址（竪穴住居址である。現在のところ佐久市内では明確な平地住居は確認されていない。）
- F＝掘立柱建物址
- D＝土坑（陥穴、貯蔵穴等）
- P＝ピット（柱状のものを建てたと思われる、多くは小径の掘り込み）
- M＝溝址（環濠、水路、道路、堀等）

### 遺構調査

住居址は均等に4等分し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・炉・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は4分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。

土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は半裁された区を東西南北の英語頭文字を区として取り上げた。

ピットも土坑と同様であるが、遺物はピットの遺構Noで一括した。

溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。

遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。

### 遺構測量

三千束遺跡群市道遺跡Ⅴ・平馬塚遺跡群平馬塚遺跡Ⅱ、北裏遺跡群北裏遺跡Ⅱにおいては、グリット杭を用いた簡易遣り方測量で行った。宮浦遺跡群宮浦遺跡Ⅰ・北畑遺跡群北畑遺跡Ⅲにおいては平面図・断面図共にトータルステーションを用いて3次元データを取得した。取得したデータは（株）こうそくのリプログラフにより図化した。測量基準座標はグリット杭を用いた。

### 写真

現場での写真はデジタル一眼レフカメラと35mmフィルム一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々撮影した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、データの状態で印刷に使用した。

### 空中写真撮影・測量

調査範囲はラジコンヘリコプターにより空中写真撮影を数回に分けて行い、背景はセスナによる空中写真撮影を行い、デジタルオルソによる合成写真及び全体図を作成した。また、デジタルオルソによる空中写真に、トータルステーションで取得した3次元データを援用した三次元画像を作成した。



- 平成14年試掘 未周知
- 平成15年試掘 北基遺跡群 (隣接)
- 平成17~18年試掘 宮浦遺跡群2
- 平成18年 三千東遺跡群3
- 平成18年 町田遺跡群3
- 平成20年 宮浦遺跡群3・平島塚遺跡群4
- 平成21年 平島塚遺跡群5
- 平成18~19年 本調査時に発見



第4図 試掘調査状況図 (1)

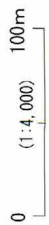
0 100m  
(1:4,000)



第5図 試掘調査状況図 (2)



- 平成 14 年度 未開知
- 平成 15 年度 北基道路群 (開竣)
- 平成 17 ~ 18 年度 菅浦道路群 2
- 平成 18 年 三ノ坂道路群 3
- 平成 18 年 町田道路群 3
- 平成 20 年 菅浦道路群 3・平原塚道路群 4
- 平成 21 年 平馬塚道路群 5
- 平成 18 ~ 19 年 本郷窪樹工実施
- 平成 24 年 慎重工事



第 6 図 試掘調査状況図 (3)



## 遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーで行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物の接合にはセメダインCを用いた。遺物復元の際の充填材にはエポキシ樹脂XNR6504、XNH6504を用いた。金属器についてはバキュームシーラによるパックで現状保存した。遺物実測・拓本は手取りで行った。最終的な遺物の保管に際しては、発掘調査報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。

## 報告書

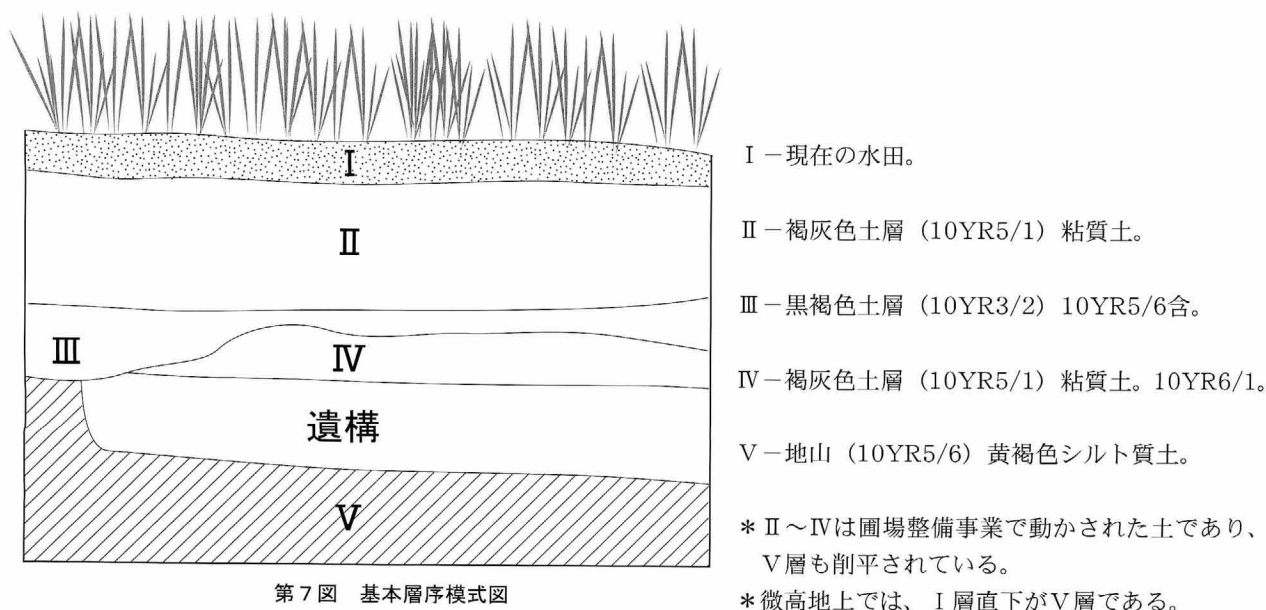
報告書掲載の遺構図版は、(株)こうそく社製「リプログラフ」により作成した版下を、アドビ社製「Illustrator」で調整した。遺物図版、はアドビ社製「Illustrator」でデジタルトレースを行い完成させた。写真・拓本は、アドビ社製「Photoshop」により加工した。本文原稿は、ジャストシステム社製「一太郎」で、表原稿はマイクロソフト社製「エクセル」で作成した。以上の原稿をアドビ社製「InDesign」によりレイアウトし、印刷原稿を作成し、入稿した。

## 第4節 試掘調査

第I章-第1節-1で記載したように、試掘調査は用地交渉が終了した部分から、佐久建設事務所の依頼を受け7回に分け実施した。第3図～第5図にその位置を表示した。なお、図上の青灰色の部分は本調査の際に試掘調査を実施した。昭和40年代の圃場整備事業により平馬塚遺跡群の一部は削平され遺跡が消滅した状況が認められたが、その他の部分は削平を受けながらも遺跡は残存していた。調査範囲の周辺部についても同様な状況が推測されることから、今後の開発に際しても注意が必要である。

## 第5節 基本層序

基本層序は第6図のとおりである。昭和40年代の圃場整備事業により、旧地形は一旦削平されており、遺構が存在する微高地は黄色シルトの一部まで削られ、その上に新たな水田耕作土を敷設しているため、現水田の床土直下が遺構検出面であった。低地部分には圃場整備以前の水田が残存する場所や、更に古い時代の水田面が確認された場所も一部にあったが、圃場整備事業の工事に際し、低地部分からの多量の湧水が要因と思われる、丸太杭の打設や、丸太を敷き詰めた工事用足場や道などが土層を大規模に攪乱しており、低地部分の方が遺跡の破壊は著しかった。千曲川や片貝川の氾濫による砂礫層上のシルト質土を地山としたが、更に下層については工事が及ばないことと、重機による掘削の限界を超えるため確認はしていない。



第7図 基本層序模式図

## 第6節 検出遺構・遺物の概要

調査を実施した5遺跡で検出された遺構・遺物の概要は以下のとおりである。

○遺構 竪穴住居址-27棟、掘立柱建物址-4棟、土坑-35基、溝址-11条、ピット-295基、竪穴建物址-2棟、水田址-1箇所

○遺物 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶磁器、石器・石製品、金属器・金属製品、木製品

# 第II章 市道遺跡V

## 第1節 住居址

### ○H1号住居址（第8図）

Ⅲウ9グリットで検出された。北東隅をカクランに切られ、更に調査区外に延びるため全容は不明である。N-8°-Wに長軸方位をとる。長軸長-4.76m、短軸長-4.64m、深度-0.16mの規模を有し、方形の平面プランを呈する。カマドは北壁の中央部に作られており、地山削りだしの袖だけが残存していた。カマド部分を除く壁下には周溝が巡らされていたらしい。支柱は床面上に柱間1.1mで4本が均等に配置されており、その規模はφ12~16cmであった。

遺物は土師器、石器が出土している。土師器には坏（1・2）・甕（3~6）の器種が認められる。坏は1がE2形態、2がD2形態である。2は内面にヘラ磨き後黒色処理が施され、外底中央部に「×」の刻書が記されている。甕は3・4が小型、5・6が大型である。4は鉢とした方が良いのかも知れない。4を除き、体部に最大径を有する。器面調整は端部がほつれたヘラ状工具によるナデが施されており、工具と器面との角度の違いにより、刷毛目状になったり、ヘラ状になっているものと思われる。石器・石製品は編物石（7）・磨石（8）・砥石（9）・石鏃（10）の器種が認められる。石鏃を除き本址に伴うものと思われる。

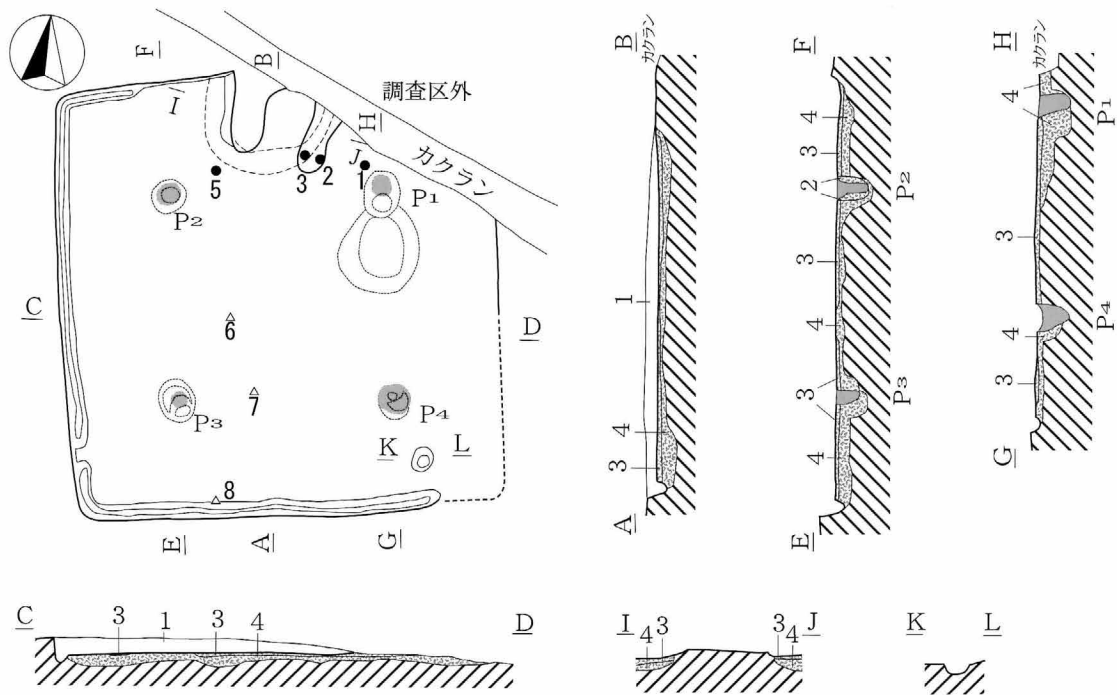
以上の出土遺物の特徴から、本址の時期は古墳時代Ⅲ期であり、6世紀中葉~7世紀初頭の実年代が想定されている。

第1表 市道遺跡V H1号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	13.0	12.5	4.5			ヘラケズリ	完全実測・No1	I区
2	土師器	坏	14.9	9.8	4.6		ヘラミガキ 黒色処理	ヘラケズリ ヘラミガキ 刻書「×」	完全実測・No2	カマド
3	土師器	甕	(10.4)	-	-		ナデ	ハケ目・ナデ	回転実測	II区
4	土師器	甕	10.7	4.5	8.3		ナデ	ヘラケズリ ハケ目	完全実測・No5	II区
5	土師器	甕	(16.7)	-	-		ナデ	ハケ目	回転実測	II区
6	土師器	甕	17.0	-	-		ハケ目	ヘラケズリ	完全実測・No3	カマド I区
7	石器	編物石	13.3	7.2	4.9	530	両側に加工痕・安山岩		No8	III区
8	石器	磨石	-	-	8.2	-	両面に磨痕・安山岩		No7	III区
9	石器	砥石	34.3	27.8	5.2	-	両面使用・安山岩		No6	II区
10	石器	石鏃	1.53	-	0.32	0.3	チャート			IV区

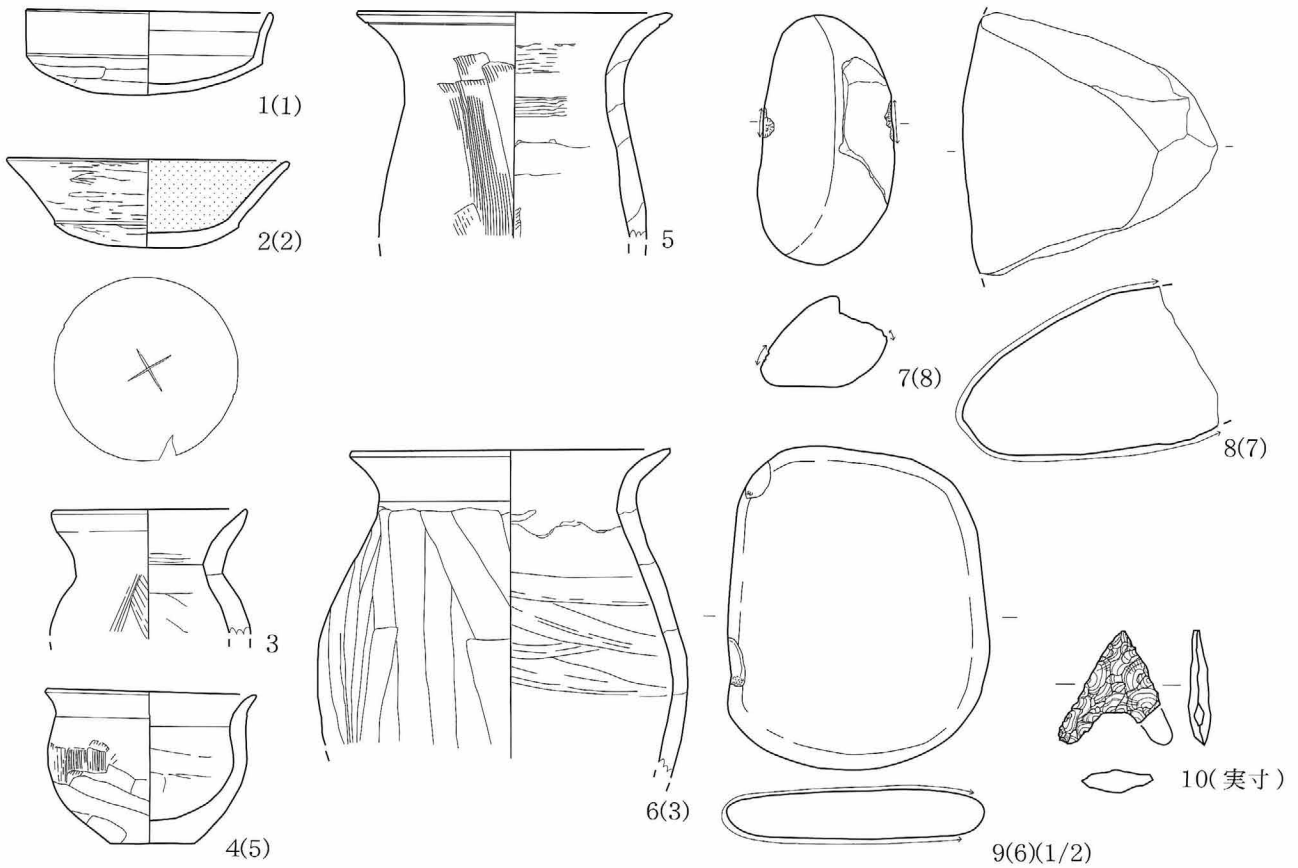
### ○H2号住居址（第9・10図）

Iケ9グリットで検出された。南西隅をカクランに、南壁中央をD1に切られる。N-23°-Wに長軸方位をとる。長軸長-4.7m（残存値）、短軸長-4.85m、深度-0.25mの規模を有する。カマドは北壁下中央部分のカクランにより破壊されたらしく残存していなかった。断絶しながらも壁下には周溝が巡らされる。P4から東壁に向かい所謂「間

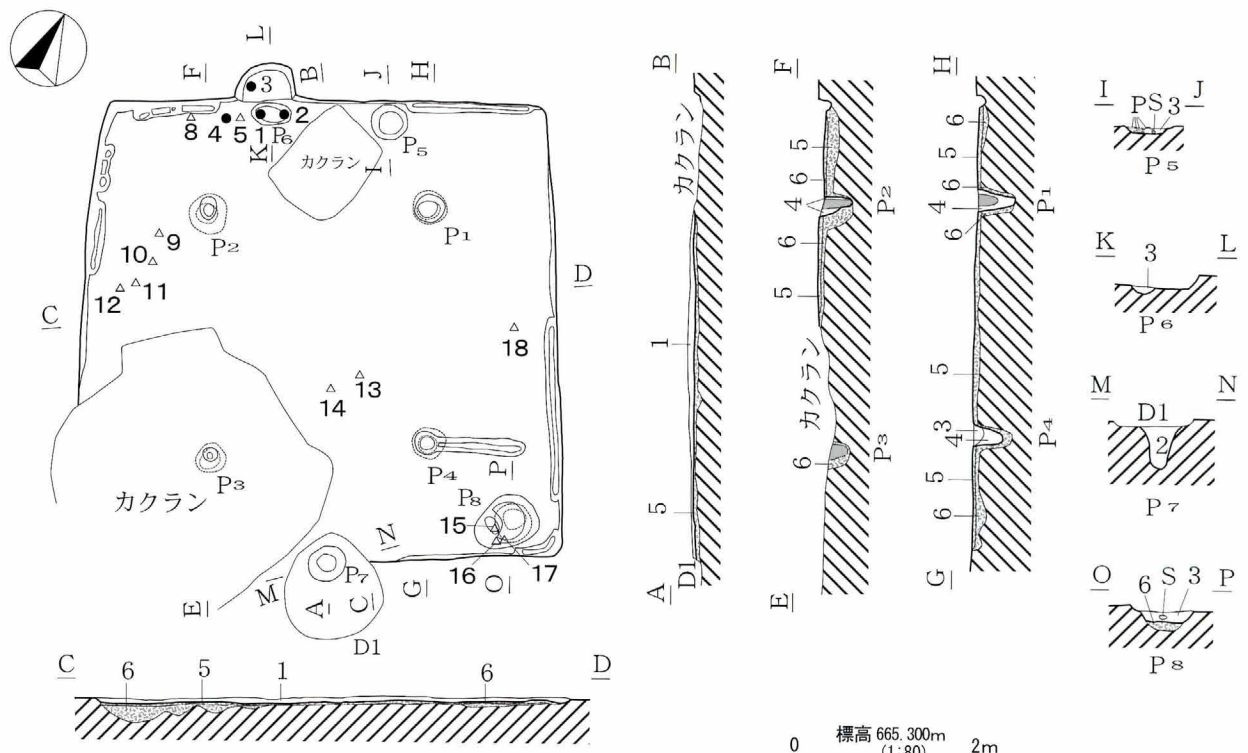


1. 黒色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 地山黄色ブロック (φ2 cm以下) 含。=人為埋土?
2. 黄褐色土層 (10YR5/6) 地山黄色主体。10YR4/3 含。
3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 貼床。
4. 黄褐色土層 (10YR5/6) 10YR4/2 含。堀方埋土。
- にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 柱痕。

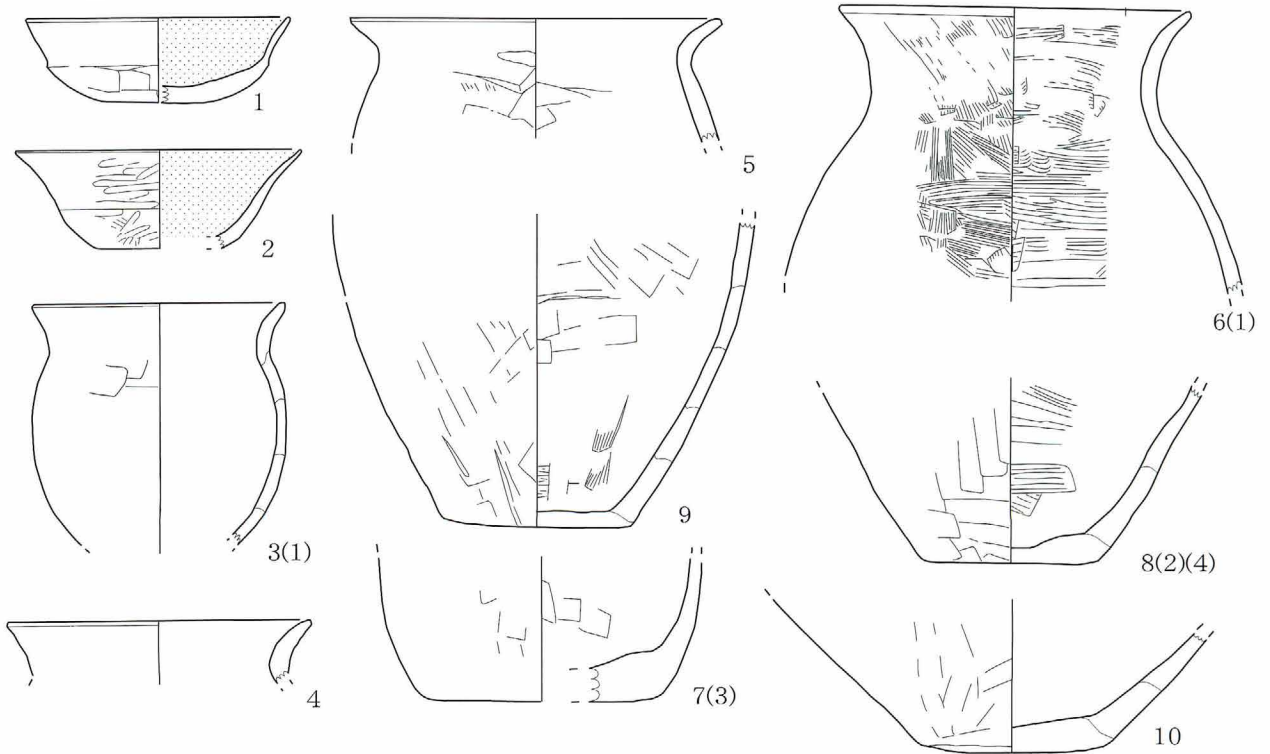
0 標高 665.200m (1:80) 2m



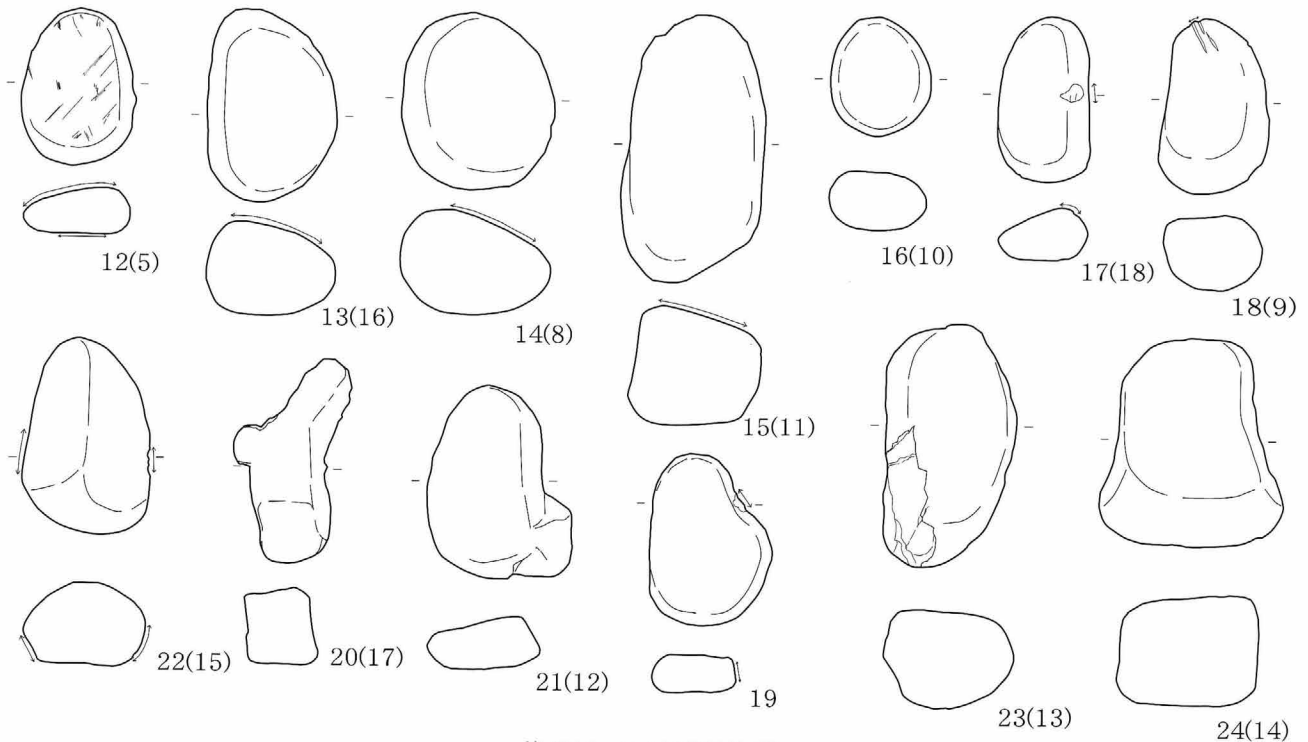
第8図 H1号住居址



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/4 地山黄色土少含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/1) 砂質土。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 地山黄色土少含。
4. 暗褐色土層 (10YR3/3) 砂質土。
5. 黄褐色土層 (10YR5/6) 10YR2/2 含。貼床。
6. 黄褐色土層 (10YR5/6) 堀方埋土。10YR5/6、10YR3/2、10YR2/2 の混在土層。
- 黒褐色土層 (10YR2/2) 柱痕。



第9図 H2号住居址(1)



第10図 H2号住居址(2)

仕切溝」が延びている。支柱は柱間—南北2.5m×東西2.3mに4本が均等に配置されていた。規模はφ14cm前後である。P7は出入口施設であろう。

遺物は土師器、石器、青磁が出土している。土師器には坏(1・2)・甕(3~9)・壺(10)の器種が認められる。坏は1がE2形態、2がD3形態である。甕は3・4が小型、他は大型である。大型の甕は体部に最大径を有する。器面調整は小型のものはナデ、大型のものはヘラケズリやハケ目が施される。壺は底部片であり全容は不明であるが、比較的大型で、球形の体部と思われる。石器は磨石(12~15)、編物石(16~24)の器種が認められる。青磁は碗片(11)が1点出土した。混入品であろう。

以上の出土遺物の特徴から、本址の時期は古墳時代Ⅲ期であり、6世紀中葉~7世紀初頭の実年代が想定されている。

### OH3号住居址(第11・12図)

Iキ9グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-104°-Wに長軸方位をとる。長軸長-3.5m、短軸長-2.74m、深度-0.22m、面積-8.92㎡の規模を有する。カマドは北壁中央部に作られており、地山削りだしの袖だけが残存していた。周溝は有さない。支柱はP3・P4の2基であり、φ18cmの規模であった。本址は消失住居であり、床面上に炭化材が散乱していた。

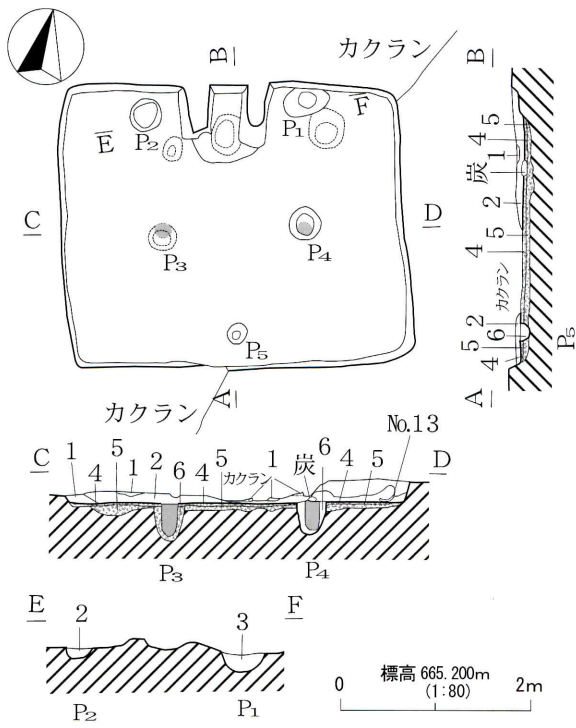
遺物は土師器、石器が出土している。土師器には坏(1~5)、甕(6)、壺(7~9)、甗(10・11)の器種が認められる。坏は1・2がF4形態、3・4がD3形態、5がD2形態である。3・5は内面にヘラミガキ後黒色処理が施されている。また、4の外底には「X」の刻書が記されている。甕は体部に最大径を有する大型のもので、ヘラケズリ調整が施される。壺は赤彩が施され、長頸で口縁部が直立する7と、底部下半が外反する8、口縁部片の9である。甗は小型甕の転用で、単孔を焼成後穿孔している10と大型で底部が開口する11が認められる。石器は砥石(12・13)、磨石(14)、編物石(15~26)が出土している。

以上の出土遺物の特徴から、本址の時期は古墳時代Ⅲ期であり、6世紀中葉~7世紀初頭の実年代が想定される。

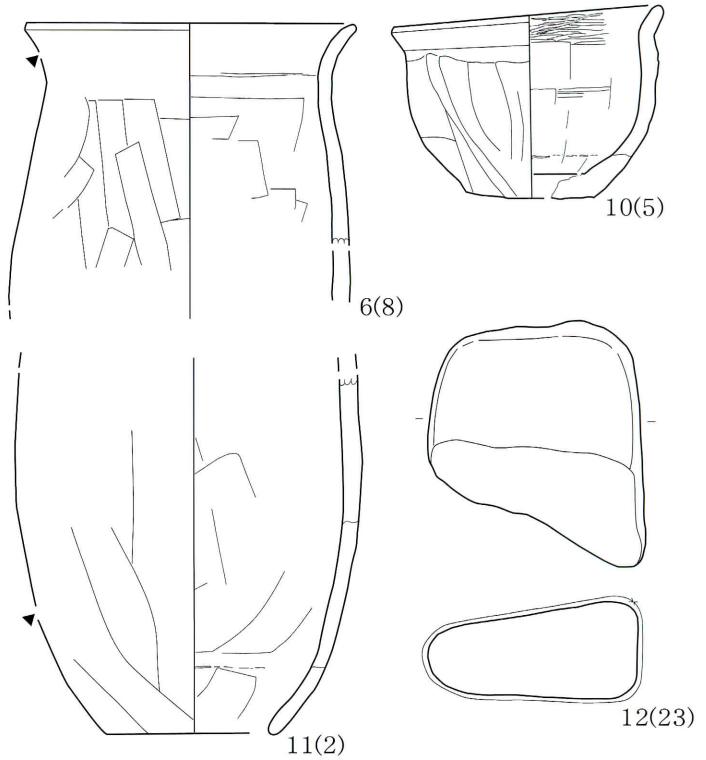
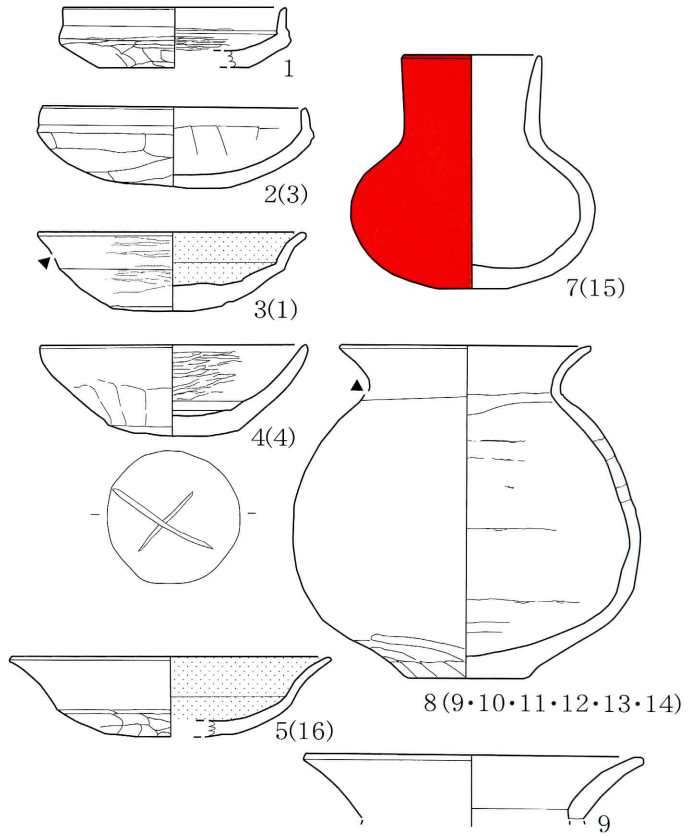
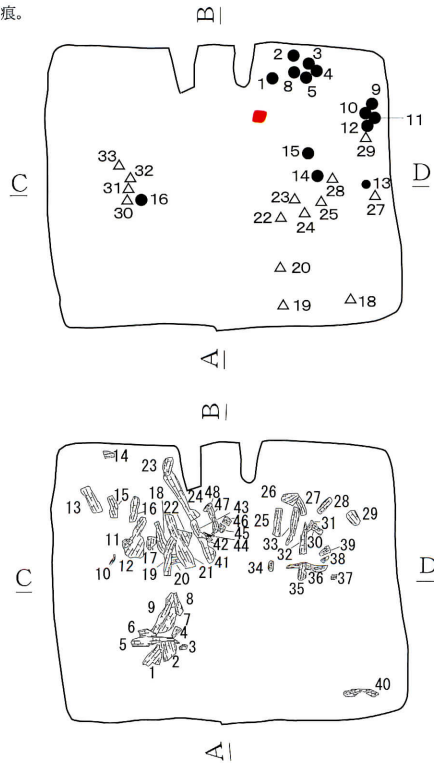
## 第2節 土坑

### OD1号土坑(第13図)

Iコ10グリットで検出された。H2号住居址を切る。N-23°-Wに長軸方位をとる。長軸長-1.1m、短軸長-



1. 褐灰色土層 (10YR4/1) 粘質土。灰・炭化物・焼土を極少含。
2. 灰・焼土・炭化物の堆積層。
3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 灰・炭化物少含。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2) 粘床。10YR5/6 少含。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 の混在土層。堀方埋土。
6. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6・10YR4/2 の混在土。
- 柱痕。



第 11 図 H3号住居址 (1)

第2表 市道遺跡Ⅴ H2号住居址出土遺物観察表

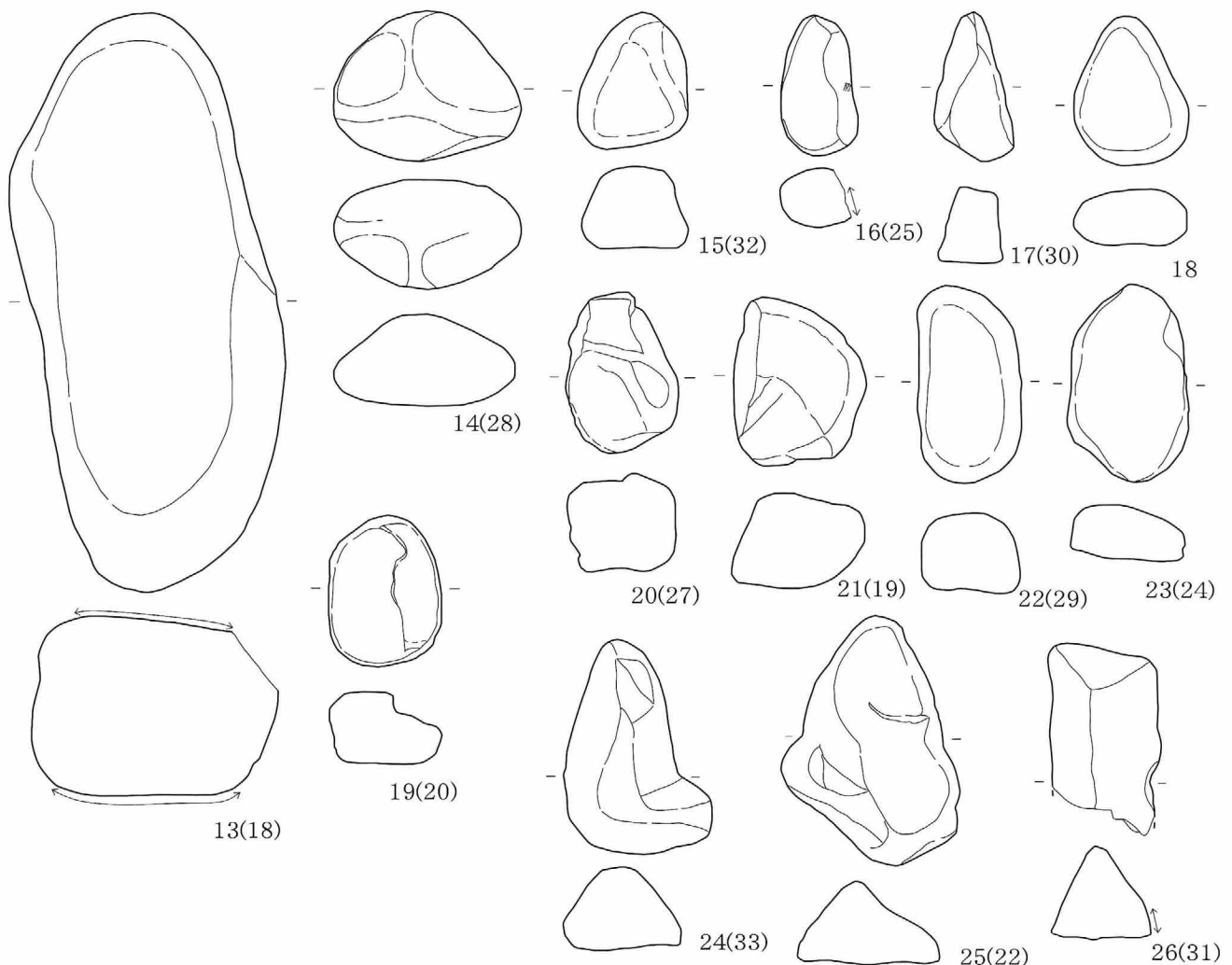
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(13.8)	4.0	—	—	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	覆土
2	土師器	坏	(15.0)	—	—	—	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラケズリ ヘラミガキ	回転実測	P3・P7
3	土師器	甕	(13.2)	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ・ナデ	回転実測・No1	II区・P1
4	土師器	甕	(16.0)	—	—	—	ナデ	ナデ	回転実測	P7
5	土師器	甕	(19.6)	—	—	—	ヘラケズリ・ナデ	ヘラケズリ	回転実測	P7
6	土師器	甕	(18.4)	—	—	—	ハケ目	ハケ目	回転実測・No1	P2
7	土師器	甕	—	(12.0)	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ・ナデ	回転実測・No3	II区
8	土師器	甕	(9.0)	—	—	—	ヘラケズリ・ハケ目	ヘラケズリ	回転実測 No2・4	II区
9	土師器	甕	—	(10.0)	—	—	ヘラケズリ・ハケ目	ヘラケズリ	完全実測	P2
10	土師器	壺	—	(9.5)	—	—	ヘラケズリ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ	完全実測	P2
11	青磁	碗	—	—	—	—			破片実測	III区
12	石器	磨石	8.3	5.9	2.8	194.0	両面に磨り痕、安山岩		No5	II区
13	石器	磨石	9.4	8.2	5.5	503.0	片面に磨り痕、安山岩		No16	IV区
14	石器	磨石	10.2	6.8	5.3	468.0	片面に磨り痕、安山岩		No8	II区
15	石器	磨石	13.8	7.5	6.3	1,060.0	片面に磨り痕、安山岩		No11	II区
16	石器	編物石	6.2	5.2	3.0	152.0	安山岩		No10	II区
17	石器	編物石	8.6	6.5	2.6	230.0	左側に加工痕、安山岩		No18	IV区
18	石器	編物石	9.3	5.8	4.3	314.0	上部に加工痕、安山岩		No9	II区
19	石器	編物石	10.0	4.3	2.8	190.0	右側に加工痕、安山岩			P8
20	石器	編物石	10.2	7.6	2.5	293.0	安山岩		No17	IV区
21	石器	編物石	10.3	6.7	4.3	400.0	両側に加工痕、安山岩		No12	II区
22	石器	編物石	10.9	5.0	4.1	275.0			No15	IV区
23	石器	編物石	11.0	9.6	6.0	965.0	安山岩		No13	IV区
24	石器	編物石	12.6	6.9	5.3	690.0			No14	IV区

第3表 市道遺跡Ⅴ H3号住居址出土遺物観察表 (1)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(11.8)	(7.9)	(3.2)	—	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	回転実測	II区
2	土師器	坏	13.8	14.6	4.2	—	ヘラミガキ	ヘラケズリ	完全実測・No3	I区
3	土師器	坏	(14.2)	6.0	4.2	—	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラケズリ ヘラミガキ	完全実測・No1	I区
4	土師器	坏	14.2	7.0	4.8	—	ヘラミガキ 黒色処理	ナデ 刻書「×」	完全実測・No4	I区
5	土師器	坏	(17.1)	—	—	—	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラケズリ・ナデ	回転実測 No16	II区
6	土師器	甕	(17.5)	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ	完全実測・No8	I区
7	土師器	壺	7.2	—	12.5	—	ナデ	赤彩	回転実測 No15	I区
8	土師器	壺	(13.3)	6.6	17.7	—	ナデ	ヘラケズリ ヘラミガキ・赤彩?	完全実測 No9～14	I・IV区
9	土師器	壺	(18.0)	—	—	—			回転実測	I区
10	土師器	甕	14.4	6.7	9.8	—	ナデ 口唇部ヘラミガキ	ヘラケズリ	完全実測・No5 小型甕の転用 焼成後穿孔	I区
11	土師器	甕	—	8.8	—	—	ナデ	ヘラケズリ	完全実測・No2	I区
12	石器	砥石	12.0	11.2	6.2	—	全面使用、安山岩		No23	IV区
13	石器	砥石	32.9	14.0	11.5	—	両面使用、安山岩		No18	IV区
14	石器	磨石	8.4	10.7	6.1	650.0			No28	I区
15	石器	編物石	7.5	6.3	4.6	330.0	安山岩		No32	II区

第4表 市道遺跡V H3号住居址出土遺物観察表(2)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
16	石器	編物石	8.0	4.3	3.4	165.0	加工痕、安山岩		No25	IV区
17	石器	編物石	8.2	4.4	4.5	160.0			No30	II区
18	石器	編物石	8.5	6.3	3.1	230.0	安山岩			I区
19	石器	編物石	8.5	6.4	4.1	290.0			No20	IV区
20	石器	編物石	9.1	6.4	5.5	370.0			No27	II区
21	石器	編物石	9.5	7.5	5.4	570.0			No19	I区
22	石器	編物石	11.1	5.8	4.3	510.0	安山岩		No29	I区
23	石器	編物石	11.2	6.7	3.0	300.0			No24	IV区
24	石器	編物石	12.1	8.2	4.7	560.0			No33	II区
25	石器	編物石	14.0	10.0	4.8	760.0			No22	II区
26	石器	編物石	-	6.0	5.3	(410.0)	加工痕		No31	II区



第12図 H3号住居址(2)

1.06m、深度-0.1mの規模である。平面形は円形、断面形は逆梯形を呈し、覆土は自然堆積と思われる、単層で構成される。

遺物は古墳時代と思われる土師器甕の底部片が1点出土している。時期的には住居址群と同時代の可能性が高い。性格は不明である。

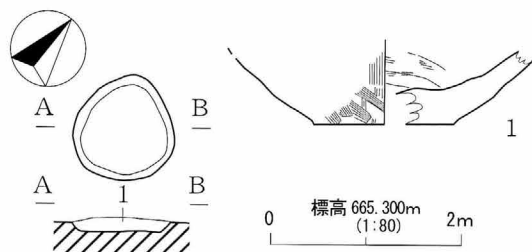


第5表 市道遺跡V D1号土坑出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	甕	-	(7.4)	-		ハケ目 ヘラケズリ	ハケ目 ヘラケズリ	回転実測	E半

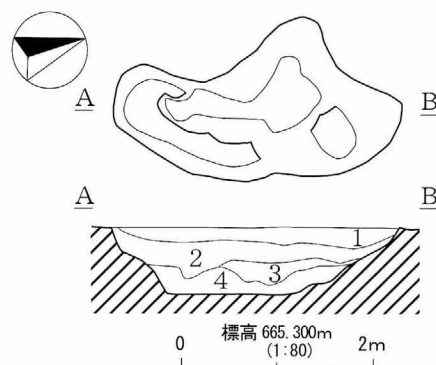
OD2号土坑 (第14図)

Ⅲア9グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-20° -Eに長軸方位をとり、長軸長-3.05m、



1. 黒褐色土層 (10YR3/1) 粘質土。φ 3cm以下礫含。

第13図 D1号土坑



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR3/4 粒子少含。  
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 粘質土。  
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR4/1 粒子含。  
4. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 地山黄色土主体、10YR2/2 含。

第14図 D2号土坑

短軸長-1.65m、深度-0.7mの規模を有する。平面形は不整であるが、断面は逆梯形である。覆土は4層の自然堆積土で構成される。

出土遺物は皆無であり、時期・性格は不明である。

第3節 ピット

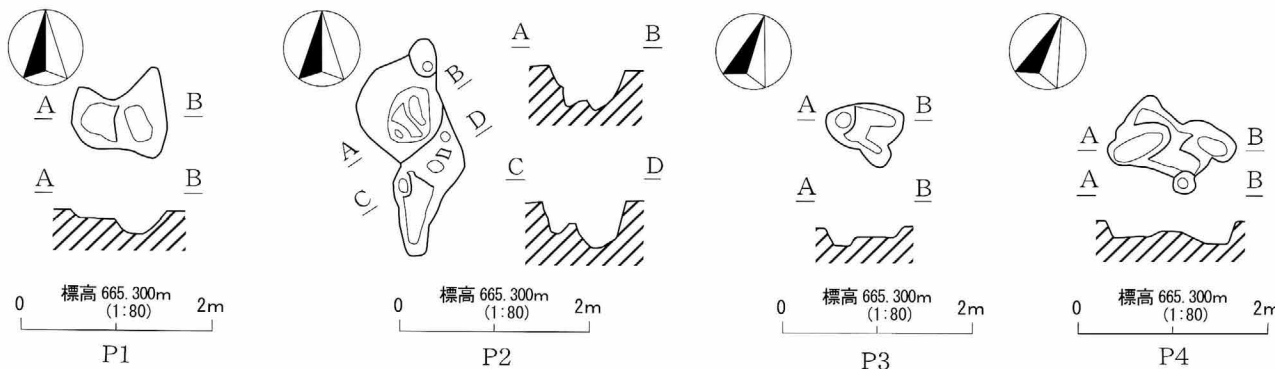
OP1 (第15図)

Ⅲア10グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-90° -Eに長軸方位をとり、長軸長-1.01m、短軸長-0.96m、深度-0.22mの規模を有する。平面形は不整であるが、断面は逆梯形である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格は不明である。

OP2 (第15図)

Iコ9グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-3° -Eに長軸方位をとり、長軸長-2.3m、短軸長-0.95m、深度-0.5mの規模を有する。平面形は不整であるが、断面は逆梯形である。



第15図 ピット

出土遺物は皆無であり、時期・性格は不明である。

OP 3 (第15図)

Iク9グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-108° -Wに長軸方位をとり、長軸長-0.84m、短軸長-0.66m、深度-0.2mの規模を有する。平面形は不整であるが、断面は逆梯形である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格は不明である。

OP 4 (第15図)

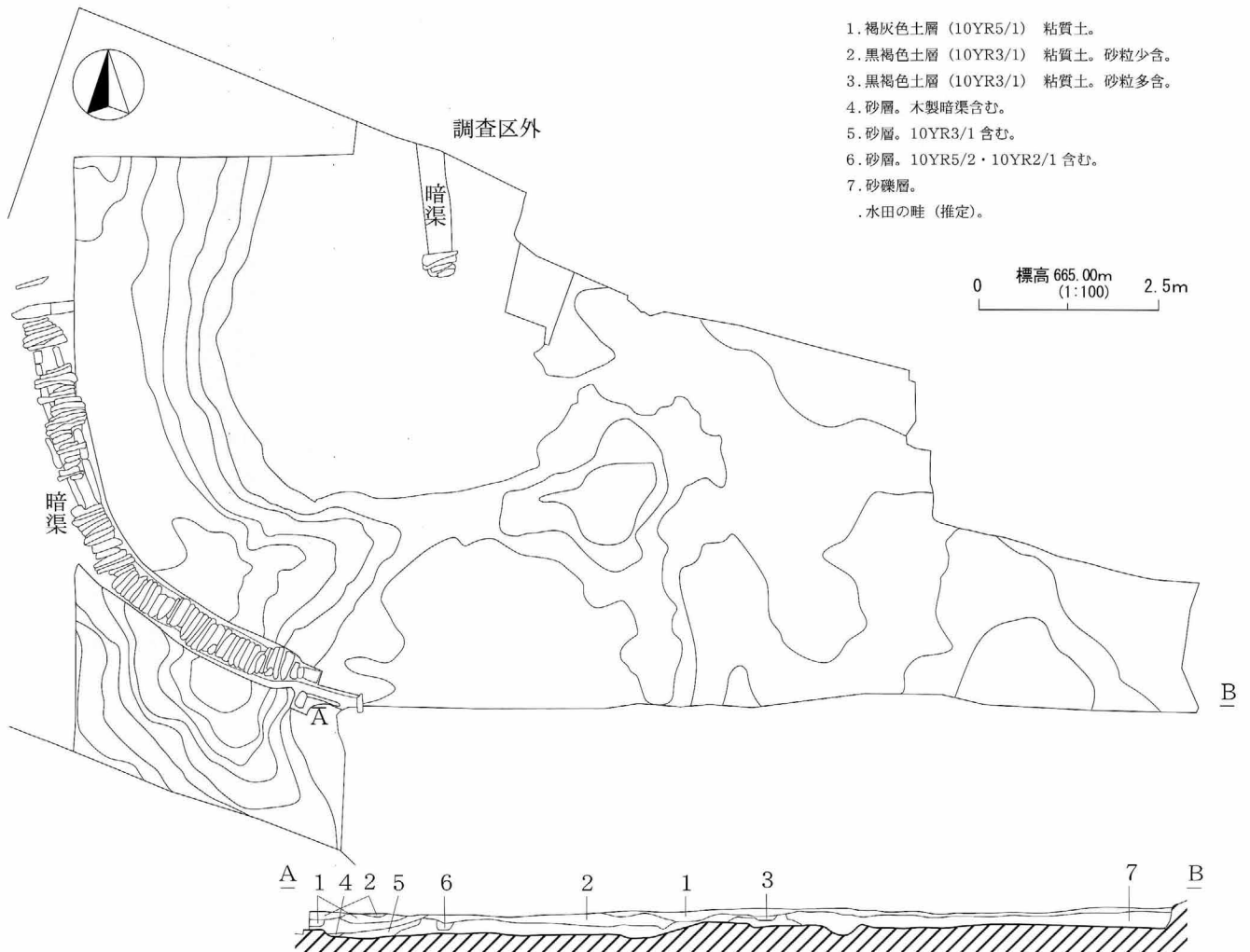
Iク9グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-111° -Wに長軸方位をとり、長軸長-1.4m、短軸長-0.8m、深度-0.24mの規模を有する。平面形は不整であるが、断面は逆梯形である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格は不明である。

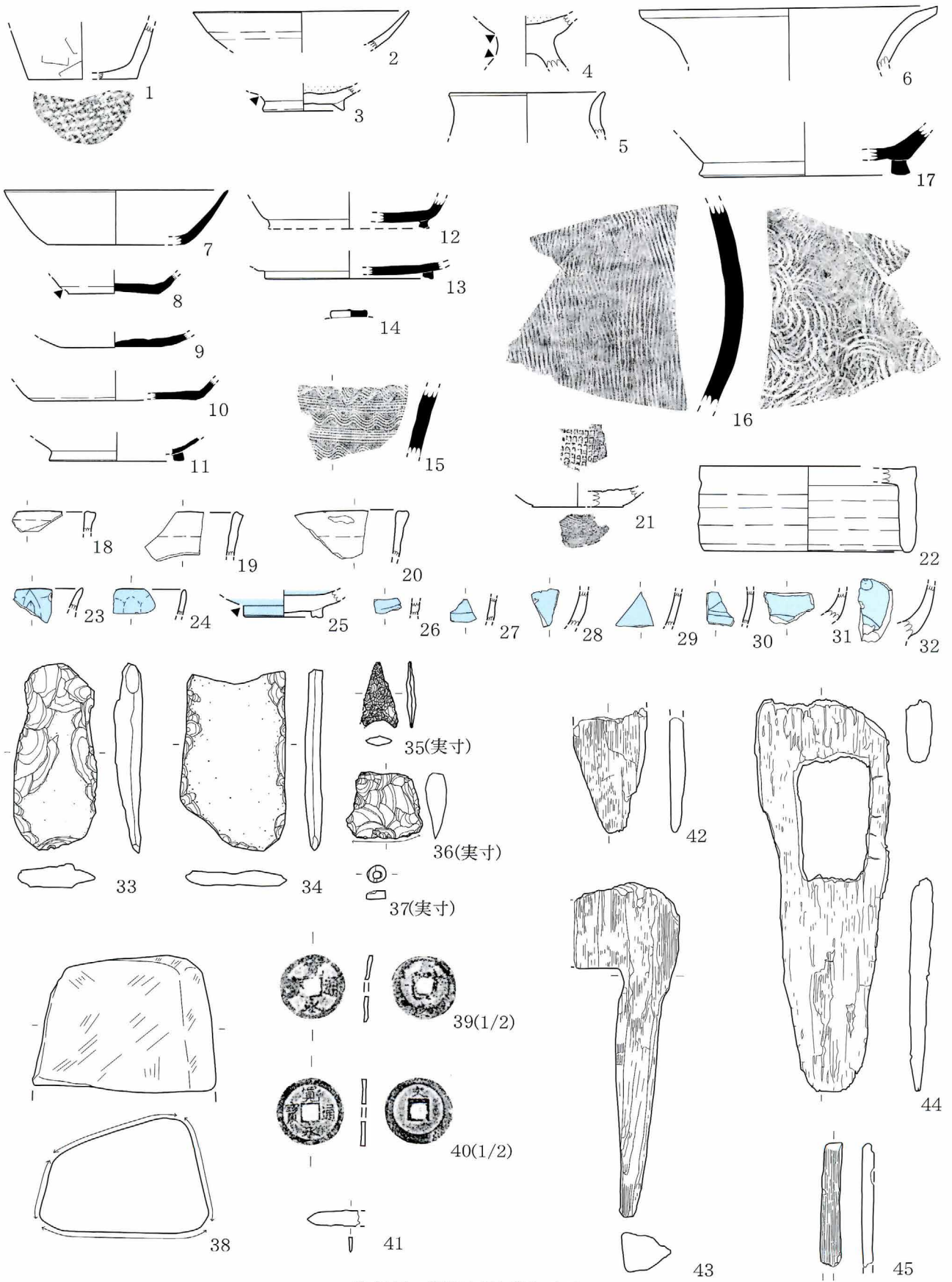
## 第4節 水田址

○水田址 (第16図)

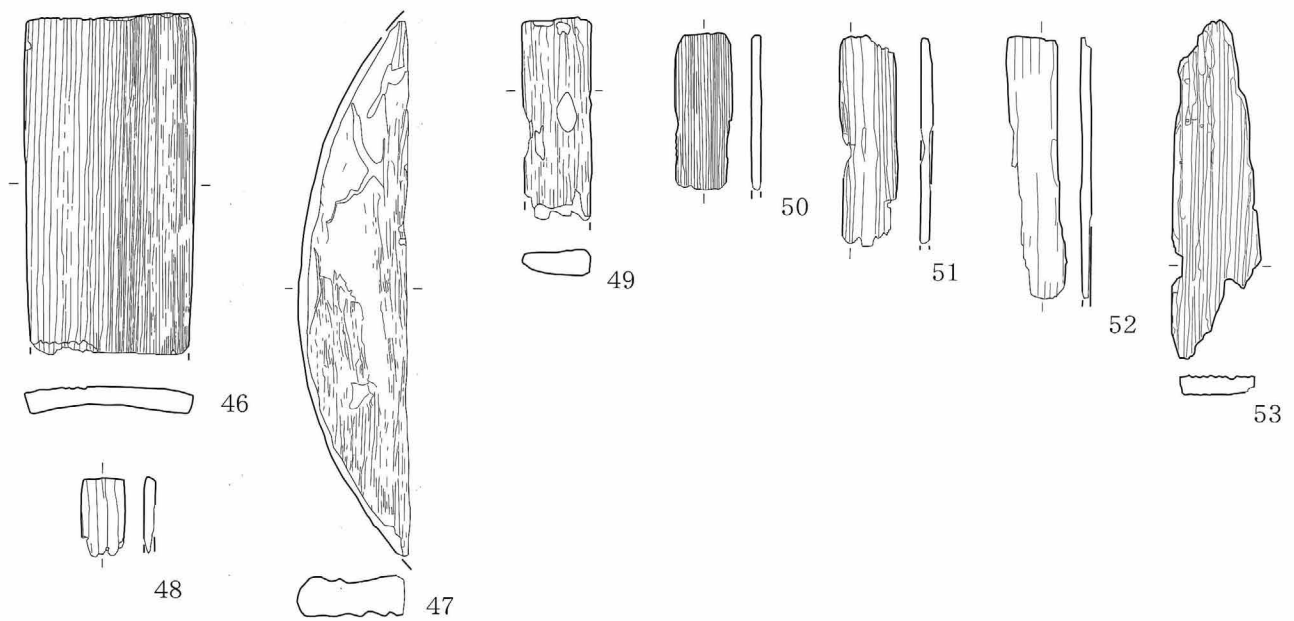
調査区西端部で検出された。基本層序の項でも述べたように、圃場整備事業の攪乱が著しく、攪乱を免れた部分の微細な地形の変化から水田を推定した。微高地の裾から低地に向かい展開しており、4×4m大の不整な方形を基本とするようである。遺構外出土遺物に掲載されている木器や木製品はこの部分から出土したものである。国道141号線



第16図 水田址



第 17 図 遺構外出土遺物 (1)



第18図 遺構外出土遺物(2)

等の調査で発見された大規模な集落は、集落周辺に広がる低湿地に開拓された本址のような水田より支えられたのであろう。

時期は平安時代を下ることはないものと思われるが、時期比定の根拠に乏しく不明と言わざるをえない。

## 第5節 遺構外出土遺物

### ○遺構外出土遺物(第17・18図)

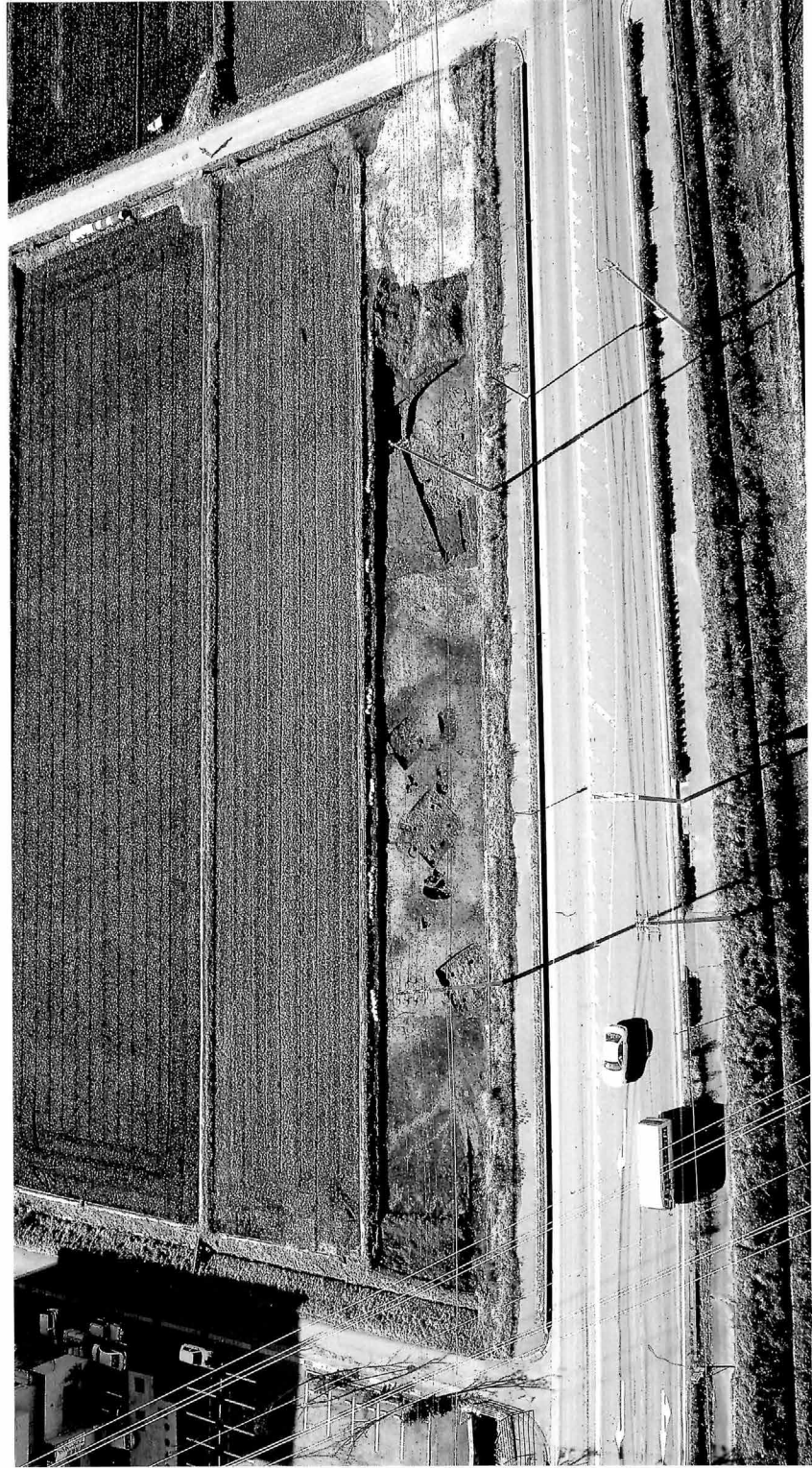
1は縄文土器深鉢底部片であり、網代底である。後期堀之内式であろう。2～6は土師器である。2は坏、3は内黒の碗、4は高坏、5は甕、6は壺である。2・3は平安時代、4は古墳時代後期、5・6は奈良時代の所産である。7～17は須恵器である。7～10は坏、11～13は有台坏、14は坏蓋、15・16は甕、17は壺である。8・10は平安時代、7・9・11～14は奈良時代である。14～17は奈良～平安時代の所産と思われるが、確定できない。18～20は山茶碗系の捏鉢である。13世紀の所産であろう。21は古瀬戸のおろし皿である。13世紀の所産と思われる。22は前山焼のサヤであろう。23～32は青磁である。連弁文や劃画文の碗であり、12～13世紀の所産である。33・34は打製石斧、35は石鎌、36は削器、37は滑石製の白玉、38は砥石である。39・40は江戸時代の銅銭、41は刀子である。42～53は木器・木製品であり、水田址に伴うものと思われる。42は矢板、43・44は鋏、45・46は桶、47は曲物か桶の底であろう。

第6表 市道遺跡V 遺構外出土遺物観察表(1)

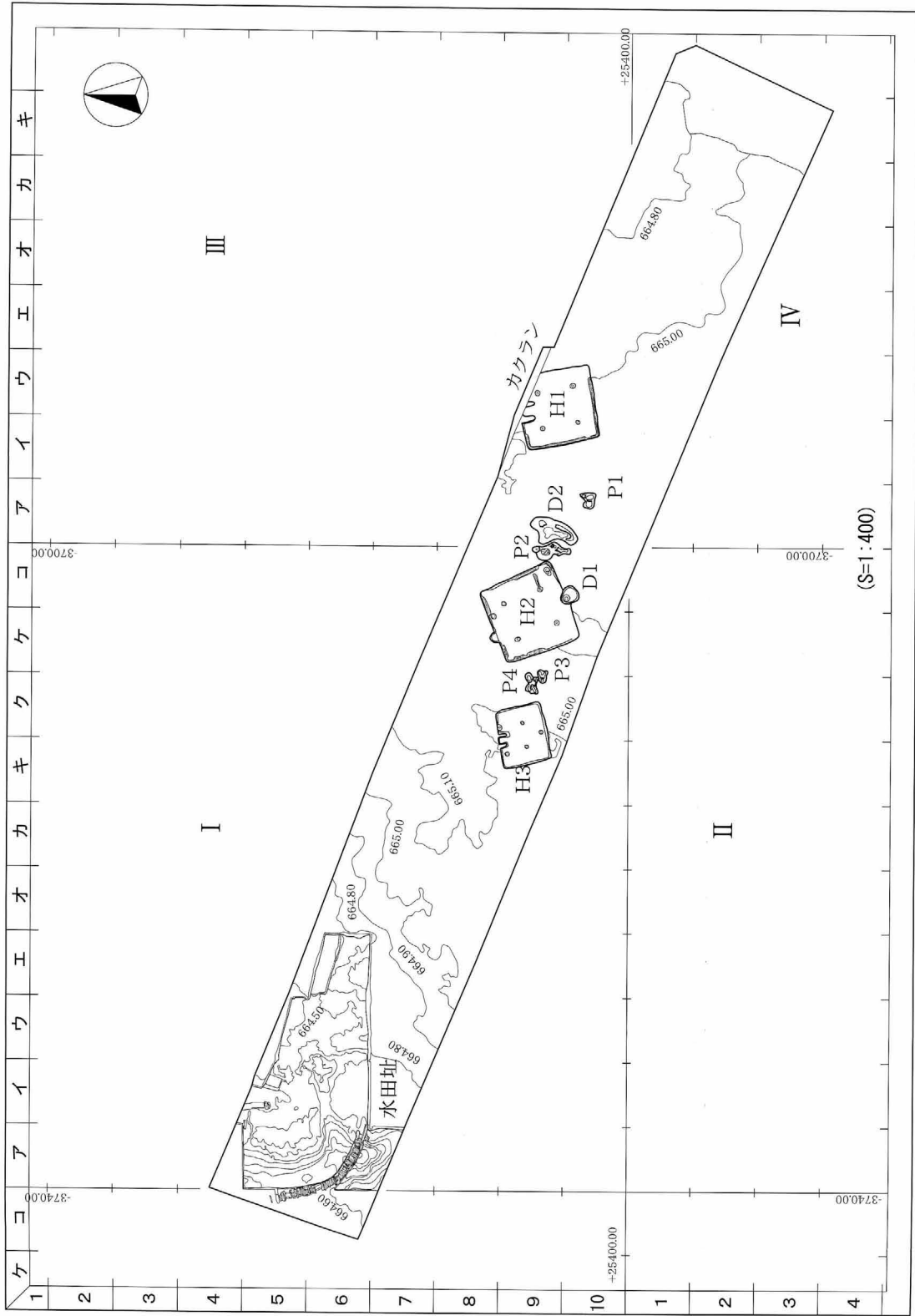
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	縄文土器	深鉢	—	(7.8)	—	—	網代底・後期堀之内式		回転実測	Iイ6
2	土師器	坏	(15.5)	—	—	—			回転実測	Iイ6
3	土師器	碗	—	(5.7)	—	—	黒色処理		完全実測	Iイ6
4	土師器	高坏	—	—	—	—	黒色処理		完全実測	Iイ5
5	土師器	甕	(11.2)	—	—	—			回転実測	検出
6	土師器	壺	(21.5)	—	—	—			回転実測	Iイ5
7	須恵器	坏	(16.0)	(9.8)	—	—			回転実測	Iウ5
8	須恵器	坏	—	(6.4)	—	—	火禱	右回転糸切	完全実測	Iエ6
9	須恵器	坏	—	(6.6)	—	—		回転ヘラケズリ	回転実測	Iイ6
10	須恵器	坏	—	(11.6)	—	—		回転糸切	回転実測	Iイ5
11	須恵器	有台坏	—	(9.6)	—	—			回転実測	Iウ6
12	須恵器	有台坏	—	(11.5)	—	—		回転ヘラケズリ	回転実測	検出
13	須恵器	有台坏	—	(12.1)	—	—		回転ヘラケズリ	回転実測	Iイ7
14	須恵器	坏蓋	—	—	—	—			完全実測	Iイ5
15	須恵器	甕	—	—	—	—		櫛描文	破片実測	Iエ6
16	須恵器	甕	—	—	—	—	当具痕	平行叩目	破片実測	Iイ7
17	須恵器	壺	—	(15.1)	—	—			回転実測	Iエ6
18	山茶碗	捏鉢	—	—	—	—			破片実測	Iエ6
19	山茶碗	捏鉢	—	—	—	—			破片実測	Iイ5
20	山茶碗	捏鉢	—	—	—	—			破片実測	Iイ7
21	古瀬戸	おろし皿	—	—	(6.5)	—			回転実測	Iエ6
22	陶器	サヤ	(14.8)	(15.5)	(6.0)	—			回転実測	検出
23	青磁	碗	—	—	—	—		連弁文	破片実測	Iイ7
24	青磁	碗	—	—	—	—		連弁文	破片実測	Iウ6
25	青磁	碗	—	5.6	—	—		連弁文	完全実測	Iイ6
26	青磁	碗	—	—	—	—			破片実測	検出
27	青磁	碗	—	—	—	—	劃画文		破片実測	Iエ6
28	青磁	碗	—	—	—	—			破片実測	Iイ6
29	青磁	碗	—	—	—	—			破片実測	Iエ6
30	青磁	碗	—	—	—	—	劃画文		破片実測	Iエ6
31	青磁	碗	—	—	—	—		連弁文	破片実測	検出
32	青磁	碗	—	—	—	—	劃画文		破片実測	Iエ6
33	石器	打製石斧	13.5	6.0	2.0	198.5			完全実測	Iエ6
34	石器	打製石斧	13.1	7.6	1.2	152.5			完全実測	Iウ5
35	石器	石鏃	2.4	(1.4)	0.3	(0.8)	チャート		完全実測	Iエ6
36	石器	削器	2.4	2.7	1.0	6.7	黒曜石		完全実測	Iイ5
37	石製品	白玉	0.6	0.6	0.3	0.2	滑石製		完全実測	Iイ7
38	石製品	砥石	10.0	13.0	9.2	1,780.0	全面に擦痕		完全実測	Iイ7
39	銅製品	古銭	2.3	2.3	0.1	2.4	寛永通宝		完全実測	Iエ6
40	銅製品	古銭	2.4	2.4	0.15	2.6	寛永通宝		完全実測	Iエ6
41	鉄器	刀子	—	1.2	0.25	—			完全実測	Iイ7
42	木製品	矢板	—	—	—	—			完全実測	Iエ6
43	木器	鋏	—	—	—	—			完全実測	Iエ6
44	木器	鋏	28.35	—	—	—			完全実測	Iウ6
45	木製品	桶?	—	1.5	0.9	—	上端部に加工痕		完全実測	Iウ5
46	木製品	桶?	—	9.0	1.1	—			完全実測	Iイ6
47	木製品	曲物?	—	—	—	—			完全実測	Iウ5
48	木製品	?	—	—	—	—			完全実測	Iエ6
49	木製品	?	—	3.7	1.4	—			完全実測	Iエ7
50	木製品	?	—	—	—	—			完全実測	Iエ6
51	木製品	?	—	—	—	—			完全実測	Iエ6
52	木製品	?	—	—	—	—			完全実測	Iエ6
53	木製品	?	—	—	—	—	2カ所に「コ」字の切り込み加工		完全実測	Iウ5

第7表 市道遺跡V 遺構計測表(2)

遺構名	検出位置	重複関係	長軸方位	長軸長	短軸長	深度	ピット	付属施設	備考	時期
H1	Ⅲウ9	カクランに切られ、調査区外にのびる	N-8°-W	4.76	4.64	0.16	主4+2	周溝	カマド地山削りだし	古Ⅲ
H2	Ⅰケ9	D1・カクランに切られる	N-23°-W	(4.70)	4.85	0.25	主4+4	周溝		古Ⅲ
H3	Ⅰキ9	なし	N-104°-W	3.50	2.74	0.22	主2+3	なし	カマド地山削りだし、消失家屋	古Ⅲ
D1	Ⅰコ10	H2を切る	N-23°-W	1.10	1.06	0.10	-	なし		不明
D2	Ⅲア9	なし	N-20°-E	3.05	1.65	0.70	-	なし		不明
P1	Ⅲア10	なし	N-90°-E	1.01	0.96	0.22	-	-		不明
P2	Ⅰコ9	なし	N-3°-E	2.30	0.95	0.50	-	-		不明
P3	Ⅰコ9	なし	N-108°-W	0.84	0.66	0.20	-	-		不明
P4	Ⅰク9	なし	N-111°-W	1.40	0.80	0.24	-	-		不明



市道遺跡V全景(北から)



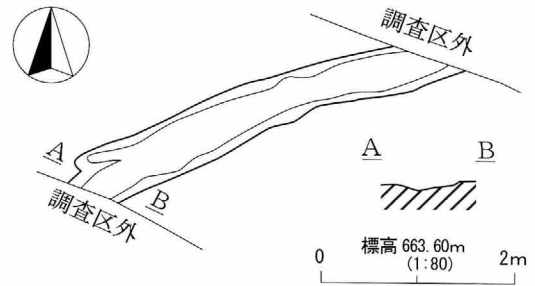
第 19 図 市道遺跡 V 全体図

# 第Ⅲ章 平馬塚遺跡Ⅱ

## 第1節 溝址

### OM1号溝址 (第20図)

X=+25540.00、Y=-4028.00座標で検出された。N-67°-Eの角度で、南から北に向かい僅かに傾斜する。巾0.64m、深度-0.07mの規模である。断面は不整な鍋底状を呈する。出土遺物は皆無であり、時期・性格は不明である。



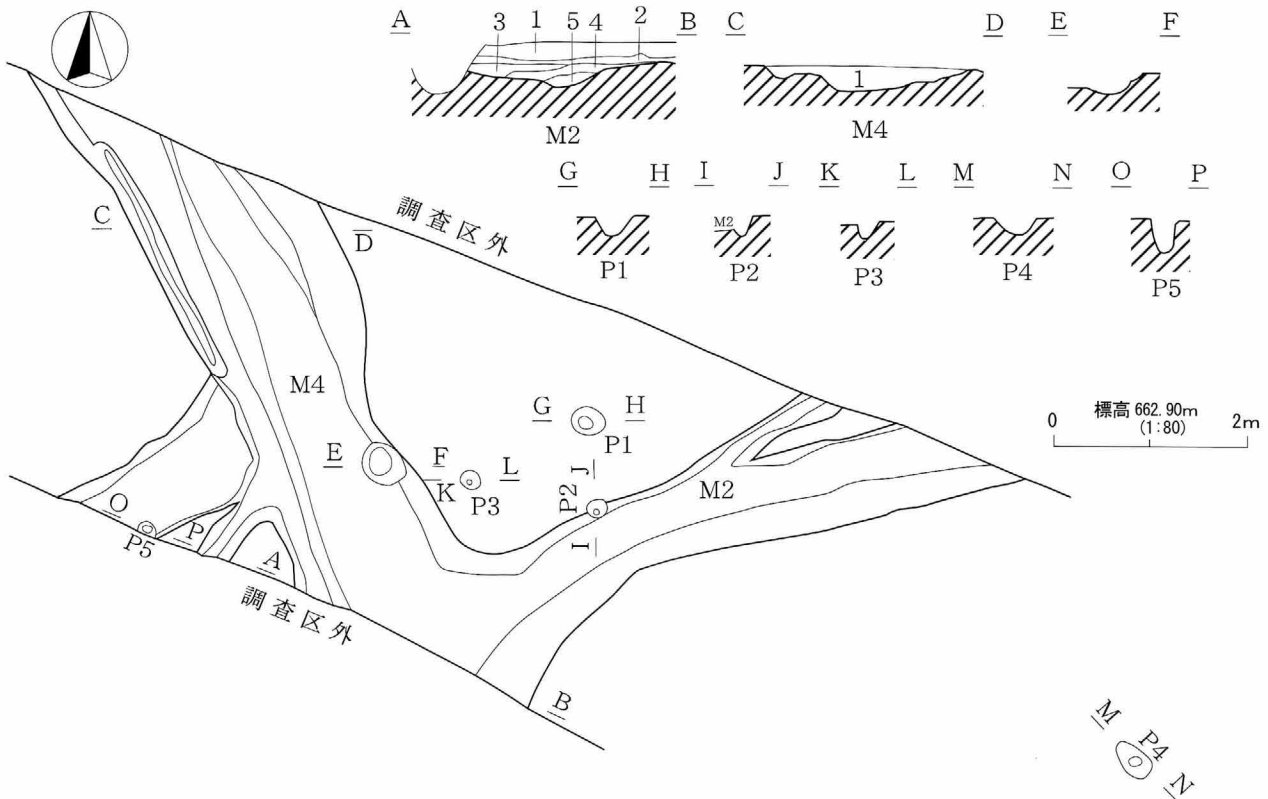
第20図 M1号 溝址

### OM2・M4号溝址 (第21・22図)

X=+25564.000~25568.000、Y=-4084.00~4096.00座標で検出された。M2はN-68°-Eの角度で東から西に向かい僅かに傾斜し、M4に合流する。M4はN-22°-Wの角度で僅かに北から南に傾斜する。M2が巾1.4m、深度0.24m、M4が巾1.9m、深度0.25mの規模である。

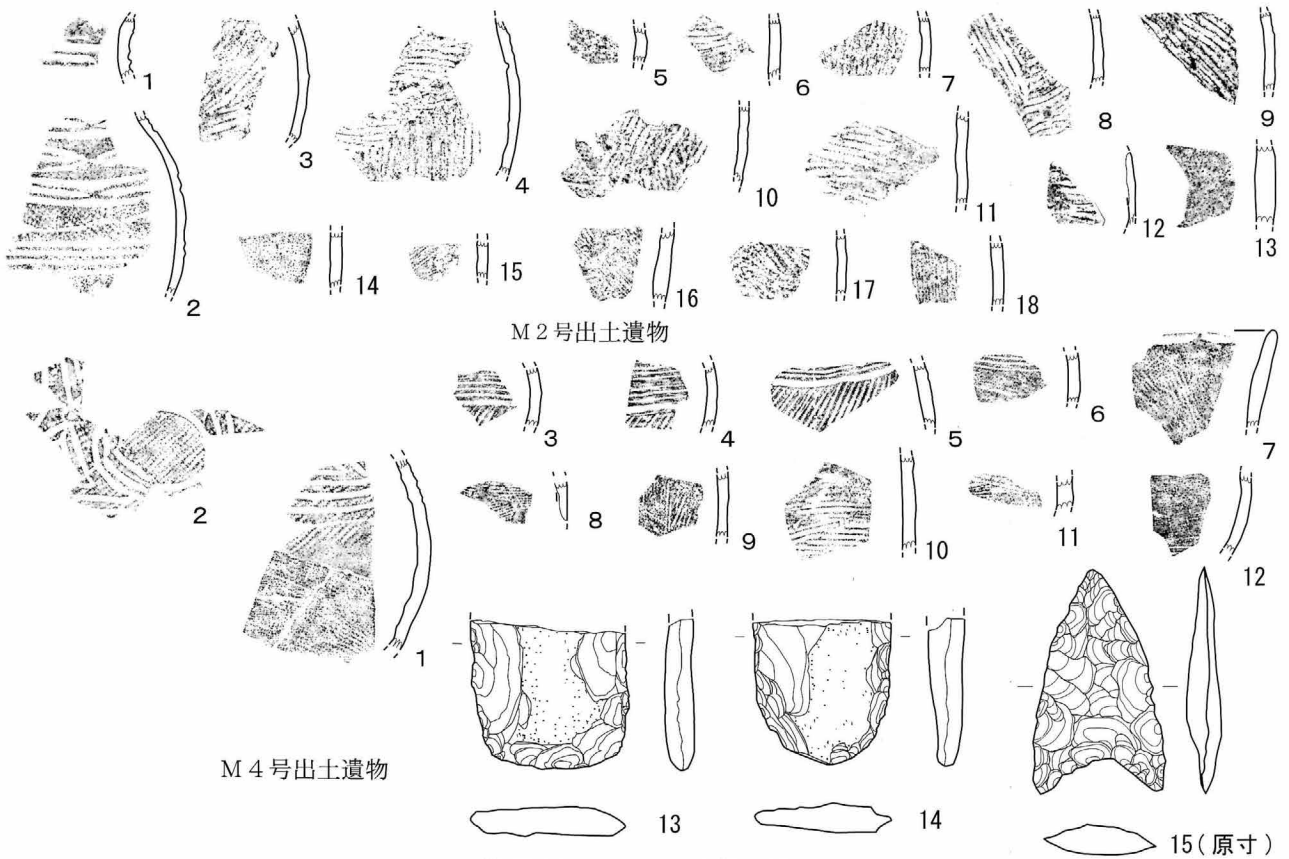
出土遺物は、弥生前期~中期中葉の土器、石器が認められる。

M2-1・2は変形工字文の甕であり、同一個体と思われる。地文に縄文が施されている。工字文は沈線により表現されている。3~12は太く浅い条痕が施される甕か壺で、同一個体と思われる。接合面が無いので断言はできないが、1・2と同一個体の可能性もある。13・14は無文である。器種は14は甕と思われるが、13は判断できない。15・16・18は3~12と比べ細い条痕が施される。17は3~12と同様であるが、3~12が灰白色の色調なのに対し、暗褐色の色調を呈するため別個体とした。以上の出土遺物は、時期的には弥生時代前期後半に該当し、長野県の氷Ⅱ式、あるいは関東北西部の沖Ⅱ式の範疇で捉えられるものと思われる。



第21図 M2・4号溝址 (1)・単独ピットP1~P5





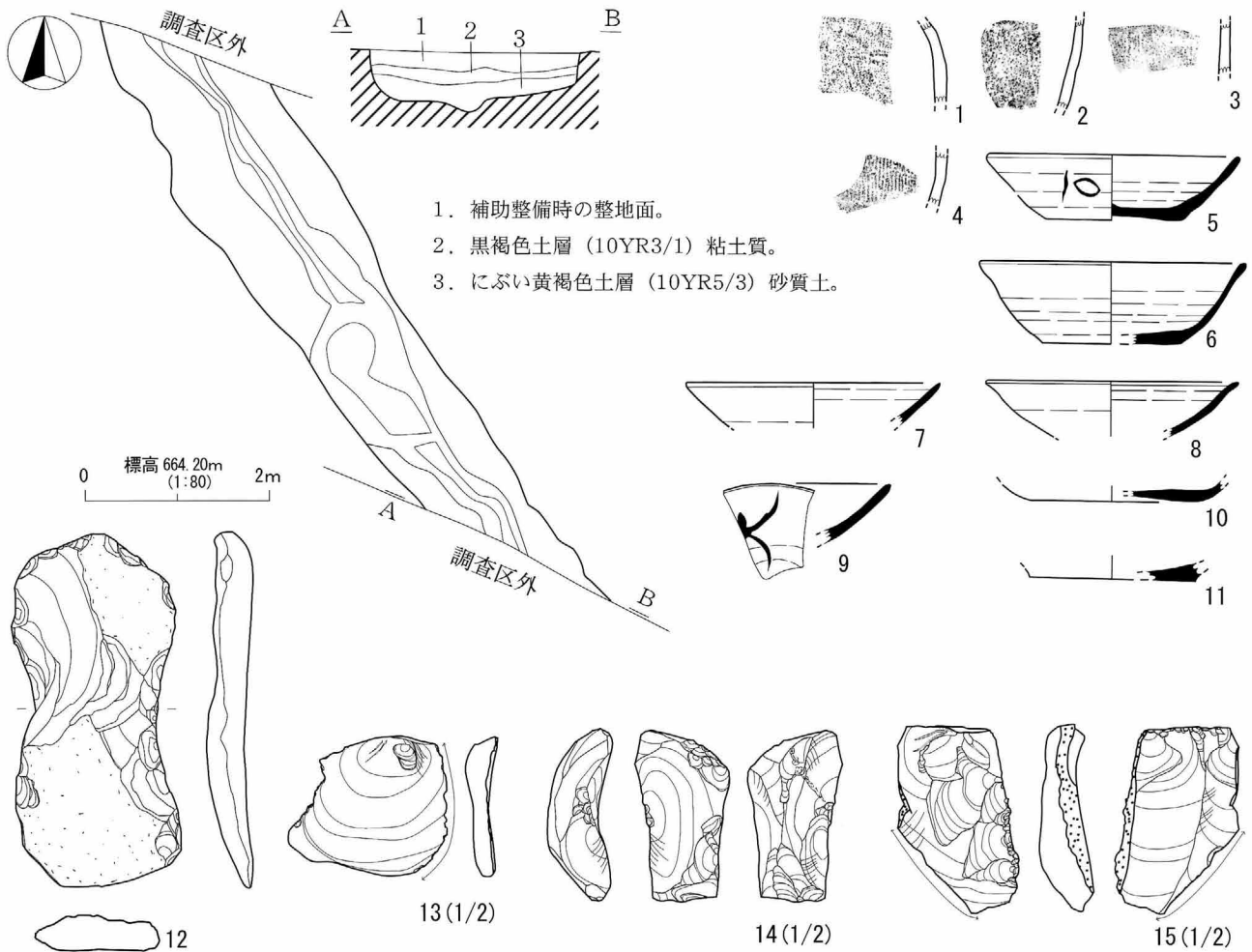
第22図 M2・4号溝址(2)

M4-1・2は同一個体の壺である。沈線による三角文と楕円文で構成される横位文様帯に縄文が施文され、更に赤彩が加えられる。文様帯の下部には細かい条痕が斜位に施されている。所謂「境窪」の範疇で捉えられるものと思われる。中期中葉の所産と考えられる。3～5も同一個体の壺片であり、所謂「ほうろく屋敷」の範疇で捉えられるように思われる。中期前葉の所産と考えられる。6は外面に比較的太めな条痕、内面にはハケ目が認められる壺、7は前期に特徴的な波状口縁の甕で細かい条痕が施される。8は細かい縄文が施文される。9・11は比較的細かい、10は太い条痕が施される甕である。12は外面に太い条痕、内面にハケ目が施される甕である。以上の出土土器は弥生時代前期

第8表 平馬塚遺跡Ⅱ M2号溝址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕	—	—	—	—	変形工字文	破片実測	M2	
2	弥生土器	甕	—	—	—	—	変形工字文、縄文	破片実測	M2	
3	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
4	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
5	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
6	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
7	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
8	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
9	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
10	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
11	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
12	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
13	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
14	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
15	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
16	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
17	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	
18	弥生土器	甕	—	—	—	—		破片実測	M2	

前期後半～中期中葉の所産と思われる。以上の土器の他に13・14の打製の石鍬片、15の黒曜石製の打製石鏟が出土している。



第23図 M3号 溝址

第9表 平馬塚遺跡Ⅱ M4号溝址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	壺	—	—	—	—		沈線文、縄文、条痕	破片実測	M4
2	弥生土器	壺	—	—	—	—		沈線文、縄文、赤彩	破片実測	M4
3	弥生土器	壺	—	—	—	—		条痕	破片実測	M4
4	弥生土器	壺	—	—	—	—		条痕	破片実測	M4
5	弥生土器	壺	—	—	—	—		条痕	破片実測	M4
6	弥生土器	壺	—	—	—	—	ハケ目	条痕	破片実測	M4
7	弥生土器	甕	—	—	—	—		条痕	破片実測	M4
8	弥生土器	?	—	—	—	—		縄文	破片実測	M4
9	弥生土器	甕	—	—	—	—		条痕	破片実測	M4
10	弥生土器	甕	—	—	—	—		条痕	破片実測	M4
11	弥生土器	甕	—	—	—	—		条痕	破片実測	M4
12	弥生土器	甕	—	—	—	—	ハケ目	条痕	破片実測	M4
13	石器	石鍬	(7.6)	7.3	1.40	(117.5)	打製		完全実測	M4
14	石器	石鍬	(7.4)	8.3	1.35	(182.5)	打製		完全実測	M4
15	石器	石鏟	3.0	1.7	0.45	1.5	打製、黒曜石		完全実測	M4

### OM3号溝址 (第23図)

X = +25572.00、Y = -4104.00座標で検出された。N-34° - Wの角度で南から北に向かい僅かに傾斜する。巾1.6m、深度0.65mの規模である。調査範囲の中央やや南よりの底面には淀み状の窪みが認められるが、鍋底状の底面中央がもう一段鍋底状に落ちる断面形状である。

出土遺物には弥生土器、須恵器、石器が認められる。弥生土器は全てに比較的細かい条痕が施されている。1・2は内面にも条痕が認められる。器種は判断出来ないが甕と思われる。大まかではあるが、時期的には弥生時代前期後半～中期中葉の所産と思われる。5～11は須恵器坏である。底面が残存するものには全て回転糸切痕が認められる。5・9には墨書が認められるが、判読はできない。時期的には奈良・平安時代V期-9C前半に比定される。石器は12の打製石鍬、13～15の加工痕及び使用痕が認められる黒曜石剥片が出土している。弥生土器と同時期のものであろう。

第10表 平馬塚遺跡Ⅱ M3号溝址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕	—	—	—			条痕	破片実測	M3
2	弥生土器	甕	—	—	—			条痕	破片実測	M3
3	弥生土器	甕	—	—	—			条痕	破片実測	M3
4	弥生土器	甕	—	—	—			条痕	破片実測	M3
5	須恵器	坏	(13.7)	7.2	3.6		火襷	右回転糸切・火襷	完全実測・墨書	M3
6	須恵器	坏	(14.4)	7.4	4.5			右回転糸切	回転実測	M3
7	須恵器	坏	(14.0)	—	(2.4)				回転実測	M3
8	須恵器	坏	(13.7)	—	(3.05)				回転実測	M3
9	須恵器	坏	(14.0)	—	(3.3)				破片実測・墨書	M3
10	須恵器	坏	—	(9.0)	(0.8)			右回転糸切・火襷	回転実測	M3
11	須恵器	坏	—	(9.0)	(0.45)			右回転糸切	回転実測	M3
12	石器	石鍬	19.1	9.0	2.1	500.0	打製		完全実測	M3
13	石器	剥片	3.85	4.35	0.8	8.9	打製、黒曜石、使用痕		完全実測	M3
14	石器	剥片	4.75	2.4	1.6	16.9	打製、黒曜石、加工痕		完全実測	M3
15	石器	剥片	5.2	1.45	1.25	15.6	打製、黒曜石、加工痕、使用痕		完全実測	M3

## 第2節 土坑

### OD1号土坑 (第24図)

X = +25536.00、Y = -4020.00座標で検出された。N-127° - Eに長軸方位をとる。長径1.3m、短径0.62m、深度0.16mの規模である。平面形状は楕円、断面形状は鍋底である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格ともに不明である。

### OD2号土坑 (第24図)

X = +25564.00、Y = -4092.00座標で検出された。真北に長軸方位をとる。径0.78mの円形の平面形を呈し、0.23mの深度を有する。断面は逆梯形を呈する。M2号に切られることから、出土遺物は皆無であるが、弥生時代前期後半以前の所産である。性格は不明である。

### OD3号土坑 (第24図)

X = +25572.00、Y = -4112.00の座標で検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-20° - Eに長軸方位をとる。長径1.6m、短径1.5m、深度0.28mの規模を有する。西辺の南半に半円状の張り出しを有するが、基本的には長方形の平面プランを呈し、逆梯形の断面形状である。図化できない破片であるが、平安時代と思われる須恵器坏片が1点出土している。

## 第3節 ピット

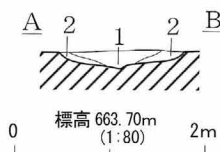
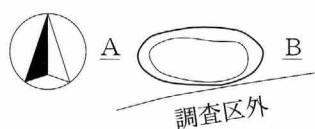
### OPピット (第21図)

M2・4号溝址の周辺で5基のピットが検出されている。平面形は円～楕円、断面は鍋底状である。圃場整備事業の

攪乱や、湧水により、遺構重複の前後関係は把握できなかった。出土遺物は皆無である。規模等については遺構計測表を参照されたい。

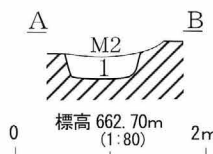
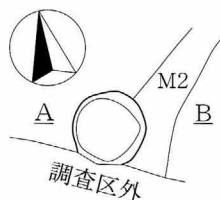
第11表 平馬塚遺跡Ⅱ 遺構計測表

遺構名	検出位置		長軸方位	長軸長	短軸長	深度	備考	時期
	X座標	Y座標						
M1	+25540.00	-4028.00	N-67° -E		0.64	0.07		不明
M2・4	+25564.00 ~	-4084.00 ~	N-68° -E		1.40	0.24		弥生前期後半~中期前葉
	+25568.00	-4096.00	N-22° -W		1.90	0.25		
M3	+25572.00	-4104.00	N-34° -W		1.60	0.65		奈・平V期
D1	+25536.00	-4020.00	N-127° -E	1.30	0.62	0.16		不明
D2	+25564.00	-4092.00	N-0° -E	0.78	0.78	0.23		不明
D3	+25572.00	-4112.00	N-20° -E	1.60	1.50	0.28		平安時代
P1	M2・4号溝址周辺		N-76° -W	0.38	0.30	0.40		不明
P2	M2・4号溝址周辺		N-86° -E	0.20	0.16	0.24		不明
P3	M2・4号溝址周辺		N-55° -W	0.24	0.18	0.20		不明
P4	M2・4号溝址周辺		N-43° -W	0.48	0.26	0.18		不明
P5	M2・4号溝址周辺					0.36		不明



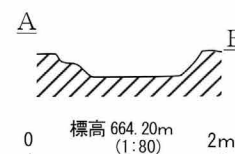
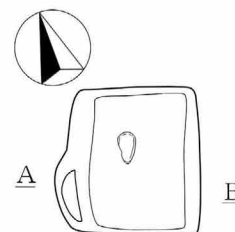
1. 黒色土層 (10YR1.7/1)。10YR6/4 不定大ブロック少含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/4 粒子多含。

D1号 土杭



1. 砂利層。

D2号 土杭

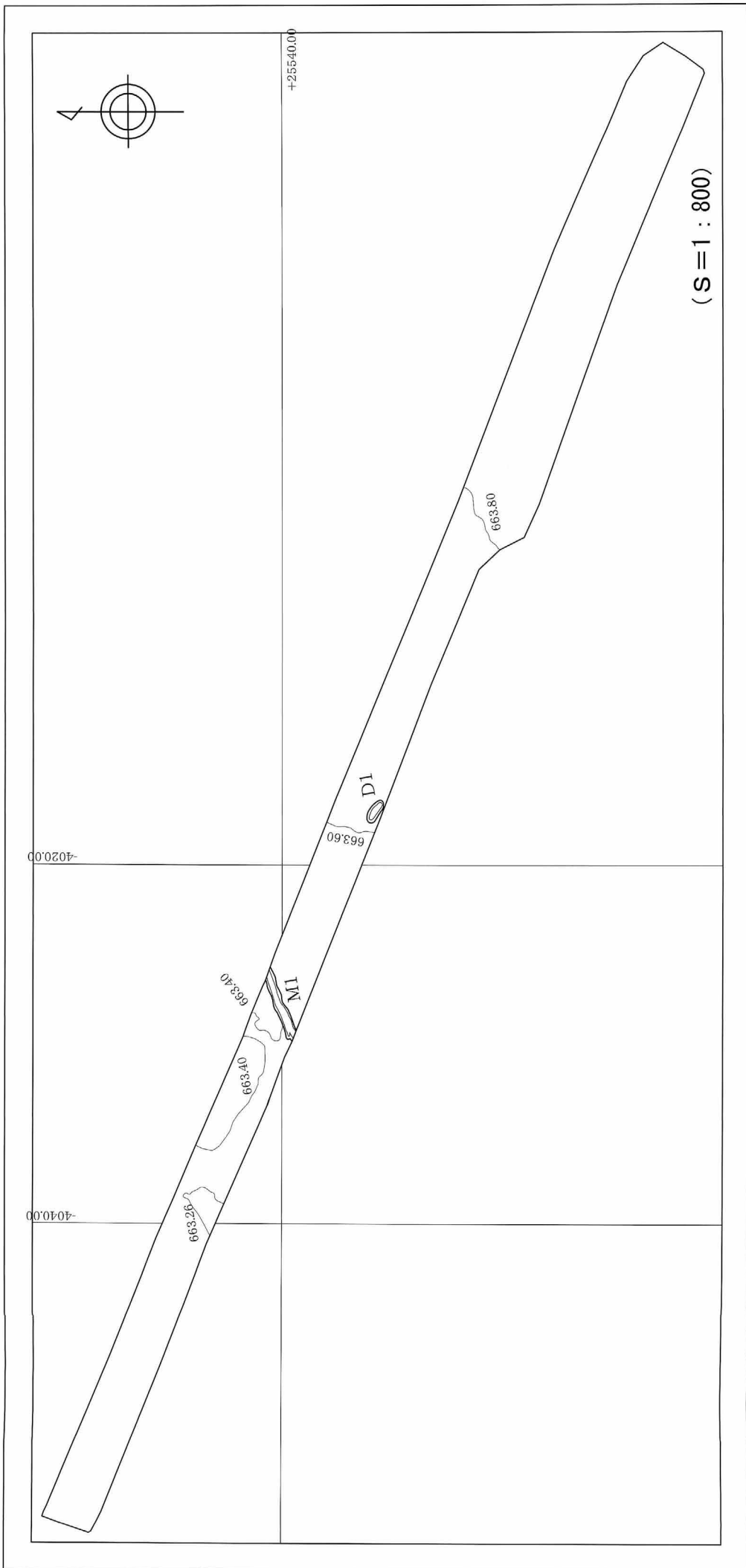


D3号 土杭

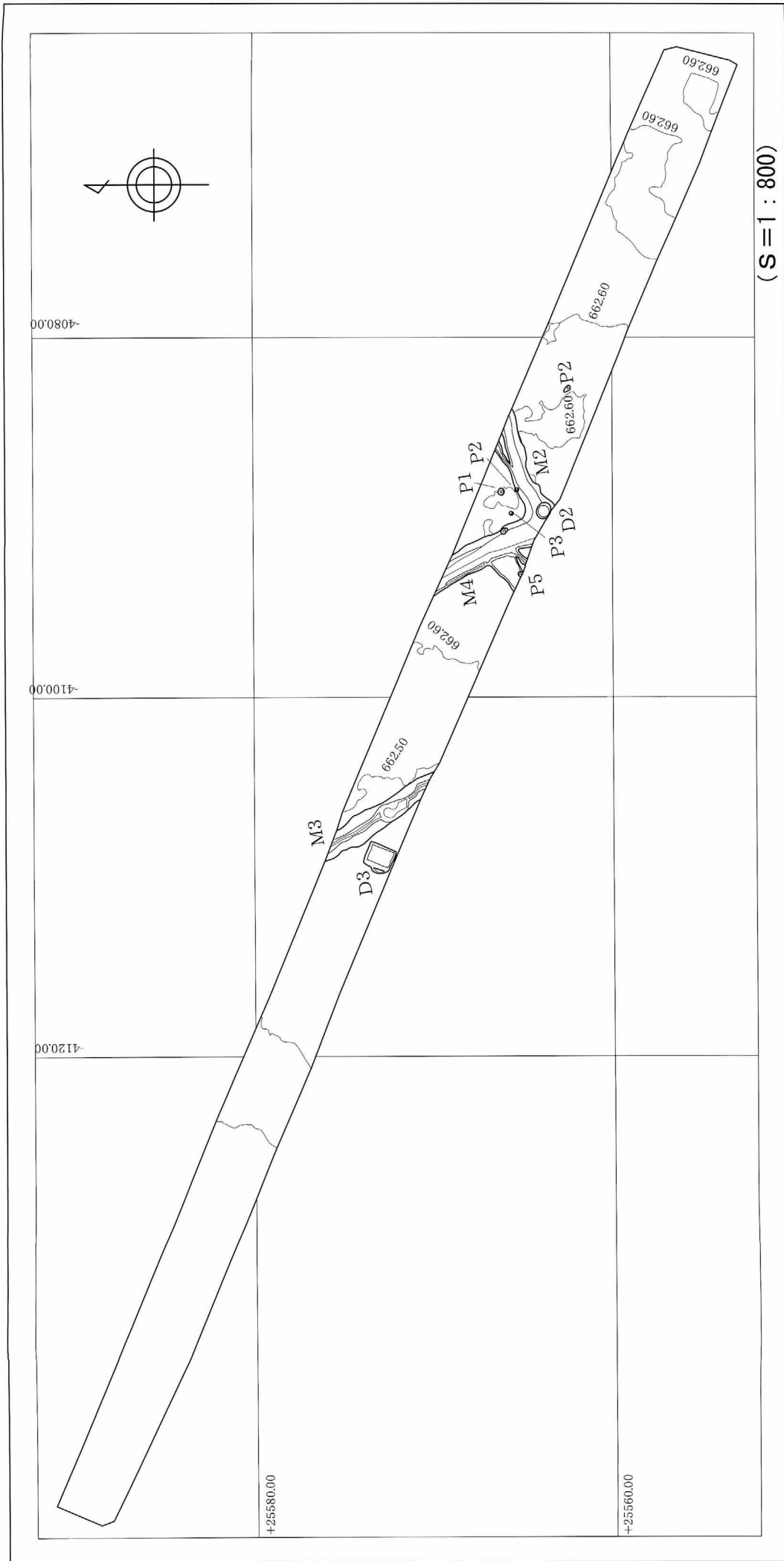
第24図 D1・D2・D3号 土杭



平馬塚遺跡Ⅱ 西半全景



第 25 図 平馬塚遺跡Ⅱ全体図東半



第 26 図 平馬塚遺跡Ⅱ全体図西半

# 第IV章 北裏遺跡II

## 第1節 溝址

### OM1号溝址 (第25図)

調査区北端部、M2号溝址は本址の南を併走しており、同一遺構の可能性も認められたため、東端部分で地山を断ち割って確認を行った結果、独立した2条の溝であることが判明した。中心の座標はX=+26240.00、Y=-5584.00である。最大巾1.5m、深度0.8mの規模で、N-55°-Wの向きに東から西に緩やかに傾斜する。覆土は3層からなる自然堆積土で、鍋底状の断面形状である。

遺物は、3の縦位櫛描条線文が体部上半に施される弥生後期後半栗林式の壺片、1・2の櫛描斜走文を縦位綾杉に施す、弥生中期後半栗林式の甕が出土している。時期的には栗林式期の所産と考えて良いように思われる。

### OM2号溝址 (第25図)

調査区北端部、M1号溝址の南を併走する。中心の座標はX=+26240.00、Y=-5588.00である。最大巾2.4m、深度0.4mの規模で、N-55°-Wの向きに東から西に緩やかに傾斜する。覆土は3層からなる自然堆積土で、鍋底状の断面形状である。

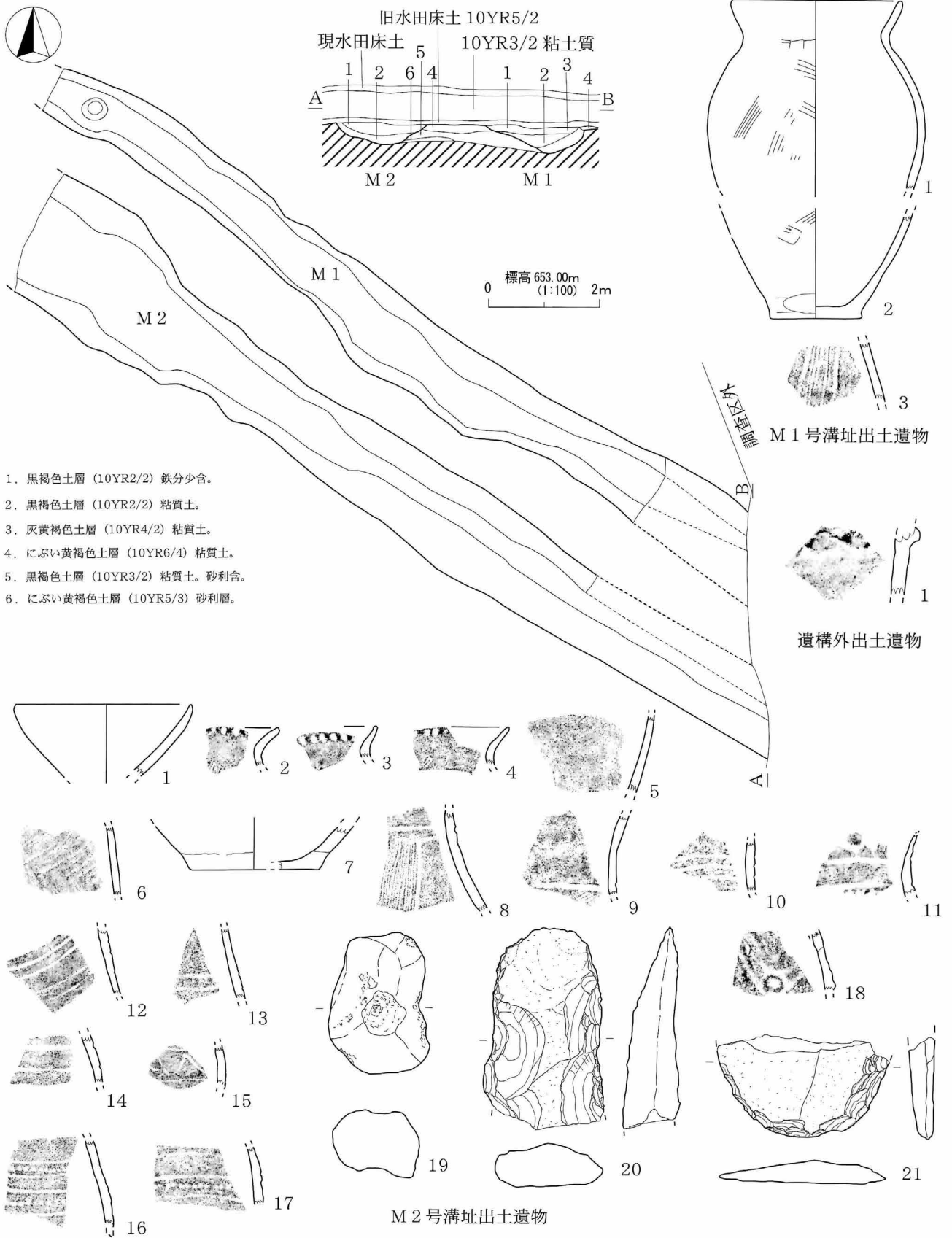
遺物は弥生土器と石器が認められる。弥生土器は1の鉢、2~6の甕、7~18の壺の器種が認められる。甕は口唇部への押捺や櫛描斜走文が綾杉状に施文されるが、横位と縦位が認められる。壺も横位、縦位の両方の文様展開が認

第12表 北裏遺跡II M1号溝址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕	12.0	—	—		頸部簾状文、体部縦羽状斜走文	回転実測	M1	
2	弥生土器	甕	—	6.4	—		縦羽状斜走文	完全実測	M1	
3	弥生土器	壺	—	—	—		縦位櫛描条線	破片実測	M1	

第13表 北裏遺跡II M2号溝址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	鉢	12.6	—	—			回転実測	M2	
2	弥生土器	甕	—	—	—		斜走文、口唇押捺	破片実測	M2	
3	弥生土器	甕	—	—	—		斜走文、口唇押捺	破片実測	M2	
4	弥生土器	甕	—	—	—		横羽状、口唇押捺	破片実測	M2	
5	弥生土器	甕	—	—	—		縦羽状	破片実測	M2	
6	弥生土器	甕	—	—	—		横羽状	破片実測	M2	
7	弥生土器	壺	—	9.3	—			回転実測	M2	
8	弥生土器	壺	—	—	—		平行沈線、条線文	破片実測	M2	
9	弥生土器	壺	—	—	—		平行沈線、縄文	破片実測	M2	
10	弥生土器	壺	—	—	—		平行沈線	破片実測	M2	
11	弥生土器	壺	—	—	—		平行沈線、横位条線	破片実測	M2	
12	弥生土器	壺	—	—	—		平行沈線	破片実測	M2	
13	弥生土器	壺	—	—	—		平行沈線	破片実測	M2	
14	弥生土器	壺	—	—	—		平行沈線	破片実測	M2	
15	弥生土器	壺	—	—	—		平行沈線、波状文	破片実測	M2	
16	弥生土器	壺	—	—	—		平行沈線、刺突文	破片実測	M2	
17	弥生土器	壺	—	—	—		平行沈線、刺突文	破片実測	M2	
18	弥生土器	壺	—	—	—		円形貼付文・ヘラ描文	破片実測	M2	
19	石器	凹石	10.2	7.1	5.5	350.0	表裏に凹	完全実測	M2	
20	石器	石鋏	—	8.6	3.9	590.0	打製、刃部欠損	完全実測	M2	
21	石器	石鋏	—	12.1	1.7	190.0	打製、基部欠損	完全実測	M2	



1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 鉄分少含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 粘質土。
3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 粘質土。
4. にぶい黄褐色土層 (10YR6/4) 粘質土。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) 粘質土。砂利含。
6. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 砂利層。

第 27 図 M 1・M 2 号溝址・遺構外出土遺物



第 14 表 北裏遺跡Ⅱ 遺構外出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	縄文土器	深鉢	—	—	—		横位凸帯、後期	破片実測	検出	

第 15 表 北裏遺跡Ⅱ 遺構計測表

遺構名	検出位置		長軸方位	長軸長	短軸長	深度	備 考	時期
	X 座標	Y 座標						
M1	+26240.00	-5584.00	N-55° -W	—	1.5	0.8		弥後期栗林
M2	+26240.00	-5588.00	N-55° -W	—	2.4	0.4		弥後期栗林

められ、櫛描条線、ヘラ状工具による沈線・刺突、縄文、貼付文等が組み合わされ施文されている。石器は19の凹石、20・21の打製の石鍬が出土している。以上の出土遺物から本址の時期は弥生時代後期栗林式期と思われる。

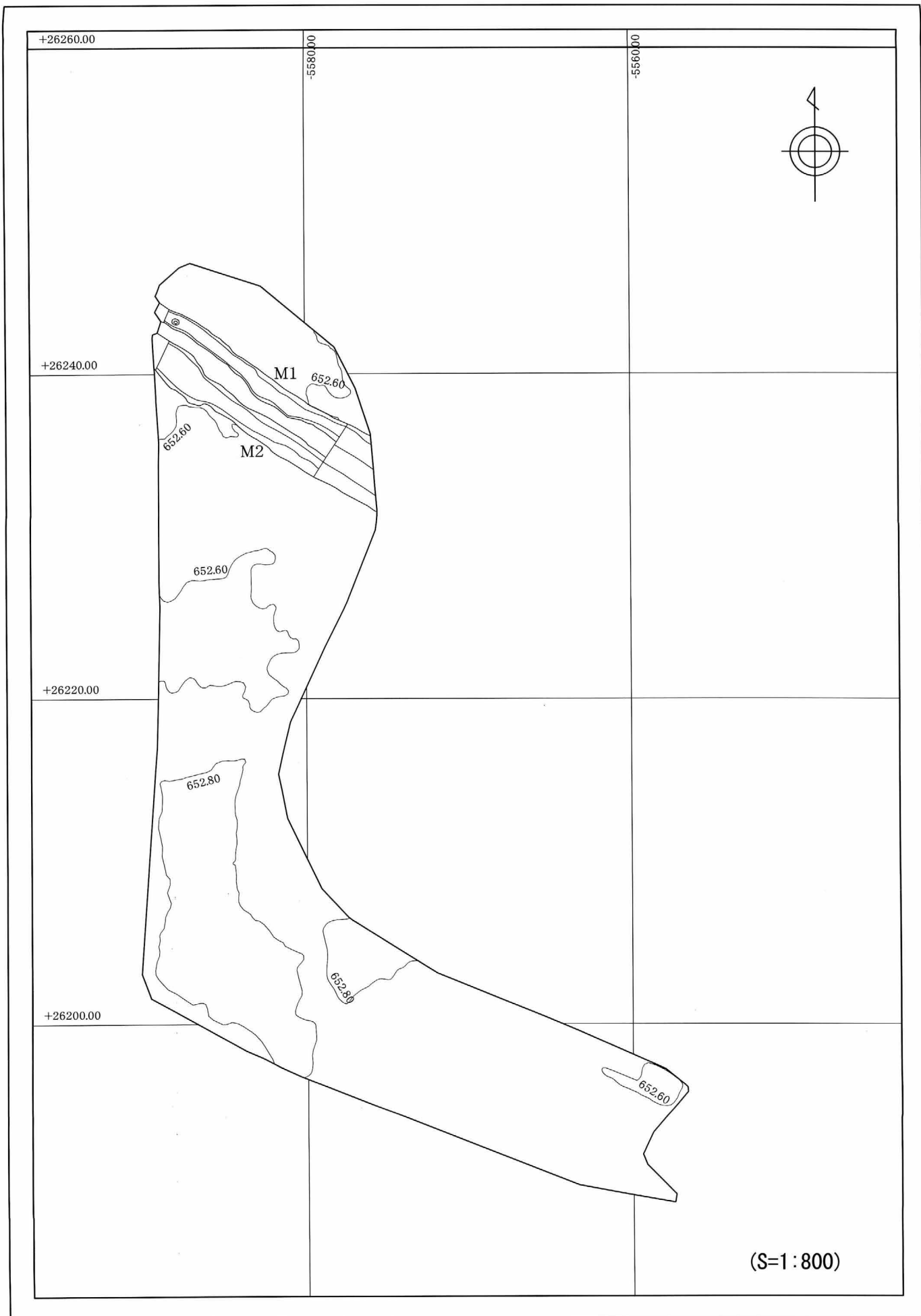
## 第 2 節 遺構外出土遺物

### ○遺構外出土遺物（第27図）

1 の横位凸帯が付く後期の縄文土器片が 1 片出土した。



北裏遺跡Ⅱ全景



第 28 図 北裏遺跡Ⅱ全体図

# 第V章 宮浦遺跡 I

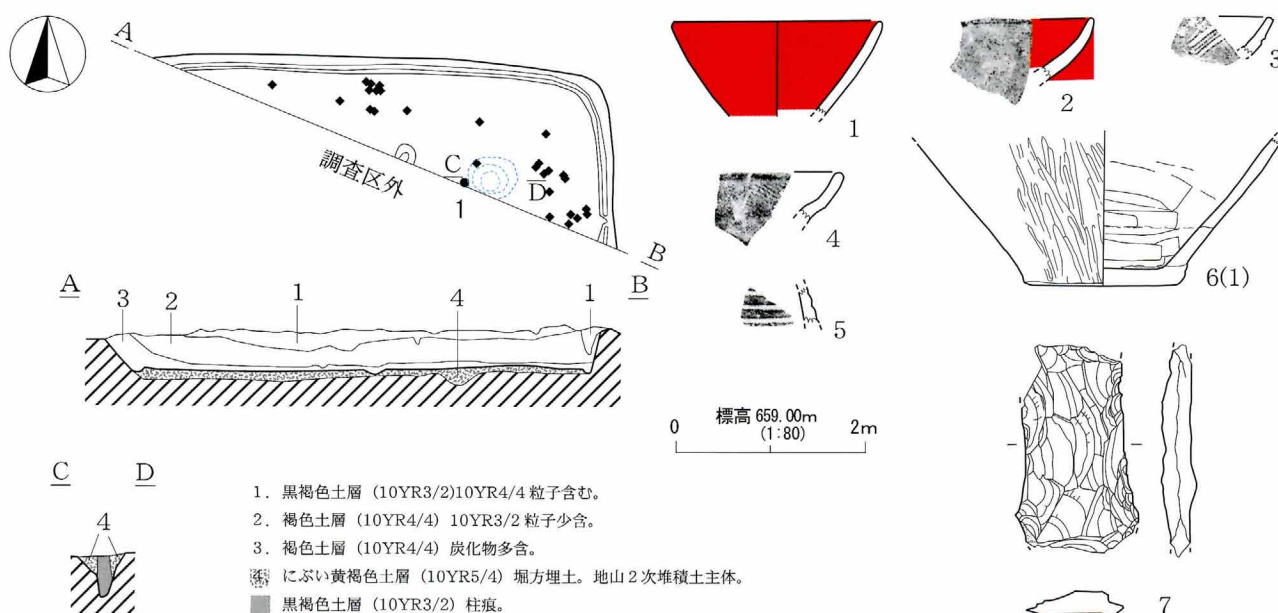
## 第1節 住居址

### OH 1号住居址 (第29図)

XIVウ4グリットで検出された。南方向に調査区外に延びるため、全容は不明である。調査範囲では重複関係は認められない。規模は深度0.41m以外は不明である。床面上には炭化物が散乱しており、焼失住居と考えられる。壁下には周溝が巡り、床面で1基、堀方で1基の柱穴が確認された。

遺物は弥生土器、石器が出土した。弥生土器には内外面赤彩の鉢(1・2)、壺(3~6)の器種が認められる。壺は赤彩されず、口縁部は受口状を呈する、また、体部にも文様帯を有する。石器は打製の石鋏片が1点出土した。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半栗林式期の所産と考えられる。



第29図 H 1号住居址

第16表 宮浦遺跡 I H 1号住居址出土遺物観察表

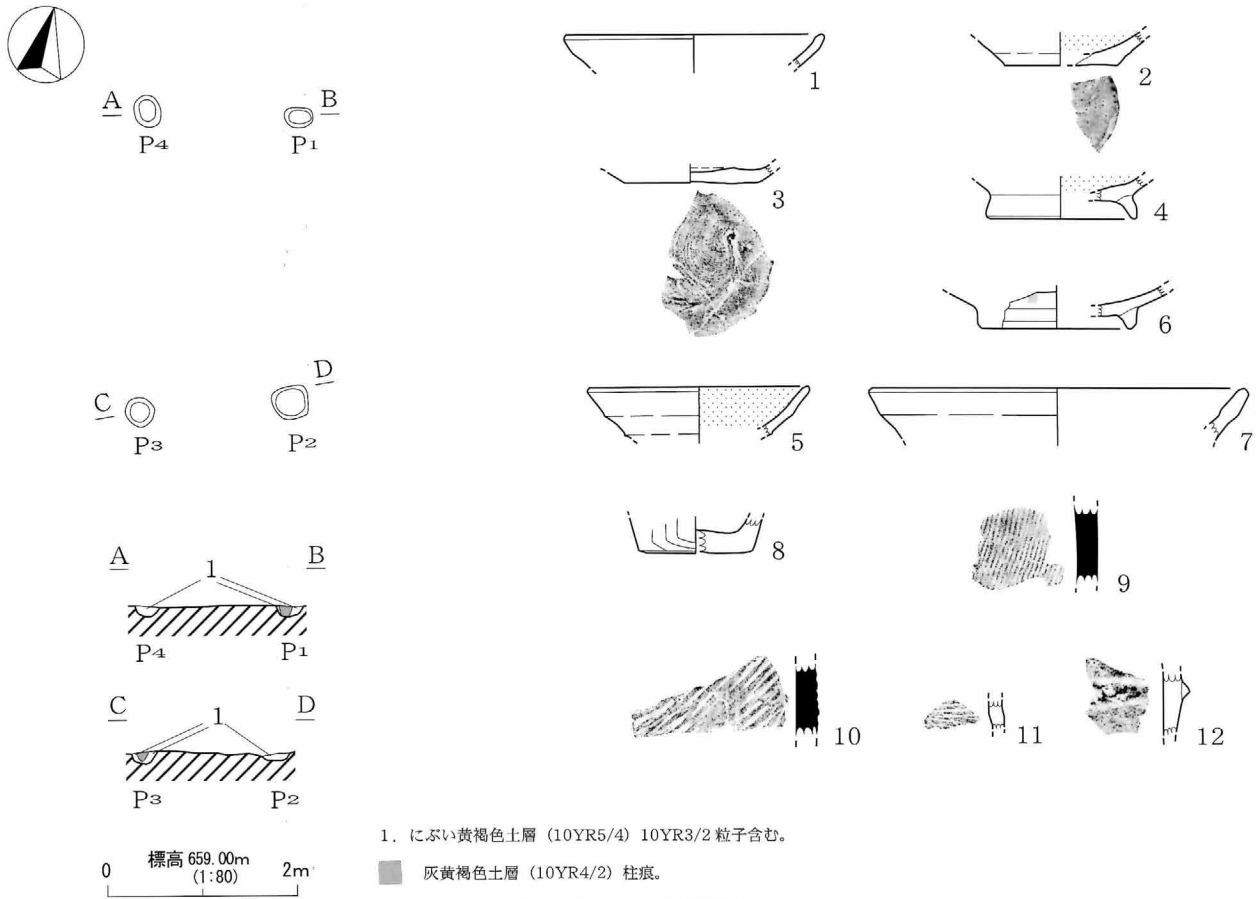
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	鉢	(11.0)	—	—		赤彩	赤彩	回転実測	覆土
2	弥生土器	鉢	—	—	—		赤彩	赤彩	破片実測	覆土
3	弥生土器	壺	—	—	—		口唇部縄文、口縁部櫛描斜走文		破片実測	覆土
4	弥生土器	壺	—	—	—			口唇部縄文	破片実測	覆土
5	弥生土器	壺	—	—	—			沈線文	破片実測	覆土
6	弥生土器	壺	—	—	—			ヘラミガキ	完全実測	No1
7	石器	石鋏	—	6.4	1.9	(114.6)	黒色安産岩			覆土

### OH 2号住居址 (第30図)

XIVウ2グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-13.5° -Wに長軸方位をとる。主柱穴と思われる4基のピットと、床面の一部が検出されただけであるため、規模は不明である。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、弥生土器、縄文土器が出土している。土師器は坏(1~3・5)、碗(4)、甕(7・8)の器種が認められる。

2・4・5は内面黒色処理が施されている。甕はロクロ甕である。須恵器（9・10）は2点共に甕の体部片である。灰釉陶器は碗の底部片である。丸石2号窯式と思われる。弥生土器（11）は櫛描条線が施される甕の体部片、縄文土器（12）は凸帯が付される後期の深鉢片である。

以上の出土遺物から本址の時期は、奈良・平安時代Ⅶ期、10世紀前半の実年代が想定される。



1. にぶい黄褐色土層（10YR5/4）10YR3/2 粒子含む。  
 ■ 灰黄褐色土層（10YR4/2）柱痕。

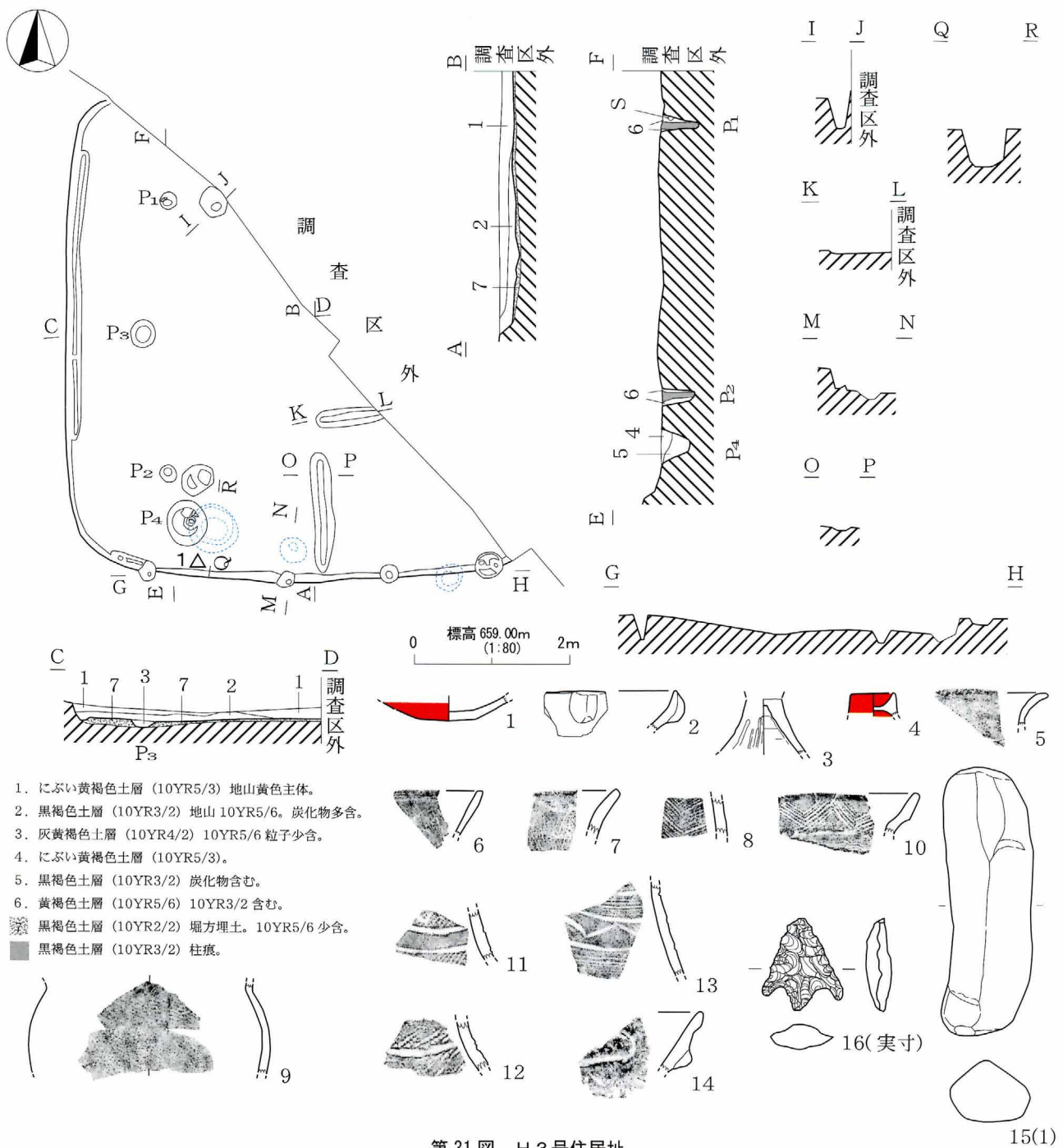
第30図 H2号住居址

第17表 宮浦遺跡Ⅰ H2号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(13.8)	—	—	—			回転実測	ケン
2	土師器	坏	—	(6.0)	—	—	黒色処理		回転実測・拓本	S半
3	土師器	坏	—	(7.0)	—	—		右回転糸切	回転実測・拓本	ケン
4	土師器	碗	—	(7.9)	—	—	黒色処理	付高台	回転実測	S半
5	土師器	坏?	(11.8)	—	—	—	黒色処理		回転実測	S半
6	灰釉陶器	碗	—	(8.4)	—	—		付高台	回転実測	ケン
7	土師器	ロクロ甕	(20.0)	—	—	—			回転実測	ケン
8	土師器	ロクロ甕	—	(6.0)	—	—	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	N半
9	須恵器	甕	—	—	—	—		平行叩目	破片実測・拓本	S半
10	須恵器	甕	—	—	—	—		平行叩目	破片実測・拓本	S半
11	弥生土器	甕	—	—	—	—		条線	破片実測・拓本	S半
12	縄文土器	深鉢	—	—	—	—		凸帯	破片実測・拓本	S半

○H3号住居址（第31図）

Ⅷカ10グリットで検出された。重複関係は有さない。北東方向に調査区外に延びるため全容は不明である。N-0°



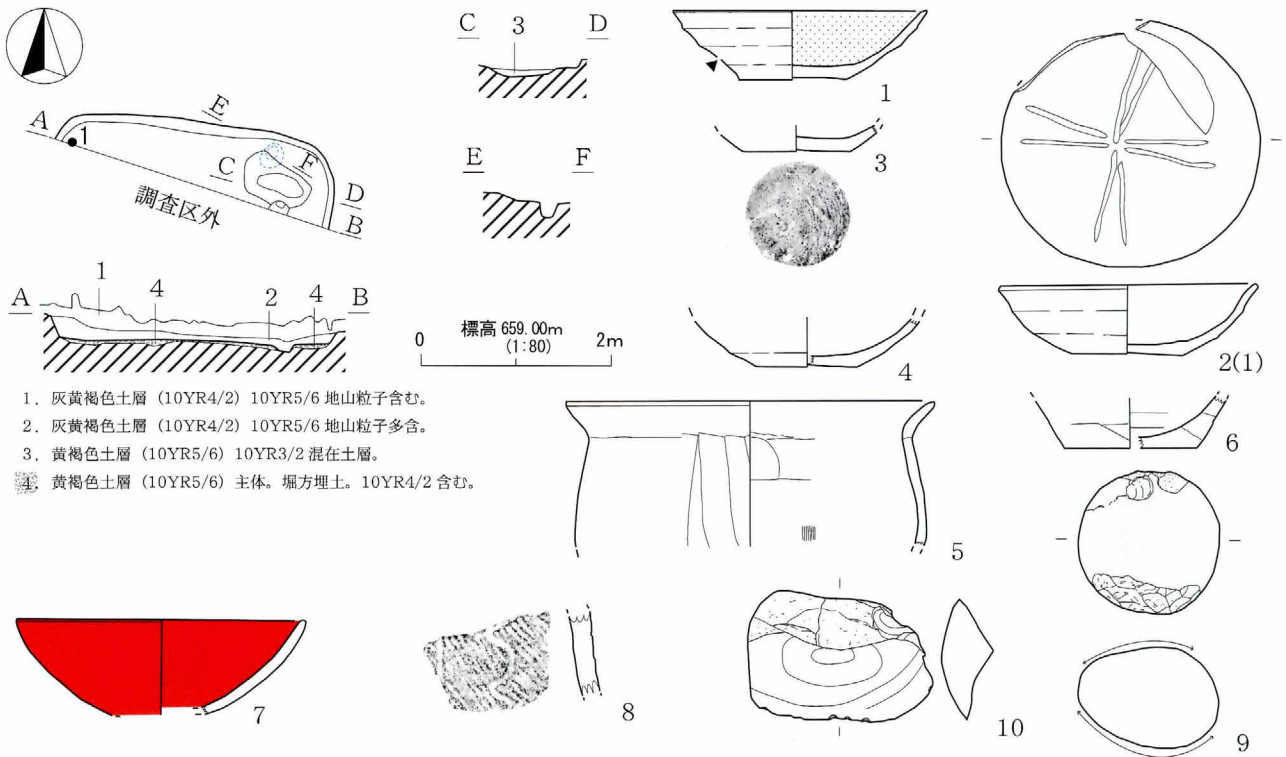
第31図 H3号住居址

—Wに長軸方位をとり、0.16mの深度を有する。床面上で10基、堀方から3基のピットが検出された。P1・P2の2基が支柱穴であり、φ10cm程度の柱痕が確認された。西壁下には周溝が巡り、南壁には壁柱穴が穿たれ、南東隅部分は所謂「間仕切り」溝により区画されている。調査範囲に炉址は確認されていない。

遺物は弥生土器、縄文土器、石器が出土している。弥生土器は鉢(1・2)、高坏(3)、蓋(4)、甕(5~9)、壺(10~13)の器種が認められる。1の鉢は外面全面に赤彩が施される。2は耳状の突起が口縁部に貼付される。高坏は脚上部の破片である。赤彩は認められない。蓋は内外面に赤彩が施される。甕5は口唇部に縄文が施される。6は斜位の条線が口縁部に施されている。7・8は縦位羽状の櫛描斜走文が施される。9は縄文が施されている。壺10は受口口縁で、口縁部には櫛描で山形文、頸部には波状文が施される。11~13は体部上半~頸部の破片で、横位の平行沈線間に縄文や山形文、平行条線が充填されている。縄文土器は中期後半「鱗状短沈線文土器」の口縁部片と思わ

れる。石器は15の編物石と16の黒曜石製の打製石鏃が認められる。

以上の遺物から、本址は弥生時代中期後半栗林期に比定される。



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR5/6 地山粒子含む。
2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR5/6 地山粒子多含。
3. 黄褐色土層 (10YR5/6) 10YR3/2 混在土層。
4. 黄褐色土層 (10YR5/6) 主体。堀方埋土。10YR4/2 含む。

第 32 図 H 4 号住居址

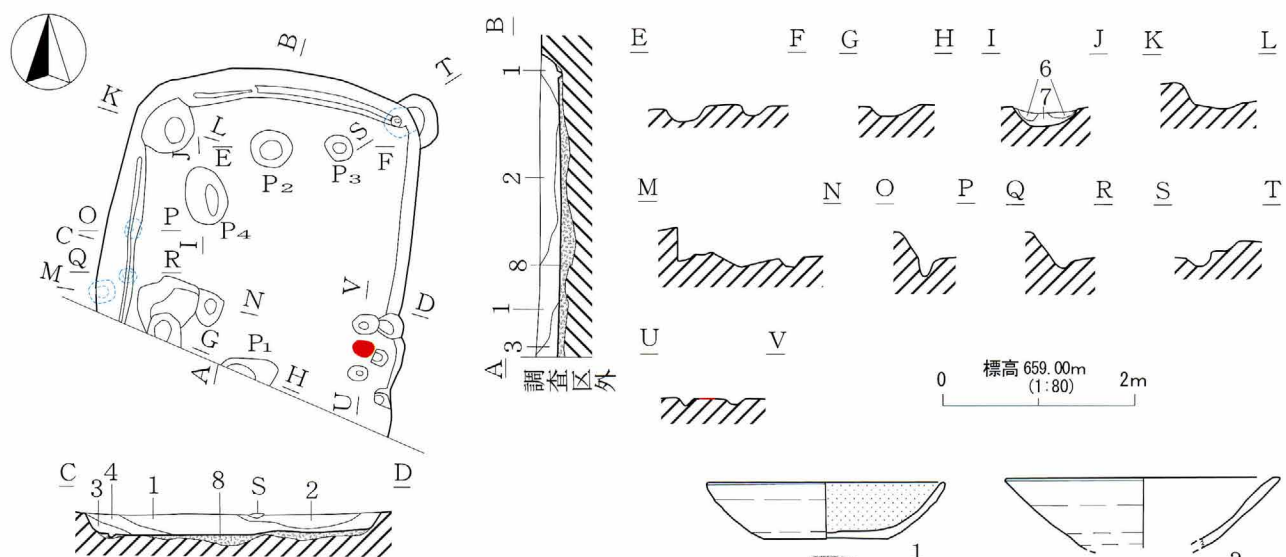
第 18 表 宮浦遺跡 I H 3 号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	鉢	—	3.6	—	—	ナデ	赤彩	完全実測	Ⅲ区
2	弥生土器	鉢	—	—	—	—	—	耳状貼付文	破片実測	Ⅱ区
3	弥生土器	高坏	—	—	—	—	ナデ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅲ区
4	弥生土器	蓋	—	—	—	—	赤彩	赤彩	回転実測	Ⅲ区ホリ
5	弥生土器	甕	—	—	—	—	—	口唇部縄文	破片実測・拓本	Ⅱ区
6	弥生土器	甕	—	—	—	—	ハケ目	斜位条線	破片実測・拓本	Ⅲ区1層
7	弥生土器	甕	—	—	—	—	ナデ	縦位羽状櫛描斜走文	破片実測・拓本	Ⅲ区
8	弥生土器	甕	—	—	—	—	ヘラミガキ	縦位羽状櫛描斜走文	破片実測・拓本	Ⅲ区
9	弥生土器	甕	—	—	—	—	ナデ	縄文	回転実測・拓本	Ⅲ区1層
10	弥生土器	壺	—	—	—	—	—	櫛描山形文・波状文	破片実測・拓本	Ⅲ区1層
11	弥生土器	壺	—	—	—	—	ナデ	横位平行沈線・縄文	破片実測・拓本	Ⅲ区ホリ
12	弥生土器	壺	—	—	—	—	ナデ	横位平行沈線・縄文	破片実測・拓本	Ⅱ区
13	弥生土器	壺	—	—	—	—	ナデ	横位平行沈線・山形文・条線	破片実測・拓本	Ⅱ区ホリ
14	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	—	中期後半「鱗状短沈線文」土器	破片実測・拓本	Ⅱ区
15	石器	編物石	17.4	5.6	6.0	710.0	—	—	完全実測	No1
16	石器	石鏃	—	1.3	0.4	—	—	—	完全実測	Ⅲ区ホリ

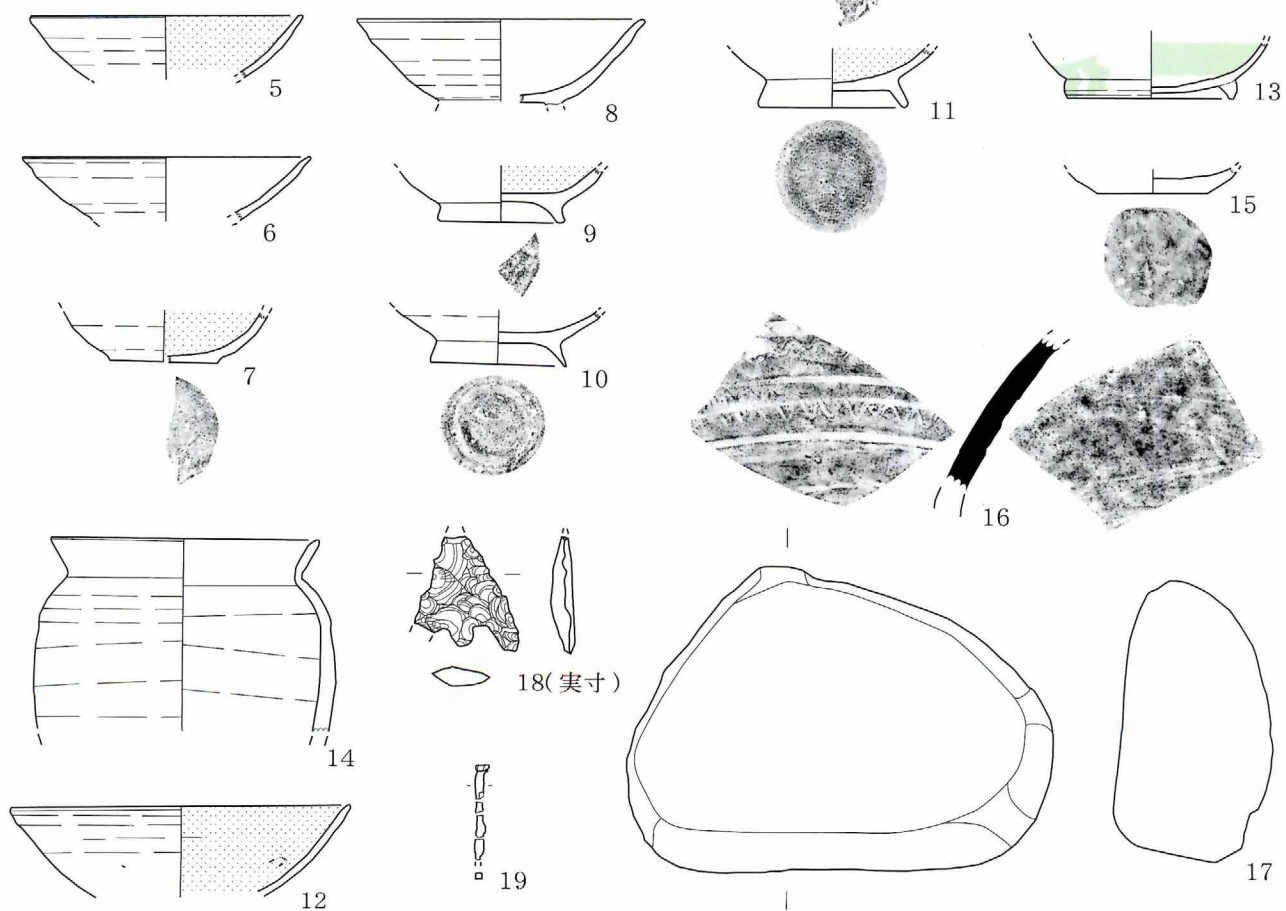
○H 4 号住居址 (第32図)

Ⅶキ2グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。0.28mの深度を有する。ピットは床面で2基、堀方で1基検出された。調査範囲にはカマドは存在しない。

遺物は土師器、弥生土器、縄文土器、石器が出土した。土師器には坏(1~4)、ロクロ甕(5・6)の器種が認められる。坏の底部処理は回転糸切痕を残すものと、ヘラケズリにより消去するものが存在する。内面黒色処理や、暗文も施される。ロクロ甕は水引痕を調整により消去する。6の底部には糸切痕が確認できる。弥生土器は7の内外面



1. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR6/4 多含。
  2. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR6/4 少含。
  3. 明黄褐色土層 (10YR6/6) 地山黄色シルト質粘土。二次堆積。
  4. 黒褐色土層 (10YR2/2) 炭化物多含。
  5. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 含む。
  6. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR5/6 少含。
  7. にぶい黄橙色土層 (10YR6/3)。
  8. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 堀方埋土。地山 10YR5/6 主体。
- 焼土。



第 33 図 H5号住居址

赤彩の高坏が出土している。縄文土器は地文縄文で、縦位の沈線間に蛇行懸垂文を沈線で描出した、加曾利E式の深鉢片が出土している。石器は9の磨・敲石と、10の粗大な削器が出土している。

以上の出土遺物の特徴から、本址は奈良平安時代VII期に比定される。実年代は10世紀前半が想定される。

第19表 宮浦遺跡I H4号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(13.4)	5.6	(3.5)		黒色処理	右回転糸切	完全実測	覆土
2	土師器	坏	13.7	5.8	3.6		暗文・黒色処理?	ヘラケズリ	完全実測	No1
3	土師器	坏	—	5.6	—			右回転糸切	完全実測・拓本	覆土
4	土師器	坏	—	(5.4)	—			ヘラケズリ	回転実測	覆土
5	土師器	ロクロ甕	(19.4)	—	—		ハケ目	ナデ	回転実測	覆土
6	土師器	ロクロ甕	—	(7.0)	—			回転糸切+ヘラケズリ	回転実測	覆土
7	弥生土器	高坏	15.4	—	—		赤彩	赤彩	完全実測	II区
8	縄文土器	深鉢	—	—	—		縄文・蛇行懸垂文、中期後半加曾利E		破片実測・拓本	覆土
9	石器	磨・敲石	7.5	7.3	5.5	420.0			完全実測	II区
10	石器	削器	9.55	6.6	3.1	170.0			完全実測	II区

○H5号住居址 (第33図)

XIVク1グリットで検出された。H6号住居址を切る。N-5°-Eに長軸方位をとる。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。短軸長3.28m、深度0.24mの規模を有する。床面上で9基、堀方から3基のピットが検出されたが支柱穴は判然としなない。北壁と西壁の直下には周溝が巡る。カマドは東壁に構築されていたが、堀方状態に破壊されていた。

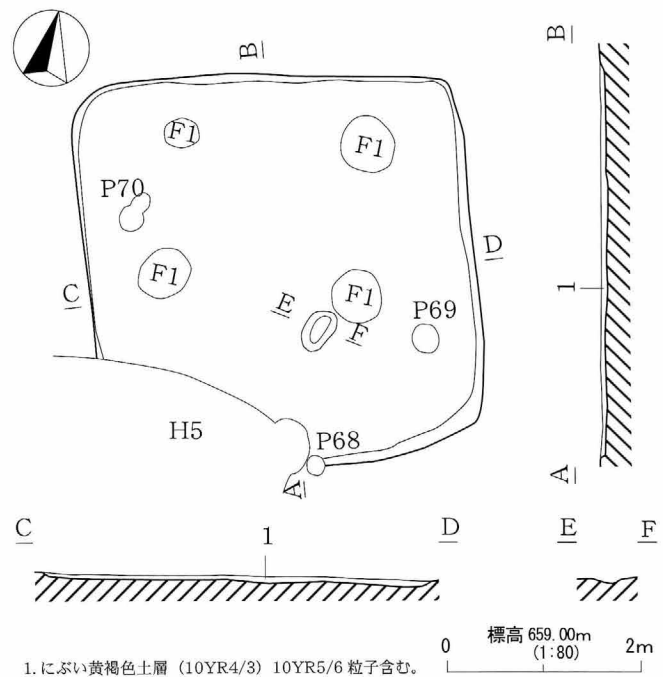
遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、石器、鉄製品が出土している。土師器には坏(1~7)、碗(8~12)、ロクロ甕(14・15)の器種が認められる。坏は内面黒色処理が施されるものと、施されないものが存在するが、いずれも暗文は認められない。底部処理も回転糸切痕を残すものと、ヘラケズリにより消去するものが存在する。碗も坏同様に内面黒色処理を施すものと、施さないものが存在する。高台は全て付高台である。ロクロ甕は2点共に小型のものである。灰釉陶器は碗(13)が1点出土した。虎溪山1号窯式と思われる。須恵器(16)は波状文が施される大甕の頸部片が出土している。石器は磨石(17)と黒曜石製の打製石鏃(18)が出土した。鉄製品は19の角釘が1点出土している。

以上の出土遺物から、本址は奈良・平安時代VII期、10世紀前半の実年代が想定される。

○H6号住居址 (第34図)

VIIIク10グリットで検出された。H5・F1・P68~70に切られる。N-15°-Wに長軸方位をとり、長軸長4.16m、短軸長4.08m、深度0.08mの規模を有する。ピットが床面上で1基検出された他は、付属施設は確認できなかった。

出土遺物も皆無であり、本址の時期は不明であるが、H5号住居址との重複関係から、奈良・平安時代VII期以前の所産であることは間違いない。



第34図 H6号住居址



第20表 宮浦遺跡Ⅰ H5号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(12.6)	(6.6)	(2.9)		黒色処理	ヘラケズリ	回転実測・拓本	I区
2	土師器	坏	(12.8)	(4.8)	(3.7)		黒色処理	ヘラケズリ	回転実測・拓本	Ⅲ区
3	土師器	坏	(13.2)	—	—				回転実測	Ⅱ区
4	土師器	坏	(13.4)	(4.8)	(3.8)		黒色処理?	右回転糸切	回転実測・拓本	Ⅱ・Ⅲ区
5	土師器	坏	(14.4)	—	—		黒色処理		回転実測	I・Ⅱ区
6	土師器	坏	(15.2)	—	—		黒色処理?		回転実測	I・Ⅱ区
7	土師器	坏	—	(5.6)	—		黒色処理	ヘラケズリ	回転実測・拓本	Ⅱ区
8	土師器	碗	(15.3)	(6.8)	(4.4)		ナデ	付高台剥落	回転実測	Ⅱ区
9	土師器	碗	—	(6.8)	—		黒色処理	付高台	回転実測・拓本	Ⅱ区ホリ
10	土師器	碗	—	(7.2)	—		黒色処理?	付高台	回転実測・拓本	I・Ⅱ区
11	土師器	碗	—	(8.0)	—		黒色処理	右回転糸切・付高台	回転実測・拓本	I・Ⅱ区
12	土師器	碗?	(18.0)	—	—		黒色処理	回転ヘラケズリ・付高台	回転実測	Ⅱ区
13	灰釉陶器	碗	—	(8.8)	—		施釉	施釉	回転実測	Ⅱ区
14	土師器	ロクロ甕	(14.2)	—	—		ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅱ区
15	土師器	ロクロ甕	—	(5.8)	—		ナデ		回転実測・拓本	Ⅱ区
16	須恵器	甕	—	—	—		当具痕・ナデ	波状文	破片実測・拓本	Ⅱ区
17	石器	磨石	22.6	16.8	19.7	4350.0	3面使用		完全実測	Ⅱ区
18	石器	打製石鏃	—	—	(0.3)	—	黒曜石		完全実測	Ⅱ区
19	鉄製品	角釘	—	(0.7)	(0.5)	—			完全実測	Ⅱ区

OH7号住居址 (第35~37図)

Ⅶコ10グリットで検出された。H8号住居址を切る。N-0°-Wに長軸方位をとる。長軸長5.37m、短軸長5.28m、深度0.24mの方形プランを呈する床面上で16基、堀方から4基のピットが検出されており、P1・P2・P6・P7の4基が支柱穴と思われる。床面は北西隅から南西隅を経て南東隅の手前までが僅かに高くなっており、所謂「ベット状遺構」が造られている。東壁下から南東隅壁下には周溝が巡っている。カマドは北壁の中央やや東寄りに造られており、石芯を粘土で被覆していたらしいが、粘土部分は残存していなかった。北東隅の壁下には貯蔵穴と思われる土坑が構築されている。南壁下中央付近に構築されたP4・P5の2基のピットは出入口施設であろう。

出土遺物は極めて多量であった。土師器、須恵器、灰釉陶器、石器、鉄製品が出土している。土師器には坏(1~33)、碗(34~40)、皿(44~46)、鉢(70)、甕(71~78)、坏ないし碗(41~43)、碗ないし皿(47・48)の器種が認められる。坏は内面黒色処理が施されるものが多数を占めるが、そうでないものも存在する。底部処理は右回転糸切が大勢であるが、ヘラケズリを施すものも存在する。2・16には煤が付着している。また13は赤彩されていた可能性がある。碗・皿の高台は付高台である。坏・碗・皿全てにおいて暗文は認められない。鉢(70)は坏形態の大型のもので、内面黒色処理が施される。甕は武蔵甕(71・72・76)とロクロ甕(73~75)が認められる。武蔵甕の口縁形態は「コ」字である。須恵器は坏(49~67)と甕(77・78)の器種が認められる。底部処理は右を主とする回転糸切である。総体的に火燻が顕著である。62は煤の付着が認められ、53の見込みは円滑である。甕は2点共に内面に当具痕、外面に平行叩目が残る。78は転用碗の可能性が高い。灰釉陶器は

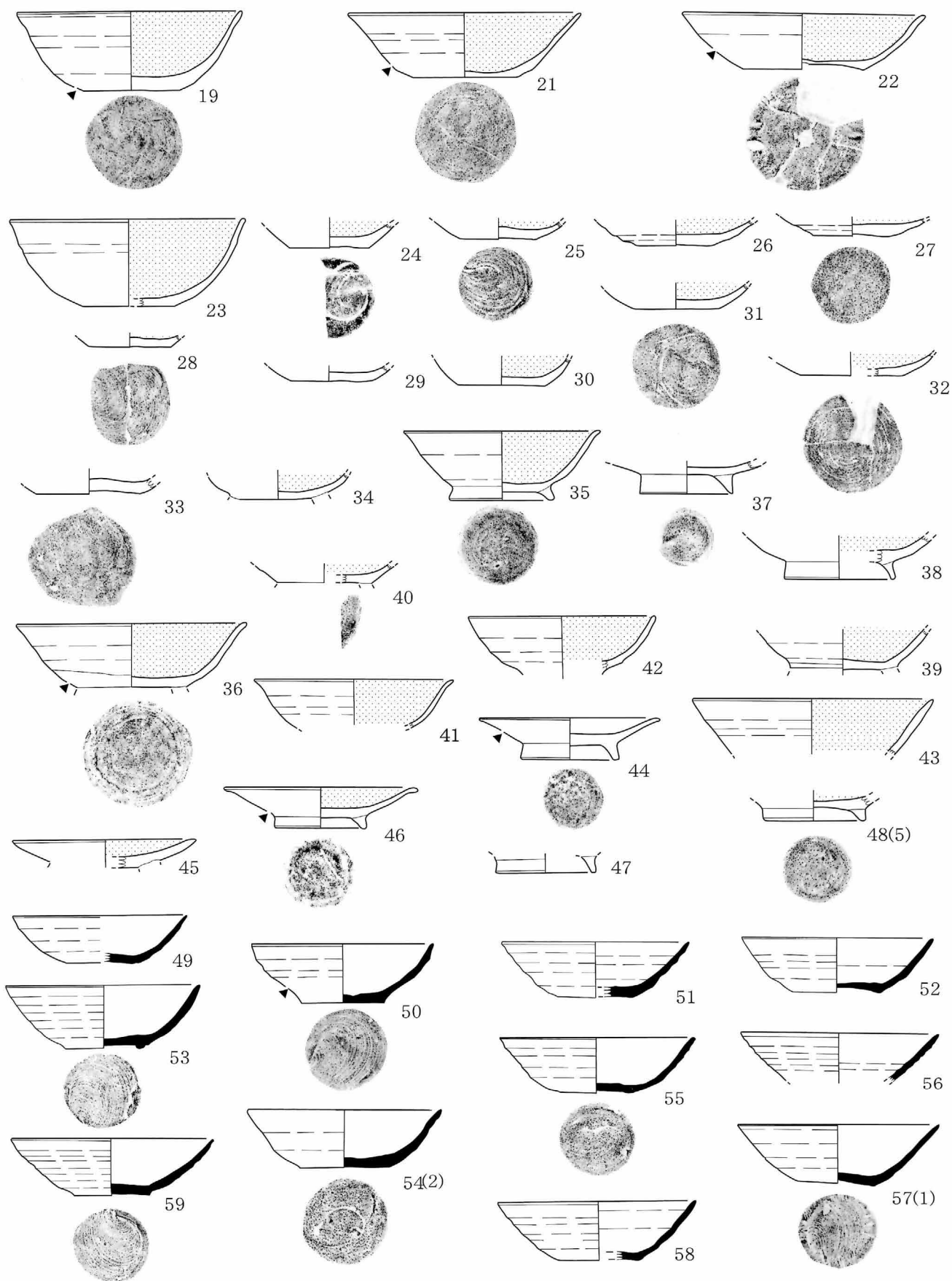
第21表 宮浦遺跡Ⅰ H7号住居址出土遺物観察表(1)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	12.0	6.0	3.5		黒色処理	体下半~底ヘラケズリ	完全実測・拓本	No4
2	土師器	坏	(13.0)	5.8	(4.0)		煤付着	右回転糸切・煤付着	回転実測・拓本	Ⅲ区
3	土師器	坏	(13.4)	—	—				回転実測	1区
4	土師器	坏	(13.4)	—	—		黒色処理、線刻		回転実測	1区P10
5	土師器	坏	(14.2)	6.2	(4.3)		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	Ⅱ区床・ホリ
6	土師器	坏	(15.2)	(6.8)	(4.0)		黒色処理	方向不明回転糸切	回転実測	I区ホリ
7	土師器	坏	—	(6.4)	(4.2)		黒色処理	右回転糸切	回転実測	Ⅳ区
8	土師器	坏	(15.3)	(6.8)	(4.4)		黒色処理?	回転糸切・ヘラケズリ	回転実測	I区
9	土師器	坏	—	—	—		黒色処理		回転実測	I区・床
10	土師器	坏	—	—	—		黒色処理		回転実測	I・Ⅲ区

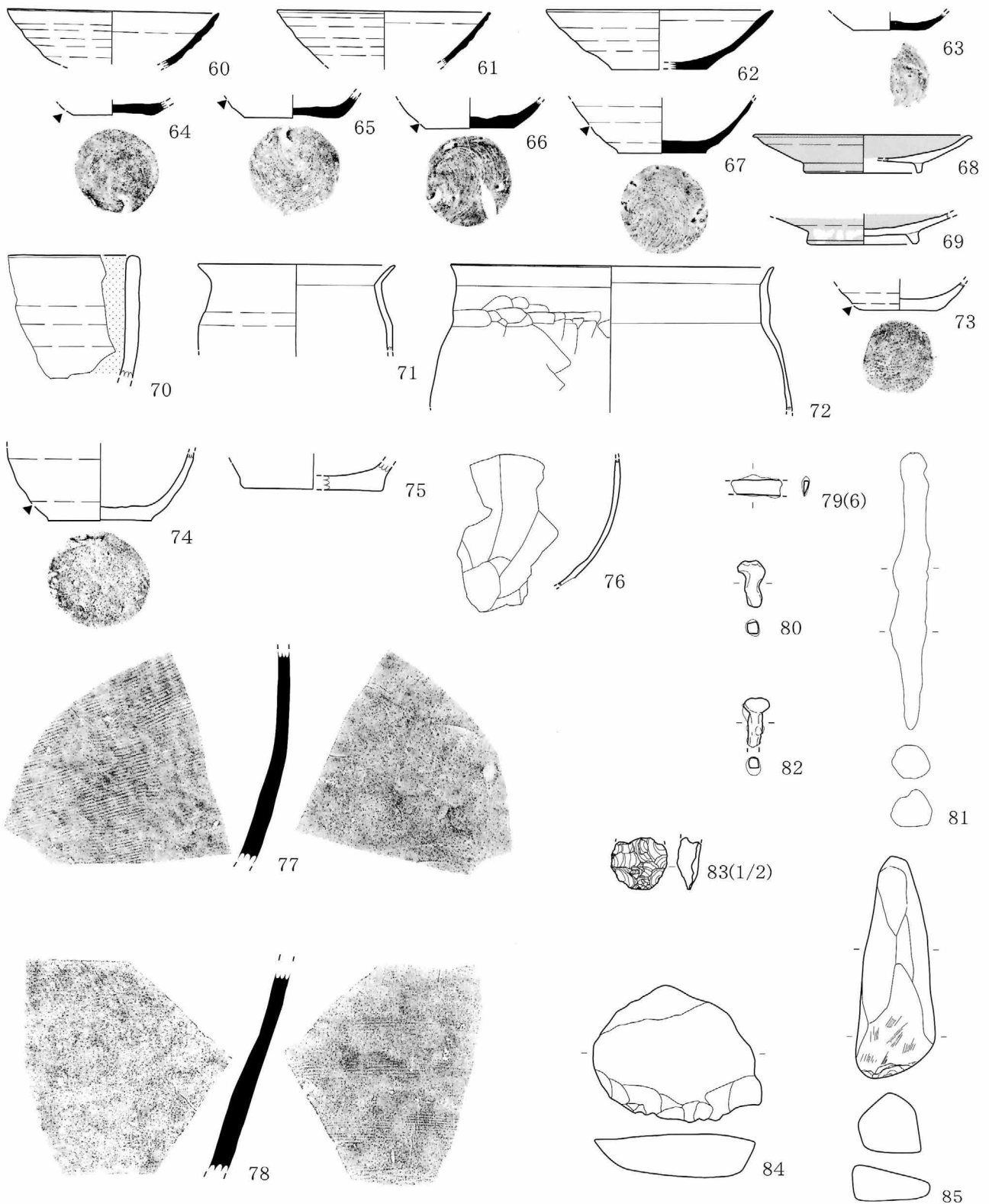
第22表 宮浦遺跡Ⅰ H7号住居址出土遺物観察表(2)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
11	土師器	坏	(15.4)	(8.0)	(5.0)		黒色処理	方向不明回転糸切	回転実測	I区ホリ
12	土師器	坏	(15.4)	(7.4)	(4.6)		黒色処理	右回転糸切	回転実測・拓本 火熱を受ける	I区・床・カ マド・P10
13	土師器	坏	(15.6)	(6.0)	(6.6)		赤彩?	ヘラケズリ	回転実測	床
14	土師器	坏	(15.6)	—	—		黒色処理		回転実測	IV区
15	土師器	坏	(15.6)	—	—		黒色処理		回転実測	I・IV区
16	土師器	坏	(15.6)	—	—		黒色処理	煤付着	回転実測	I区
17	土師器	坏	(16.0)	(8.0)	(5.0)		黒色処理	方向不明回転糸切	回転実測	床
18	土師器	坏	(16.0)	—	—		黒色処理		回転実測	カマド
19	土師器	坏	(16.4)	6.8	(5.7)		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	IV区
20	土師器	坏	(16.6)	—	—		黒色処理		回転実測	床
21	土師器	坏	(16.8)	7.4	(4.7)		黒色処理	回転糸切・ヘラケズリ	完全実測・拓本	カマド
22	土師器	坏	(17.4)	8.6	(4.1)		黒色処理	回転糸切・ヘラケ ズリ	完全実測・拓本	I・IV区・床・ カマド・P10
23	土師器	坏	(17.6)	(6.6)	(6.3)		黒色処理	回転糸切・ヘラケズリ	回転実測	IV区
24	土師器	坏	—	(3.6)	—		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	I区・P10
25	土師器	坏	—	5.4	—		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	Ⅲ区
26	土師器	坏	—	(5.6)	—		黒色処理	右回転糸切	回転実測	I区
27	土師器	坏	—	(5.6)	—		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	I区
28	土師器	坏	—	(5.8)	—		黒色処理	右回転糸切・黒色処理	完全実測・拓本	I・Ⅱ区
29	土師器	坏	—	(5.6)	—			右回転糸切	回転実測	Ⅱ区
30	土師器	坏	—	(6.2)	—		黒色処理	回転ヘラケズリ	回転実測	床
31	土師器	坏	—	(6.2)	—		黒色処理	右回転糸切	回転実測・拓本	IV区
32	土師器	坏	—	7.2	—		黒色処理	回転ヘラケズリ	完全実測・拓本	Ⅲ区・床・ カマド
33	土師器	坏	—	(7.4)	—			右回転糸切	回転実測・拓本	IV区
34	土師器	碗	(10.2)	—	—		ミガキ・黒色処理	付高台	回転実測	IV区
35	土師器	碗	14.2	7.6	5.0		ミガキ・黒色処理	回転糸切・付高台	完全実測・拓本	I・IV区・床
36	土師器	碗	(16.8)	—	—		ミガキ・黒色処理	回転糸切・ヘラ ケズリ・付高台	完全実測	床
37	土師器	碗	—	(6.8)	—		ミガキ・黒色処理?	回転糸切・付高台	回転実測・拓本	Ⅱ区
38	土師器	碗	—	(8.0)	—		ミガキ・黒色処理	付高台	回転実測	I区
39	土師器	碗	—	—	—		ミガキ・黒色処理	回転糸切・ヘラ ケズリ・付高台	完全実測	I区・カ マド
40	土師器	碗	—	—	—		黒色処理	回転糸切・付高台	回転実測・拓本	IV区
41	土師器	坏?	(14.4)	—	—		ミガキ・黒色処理		回転実測	IV区
42	土師器	坏?	(17.6)	—	—		黒色処理		回転実測	I区
43	土師器	碗?	(17.6)	—	—		黒色処理		回転実測	I区
44	土師器	皿	(13.2)	7.1	(3.0)		ミガキ・黒色処理?	回転糸切・付高台	完全実測・拓本	I区・床・ カマド
45	土師器	皿	(13.2)	—	—		ミガキ・黒色処理	付高台	回転実測	IV区ホリ
46	土師器	皿	(14.2)	6.8	(3.0)		ミガキ・黒色処理	回転糸切・付高台	完全実測・拓本	カマド・P10
47	土師器	碗?	—	7.2	—			付高台	完全実測	I・Ⅱ区
48	土師器	碗?	—	7.4	—		黒色処理	回転糸切・付高台	完全実測・拓本	No5
49	須恵器	坏	(12.6)	(5.0)	(3.4)		火襷	火襷	回転実測	カマド・床
50	須恵器	坏	(13.2)	6.0	(4.2)			右回転糸切	完全実測・拓本	床
51	須恵器	坏	(13.6)	(5.2)	(3.9)			回転糸切	回転実測	I・IV区
52	須恵器	坏	(13.6)	(6.2)	(3.9)			回転糸切	完全実測	I区・床
53	須恵器	坏	14.0	5.6	4.5		見込円滑・火襷	右回転糸切・火襷	完全実測・拓本	I区・床・ P10
54	須恵器	坏	14.0	6.4	4.2			右回転糸切・ヘラ ケズリ	完全実測・拓本 火熱を受ける	No2
55	須恵器	坏(杓状)	14.2	5.8	4.1			回転糸切	完全実測・拓本	I区・P10
56	須恵器	坏	(14.2)	—	—				回転実測	Ⅱ区ホリ
57	須恵器	坏	14.4	5.6	4.3		火襷	右回転糸切・火襷	回転実測・拓本	IV区・No1
58	須恵器	坏	(14.4)	(5.8)	(4.4)			回転糸切	回転実測	I区
59	須恵器	坏	14.6	5.4	4.2		火襷	右回転糸切・火襷	回転実測・拓本	I区



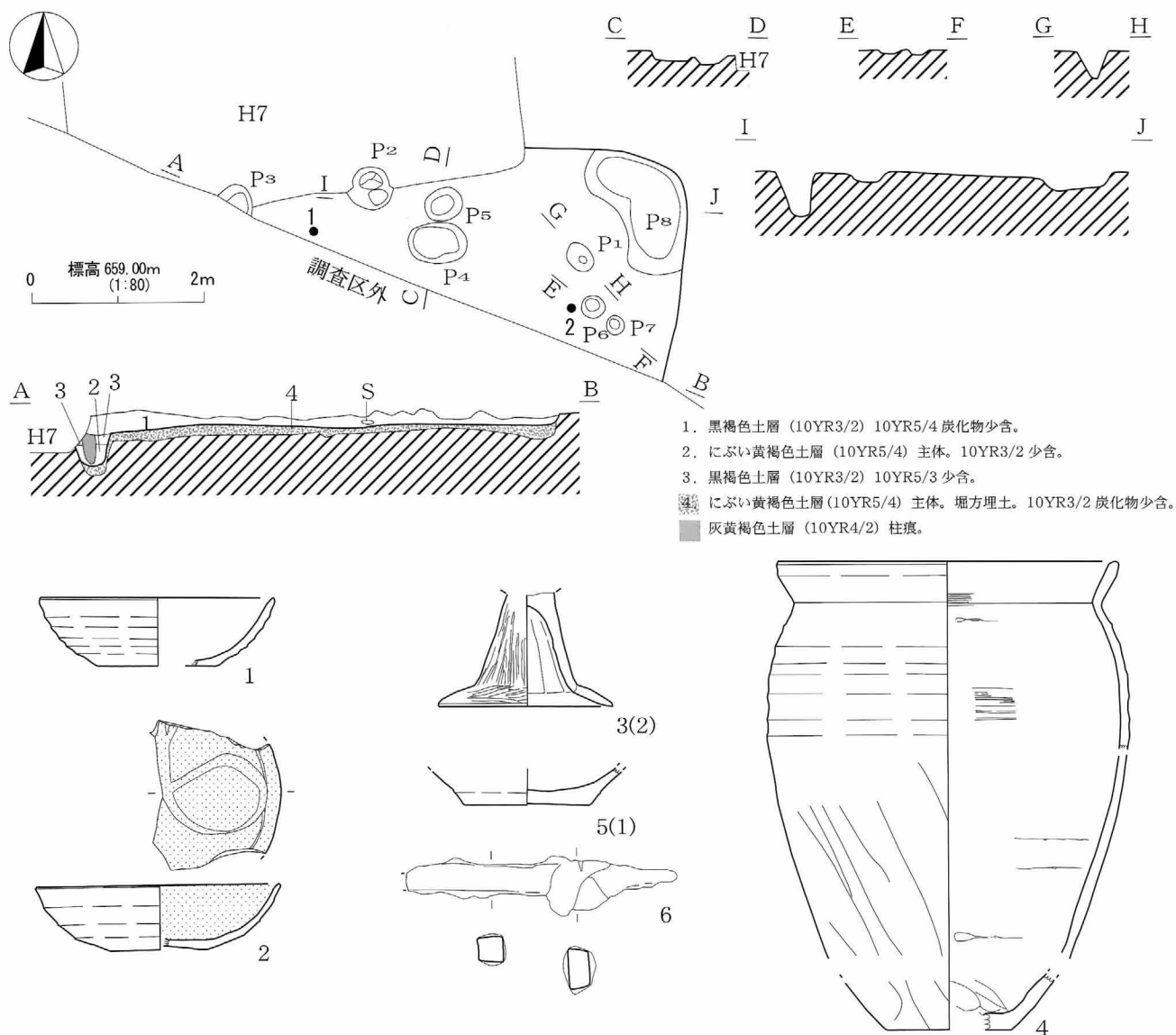


第36图 H7号住居址(2)



第 37 図 H7号住居址 (3)

皿 (68・69) が 2 点出土している。施釉は刷毛塗であり、68は光ヶ丘 1 号窯式、69は大原 2 号窯式と思われる。石器は黒曜石製の打製石鏃 (83)、粗大な削器 (84)、磨・敲石 (85) が認められる。鉄製品は刀子 (79)、角釘 (80・82)、不明 (81) が認められる。



第38図 H8号住居址

以上の出土遺物から本址は奈良・平安時代VI期、9世紀後半の実年代が想定される。

#### OH8号住居址 (第38図)

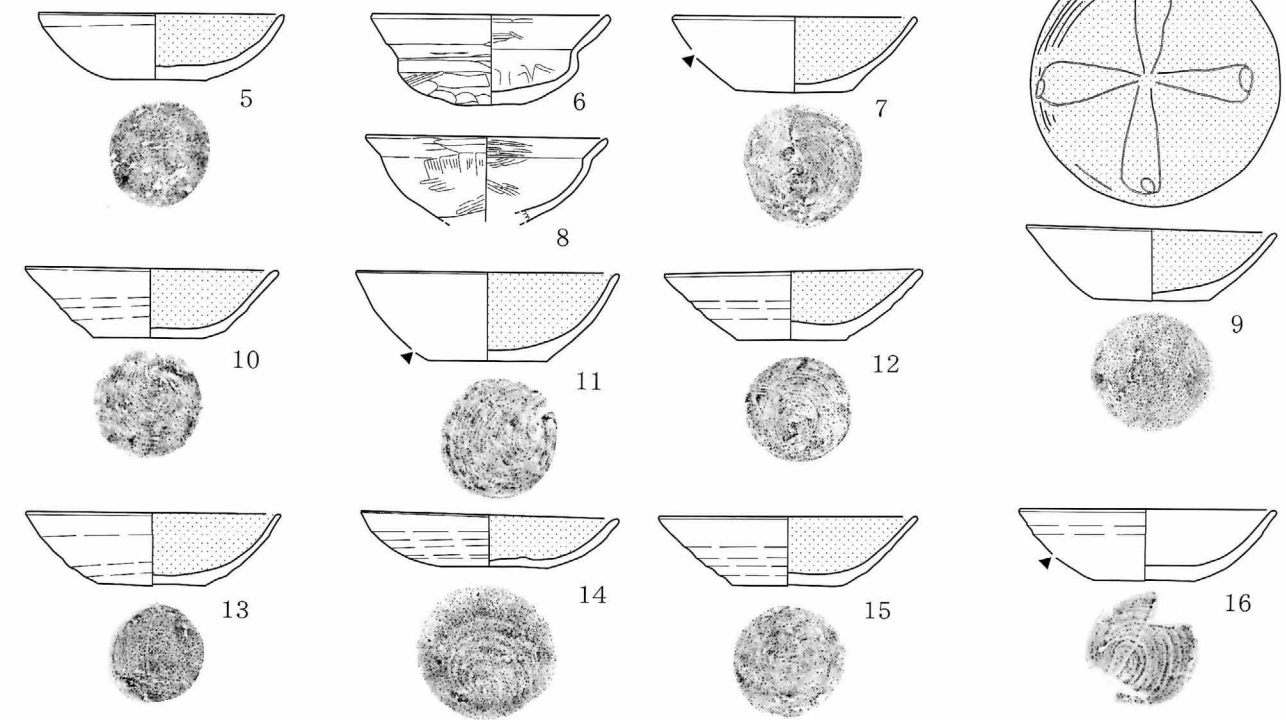
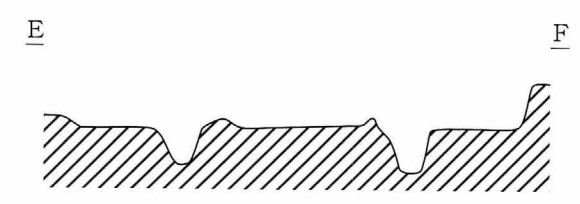
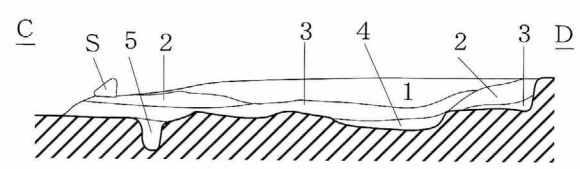
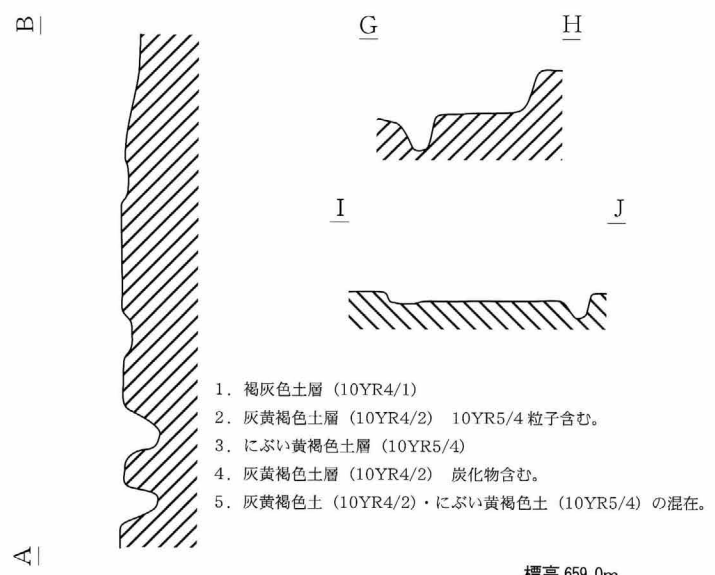
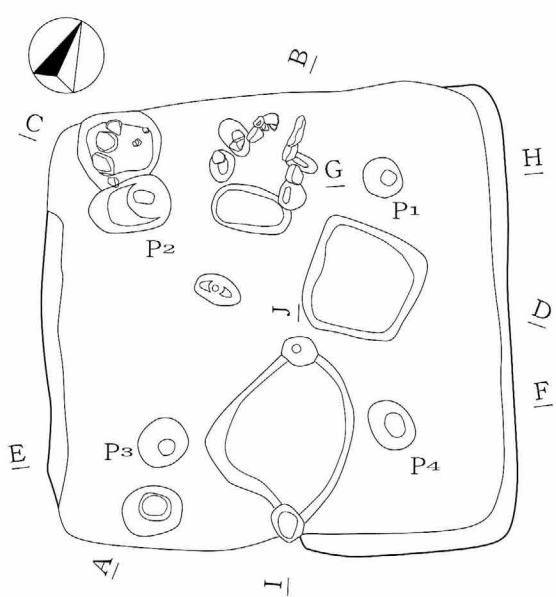
XIVコ1グリットで検出された。H7号住居址に切られる。南方向に調査区外に延びるため、全容は不明である。深度0.08mの規模である。ピットは床面上で8基検出されたが、P2・P3以外は規模が小さく、P2・P3の2基も位置的に主柱としては不適である。調査範囲内にはカマドは存在しなかった。

遺物は土師器と鉄製品が出土している。土師器は坏(1・2)、高坏(3)、ロクロ甕(4・5)の器種が認められる。坏は2点共に底部回転糸切であり、2は内面黒色処理で、暗文が施されている。高坏は脚部が屈折して外開する形態で、暗文状のヘラミガキが縦位に施されている。他の土師器とは明らかに異質であり、古墳時代中期の所産である。混入品である。ロクロ甕は2点共に底部が平らで、ロクロを利用した水引痕が認められる。鉄器は器種は不明であるが、断面は方ないし長方であり、刃は有さない。

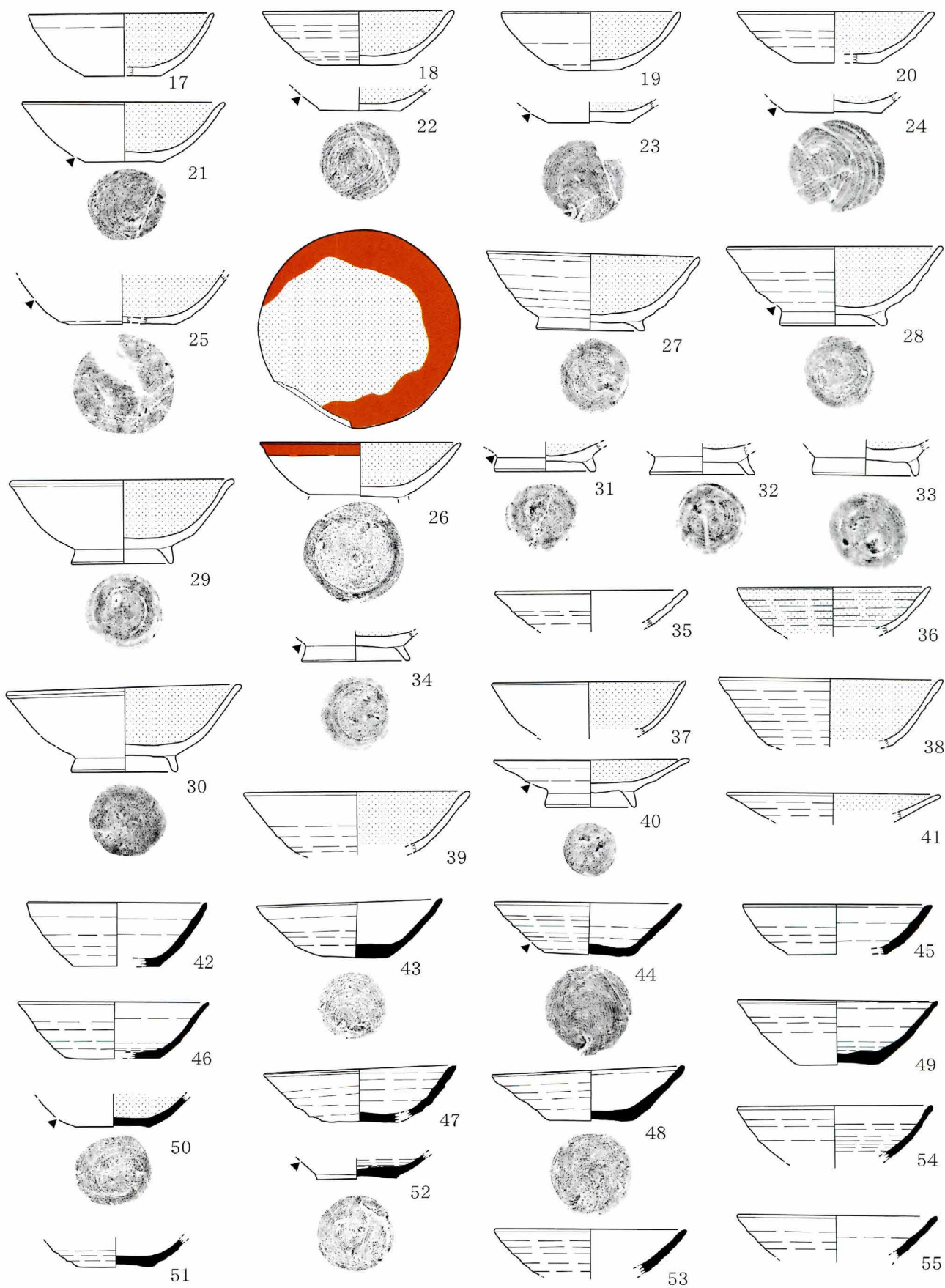
以上の出土遺物から本址は奈良・平安時代VII期、10世紀前半の実年代が想定される。

#### OH9号住居址 (第39～41図)

IXイ8グリットで検出された。H10・11・13を切る。N-32°-Wに長軸方位をとり、長軸長4.96m、

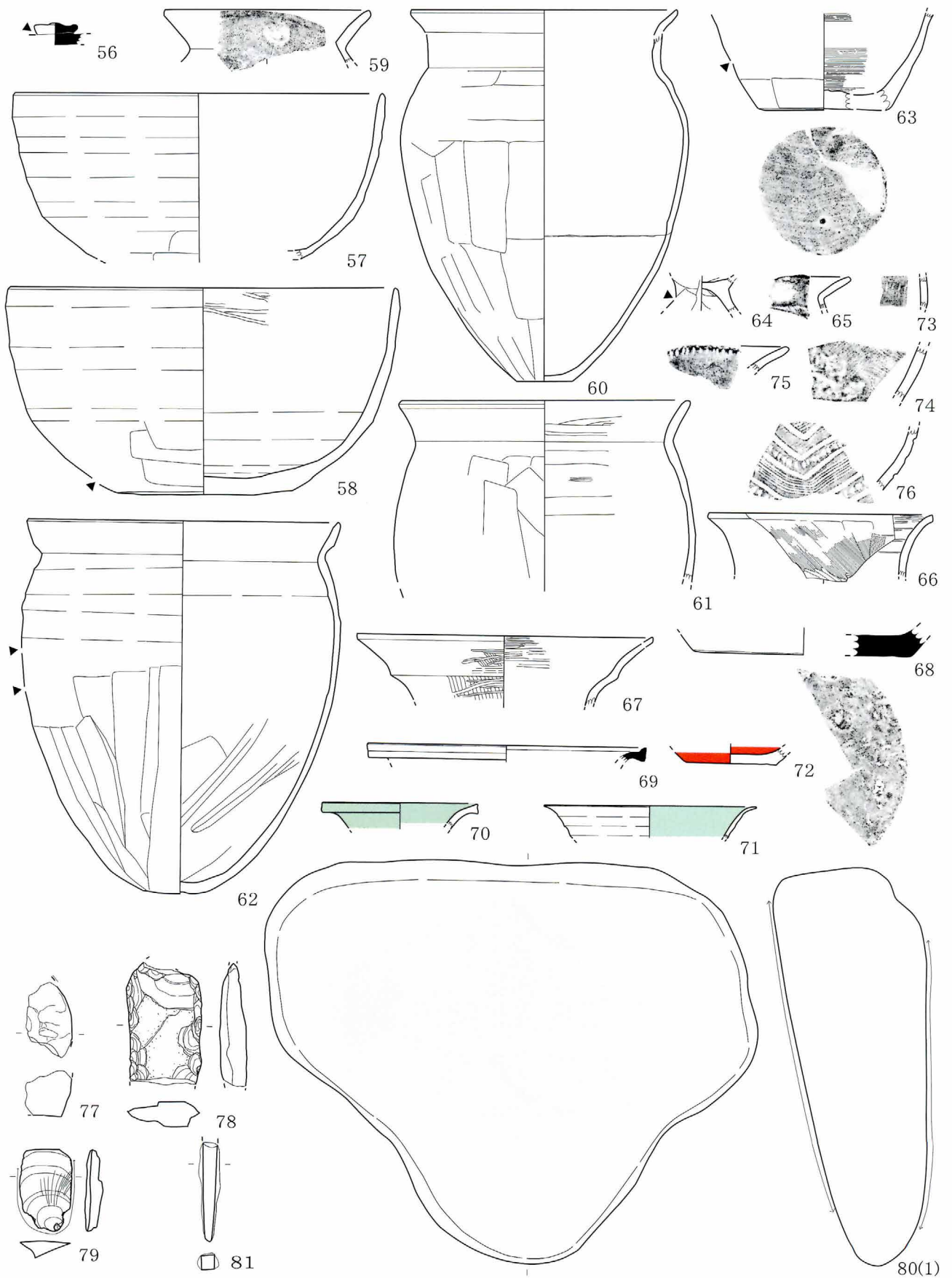


第 39 図 H9号住居址(1)



第 40 图 H9号住居址 (2)





第41图 H9号住居址(3)

第 23 表 宮浦遺跡 I H 7 号住居址出土遺物観察表(3)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
60	須恵器	坏	(14.6)	—	—			方向不明回転糸切	回転実測	IV区・床
61	須恵器	坏	(14.8)	—	—				回転実測	I区・床・P10
62	須恵器	坏	(15.6)	(6.6)	(4.1)		煤付着	回転糸切・煤付着	回転実測	I区・床
63	須恵器	坏	—	(4.8)	—				回転実測・拓本	IV区
64	須恵器	坏	—	5.4	—			右回転糸切	完全実測・拓本	II区
65	須恵器	坏	—	6.0	—			右回転糸切	完全実測・拓本	I区
66	須恵器	坏	—	6.0	—			右回転糸切	完全実測・拓本	III区
67	須恵器	坏	—	6.1	—		火襖	右回転糸切、火襖	完全実測・拓本	II区
68	灰釉陶器	皿	(15.2)	(8.6)	(2.6)		施釉(刷毛)	回転ヘラケズリ・付高台・施釉(刷毛)	回転実測	P10
69	灰釉陶器	皿	—	(7.8)	—		施釉(刷毛)	回転ヘラケズリ・付高台・施釉(刷毛)	回転実測	II区
70	土師器	鉢	—	—	—		黒色処理		破片実測	I区
71	土師器	武蔵甕	(13.6)	—	—				完全実測	I区
72	土師器	武蔵甕	(22.4)	—	—		ナデ		回転実測	IV区・P11
73	土師器	ロクロ甕	—	5.0	—			右回転糸切	完全実測・拓本	I区
74	土師器	ロクロ甕	—	7.0	—			右回転糸切	完全実測・拓本	I区・P14
75	土師器	ロクロ甕	—	(9.6)	—				回転実測	P14
76	土師器	武蔵甕	—	—	—		ナデ	ヘラケズリ	破片実測	I区・P10
77	須恵器	甕	—	—	—		当具痕・ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	I区
78	須恵器	甕	—	—	—		当具痕・カキ目	平行叩目	破片実測・拓本	カマド
79	鉄製品	刀子	—	—	—				完全実測	I区
80	鉄製品	角釘	—	—	—				完全実測	
81	鉄製品	角釘	19.0	2.5	2.6	150.0			完全実測	No6
82	鉄製品	不明	—	—	—				完全実測	
83	石器	石鏃	—	1.9	0.75	—	黒曜石・未製品		完全実測	IV区
84	石器	削器	9.3	11.1	2.9	450.0			完全実測	
85	石器	磨・敲石	15.4	5.5	4.0	420.0			完全実測	III区ホリ

短軸長4.88m、深度0.48mの規模を有する。床面上で検出された10基のピットのうちP1からP4の4基が支柱である。カマドは北壁の中央に構築されていたが、部分的に石芯は残るものの堀方に近い状態に破壊されていた。本来は粘土で被覆し、煙道が壁外にのびていたものと推測される。周溝は有さない。2基検出された土坑の性格は不明である。

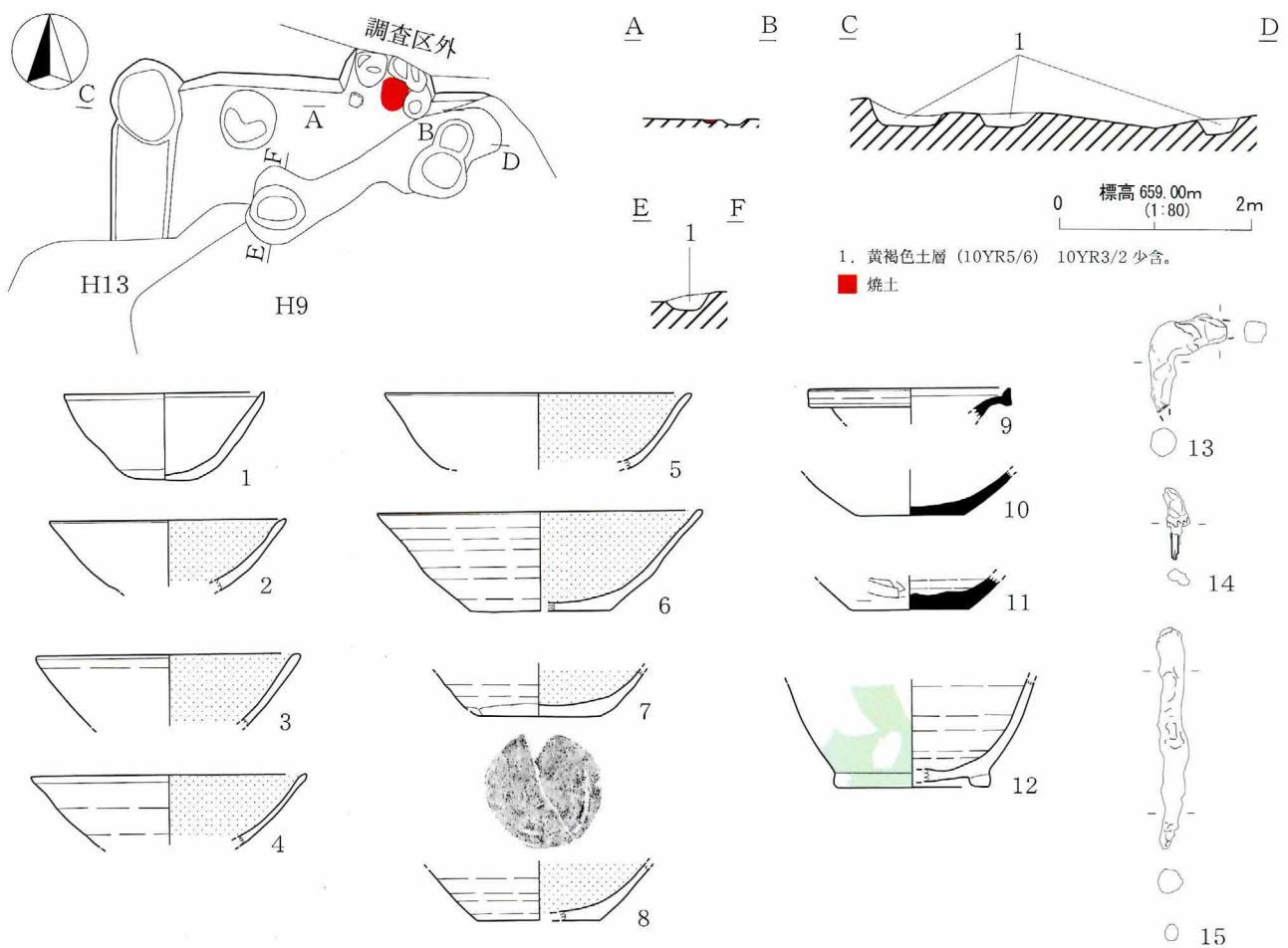
遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、弥生土器、土製品、石器、鉄製品が出土した。土師器には坏・小型丸底(1~25)、碗(26~34)、皿(40・41)、坏か碗か判断できないもの(35~39)、鉢(57・58)、甕(59~65)、壺(66・67)の器種が認められる。小型丸底(6・8)、甕(59・64・65)、壺(66・67)は古墳時代前期の土器であり混入品である。坏は内面黒色処理、底部右回転糸切のものが主体であるが、黒色処理はヘラミガキを行うものを行わないものに分かれる。また、暗文は1点(9)のみに認められる。底部処理もヘラケズリが混在している。3には煤の付着が認められた。碗も内面黒色処理が主体であるが、ヘラミガキを伴うものがほとんどである。高台は全て付高台である。27には煤の付着が認められた。皿も碗同様にヘラミガキを伴う内面黒色処理が施され、高台は付高台である。鉢は2点共に大型で、内面は黒色処理されていた可能性が強いものである。ロクロ成形で、底部はヘラケズリ調整が施されている。甕には武蔵甕(60)とロクロ甕(61~63)が存在する。武蔵甕

第 24 表 宮浦遺跡 I H 8 号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(13.8)	(7.3)	(4.0)			方向不明回転糸切	回転実測	P1
2	土師器	坏	(14.4)	(5.5)	(3.75)		黒色処理・暗文	方向不明回転糸切	回転実測	床
3	土師器	高坏	—	10.2	—			ハケ目・ヘラミガキ	完全実測	No2・混入品
4	土師器	ロクロ甕	(20.0)	(7.2)	—		ハケ目・ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	II・IV区・P2
5	土師器	ロクロ甕	—	(7.2)	—			方向不明回転糸切	完全実測	
6	鉄製品	不明	—	—	—				完全実測	P2

第25表 宮浦遺跡Ⅰ H9号住居址出土遺物観察表(1)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(12.5)	6.4	(3.4)		黒色処理	ヘラケズリ	完全実測・拓本	I区
2	土師器	坏	(12.6)	5.6	(4.0)		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	I・II区、H11
3	土師器	坏	(12.6)	(5.7)	(3.9)		ヘラミガキ・黒色処理	方向不明回転糸切・煤付着	回転実測	I区
4	土師器	坏	(12.7)	(6.2)	(4.0)		ヘラミガキ・黒色処理	方向不明回転糸切	回転実測	IV区
5	土師器	坏	12.8	5.2	3.6		黒色処理	ヘラケズリ	完全実測、拓本、杓状	上面
6	土師器	小型丸底	12.8	9.5	4.75		ナデ、ヘラミガキ	ヘラケズリ、ミガキ	完全実測、古墳	I区上面
7	土師器	坏	(12.8)	6.2	(4.0)		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	III・IV区
8	土師器	小型丸底	(12.8)	—	—		ヘラミガキ	ヘラケズリ、ミガキ	回転実測、古墳	I区
9	土師器	坏	13.2	6.1	4.1		黒色処理、暗文	回転ヘラケズリ	完全実測・拓本	上面
10	土師器	坏	13.3	5.7	3.8		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	I区・H10P7
11	土師器	坏	(13.4)	6.3	(4.7)		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	IV区
12	土師器	坏	13.5	5.2	3.8		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	II区・H10床
13	土師器	坏	13.5	5.6	4.0		黒色処理	ヘラケズリ	完全実測・拓本	上面
14	土師器	坏	13.6	5.5	3.0		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	上面
15	土師器	坏	13.6	5.8	3.8		ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	完全実測・拓本	I区
16	土師器	坏	(13.7)	5.3	(3.9)		黒色処理?	右回転糸切	完全実測・拓本	III・IV区、カマド
17	土師器	坏	(13.7)	(5.8)	(4.5)		ヘラミガキ・黒色処理	方向不明回転糸切	回転実測	III・IV区
18	土師器	坏	(13.8)	(6.4)	(3.9)		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切	回転実測	I・II区
19	土師器	坏	(13.9)	(4.4)	(4.2)		黒色処理	方向不明回転糸切	回転実測	IV区
20	土師器	坏	(14.1)	(6.2)	(3.75)		ヘラミガキ・黒色処理	方向不明回転糸切	回転実測	II区
21	土師器	坏	(14.6)	5.7	(4.3)		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	II・III・IV区
22	土師器	坏	—	5.8	—		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	IV区・P1
23	土師器	坏	—	5.9	—		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	IV区
24	土師器	坏	—	6.8	—		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	IV区
25	土師器	坏	—	(7.4)	—		黒色処理	ヘラケズリ	回転実測・拓本	III・IV区
26	土師器	碗	14.45	—	—		ヘラミガキ・黒色処理、煤付着	高台欠損、煤付着	完全実測・拓本	No1
27	土師器	碗	15.3	7.8	5.6		ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切、付高台	完全実測・拓本	P2
28	土師器	碗	(15.5)	7.7	(5.7)		ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切、付高台	完全実測・拓本	I区
29	土師器	碗	16.3	7.3	6.05		ヘラミガキ・黒色処理	付高台	完全実測・拓本	III・IV区、カマド
30	土師器	碗	17.0	7.7	5.3		ヘラミガキ・黒色処理	付高台	完全実測・拓本	III・IV区、カマド
31	土師器	碗	—	7.25	—		ヘラミガキ・黒色処理	付高台	完全実測・拓本	I区・P1
32	土師器	碗	—	7.55	—		ヘラミガキ・黒色処理	付高台	完全実測・拓本	I区
33	土師器	碗	—	7.6	—		ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切、付高台	完全実測・拓本	III区
34	土師器	碗	—	7.8	—		ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切、付高台	完全実測・拓本	I区
35	土師器	坏?	(13.8)	—	—				回転実測	I・II区
36	土師器	坏?	(13.9)	—	—		黒色処理	黒色処理	回転実測	I・II区
37	土師器	坏?	(14.0)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理		回転実測	IV区
38	土師器	碗?	(16.1)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理		回転実測	I区
39	土師器	碗?	(16.4)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理		回転実測	I区・P1・H13
40	土師器	皿	(14.2)	6.55	(3.5)		ヘラミガキ・黒色処理	付高台	完全実測・拓本	I・IV区
41	土師器	皿	(15.2)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理		回転実測	I区
42	須恵器	坏	(13.0)	(6.2)	(4.6)			方向不明回転糸切	回転実測	II区
43	須恵器	坏	13.4	4.65	4.4			右回転糸切	完全実測・拓本	IV区
44	須恵器	坏	(13.4)	6.5	3.9			右回転糸切	完全実測・拓本	II区
45	須恵器	坏	(13.6)	(7.0)	(3.6)				回転実測	I区
46	須恵器	坏	(13.8)	(6.6)	(4.0)			方向不明回転糸切	回転実測	II区
47	須恵器	坏	13.9	5.5	3.9			右回転糸切	完全実測	II区
48	須恵器	坏	13.9	5.8	4.2			右回転糸切	完全実測・拓本	No1
49	須恵器	坏	(14.25)	(6.0)	(4.6)			方向不明回転糸切	回転実測	I区
50	須恵器	坏	—	5.4	—			右回転糸切	完全実測・拓本	I区
51	須恵器	坏	—	(5.6)	—			右回転糸切	回転実測	カマド
52	須恵器	坏	—	5.65	—			右回転糸切	完全実測・拓本	III区
53	須恵器	坏?	(13.9)	—	—				回転実測	I区
54	須恵器	坏?	(14.0)	—	—				回転実測	I区
55	須恵器	坏?	(14.4)	—	—				回転実測	III区
56	須恵器	坏蓋	—	—	—		ヘラケズリ		完全実測	I区



第 42 図 H10 号住居址

は「コ」字口縁である。ロクロ甕は叩成形の可能性が高い (61・62) と、ロクロ成形の (63) に大別される。須恵器は坏 (42～55)、坏蓋 (56)、甕 (68)、壺 (69) の器種が認められる。坏の底部処理は、底部が残存するもの全てが回転糸切である。灰釉陶器は長頸壺 (70) と瓶 (71) の器種が認められる。弥生土器 (72～76) は中期後半栗林式の破片ある。土製品 (77) は器種は不明である。石器は打製石斧 (78)、黒曜石製の使用痕のある剥片 (79)、砥石 (80) が出土した。鉄製品 (81) は器種不明である。

以上の出土遺物から本址は奈良・平安時代VI基、9世紀後半の実年代が想定される。

#### OH10号住居址 (第42図)

Ⅸウ8グリットで検出された。H9・13号住居址に切られる。深度0.16mの規模である。ピットは床面上で5基検出されたが、支柱穴は判然としない。カマドは北壁の中央東寄りに構築されていたが、堀方状態に破壊されていた。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品が出土した。土師器は坏 (1～8) のみ出土した。(1)は古墳時代前期のものであり、混入品である。他は(5)を除き内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。(5)はヘラミガキが施されない。底部処理は底部が残存するものうち(6)は右回転糸切、(6)は回転糸切後ヘラケズリ、(8)はヘラケズリである。須恵器は壺 (9～11) のみ出土している。(9)口縁部片、(10・11)は右回転糸切痕を残す底部片である。灰釉陶器は長頸壺 (12) の底部片が1点出土している。鉄製品 (13～15) は3点出土しているが、13が鋸と思われる他は器種不明である。以上の出土遺物から本址は奈良平安時代VI期、9世紀後半の実年代が想定される。

#### OH11号住居址 (第43図)

Ⅸウ9グリットで検出された。H9・13号住居址に切られる。短軸長5.64m、深度0.2mの規模である。床面及びH9号住居址堀方から検出された、P1～P4の4基のピットが支柱穴と思われる。また、P3、P4に挟まれる

2基のピットは出入口施設と思われる。カマドは残存していなかった。

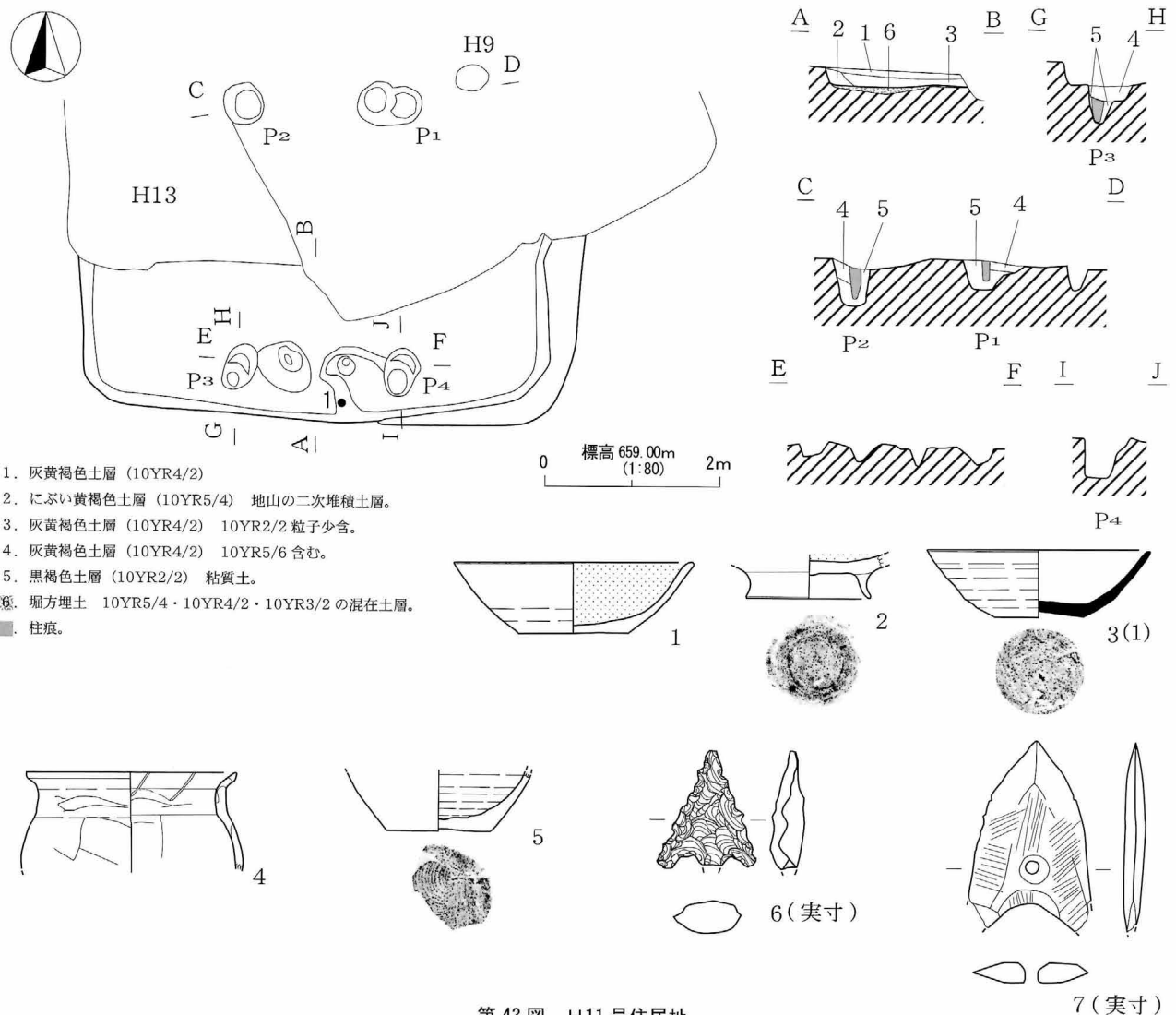
遺物は土師器、須恵器、石器が出土した。土師器には坏（1）、碗（2）、武蔵甕（4）、ロクロ甕（5）の器種が認められる。坏・碗はヘラミガキ後内面黒色処理が施されており、坏の底部処理は左回転糸切である。武蔵甕は「コ」字口縁のものであり、ロクロ甕は底部片で右回転糸切痕がのこされる。須恵器は坏（3）が1点のみ出土している。底部処理は土師器坏同様に左回転糸切である。石器は6の打製石鏃と、7の磨製石鏃が出土している。2点共に混入品である。

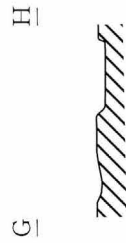
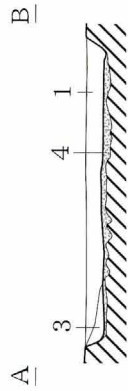
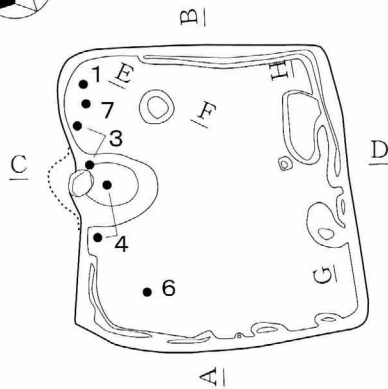
以上の出土遺物から本址は奈良平安時代V期、9世紀前半の実年代が想定される。

### OH12号住居址（第44図）

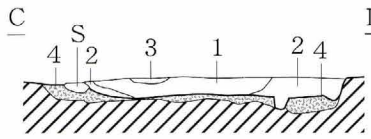
XI6グリットで検出された。M3号溝址を切る。N-9°-Wに長軸方位をとる。長軸長3.2m、短軸長3.04m、深度0.2mの規模を有する。床面上で3基のピットが検出されたが、支柱穴は有さない。壁下には周溝がが巡り、西壁中央付近にカマドが構築される。カマドは堀方状態に破壊されていた。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、石器が出土した。土師器には坏（1～3）、碗（4）、坏か碗か判断しかねるもの（5・6）、ロクロ甕（11～17）の器種が認められる。坏・碗共に内面黒色処理が施されるものと、されないものが混在し、されるものもヘラミガキが伴うものと、そうでないものが存在する。底部処理は右回転糸切のもとヘラケズリのもものが存在する。碗の高台は付高台である。甕はすべてロクロ甕であり、中・小型のものはロクロ成形で、平坦な底部を有し、大型のものは叩き成形の可能性が強く、底部も丸い。須恵器は回転糸切痕をのこす、坏（7）の底部

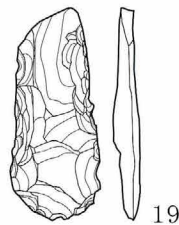
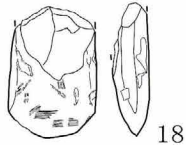
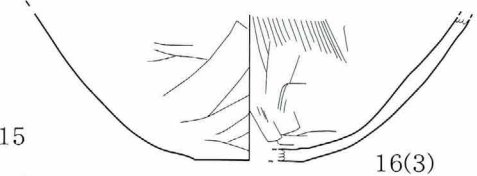
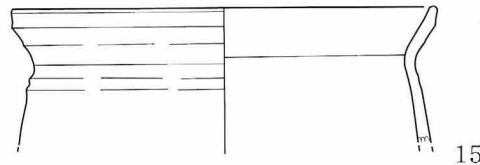
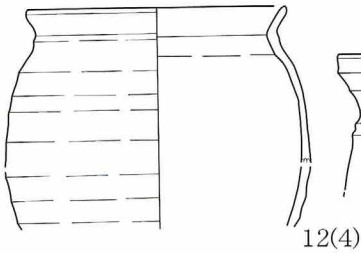
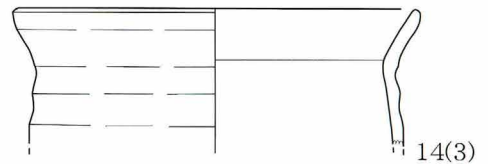
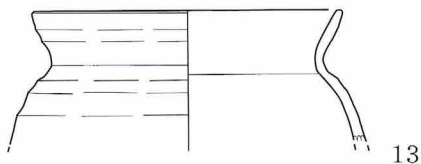
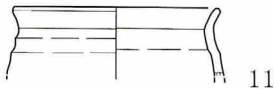
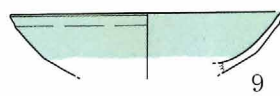
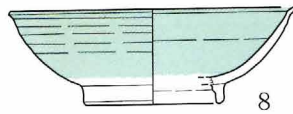
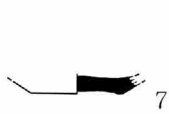
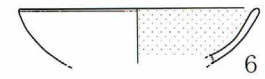
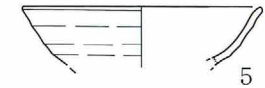
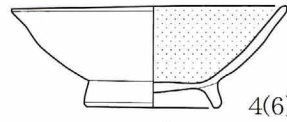
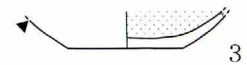
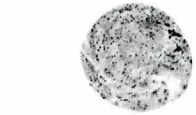
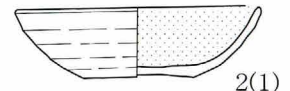
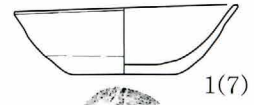




標高 658.50m  
(1:80) 2m



1. 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 10YR6/4・2/2 粒子含む。
2. 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 10YR6/4・2/2 の混在土。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2)。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 多含。堀方埋土。



第 44 図 H12 号住居址

第 26 表 宮浦遺跡 I H 9 号住居址出土遺物観察表 (2)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
57	土師器	鉢	(26.9)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理?	体部下半ヘラケズリ	完全実測	Ⅲ・Ⅳ区
58	土師器	鉢	(28.3)	12.8	(15.0)		ヘラミガキ・黒色処理?	体部下半ヘラケズリ	完全実測	Ⅳ区・カマド
59	土師器	甕	(15.0)	—	—		ナデ	ハケ目	回転実測・拓本、古墳	ケン
60	土師器	武蔵甕	(19.4)	(4.0)	(27.0)		ナデ	底～体ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区
61	土師器	ロクロ甕	(21.2)	—	—		ナデ	体部ヘラケズリ	回転実測、叩成形	Ⅳ区
62	土師器	ロクロ甕	22.6	4.2	27.2		ナデ	底～体ヘラケズリ	回転実測、叩成形	Ⅲ・Ⅳ区
63	土師器	ロクロ甕	—	9.6	—		カキ目	ヘラケズリ	完全実測・拓本	Ⅲ区
64	土師器	台付甕	—	—	—		ナデ	ヘラケズリ	完全実測、古墳	ケン
65	土師器	甕	—	—	—		ナデ		破片実測・拓本、古墳	ケン
66	土師器	壺	(16.35)	—	—		ヘラミガキ	ハケ目	回転実測、古墳	P3
67	土師器	有段口縁壺	(21.6)	—	—		ハケ目・ヘラミガキ	ハケ目・ヘラミガキ	回転実測、古墳	カマド
68	須恵器	甕	—	(15.8)	—		ナデ	ヘラケズリ	回転実測・拓本	Ⅱ区
69	須恵器	壺	(20.4)	—	—				回転実測	P1
70	灰釉陶器	長頸壺	(11.4)	—	—		施釉	施釉	回転実測	Ⅰ区
71	灰釉陶器	瓶	(15.5)	—	—			施釉	回転実測	Ⅱ区
72	弥生土器	鉢	—	(6.6)	—		赤彩	赤彩	回転実測	Ⅱ区
73	弥生土器	甕	—	—	—			刻目	破片実測・拓本	Ⅱ区
74	弥生土器	甕	—	—	—		ハケ目	縦位羽状	破片実測・拓本	Ⅱ区
75	弥生土器	壺	—	—	—		ナデ	口唇部刻目	破片実測・拓本	Ⅰ区
76	弥生土器	壺	—	—	—		ハケ目	縄文・三角文・刺突・赤彩	破片実測・拓本	Ⅲ区
77	土製品	?	—	—	—				破片実測	Ⅲ区
78	石器	打製石斧	(8.6)	5.3	0.85	(119.1)				ケン
79	石器	剥片	3.0	1.8	5.5	2.8			使用痕、黒曜石	ケン
80	石器	砥石	29.3	35.2	12.2	16.28			安山岩	No1
81	鉄製品	?	—	—	—	—				Ⅰ区

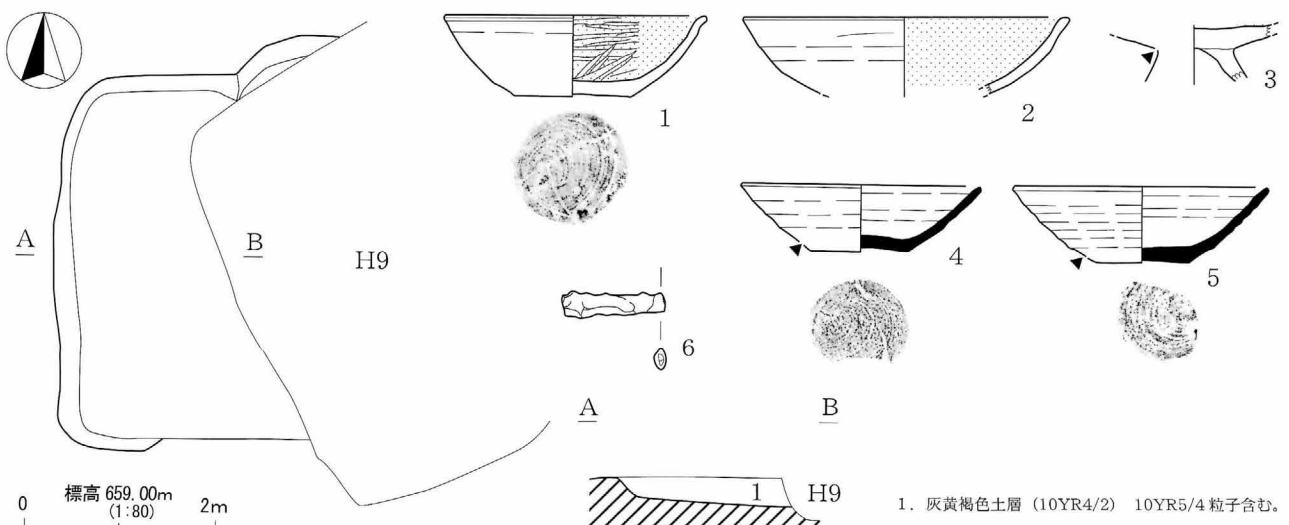
片が 1 点出土された。灰釉陶器は碗 (8・9)、皿 (10) の器種が認められる。丸石 2 号窯期に比定される。石器は (18) の磨製石斧と (19) の打製石斧が出土した。いずれも混入品である。

以上の出土遺物から本址は奈良・平安時代Ⅶ期、10 世紀前半の実年代が想定される。

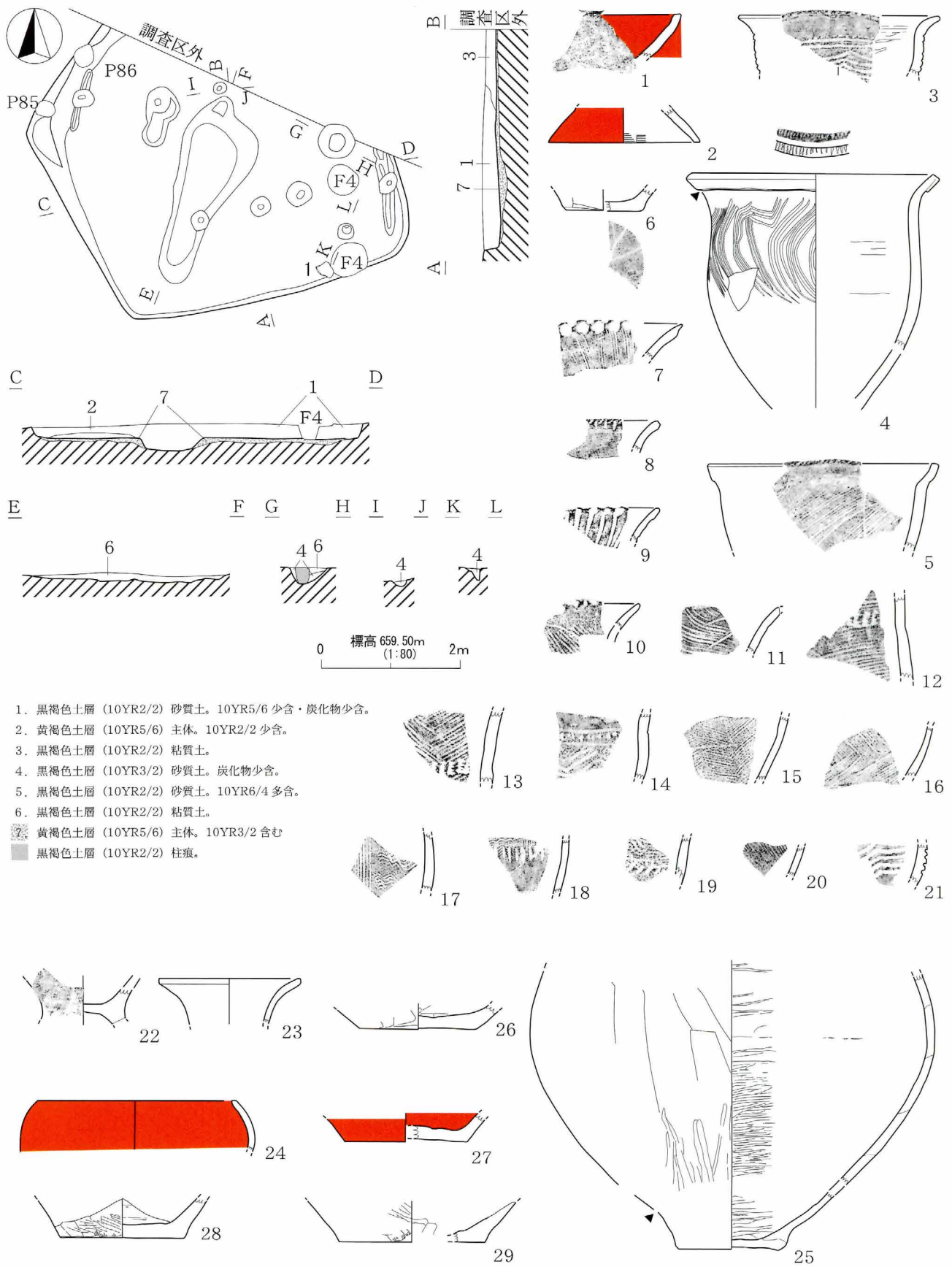
OH 13 号住居址 (第 45 図)

IXウ 8 グリットで検出された。H 9 号住居址に切られ、H 11 号住居址を切る。N-0°-W に長軸方向をとる。長軸長 4.0 m、深度 0.24 m の規模を有する。ピット、カマド等は残存あるいは存在しない。

遺物は土師器、須恵器、鉄製品が出土した。土師器は、坏 (1・2)、高坏 (3) の器種が認められる。坏の内面はヘラミガキ後、黒色処理が施される。底部は 1 しか残存しないが、右回転糸切痕をのこす。高坏は古墳時代のもので

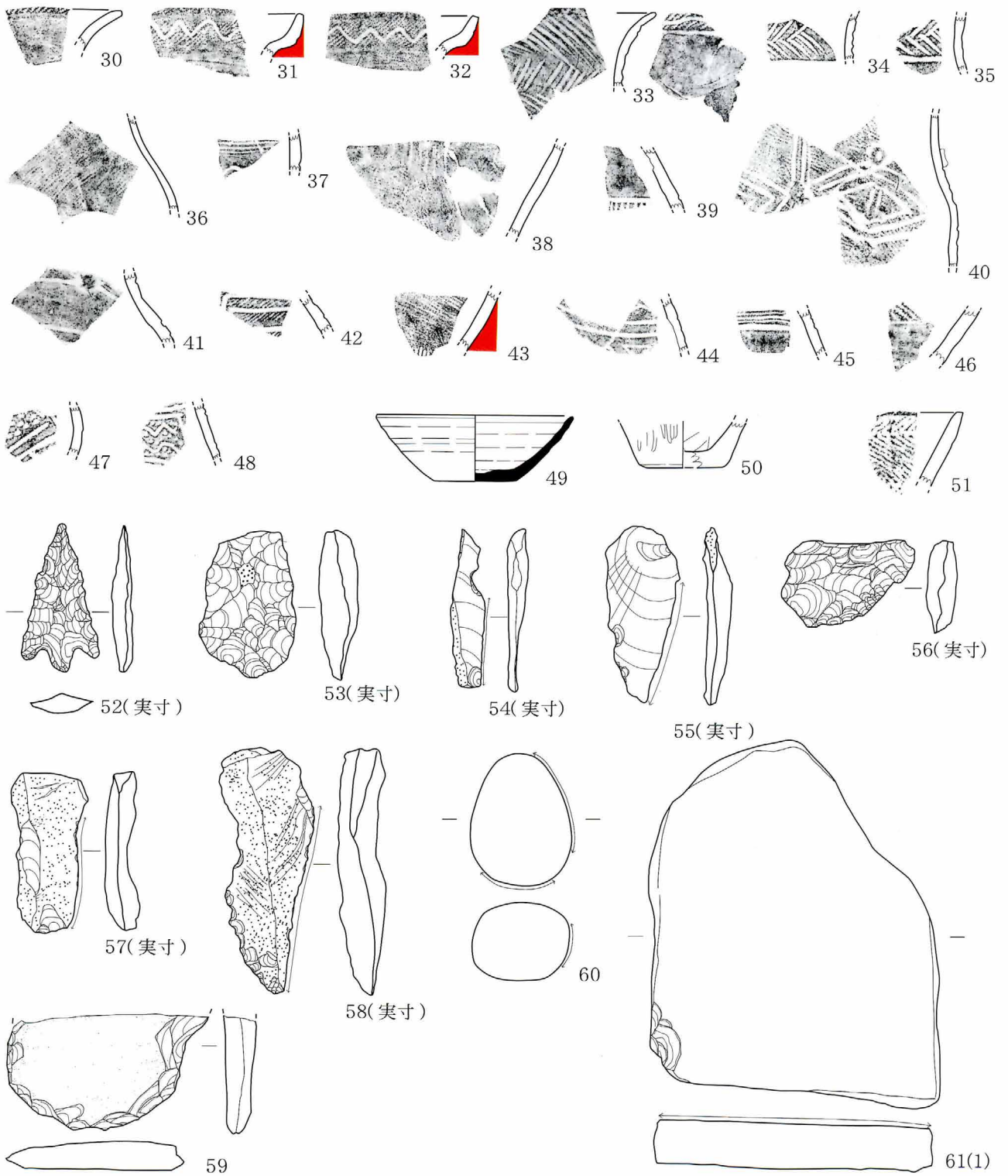


第 45 図 H 13 号住居址



第 46 图 H14 号住居址(1)





第47图 H14号住居址(2)

あり、混入品である。須恵器は坏（4・5）が2点出土している。いずれも底部には右回転糸切痕をのこす。鉄製品は（6）の器種不明品が1点出土した。

以上の出土遺物から本址は奈良・平安時代V期、9世紀前半の実年代が想定される。

第27表 宮浦遺跡I H10号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	10.6	5.3	4.5			完全実測、古墳		
2	土師器	坏	(12.5)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理	回転実測	カマド	
3	土師器	坏	(14.0)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理	回転実測	カマド	
4	土師器	坏	(14.6)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理	回転実測	床	
5	土師器	坏	(16.2)	—	—		黒色処理	回転実測	カマド、床	
6	土師器	坏	(17.3)	(7.4)	(5.3)		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切	回転実測	床
7	土師器	坏	—	6.4	—		ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切、ヘラケズリ	完全実測・拓本	カマド
8	土師器	坏	—	(6.4)	—		ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	
9	須恵器	長頸壺	(10.6)	—	—			回転実測		
10	須恵器	壺?	—	(5.8)	—		ナデ	右回転糸切	回転実測	カマド
11	須恵器	壺?	—	(6.2)	—		ナデ	右回転糸切	回転実測	カマド
12	灰釉陶器	長頸壺	—	(8.0)	—		ナデ	施釉	回転実測	P7
13	鉄製品	鏝	—	—	—	—		完全実測		
14	鉄製品	?	—	—	—	—		完全実測	カマド	
15	鉄製品	?	—	—	—	—		完全実測		

第28表 宮浦遺跡I H11号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(13.8)	(6.3)	(4.0)		ヘラミガキ・黒色処理	左回転糸切	回転実測	覆土、ホリ
2	土師器	碗	—	(7.2)	—		ヘラミガキ・黒色処理	付高台	回転実測・拓本	
3	須恵器	坏	(12.7)	(5.0)	(3.9)			左回転糸切	回転実測・拓本	No1
4	土師器	武蔵甕	(12.0)	—	—		ナデ	ヘラケズリ	回転実測	
5	土師器	ロクロ甕	—	(6.0)	—			右回転糸切	回転実測・拓本	
6	石器	打製石鏝	—	1.4	0.45	0.7			黒曜石	
7	石器	磨製石鏝	—	1.75	0.3	1.7				

第29表 宮浦遺跡I H12号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	11.7	6.0	3.6			右回転糸切	完全実測・拓本	No7
2	土師器	坏	12.9	5.8	3.6		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	No1
3	土師器	坏	—	6.0	—		黒色処理	ヘラケズリ	完全実測	IV区
4	土師器	碗	14.5	7.2	5.3		ヘラミガキ・黒色処理	付高台	完全実測・拓本	No6
5	土師器	坏?	(12.6)	—	—				回転実測	III区
6	土師器	坏?	(12.6)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理		回転実測	
7	須恵器	坏	—	(4.8)	—			方向不明回転糸切	回転実測	III区
8	灰釉陶器	碗	(15.1)	(7.4)	(4.9)		施釉	付高台・施釉	回転実測	III区
9	灰釉陶器	碗	(15.4)	—	—		施釉	施釉	回転実測	III区
10	灰釉陶器	皿	(15.4)	—	—		施釉	施釉	回転実測	ケン
11	土師器	ロクロ甕	(11.0)	—	—				回転実測	
12	土師器	ロクロ甕	(13.8)	—	—				回転実測、叩成形	No4
13	土師器	ロクロ甕	(16.4)	—	—				回転実測	
14	土師器	ロクロ甕	(21.4)	—	—				回転実測	No3
15	土師器	ロクロ甕	(22.5)	—	—				回転実測	
16	土師器	ロクロ甕	—	—	—				回転実測、叩成形	No3
17	土師器	ロクロ甕	—	8.4	—			ヘラケズリ	完全実測	II区
18	石器	磨製石斧	(6.9)	(4.5)	(1.9)	90.0				IV区
19	石器	打製石斧	(10.8)	(4.5)	(1.4)	75.0				III区

第30表 宮浦遺跡Ⅰ H13号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	14.0	6.0	4.2		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	
2	土師器	坏	(17.0)	—	—		ヘラミガキ 黒色処理・煤付着		回転実測	
3	土師器	高坏	—	—	—		ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	完全実測	
4	須恵器	坏	(12.7)	5.0	3.5			右回転糸切	完全実測・拓本	
5	須恵器	坏	(13.6)	5.0	(4.0)			右回転糸切	完全実測・拓本	
6	鉄製品	?	—	—	—	1.0				

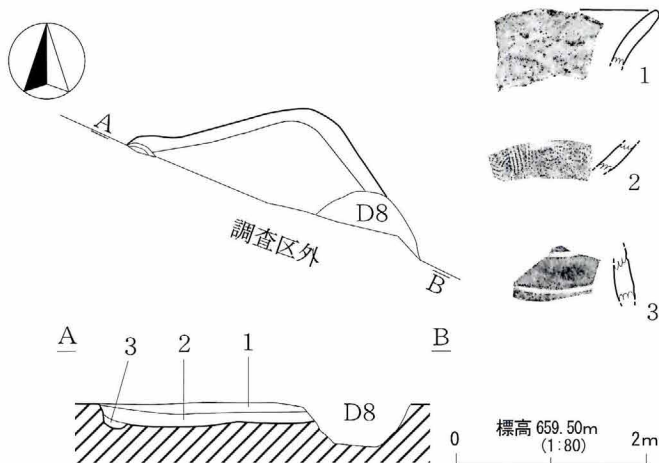
第31表 宮浦遺跡Ⅰ H14号住居址出土遺物観察表(1)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	鉢	—	—	—		赤彩	赤彩	破片実測・拓本	Ⅳ区
2	弥生土器	高坏	—	(11.0)	—			赤彩	回転実測	Ⅱ区
3	弥生土器	甕	(14.4)	—	—		口唇部縄文、ヘラ描縦位羽状・刺突		回転実測・拓本	Ⅱ区
4	弥生土器	甕	(18.2)	—	—		口唇部刻目、縦櫛波状文		完全実測・拓本	P3
5	弥生土器	甕	(18.5)	—	—		口唇部縄文、櫛描斜走文		回転実測・拓本	Ⅳ区
6	弥生土器	甕	—	(5.8)	—		底部木葉痕、ヘラケズリ		回転実測・拓本	Ⅰ区
7	弥生土器	甕	—	—	—		口縁部押捺、櫛描横位羽状文		破片実測・拓本	P5
8	弥生土器	甕	—	—	—		口唇部縄文及び刻目		破片実測・拓本	Ⅱ区
9	弥生土器	甕	—	—	—		口唇部押捺、ヘラ描横位羽状文		破片実測・拓本	Ⅳ区
10	弥生土器	甕	—	—	—		口唇部突起、櫛描横位羽状文		破片実測・拓本	Ⅱ区
11	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描横位羽状文		破片実測・拓本	Ⅲ区
12	弥生土器	甕	—	—	—		櫛刺突、櫛描縦羽状文		破片実測・拓本	Ⅱ区
13	弥生土器	甕	—	—	—		櫛刺突、櫛描縦羽状文		破片実測・拓本	Ⅲ区
14	弥生土器	甕	—	—	—		ヘラ描沈線、ヘラ描縦位羽状文		破片実測・拓本	Ⅳ区
15	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描縦羽状文		破片実測・拓本	Ⅳ区
16	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描横羽状文		破片実測・拓本	Ⅱ区
17	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描波状文、櫛描条線		破片実測・拓本	Ⅳ区
18	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描波状文、櫛刺突		破片実測・拓本	Ⅲ区
19	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描波状文、櫛刺突		破片実測・拓本	Ⅱ区
20	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描横羽状文		破片実測・拓本	Ⅳ区
21	弥生土器	甕	—	—	—		半裁竹管縦位羽状		破片実測・拓本	Ⅱ区
22	弥生土器	台付甕	—	—	—		縄文		回転実測・拓本	Ⅳ区
23	弥生土器	壺	—	(10.4)	—				回転実測	Ⅱ区
24	弥生土器	無頸壺	—	(14.4)	—		赤彩	赤彩	回転実測	Ⅲ区
25	弥生土器	壺	—	7.6	—				完全実測	Ⅳ区
26	弥生土器	壺	—	(8.4)	—				回転実測	Ⅳ区
27	弥生土器	壺	—	(8.8)	—		赤彩	赤彩	回転実測	P9
28	弥生土器	壺	—	(9.0)	—			ハケ目	回転実測	Ⅱ区
29	弥生土器	壺	—	(10.6)	—			ハケ目	回転実測	Ⅳ区
30	弥生土器	壺	—	—	—			口唇部縄文	破片実測・拓本	Ⅲ区
31	弥生土器	壺	—	—	—		赤彩		破片実測・拓本	Ⅳ区
32	弥生土器	壺	—	—	—		赤彩		破片実測・拓本	Ⅲ区
33	弥生土器	壺	—	—	—		口縁部縄文、ヘラ描沈線	ヘラ描斜走文	破片実測・拓本	Ⅳ区
34	弥生土器	壺	—	—	—				破片実測・拓本	Ⅳ区

OH14号住居址 (第46・47図)

XIVイ10グリットで検出された。F4号掘立柱建物址、P85・P86に切られ、M5を切る。北東方向に調査区外に延びるため全容は不明である。短軸長4.64m、深度0.24mの規模を有する。ピットは床面上で9基検出されたが、支柱穴は判然としない。北・東壁下には周溝が巡り、住居の中央から南西隅に向かい土坑が存在する。調査範囲内には炉址は存在しなかった。

遺物は弥生土器、縄文土器、土師器、須恵器、石器が出土している。弥生土器には鉢(1)、高坏(2)、甕(3～21)、台付甕(22)、壺(23～48)の器種が認められる。鉢は内外面に赤彩が施される。高坏の可能性も否定

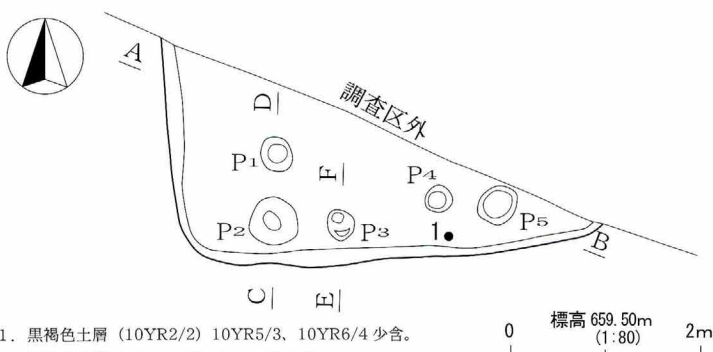


1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 含む。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR5/6 少含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR5/6 多含。

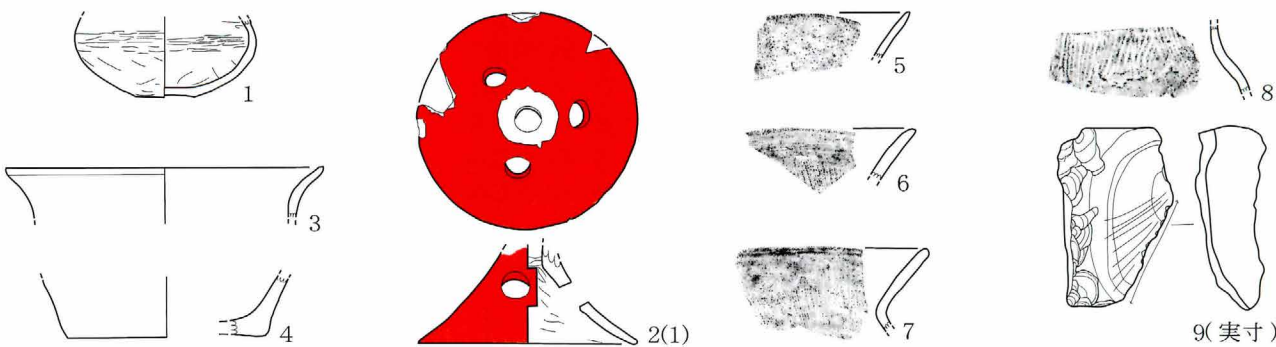
第 48 図 H15 号住居址

できない。高坏は外面に赤彩が施される脚部の破片である。甕はヘラ (3・12・17・21) あるいは櫛 (4・5・7・10~13, 15~20) による羽状文が施される。口唇部に縄文 (3・5) や刻目 (4・11)、押捺 (7・12)、突起 (13) が加飾されるものが多い。羽状文の他には刺突や波状文も認められるが、波状文は 17 のみであり、刺突については櫛によるもの (12・13・18・19) とヘラによるもの (3・17) がある。また、4 には特徴的な折り返し口縁が認められる。台付甕は台と底部の接合部分の破片が出土した。壺は赤彩されるもの (24・27・31・32・43) は少なく、ほとんどのものが無彩である。24 が無頸壺の他は頸を有する。25 の体部などから、栗林式に典型的な体部下半に最大径を有する器形ではなく、体部中央より上位に最大径を有する器形を呈するようである。口縁形状も 31・32 のような受口のは少なく、32 のような素口縁が大勢のようである。また、口唇部への加飾は 30 のように、面取りをして縄文を施文するものもあるが、33 のように加飾が内面にまで及ぶものも存在する。口唇部以外の文様は縄文やヘラによる 1 条の波状文 (31・32)、ヘラによる横位羽状文 (33~35)、櫛描横位羽状文 (36・38・42) ヘラによる菱形文 (40)、三角文 (47)、円形の貼付文 (39・40)、変形工字文 (42)、平行沈線 (37・44・45) などが認められる。縄文土器は前期の繊維土器 (51) が 1 点出土した。土師器は 50 の甕底部が 1 点出土している。須恵器は 49 の坏が 1 点出土した。底部には右回転糸切痕が認められる。石器は打製石鏃 (52・53)、使用痕のある剥片 (54・55・57・58)、スクレイパー (56)、打製石鏃 (59)、磨石 (60)、砥石 (61) が出土した。

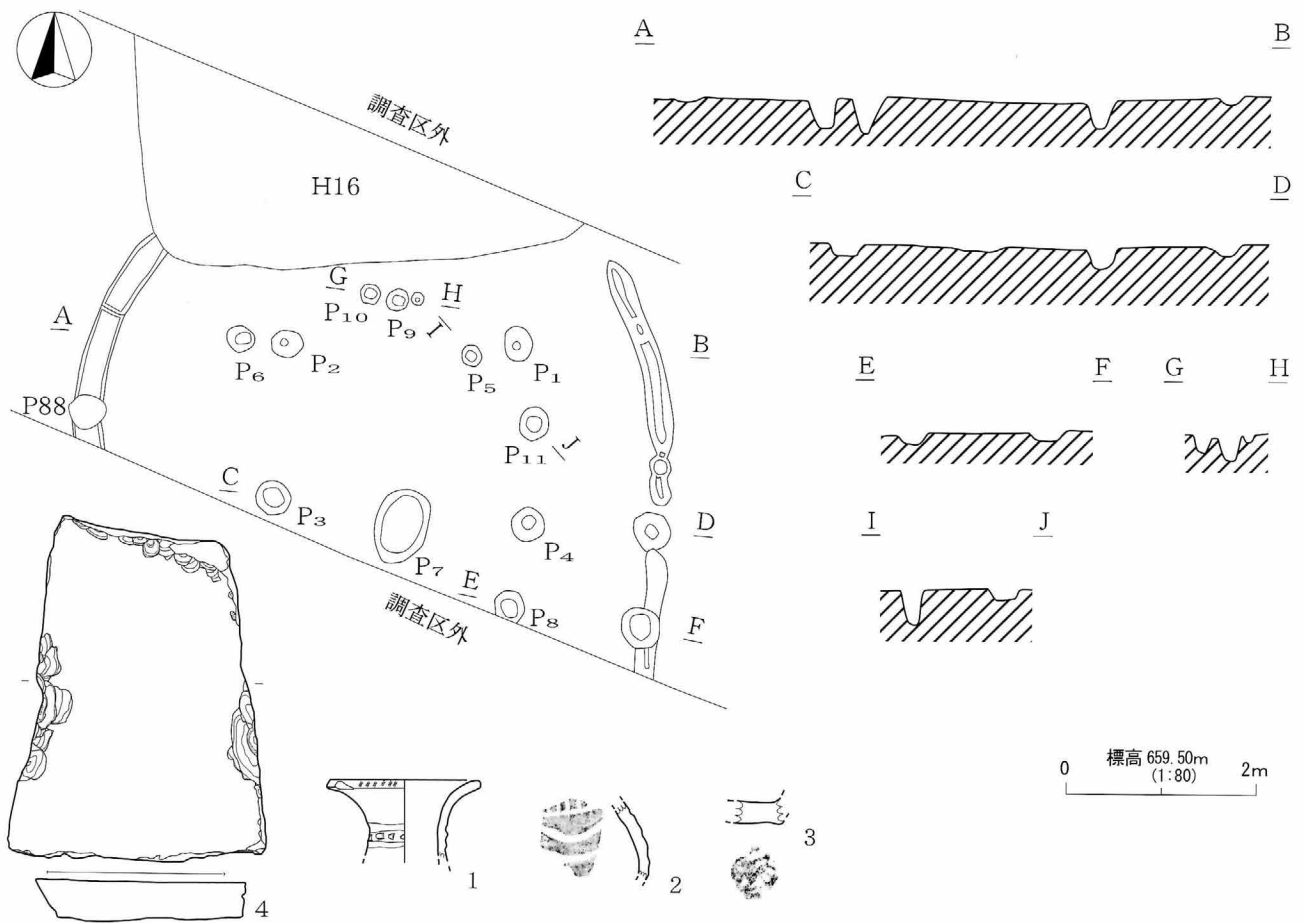
以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期前半に位置づけられる。



1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR5/3, 10YR6/4 少含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/5 少含。
3. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) 10YR3/2, 10YR2/2 の混在土。



第 49 図 H16 号住居址



第50図 H17号住居址

OH15号住居址 (第48図)

XIVエ10グリットで検出された。D8号土坑に切られ、南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.24mの規模である。ピットは床面上で1基検出されたが、主柱穴ではない。調査範囲には周溝、炉址等は存在しなかった。

遺物は弥生土器片が3点出土している。1は甕の口縁部片で、斜位条線が施文される。2も甕の体部片で櫛描の縦位条線区画内に横位の波状文が施文される。3は外面赤彩の壺片で平行沈線が施文されている。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半の所産と考えられる。

OH16号住居址 (第49図)

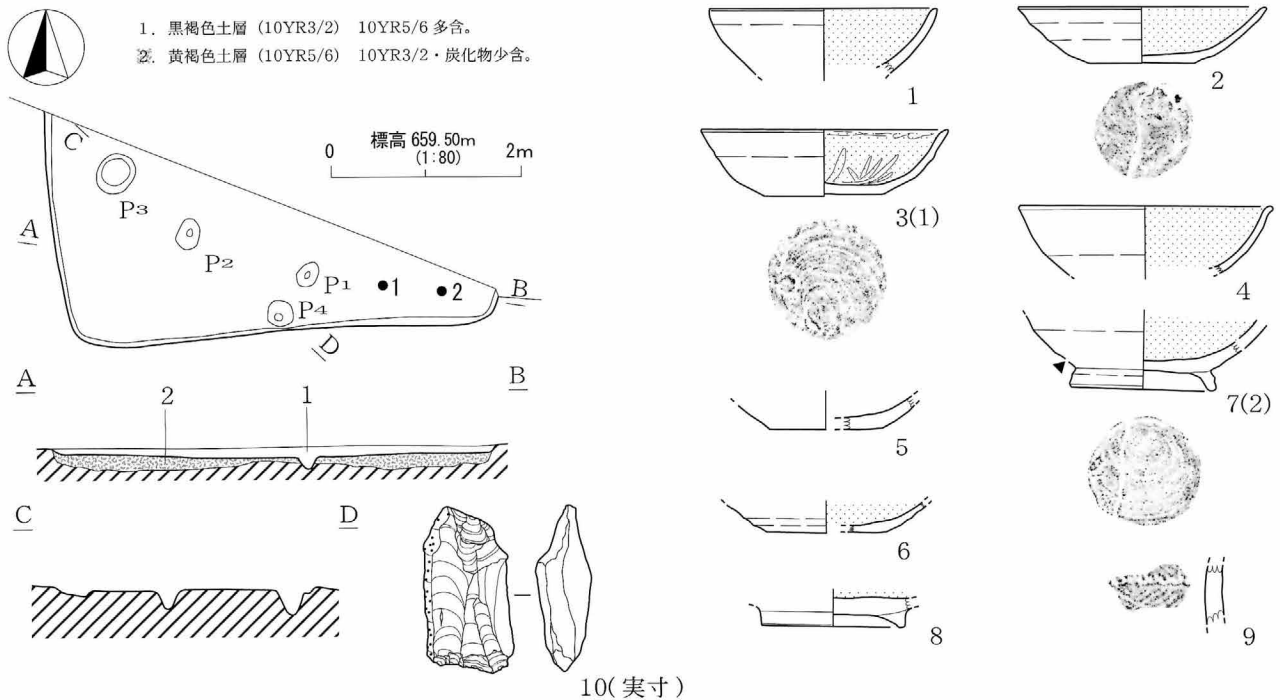
XIVカ8グリットで検出された。H17号住居址を切る。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.24mの規模を有する。ピットは床面上で5基検出されたが主柱穴は判然としない。調査範囲内には周溝、炉址とは存在しなかった。

遺物は土師器と石器が出土しているが、削器(9)と思われる黒曜石製の石器は混入品であろう。土師器には小型丸底(1)、器台(2)、甕(5~8)の器種が認められる。小型丸底は口縁部が残存しないが、小径で上げ底の底部を有する。器台は外面赤彩で、脚部に3ヶの円孔が均等に配される。受部は残存しない。甕(6・7・8)はハケ目調整が顕著である。

以上の出土遺物から、本址は古墳時代前期の所産と考えられる。

第 32 表 宮浦遺跡 I H14 号住居址出土遺物観察表(2)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
35	弥生土器	壺	-	-	-	-	へら描平行沈線、横位羽状文		破片実測・拓本	P3
36	弥生土器	壺	-	-	-	-	櫛描斜走文		破片実測・拓本	I区
37	弥生土器	壺	-	-	-	-	へら描沈線、櫛描斜走文		破片実測・拓本	IV区
38	弥生土器	壺	-	-	-	-		ハケ目	破片実測・拓本	IV区
39	弥生土器	壺	-	-	-	-	へら描沈線、櫛刺突		破片実測・拓本	III区
40	弥生土器	壺	-	-	-	-	縄文、菱形文、貼付文		破片実測・拓本	III区
41	弥生土器	壺	-	-	-	-	へら描沈線、貼付文		破片実測・拓本	II区
42	弥生土器	壺	-	-	-	-	縄文、変形工字文		破片実測・拓本	IV区
43	弥生土器	壺	-	-	-	-	櫛描斜走文、櫛刺突、赤彩		破片実測・拓本	IV区
44	弥生土器	壺	-	-	-	-	へら描沈線		破片実測・拓本	III区
45	弥生土器	壺	-	-	-	-	へら描沈線		破片実測・拓本	II区
46	弥生土器	壺	-	-	-	-		縄文	破片実測・拓本	I区
47	弥生土器	壺	-	-	-	-	三角文内刺突充填		破片実測・拓本	IV区
48	弥生土器	壺	-	-	-	-	沈線区画内へら描波状文・刺突		破片実測・拓本	P5
49	須恵器	坏	(13.6)	(5.6)	(4.5)	-		右回転糸切	回転実測	IV区
50	土師器	甕	-	(6.0)	-	-		へらミガキ	回転実測	P5
51	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	縄文前期、含繊維		破片実測・拓本	II区
52	石器	打製石鏃	2.5	1.3	0.3	0.8	黒曜石		完全実測	P5
53	石器	打製石鏃	-	1.6	0.7	2.6	未製品?		完全実測	覆土
54	石器	剥片	2.7	0.6	0.3	0.4			完全実測	覆土
55	石器	剥片	3.1	1.3	0.45	1.3			完全実測	覆土
56	石器	搔器	1.5	2.3	0.5	1.7			完全実測	覆土
57	石器	剥片	2.75	1.3	0.6	1.7			完全実測	覆土
58	石器	剥片	4.2	1.4	0.8	3.6			完全実測	覆土
59	石器	打製石鏃	-	12.0	1.9	-			完全実測	覆土
60	石器	磨石	9.0	6.9	5.35	510.0			完全実測	II区
61	石器	砥石	12.8	19.7	3.9	2750.0			完全実測	No1



第 51 図 H18 号住居址

第 33 表 宮浦遺跡 I H15 号住居址出土遺物観察表

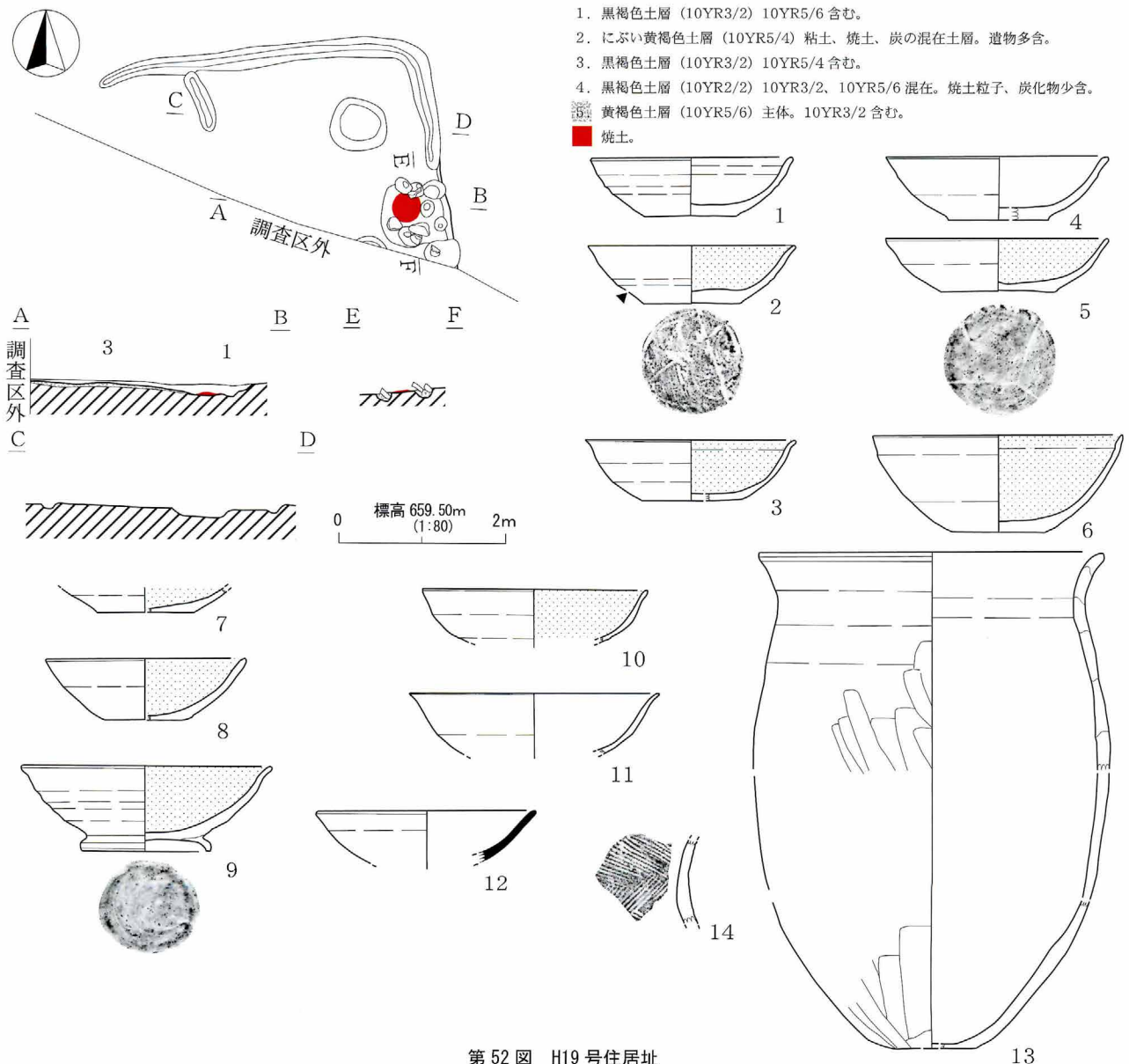
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕	—	—	—	—	斜位の条線	破片実測・拓本	覆土	
2	弥生土器	甕	—	—	—	—	櫛描縦位条線、波状文	破片実測・拓本	覆土	
3	弥生土器	壺	—	—	—	—	赤彩、平行沈線	破片実測・拓本	覆土	

○H17号住居址 (第50図)

XIVカ9グリットで検出された。H16号住居址に切られる。ほぼ真北に長軸方位をとるものと思われる。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。短軸長6.32mの規模であるが、壁は残存していない。床面上で12基のピットが検出され、P1・P2の2基は支柱穴、P5・P6は建替前の古い支柱穴である。P9・P10は出入口のピットであろう。壁下には周溝が巡るが、炉址は調査範囲内には存在しなかった。

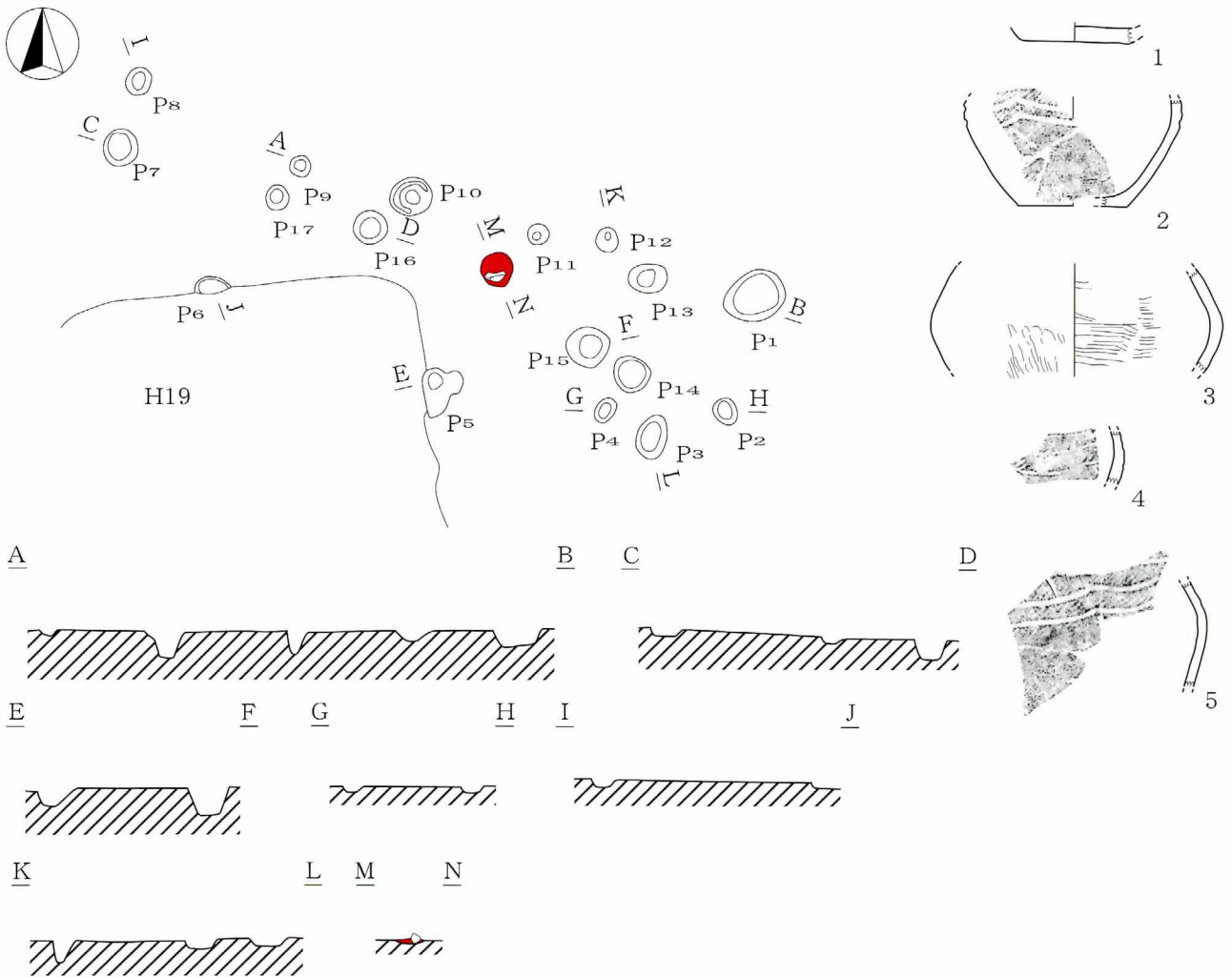
遺物は弥生土器、縄文土器、石器が出土している。弥生土器は1の壺口縁部、2の壺体部片である。縄文土器は3の深鉢底部片で、胎土に繊維を含む前期の土器である。石器は4の砥石が1点認められる。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半の所産と考えられる。



第 34 表 宮浦遺跡 I H16 号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	小型丸底	—	3.0	—	—	ヘラミガキ	ヘラケズリ・ミガキ	完全実測	
2	土師器	器台	—	11.6	—	—		赤彩	完全実測	No1
3	土師器	甕	(16.7)	—	—	—			回転実測	
4	土師器	甕	—	(10.4)	—	—			回転実測	
5	土師器	甕	—	—	—	—			破片実測・拓本	
6	土師器	甕	—	—	—	—	ハケ目	ハケ目	破片実測・拓本	
7	土師器	甕	—	—	—	—	ハケ目	ハケ目	破片実測・拓本	
8	土師器	甕	—	—	—	—	ハケ目	ハケ目	破片実測・拓本	P2
9	石器	削器	2.4	1.45	0.85	2.8	黒曜石		完全実測	P2



第 53 図 H20 号住居址



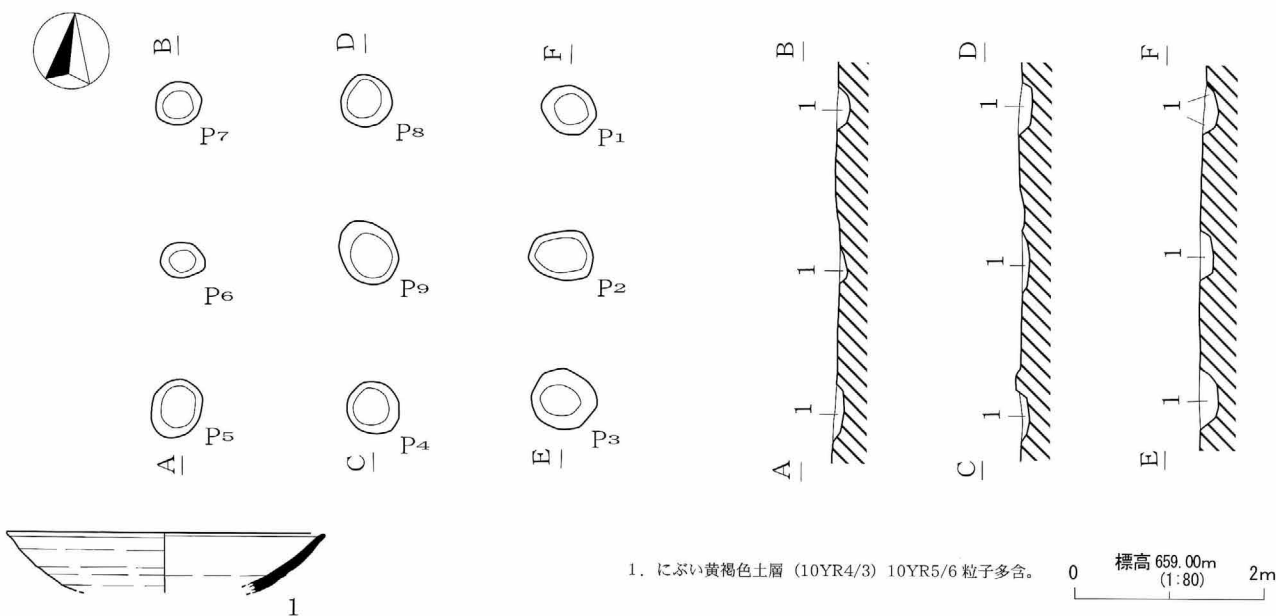
第35表 宮浦遺跡 I HI7号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	壺	8.15	—	—	—	口唇部縄文、平行沈線間に刺突列		完全実測	
2	弥生土器	壺	—	—	—	—	指頭圧痕	弧文、赤彩?	破片実測・拓本	
3	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	含繊維、縄文前期		破片実測・拓本	
4	石器	砥石	17.8	13.5	2.15	890.0			完全実測	

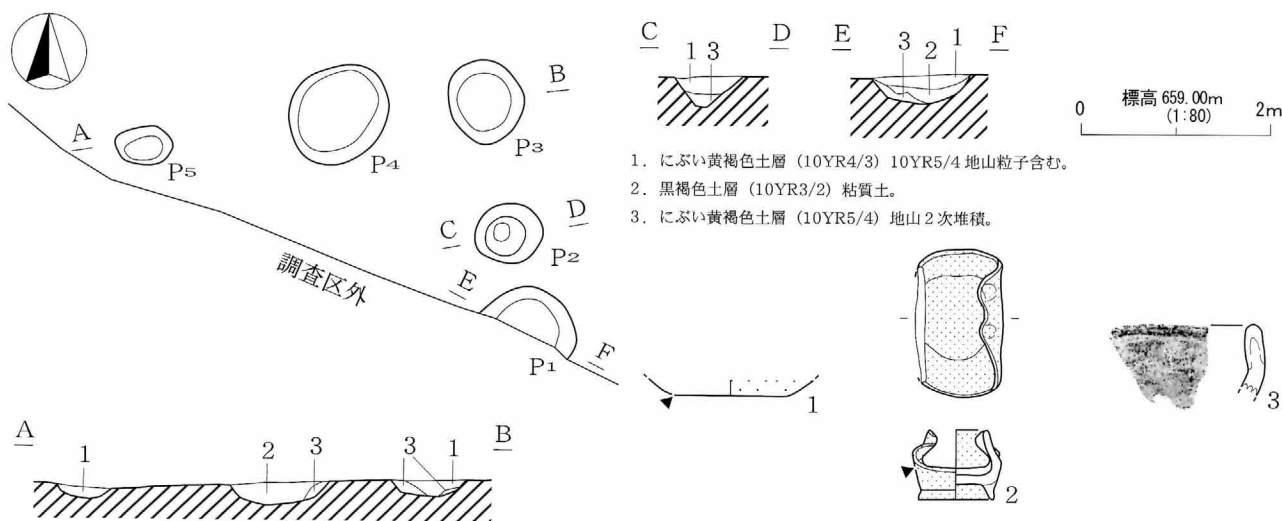
OH18号住居址 (第51図)

XIVキ7グリットで検出された。M4号溝址を切る。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.08mの規模である。ピットは床面上で4基検出されたが、支柱穴は判然としない。調査範囲内には周溝、カマド等は認められなかった。

遺物は土師器、縄文土器、石器が出土している。土師器には坏(1~6)、碗(7・8)の器種が認められる。いずれも、内面黒色処理で底部には回転糸切痕をのこすものが主体である。縄文土器は9の深鉢片が1点出土している。胎土には繊維を含み、LR、RLの原体結束による羽状縄文が施文されている。前期の所産である。石器は10の楔形



第54図 F1号掘立柱建物址



第55図 F2号掘立柱建物址

器が1点出土した。黒曜石製である。

以上の出土遺物から、本址は奈良・平安時代VI期、9世紀後半の実年代が想定される。

第36表 宮浦遺跡I H18号住居址出土遺物観察表

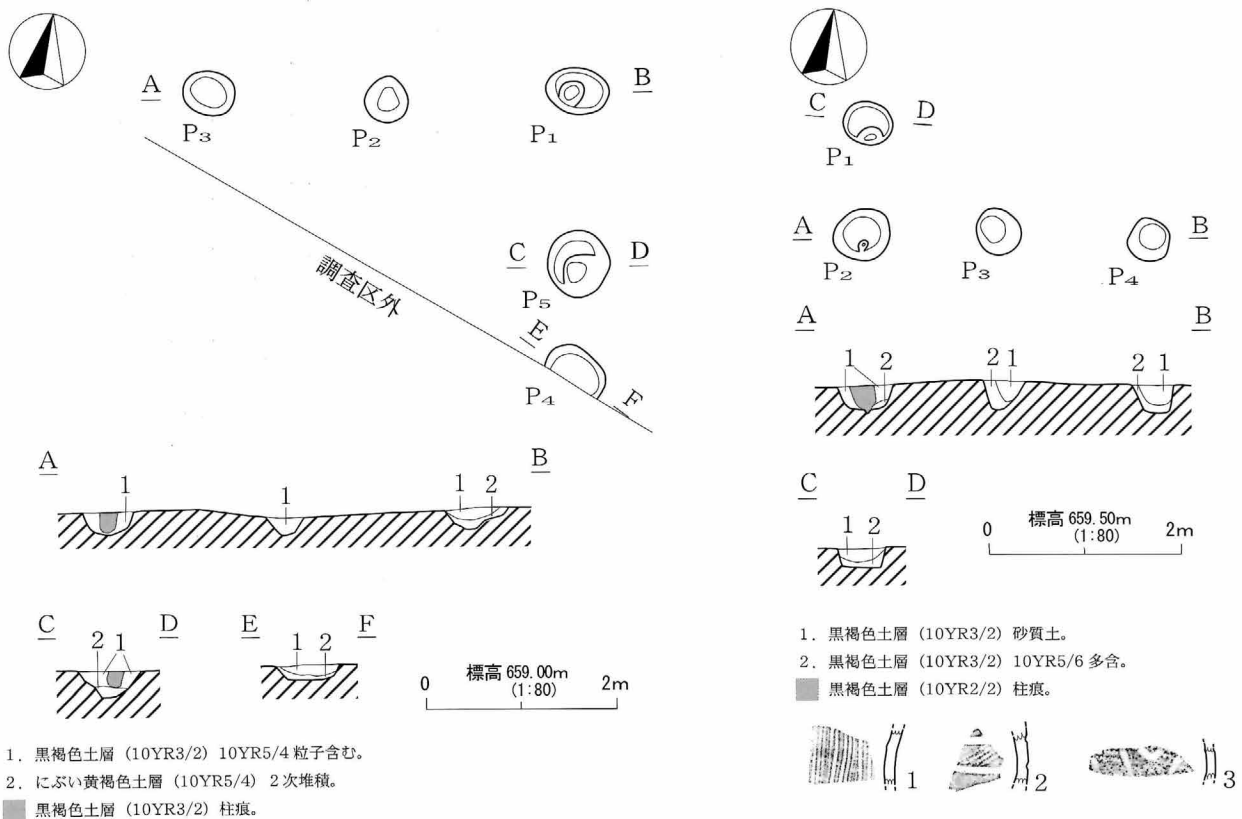
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(12.0)	—	—	—	黒色処理		回転実測	
2	土師器	坏	(13.0)	(5.4)	(3.0)	—	黒色処理	右回転糸切	回転実測・拓本	
3	土師器	坏	13.0	6.2	3.5	—	放射暗文、黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	No1
4	土師器	坏	(13.2)	—	—	—	黒色処理		回転実測	
5	土師器	坏	—	(5.8)	—	—		回転方向不明糸切	回転実測	
6	土師器	坏	—	(6.2)	—	—	黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	
7	土師器	碗	—	7.4	—	—	ミガキ→黒色処理	回転糸切→付高台	完全実測・拓本	No2
8	土師器	碗	—	(7.6)	—	—	ミガキ→黒色処理		回転実測	
9	縄文土器	深鉢	—	—	—	—		羽状縄文	破片実測・拓本	
10	石器	楔形石器	2.2	1.2	0.8	1.8			完全実測	

OH19号住居址 (第52図)

XVア8グリッドで検出された。H20号住居址を切る。N-84°-Eに長軸方位をとる。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.12mの規模である。カマドは東壁の中央に構築されていたが、堀方状態に破壊されていた。壁下には周溝が巡り、間仕切と思われる溝も認められた。ピットは床面上で2基検出された。

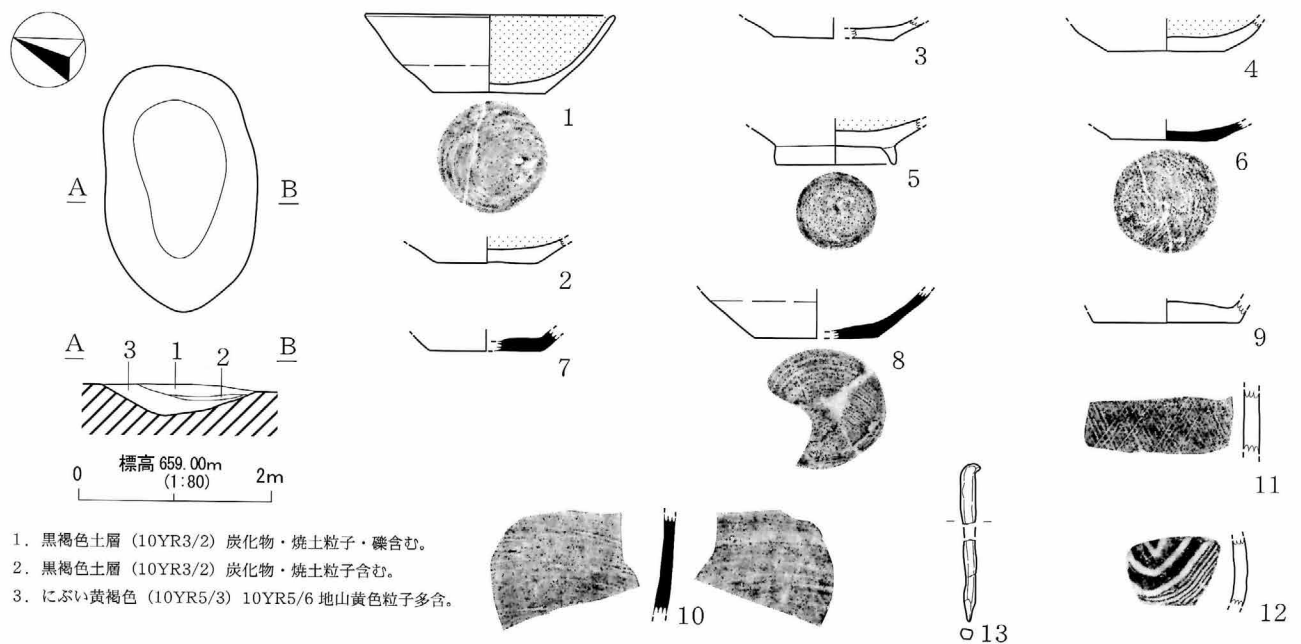
遺物は土師器、須恵器、弥生土器が出土している。土師器には坏(1~8)、碗(9)、ロクロ甕(13)の器種が認められる。坏、碗は内面黒色処理で底部には回転糸切痕をのこすものが主体である。ロクロ甕は丸底ではなく、平坦な底部を有する。須恵器は12の坏片が1点出土している。弥生土器は14の横羽状文が施される甕片が1点出土している。

以上の出土遺物から、本址は奈良・平安時代VII期、10世紀前半の実年代が想定される。



第56図 F3号掘立柱建物址

第57図 F4号掘立柱建物址



第58図 D1号土坑

OH20号住居址 (第53図)

XVア7グリットで検出された。H19号住居址、D13号土坑に切られる。炉址と17基のピットが残存しており、壁、床等は存在しない。そのため規模・形状が不明である。

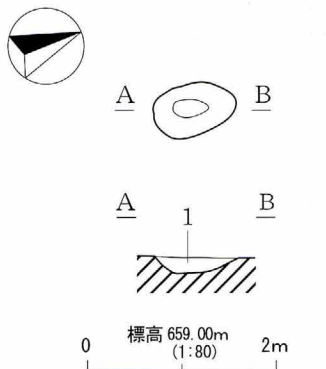
遺物は弥生土器が5点出土した。すべて壺であり、弥生時代中期後半栗林式に比定される。

第37表 宮浦遺跡I H19号住居址出土遺物観察表

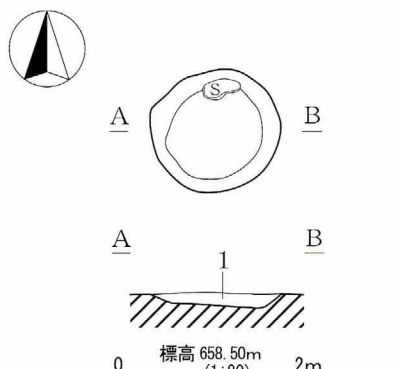
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(12.2)	(5.4)	(3.5)		右回転糸切	回転実測	カマド	
2	土師器	坏	(12.5)	5.6	(3.5)	黒色処理	右回転糸切、ヘラ記号	完全実測・拓本		
3	土師器	坏	(12.6)	(6.0)	(3.6)	黒色処理	回転方向不明糸切	回転実測	カマド	
4	土師器	坏	(13.4)	(6.0)	(3.8)		回転方向不明糸切	回転実測		
5	土師器	坏	13.4	6.8	3.2	黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	カマド	
6	土師器	坏	(15.0)	(5.4)	(5.8)	黒色処理		回転実測	カマド	
7	土師器	坏	—	(5.8)	—	黒色処理	右回転糸切	回転実測		
8	土師器	坏	—	—	—	黒色処理		回転実測		
9	土師器	碗	(15.0)	(6.0)	(5.1)	黒色処理	回転糸切→付高台	回転実測・拓本	カマド	
10	土師器	坏?	(13.6)	—	—	黒色処理		回転実測	カマド	
11	土師器	坏?	(15.1)	—	—			回転実測	カマド	
12	須恵器	坏	(13.2)	—	—			回転実測	カマド	
13	土師器	ロクロ甕	(20.8)	(4.8)	—	ナデ	ヘラケズリ	回転実測、叩成形	カマド	
14	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描横羽状文	破片実測・拓本	堀方	

第38表 宮浦遺跡I H20号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	壺	—	6.0	—			完全実測		
2	弥生土器	壺	—	(6.0)	—		弧線文、縄文	回転実測・拓本		
3	弥生土器	壺	—	—	—	ハケ目	ミガキ	回転実測		
4	弥生土器	壺	—	—	—		弧線文、縄文	破片実測・拓本		
5	弥生土器	壺	—	—	—		弧線文、縄文	破片実測・拓本		

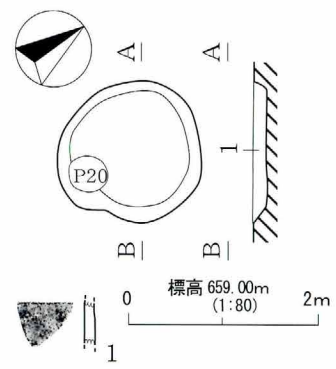


1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 砂質土。



1. 褐灰色土層 (10YR4/1) 砂質土。10YR5/4 含む。

第61図 D4号土坑

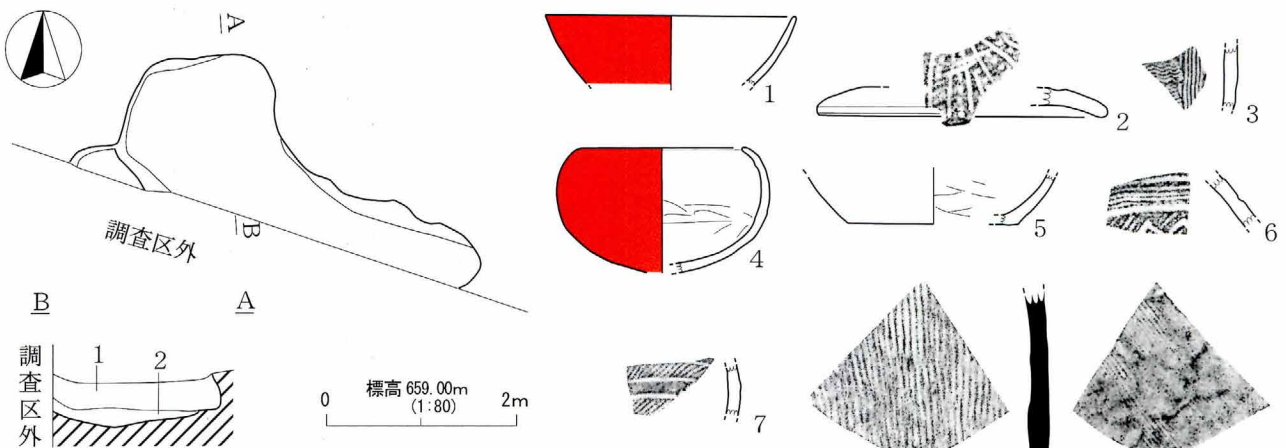


1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 炭化物・焼土粒子・礫含む。

第62図 D5号土坑

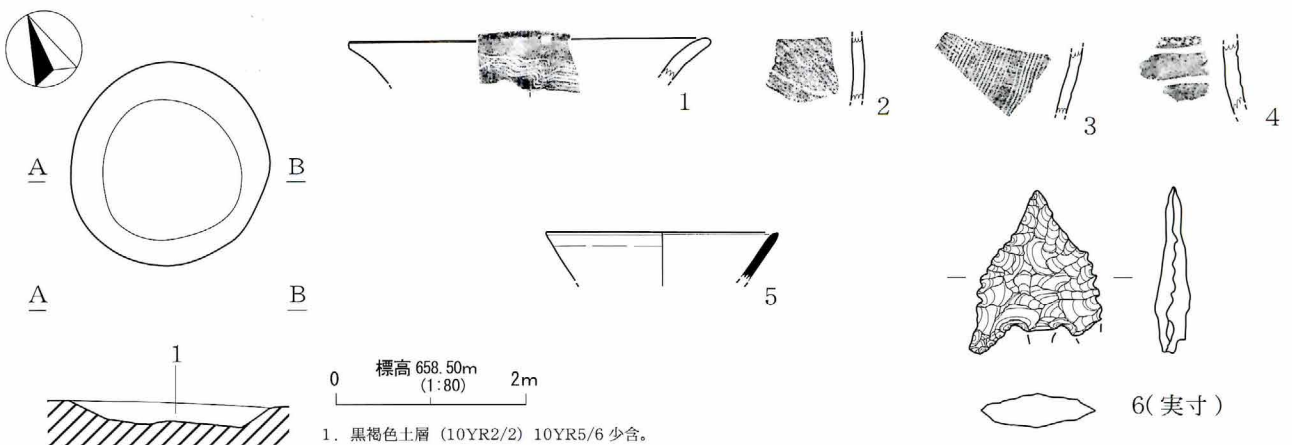


第59図 D2号土坑



1. にぶい黄褐色土層 (10YR6/4) 炭化物含む。  
2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 砂利多含。

第60図 D3号土坑



1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR5/6 少含。

第63図 D6号土坑

## 第2節 掘立柱建物址

### ○F1号掘立柱建物址 (第54図)

Ⅷキ10グリットで検出された。H6号住居址を切る。N-84°-Eに長軸方位をとる。桁行4.08m×梁間3.04m、深度0.08～0.2mの規模を有する。形態は9基の柱穴で構成される2間×2間の総柱式であり、聖原分類のE2形態である。

出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

### ○F2号掘立柱建物址 (第55図)

Ⅸイ10グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。5基の柱穴が検出されたが、南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度は0.12～0.24mの規模である。

遺物は底部に左回転糸切痕を残す内面黒色処理の土師器坏(1)、内外面黒色処理が施される土師器耳皿(2)、ナデ調整が施される土師器鉢?(3)が出土している。

以上の出土遺物から、本址は奈良・平安時代Ⅶ期、10世紀前半の実年代が想定される。

### ○F3号掘立柱建物址 (第56図)

Ⅸイ10グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。5基の柱穴が検出されたが、南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度は0.16～0.28mの規模である。

出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

### ○F4号掘立柱建物址 (第57図)

XIVア10グリットで検出された。H14号住居址を切る。4基の柱穴が検出されたが、北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度は0.2～0.36mの規模である。

遺物は弥生時代中期後半栗林式の甕(1)壺(2)、縄文時代後期堀之内式の深鉢片(3)が出土した。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半栗林期の所産の可能性が高い。

第39表 宮浦遺跡Ⅰ F1号掘立柱建物址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	須恵器	坏	(16.7)	-	-				回転実測	P7

第40表 宮浦遺跡Ⅰ F2号掘立柱建物址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	-	(6.0)	-		ミガキ→黒色処理	左回転糸切	回転実測	P3
2	土師器	耳皿	7.8	4.0	(3.7)		ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理	完全実測	P4
3	土師器	鉢?	-	-	-		ナデ	ナデ	破片実測・拓本	

第41表 宮浦遺跡Ⅰ F4号掘立柱建物址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕	-	-	-		ナデ	櫛描条線(縦位)	破片実測・拓本	P4
2	弥生土器	壺	-	-	-		ナデ	沈線・縄文	破片実測・拓本	
3	縄文土器	深鉢	-	-	-		ナデ	沈線・縄文	破片実測・拓本	P4

## 第3節 土坑

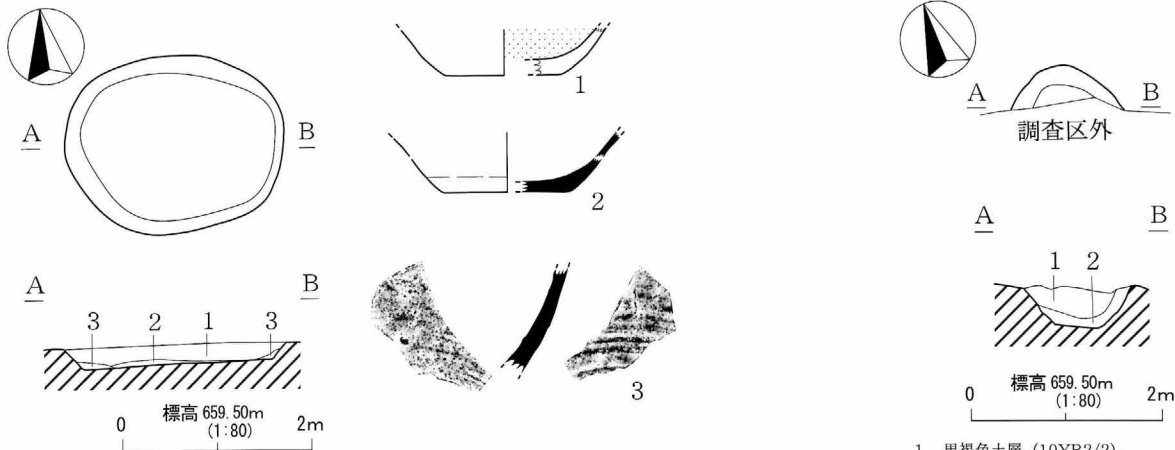
### ○D1号土坑 (第58図)

XIVカ2グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-63°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.60m×短軸長1.60m×深度0.32mの規模を有する。平面は楕円形、断面は鍋底の形態である。覆土は3層から成り、

1・2層には炭化物・焼土を包含する。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、鉄製品が出土している。土師器には坏（1～4）、碗（5）、ロクロ甕（9）の器種が認められる。坏・碗は3を除きヘラミガキ後黒色処理が施されている。須恵器は坏（6～8）、甕（10）の器種が認められる。坏の底部には右回転糸切痕が残されている。弥生土器は11の甕と、12の壺片が出土している。混入品であろう。鉄製品は13の角釘が1点出土した。

以上の出土遺物から、本址は奈良・平安時代VI期、9世紀後半の実年代が想定される。



- 1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 少含。
- 2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 多含。
- 3. 黄褐色土層 (10YR5/6) 主体。

- 1. 黒褐色土層 (10YR2/2)。
- 2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR5/6 少含。

第65図 D8号土坑

第64図 D7号土坑

第42表 宮浦遺跡Ⅰ D1号土坑出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	13.2	6.0	4.15		ミガキ→黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	E半
2	土師器	坏	—	(5.6)	—		ミガキ→黒色処理	右回転糸切	回転実測	
3	土師器	坏	—	(6.2)	—		ナデ	右回転糸切	回転実測	E半
4	土師器	坏	—	(6.2)	—		ミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	E半
5	土師器	碗	—	(6.3)	—		ミガキ→黒色処理	付高台	回転実測・拓本	
6	須恵器	坏	—	5.6	—		ナデ	右回転糸切	完全実測・拓本	
7	須恵器	坏	—	(6.0)	—		ナデ	右回転糸切	回転実測	E半
8	須恵器	坏	—	(6.4)	—		ナデ	右回転糸切	回転実測・拓本	E半
9	土師器	ロクロ甕	—	(7.6)	—		ナデ	ヘラケズリ→ナデ	回転実測	E半
10	須恵器	甕	—	—	—		回転ヘラケズリ	ハケナデ	破片実測・拓本	E半
11	弥生土器	甕	—	—	—		ナデ→ミガキ	縦羽状条線	破片実測・拓本	E半
12	弥生土器	壺	—	—	—		ナデ	弧線文	破片実測・拓本	E半
13	鉄製品	角釘	—	(0.9)	0.45	6.5				E半

○D2号土坑 (第59図)

XⅢオ5グリッドで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-21°-Eに長軸方位をとる。長軸長0.96m×短軸長0.56m×深度0.16mの規模を有する。平面は楕円形、断面は鍋底の形態である。覆土は単層である。

遺物は須恵器の坏蓋片が1点出土したのみであり、本址の時期は不明である。

第43表 宮浦遺跡Ⅰ D2号土坑出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	須恵器	坏蓋	(11.4)	—	—		ナデ	ナデ	回転実測	1層

OD3号土坑（第60図）

XⅢコ4グリットで検出された。M2号溝址を切る。調査区外に延びるため、長軸方位、長軸長、短軸長は不明である。深度は0.48mの規模である。平面形は不整形、断面は壁面がオーバーハングする。覆土は2層からなり、1層中には炭化物を包含する。

遺物は、弥生土器、須恵器が認められ、弥生土器には鉢（1）、蓋（2）、甕（3）、無頸壺（4）、壺（5～7）の器種が存在する。須恵器は甕の体部片が1点認められる。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半栗林期の所産の可能性が高い。

第44表 宮浦遺跡Ⅰ D3号土坑出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	鉢	(17.2)	—	—	—	ナデ→ミガキ	ミガキ→赤彩	回転実測	
2	弥生土器	蓋	(15.4)	—	—	—	ナデ	沈線、刺突列	破片実測・拓本	
3	弥生土器	甕	—	—	—	—	ナデ	条線、波状文	破片実測・拓本	
4	弥生土器	無頸壺	(8.4)	—	—	—	ハラナデ	ミガキ→赤彩	回転実測	
5	弥生土器	壺	—	(9.0)	—	—	ハラナデ	—	回転実測	
6	弥生土器	壺	—	—	—	—	ナデ	条線、沈線、波状文、縄文	破片実測・拓本	
7	弥生土器	壺	—	—	—	—	ナデ	沈線、縄文	破片実測・拓本	
8	須恵器	甕	—	—	—	—	ハケ目、当具痕	平行叩目	破片実測・拓本	

OD4号土坑（第61図）

Xア5グリットで検出された。P67を切る。N-0°-Wに長軸方位をとる。長軸長1.36m×短軸長1.28m×深度0.16mの規模を有する。平面は円形、断面は逆梯形の形態である。覆土は単層である。

出土遺物は皆無あり、本址の時期は不明である。

OD5号土坑（第62図）

XIVオ2グリットで検出された。P20に切られる。N-35°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.52m×短軸長1.48m×深度0.16mの規模を有する。平面は円形、断面は逆梯形の形態である。覆土は単層で、炭化物・焼土粒子を含む。

遺物は弥生土器の甕片が1点出土したのみであり、本址の時期は不明である。

第45表 宮浦遺跡Ⅰ D5号土坑出土遺物観察表

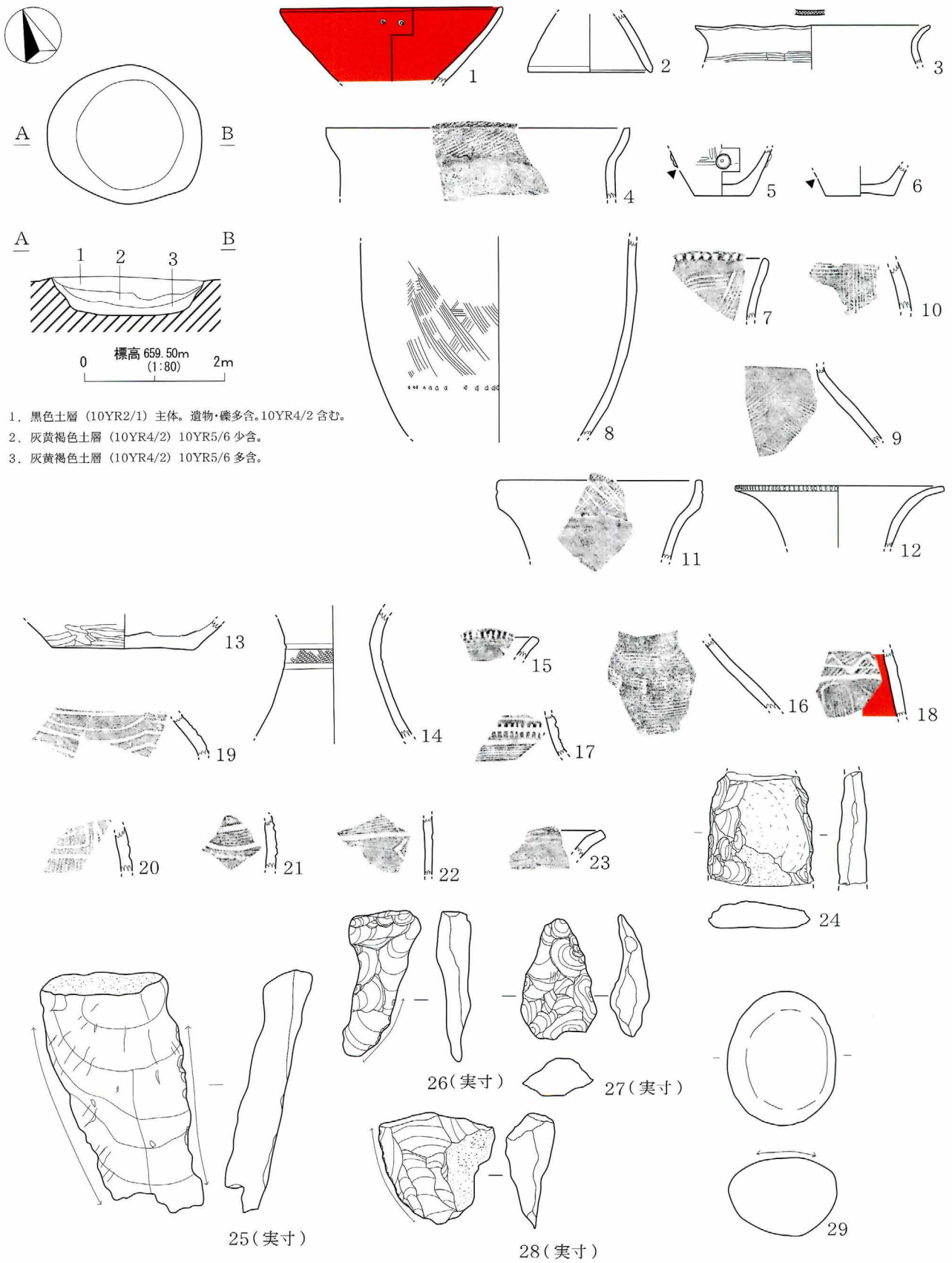
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕?	—	—	—	—	ナデ	ナデ	破片実測・拓本	

OD6号土坑（第63図）

XIVウ9グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-25°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.16m、短軸長2.08m、深度は0.24mの規模である。平面形は円形、断面は逆梯形の形態である。覆土は単層である。

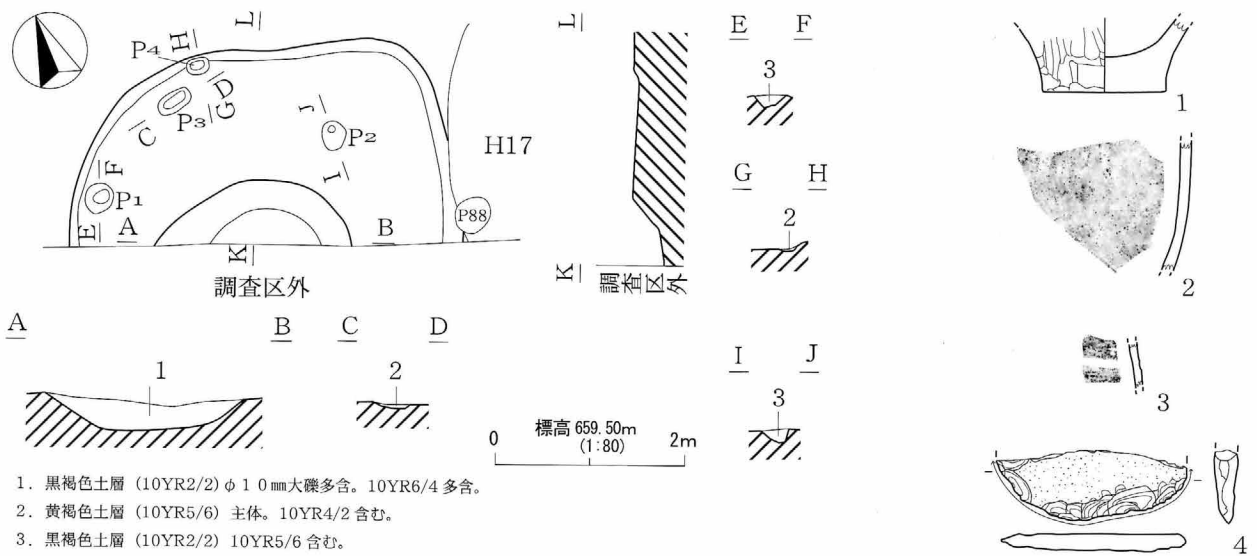
第46表 宮浦遺跡Ⅰ D6号土坑出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕	(19.0)	—	—	—	ナデ	櫛描波状文	回転実測・拓本	
2	弥生土器	甕	—	—	—	—	ナデ	ハケ目	破片実測・拓本	
3	弥生土器	甕	—	—	—	—	ナデ	横位櫛描羽状文	破片実測・拓本	
4	弥生土器	壺	—	—	—	—	ナデ	沈線・刺突・ナデ	破片実測・拓本	ケン
5	須恵器	坏	(12.2)	—	—	—	ナデ	ナデ	回転実測	
6	石器	石鏃	—	—	—	—	—	—	黒曜石	
7	鉄製品	鉄滓	—	—	—	—	—	—	未凶化	



第66图 D9号土坑





第66図 D10号土坑

遺物は、弥生土器、須恵器、石器、鉄滓が認められる。弥生土器には甕（1～3）、壺（4）の器種が存在し、須恵器は坏片（5）が1点出土している。石器は黒曜石製の打製石鏃（6）が1点出土している。鉄滓は図示しないが1点出土した。

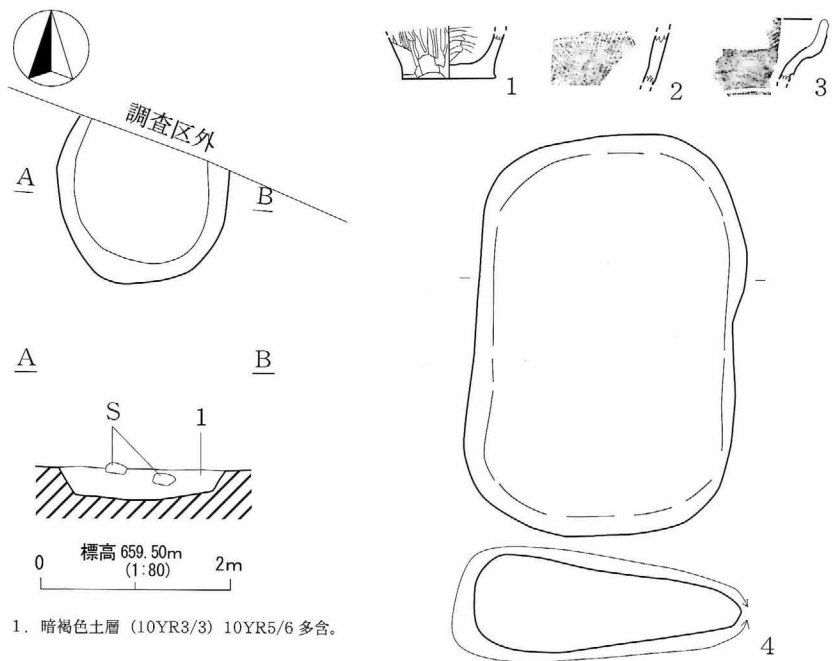
以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半栗林期の所産の可能性が高い。

OD7号土坑（第64図）

XIVエ8グリッドで検出された。D12号土坑を切る。N-82°-Wに長軸方位をとる。長軸長2.32m×短軸長1.88m×深度0.24mの規模を有する。平面は楕円形、断面は逆梯形の形態である。覆土は3層である。

遺物は土師器と須恵器が認められ、土師器は内面黒色処理が施される坏（1）、須恵器は坏（2）、甕（3）の器種が存在する。

以上の出土遺物から、本址は奈良平安時代IV期に比定される。



第67図 D11号土坑

第47表 宮浦遺跡I D7号土坑出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	-	(6.0)	-		ミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	
2	須恵器	坏	-	(6.8)	-		ナデ	ナデ	回転実測	
3	須恵器	甕	-	-	-		ナデ	回転ヘラケズリ	破片実測・拓本	

○D 8号土坑 (第65図)

XXウ1グリットで検出された。H15を切る。調査区外に延びるため、長軸方位、長軸長、短軸長は不明である。深度0.40mの規模を有する。断面は逆梯形の形態で、覆土は2層である。

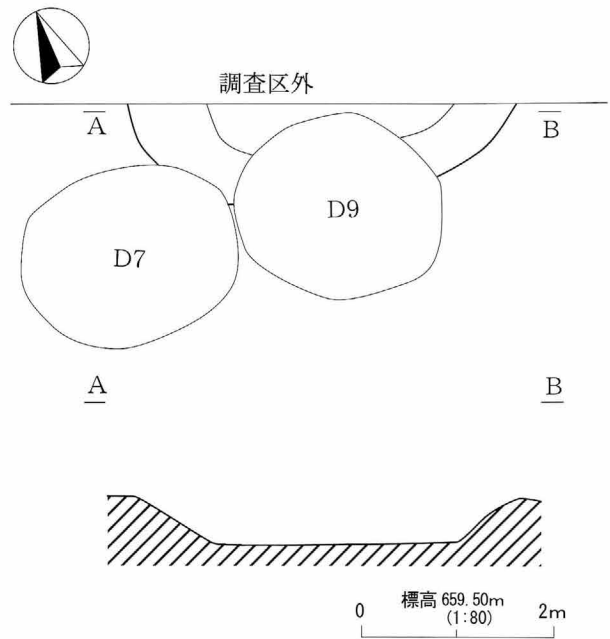
出土遺物は皆無あり、本址の時期は不明である。

○D 9号土坑 (第65図)

XIVウ9グリットで検出された。D12号土坑を切る。N-67°-Wに長軸方位をとる。長軸長2.2m×短軸長1.92m×深度0.52mの規模を有する。平面は楕円形、断面は逆梯形の形態である。覆土は3層である。

遺物は弥生土器と石器が認められる。弥生土器には高坏(1・2)、甕(3~1)、壺(11~23)の器種が存在する。石器は打製石斧(24)、削器(25~28)、磨石(29)の器種がある。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半栗林期の所産と考えられる。

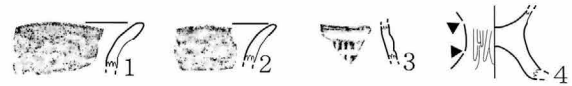


○D 10号土坑 (第66図)

XIVカ8グリットで検出された。H17・P88に切られる。調査区外に延びるため、長軸方位、長軸長、短軸長は不明である。深度0.40mの規模を有する。断面は二段階に落ちる逆梯形の形態で、覆土は3層である。

出土遺物は弥生土器と石器が認められる。弥生土器には甕(1・2)、壺(3)の器種がある。石器は打製石斧(4)が1点出土している。

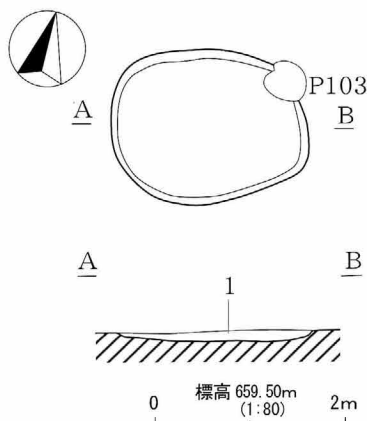
以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半栗林期の所産と考えられる。



第68図 D12号土坑

○D 12号土坑 (第68図)

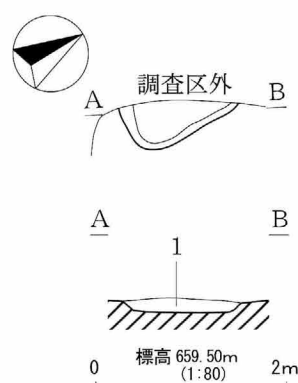
XIVウ9グリットで検出された。D7・D9号土坑に切られる。調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.56mの規模を有する。断面は逆梯形の形態である。



1. 黄褐色土層(10YR5/6)主体。10YR2/2・3/2多含。

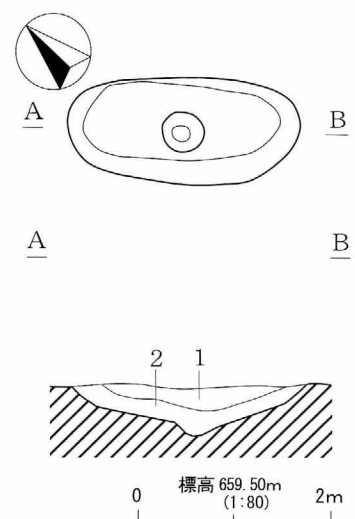


第69図 D13号土坑



1. 黒褐色土層(10YR2/2)10YR5/4地山含む。

第70図 D14号土坑



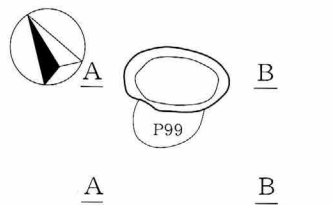
1. 黒褐色土層(10YR2/2)。  
2. 黄褐色土層(10YR5/6)二次堆積。

第71図 D15号土坑

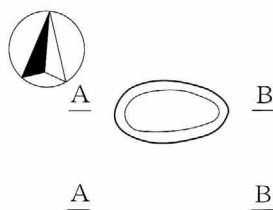
出土遺物は弥生土器が認められる。甕（1～2）、壺（3）、ミニチュア土器？（4）の器種が存在する。  
以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半栗林期の所産と考えられる。

第48表 宮浦遺跡Ⅰ D9号土坑出土遺物観察表

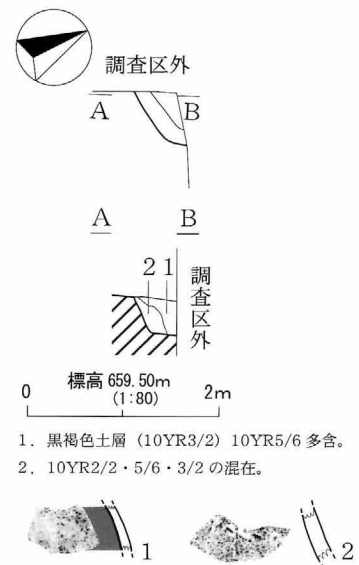
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	高坏	(15.8)	(6.0)	—		ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	回転実測	
2	弥生土器	高坏	(8.8)	(6.8)	—		ナデ	ナデ	回転実測	
3	弥生土器	甕	(16.6)	—	—		ナデ	縄文、横位条線	回転実測	
4	弥生土器	甕	(21.6)	—	—		ナデ	縄文	回転実測・拓本	
5	弥生土器	甕	—	4.0	—		ナデ	「コ」字文、貼付文	完全実測	
6	弥生土器	甕	—	(4.8)	—		ナデ	ナデ	回転実測	
7	弥生土器	甕	—	—	—		ナデ	刻目、条線	破片実測・拓本	
8	弥生土器	甕	—	—	—		ナデ	櫛描縦位羽状文、波状文、横位刺突列	回転実測	
9	弥生土器	甕	—	—	—		ナデ	羽状文	破片実測・拓本	
10	弥生土器	甕	—	—	—		ナデ	条線、刺突列	破片実測・拓本	
11	弥生土器	壺	(14.4)	—	—		ハケナデ	縄文、斜位の沈線	回転実測	
12	弥生土器	壺	(14.6)	—	—		ナデ	刻目	回転実測	
13	弥生土器	壺	—	(10.2)	—		剥離	ヘラナデ、剥離	回転実測	
14	弥生土器	壺	—	—	—		ヘラナデ	平行沈線間に縄文	回転実測	
15	弥生土器	壺	—	—	—			刻目	破片実測・拓本	
16	弥生土器	壺	—	—	—			簾状文、条線	破片実測・拓本	
17	弥生土器	壺	—	—	—			横位条線・沈線、刻目	破片実測・拓本	
18	弥生土器	壺	—	—	—			沈線、縄文、条線、赤彩	破片実測・拓本	
19	弥生土器	壺	—	—	—			沈線、弧文、縄文	破片実測・拓本	
20	弥生土器	壺	—	—	—			「コ」字文、縄文	破片実測・拓本	
21	弥生土器	壺	—	—	—			平行沈線間に縄文	破片実測・拓本	
22	弥生土器	壺	—	—	—			沈線、条線	破片実測・拓本	
23	弥生土器	壺？	—	—	—				破片実測・拓本	
24	石器	打製石斧	—	—	1.85	185.0			上下欠損	
25	石器	削器	—	—	—	7.1			黒色緻密安山岩	
26	石器	削器	—	—	—	1.7			黒曜石	
27	石器	削器	—	—	—	1.4			黒曜石	
28	石器	削器	—	—	—	2.4			黒曜石	
29	石器	磨石	9.8	7.7	5.8	515.0				



第72図 D16号土坑



第73図 D17号土坑



第74図 D18号土坑

第 49 表 宮浦遺跡 I D10 号土坑出土遺物観察表

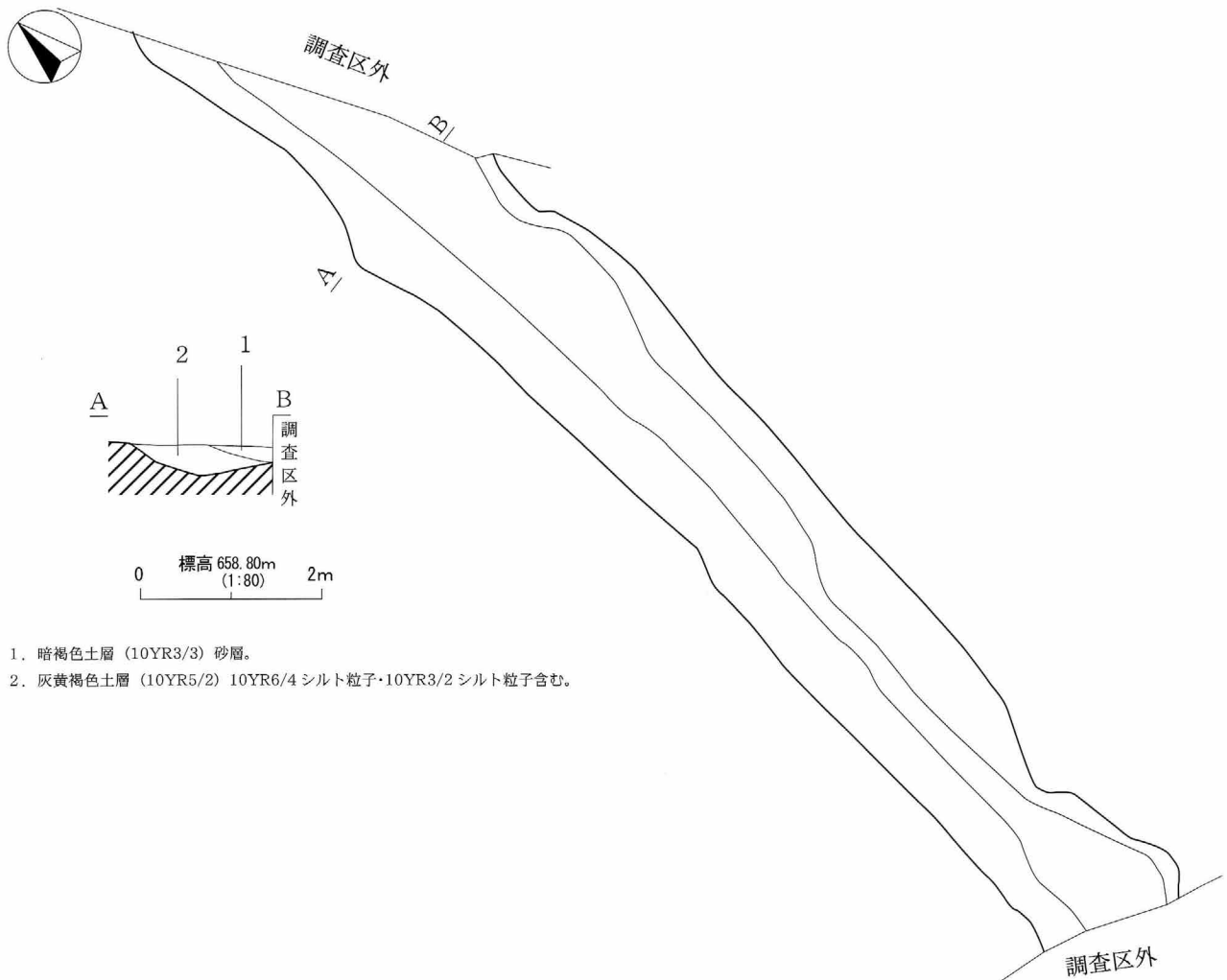
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕	—	(6.6)	—		ナデ	ヘラナデ	回転実測	
2	弥生土器	甕	—	—	—		ハケナデ	ハケナデ	破片実測・拓本	
3	弥生土器	壺	—	—	—		ナデ	簾状文、沈線	破片実測・拓本	
4	石器	打製石斧	(10.0)	—	(1.3)	(49.9)				

○D11号土坑 (第67図)

XIVカ7グリットで検出された。調査区外に延びるため全容は不明である。N-0°-Wに長軸方位をとる。短軸長1.76m×深度0.32mの規模を有する。平面は楕円形、断面は逆梯形の形態である。覆土は単層である。

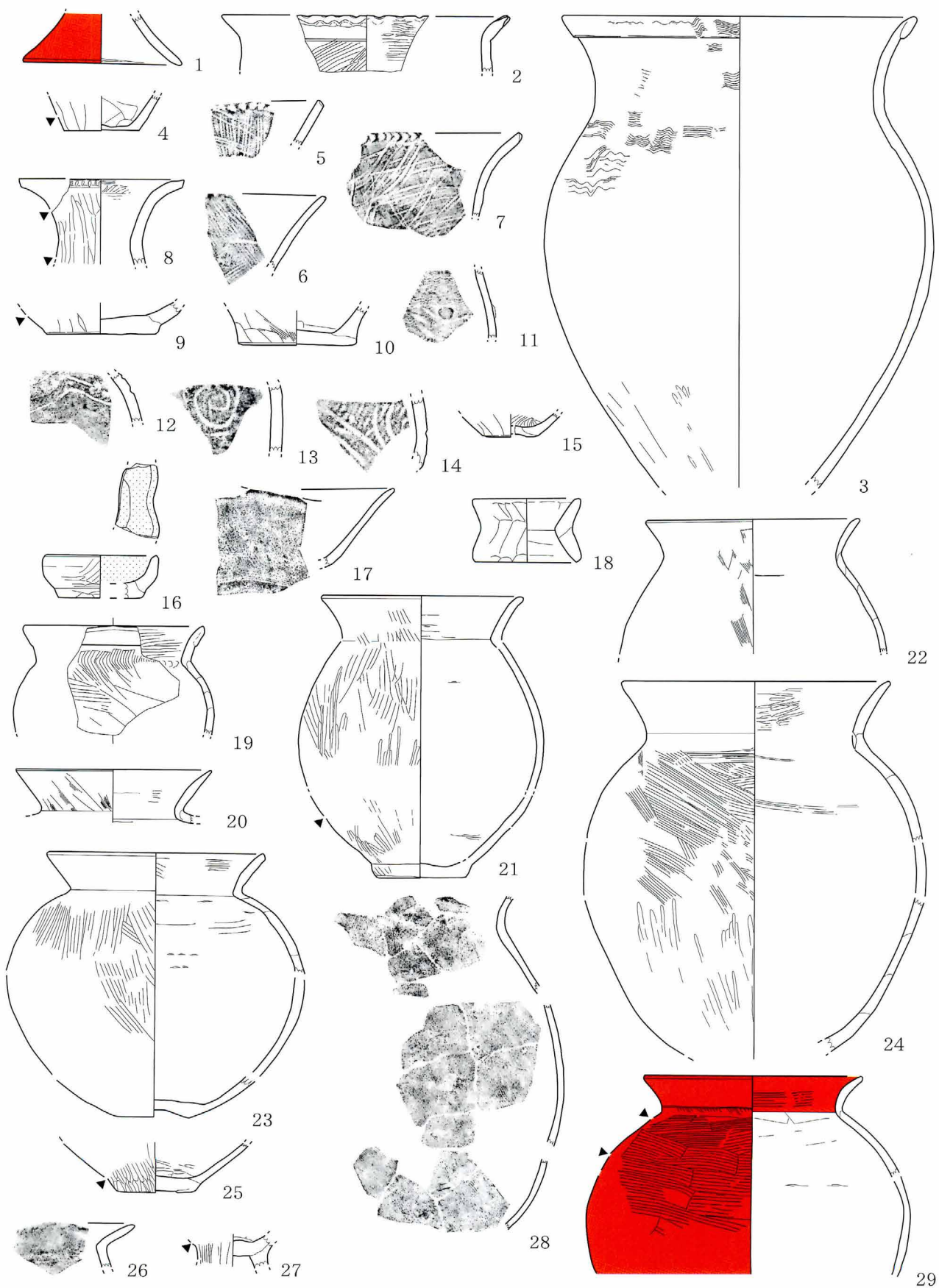
出土遺物は弥生土器と石器が認められる。弥生土器には甕(1・2)、壺(3)の器種がある。石器は磨石(4)が1点出土している。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半栗林期の所産と考えられる。

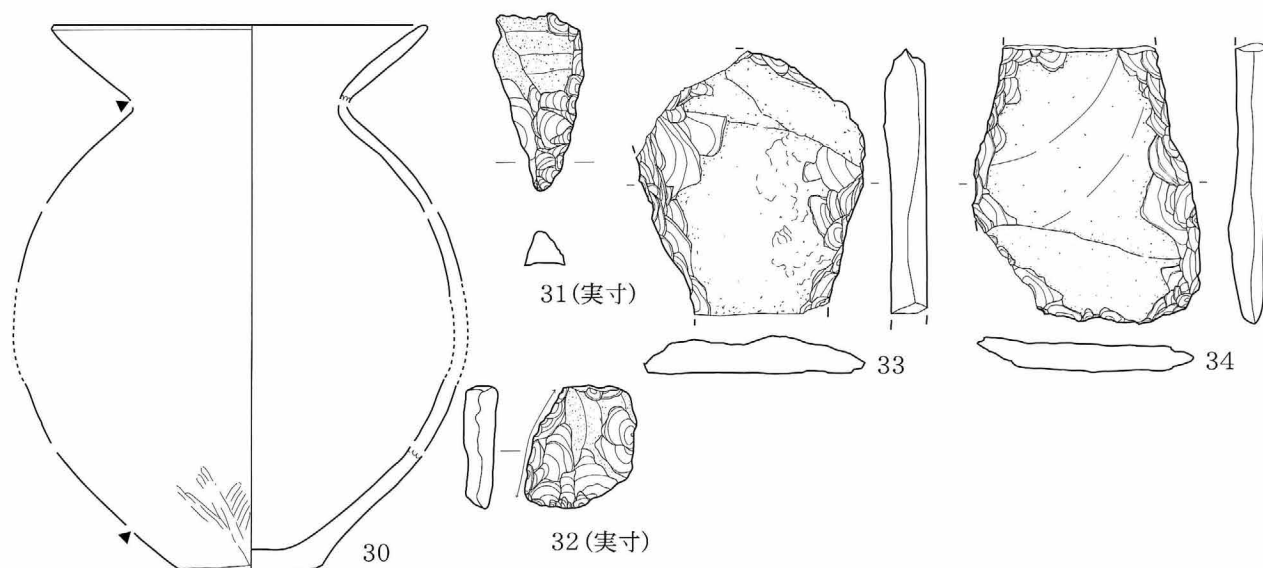


1. 暗褐色土層 (10YR3/3) 砂層。
2. 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 10YR6/4 シルト粒子・10YR3/2 シルト粒子含む。

第 75 図 M1号溝址 (1)



第 76 图 M1 号沟址 (2)



第77図 M1号溝址(3)

第50表 宮浦遺跡Ⅰ D11号土坑出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕	—	5.0	—	—	ハラケズリ→ミガキ	ハラケズリ→ミガキ	完全実測	
2	弥生土器	甕	—	—	—	—	ミガキ	縦位羽状文	破片実測・拓本	
3	弥生土器	壺	—	—	—	—	ナデ	沈線、縄文	破片実測・拓本	
4	石器	磨石	20.0	14.1	5.3	2.58				

OD13号土坑(第69図)

XIVヶ6グリットで検出された。P103に切られる。N-71° -Eに長軸方位をとる。長軸長2.08m×短軸長1.6m×深度0.12mの規模を有する。平面は楕円形、断面は鍋底の形態である。覆土は単層である。

出土遺物は弥生土器と縄文土器が認められる。弥生土器は壺？(1)、縄文土器は深鉢(2)の器種がある。

本址の時期は不明である。

第51表 宮浦遺跡Ⅰ D12号土坑出土遺物観察表

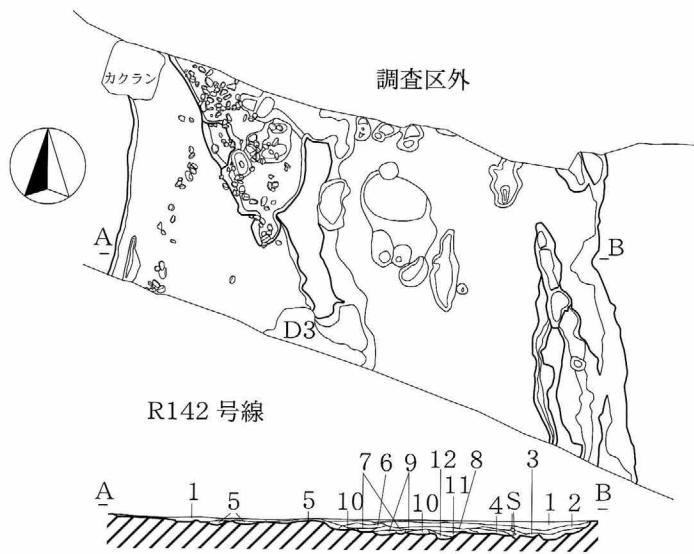
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕	—	—	—	—			破片実測・拓本	
2	弥生土器	甕	—	—	—	—			破片実測・拓本	
3	弥生土器	壺	—	—	—	—	ナデ	条線、刻目	破片実測・拓本	
4	弥生土器	ミニチュア	—	—	—	—	ナデ	ハラケズリ→ミガキ	完全実測	

第52表 宮浦遺跡Ⅰ D13号土坑出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	壺	—	—	—	—		ナデ	破片実測・拓本	
2	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	押捺、縄文、含繊維		破片実測・拓本	

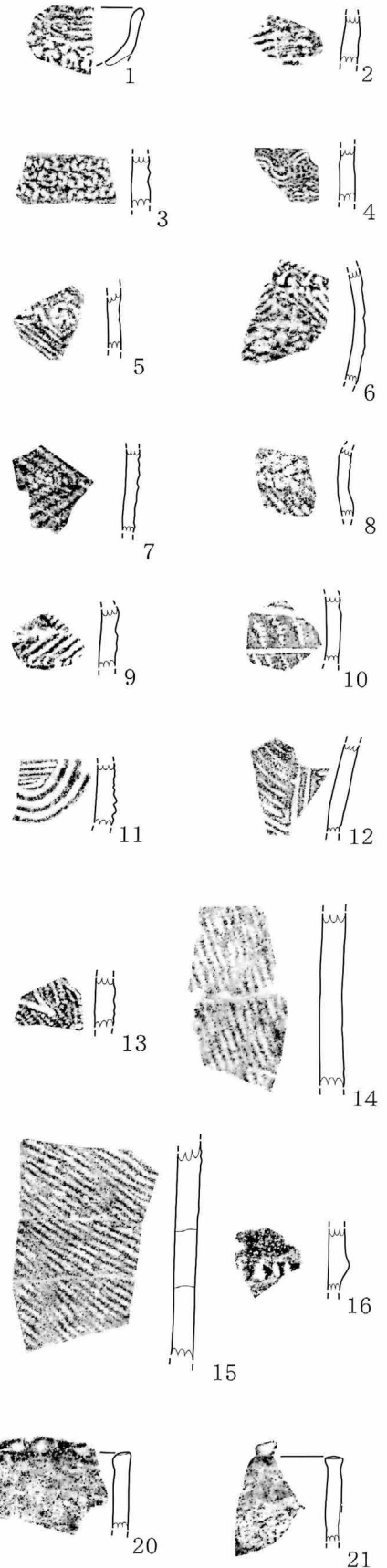
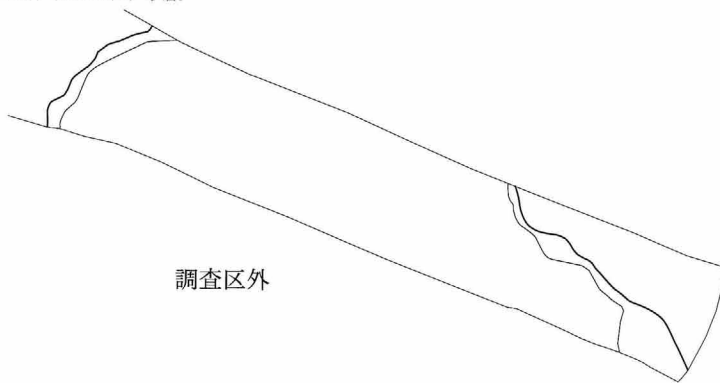
第53表 宮浦遺跡Ⅰ D18号土坑出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	壺	—	—	—	—		ミガキ→赤彩	破片実測・拓本	
2	弥生土器	壺	—	—	—	—			破片実測・拓本	



1. にぶい黄橙色土層 (10YR6/4) シルト質土層。
2. にぶい黄橙色土層 (10YR6/4) 砂層。
3. にぶい黄橙色土層 (10YR6/4) 10YR6/2 砂粘含む。
4. 灰黄褐色土層 (10YR6/2) 砂層。10YR6/4 少含む。
5. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) 炭化物含む。
6. 灰黄褐色土層 (10YR6/2) 砂層。10YR6/4 含む。
7. 黒褐色土層 (10YR3/2) 粘質土。
8. 灰黄褐色土層 (10YR6/2) 砂利層。
9. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/2 少含む。
10. 灰黄褐色土層 (10YR6/2) 砂層。10YR5/4 少含む。
11. 黒褐色土層 (10YR3/2) 砂層。
12. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 砂層。

0 標高 659.50m (1:160) 4m



第 78 図 M2号溝址 (1)

#### OD14号土坑（第70図）

XVオ5グリットで検出された。他遺構との重複関係は認められないが、調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.16mの規模を有する。断面は逆梯形の形態である。

出土遺物は皆無あり、本址の時期は不明である。

#### OD15号土坑（第71図）

XVウ6グリットで検出された。P101を切る。N-44°-Wに長軸方位をとる。長軸長2.44m×短軸長1.12m×深度0.56mの規模を有する。平面は楕円形、断面は鍋底形態で底面中央にピットを1基有する。覆土は2層である。

出土遺物は皆無あり、本址の時期は不明である。

#### OD16号土坑（第72図）

XVイ5グリットで検出された。P99に切られる。N-58°-Wに長軸方位をとる。長軸長1.12m×短軸長0.68m×深度0.16mの規模を有する。平面は楕円形、断面は逆梯形の形態である。覆土は単層である。

出土遺物は皆無あり、本址の時期は不明である。

#### OD17号土坑（第73図）

XVウ5グリットで検出された。他遺構との重複関係は認められない。N-84°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.2m×短軸長0.64m×深度0.08mの規模を有する。平面は楕円形、断面は逆梯形の形態である。覆土は単層である。

出土遺物は皆無あり、本址の時期は不明である。

#### OD18号土坑（第74図）

XVオ4グリットで検出された。他遺構との重複関係は認められないが、調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.40mの規模を有する。断面は逆梯形の形態である。覆土は2層である。

出土遺物は弥生土器が認められる。器種は2点共に壺（1・2）である。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半栗林期の所産と考えられる。

## 第4節 溝址

#### OM1号溝址（第75～77図）

XⅢエ3～6グリットで検出された。他遺構との重複関係は認められないが、両端が調査区外に延びるため全容は不明である。検出長13.76m×最大幅1.84m×深度0.32mの規模であり、底面レベルは北から南に向かい緩やかに傾斜している。覆土は2層から成り、常時水が流れた痕跡は認められない。性格は不明であるが、人為的に掘削された溝である。

出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、石器が認められる。縄文土器は、同一個体と思われる後期堀之内式の鉢片（13・14）が存在する。弥生土器は高坏（1）、甕（2～7）、壺（8～12）、甑（15）の器種が存在する。これらの内、2・5～7は中期前半、3は後期箱清水式の他は中期後半栗林式と思われる。土師器は耳皿（16）、波状口縁の高坏（17）、器台（18）、甕（19～28（23・27は台付甕））、壺（29・30）の器種が存在する。この内、耳皿は平安時代、器台は時期不明の他は古墳時代前期のものである。石器は錐（31）、削器（32）、打製石斧（33・34）の器種が存在する。31・32は黒曜石製。打製石斧は弥生時代のものであり、石鍬と称した方が良いのかも知れない。

以上の出土遺物から本址の時期は、遺物の大半を占める古墳時代前期と考えるのが妥当と思われる、聖原遺跡の時期区分、古墳時代I期に比定される。

#### OM2号溝址（第78～87図）

XⅢ区画～XⅨ区画を中心に検出された。カクラン、D3号土坑に切られる。南北両端が調査区外に延びるため全容は不明である。検出長21.6m×最大幅10.72m×深度0.8m前後の規模である。底面レベルは南から北に向か

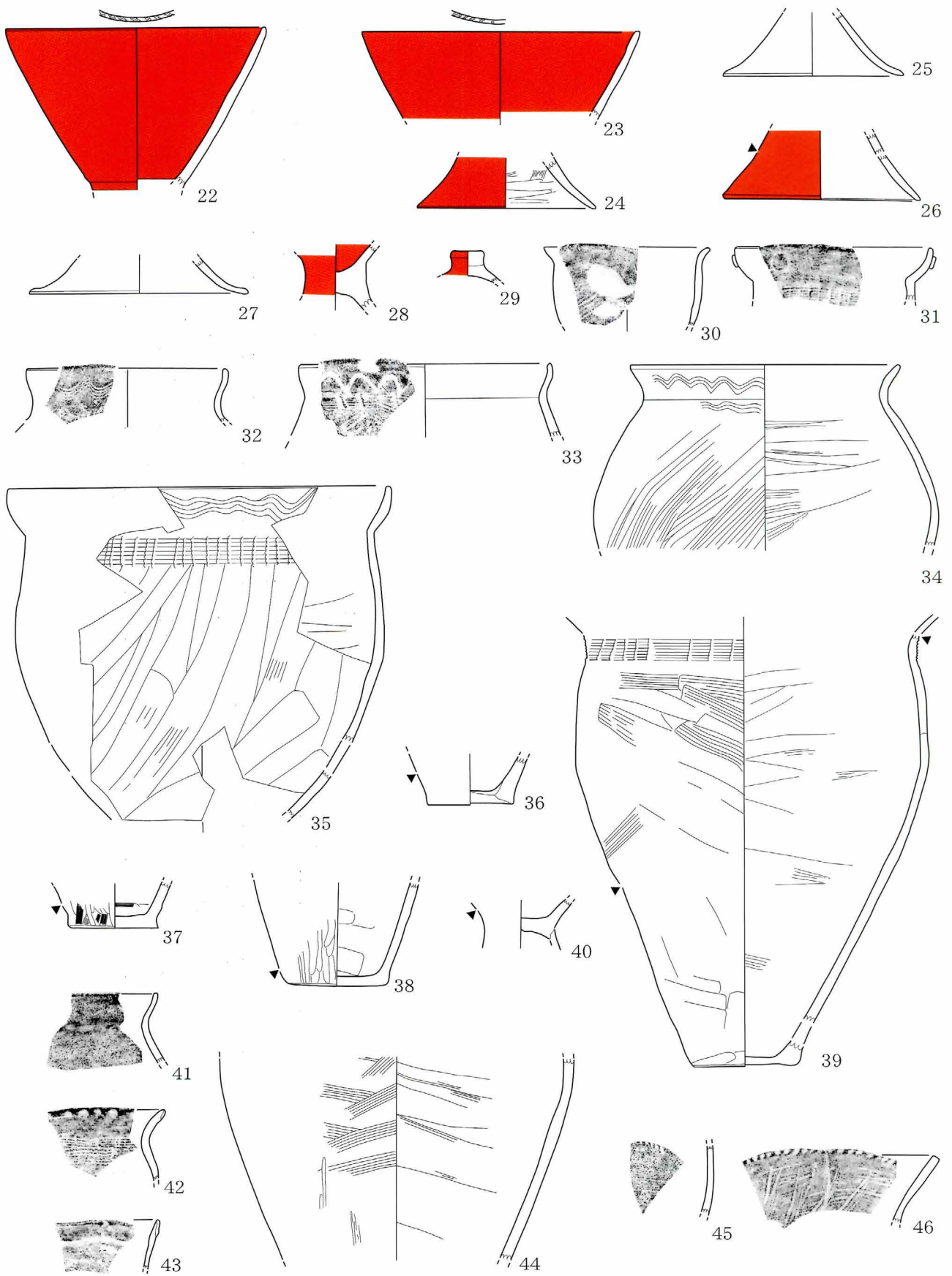


第54表 宮浦遺跡Ⅰ M1号溝址出土遺物観察表

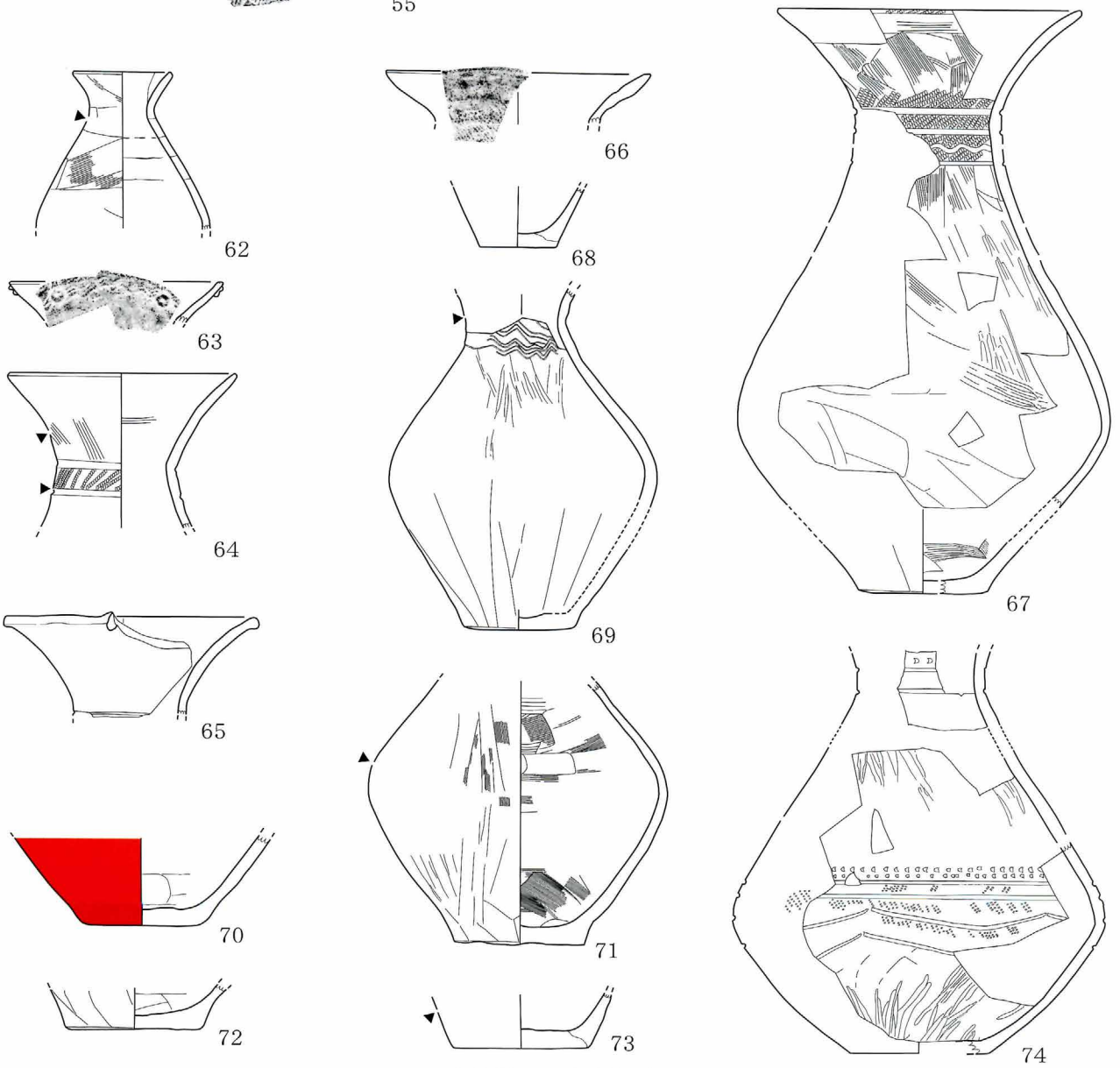
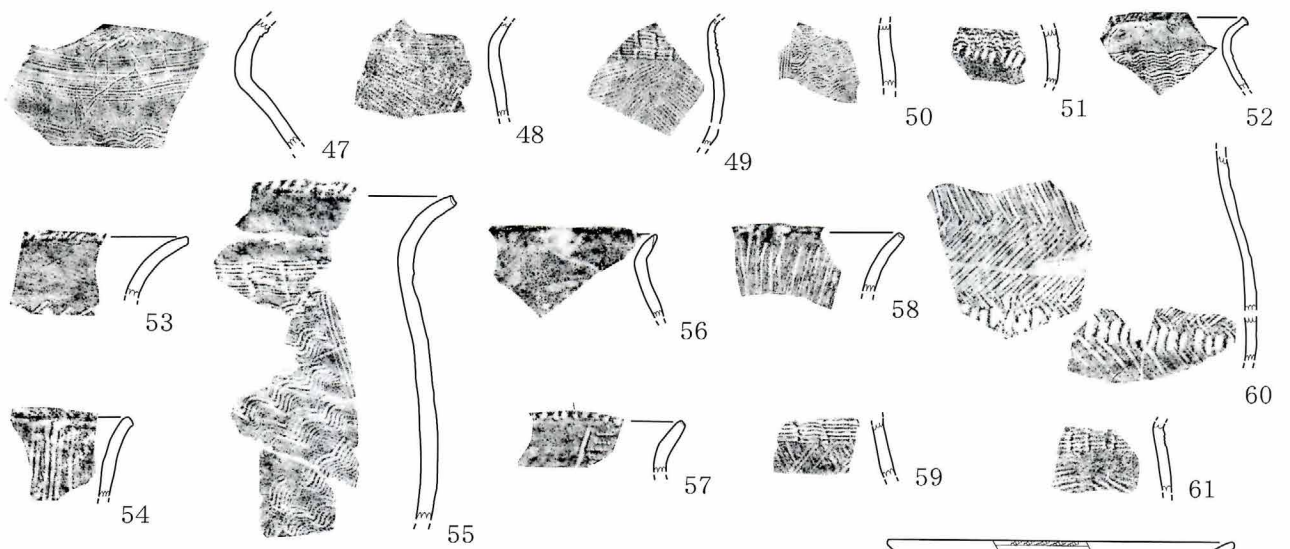
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	高坏	—	(11.4)	—	—	ヘラナデ	ヘラミガキ・赤彩	回転実測	
2	弥生土器	甕	(20.7)	—	—	—	ヘラミガキ	押捺・横羽状文	回転実測	
3	弥生土器	甕	(25.6)	—	—	—	ナデ	櫛描波状文	回転実測	
4	弥生土器	甕	—	5.4	—	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	
5	弥生土器	甕	—	—	—	—	ヘラナデ	口唇部刻目、条線	破片実測・拓本	
6	弥生土器	甕	—	—	—	—	ヘラミガキ	口唇部刻目、横羽状文	破片実測・拓本	
7	弥生土器	甕	—	—	—	—	ヘラミガキ	口唇部刻目、条線	破片実測・拓本	
8	弥生土器	壺	(11.8)	—	—	—	ヘラミガキ	口唇部刻目	完全実測	
9	弥生土器	壺	—	8.2	—	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	
10	弥生土器	壺	—	(8.6)	—	—	ヘラナデ	ヘラケズリ、ハケ目	回転実測	
11	弥生土器	壺	—	—	—	—	ハケ目、ヘラミガキ	櫛描波状文、貼付文	破片実測・拓本	
12	弥生土器	壺	—	—	—	—	ハケ目	弧線文、縄文	破片実測・拓本	
13	縄文土器	鉢	—	—	—	—	沈線、縄文、後期堀之内式		破片実測・拓本	
14	縄文土器	鉢	—	—	—	—	沈線、縄文、後期堀之内式		破片実測・拓本	
15	弥生土器	甌	—	(4.0)	—	—	ヘラミガキ	ヘラケズリ	回転実測	
16	土師器	耳皿	(8.2)	(6.2)	(3.0)	—	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ・ミガキ	回転実測	
17	土師器	高坏	—	—	—	—	ヘラナデ	ハケ目	破片実測・拓本	
18	土師器	器台	(7.8)	(7.8)	(4.6)	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	
19	土師器	甕	(13.0)	—	—	—	ハケ目、ヘラナデ	ハケ目、ヘラケズリ	回転実測	
20	土師器	甕	(14.0)	—	—	—	ヘラミガキ	ハケ目	回転実測	
21	土師器	甕	(14.6)	6.6	(24.0)	—	ヘラミガキ	ハケ目、ヘラミガキ	完全実測	
22	土師器	甕	(15.3)	—	—	—	ヘラナデ	ハケ目	回転実測	
23	土師器	台付甕	(15.6)	—	—	—	ハケ目、ナデ	ハケ目	回転実測	
24	土師器	甕	(19.3)	—	—	—	ナデ、ヘラミガキ	ハケ目、ヘラミガキ	回転実測	
25	土師器	甕	—	5.6	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	
26	土師器	甕	—	—	—	—	ハケナデ	ハケ目	破片実測・拓本	
27	土師器	台付甕	—	—	—	—	ヘラナデ	ハケ目	完全実測	
28	土師器	甕	—	—	—	—	ヘラケズリ・ミガキ	ハケ目	破片実測・拓本	
29	土師器	壺	(15.7)	—	—	—	ハケ目、ヘラケズリ、ヘラミガキ、赤彩		完全実測	
30	土師器	壺	(19.9)	7.8	—	—	ヘラミガキ	ヘラケズリ・ミガキ	完全実測	
31	石器	錐	2.3	1.2	0.4	1.4	黒曜石		完全実測	
32	石器	削器	1.6	1.4	0.4	1.1	黒曜石		完全実測	
33	石器	打製石斧	—	12.0	2.1	—			完全実測	
34	石器	打製石斧	—	11.6	1.8	—			完全実測	

い傾斜している。覆土は12層からなり、基本的には流水により運ばれた砂や砂利により構成されているが、西側辺の浅いテラス状の部分には炭化物の堆積が認められた。また、この部分に列石状にならべられた川床礫には、第87図に示したような砥石状の使用痕が認められた。水辺におけるなんらかの作業の痕跡であろう。本址が人工の水路であるか、自然流露であるかは今回の調査からは判断できないが、集落の生活水を供給していたことは確実である。

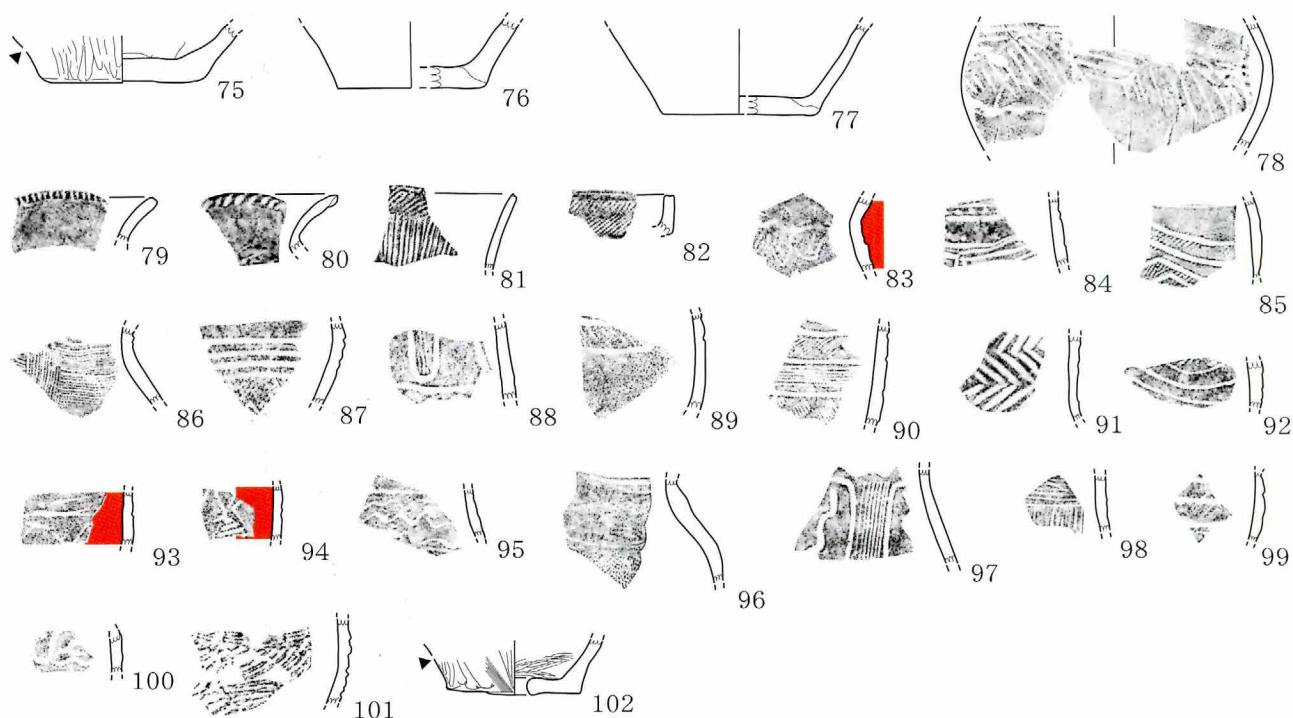
出土遺物は縄文土器(1~19)、弥生土器(20~102)、土師器(103~199)、須恵器(200~224)、灰釉陶器(225~233)、青磁(234)、土製品(235)、石器(236~299)、鉄器(300)が認められる。縄文土器には前期関山式(1~9)、前期有尾式(10)、中期(11~15)、後期(16~19)の時代ものが認められる。弥生土器は高坏(22~28)、甕(20・21・29~61)、壺(62~101)、甌(102)の器種が認められる。注目すべきは前期(20・21)や中期前半(54・57・81・82・91・96・97)と考えられる土器が存在することである。土師器には坏(103~140)、碗(141~157)、皿(161~163・165)、耳皿(164)、高坏(173~177)、鉢(178~181)甕(183~197・199)などの多様な器種が認められる。時期的には古墳時代~平安時代のものであるが、平安時代のもものが圧倒的に多い。須恵器には坏(200~218)、有台坏(219)、甕(220~223)、壺(223・224)の器種が認められる。時期的には奈良・平安時代のものである。灰釉陶器には碗(225・226)、段皿(227)、皿(228・229)、瓶(230~233)の器種が認められる。青磁、土製品(羽口)、鉄器(刀子)はそれぞれ1点のみの出土である。石器は打製石鏃(236~253)、石錐(254・255)、石匙(256・257)、横刃型石器(258)、打製石斧(259~268)、スクレイパー(269)、両極石器(270~272)、二次加工ないし使用痕のある剥片(273~281)、磨石・凹石(282~286)、石包丁(287)、編物



第 79 图 M2 出土遗物 (2)



第80图 M2号沟址(3)



第 81 図 M2号溝址 (4) 弥生土器

石 (288・289)、砥石 (290～299) の器種が認められる。

以上の出土遺物から本址の時期を確定することは困難であるが、弥生時代～平安時代にかけて連綿と使用された水路であろうと思われる。

#### OM3号溝址 (第88図)

XI5グリットで検出された。H2号住居址、P36、P37に切られる。南端が調査区外に延びるため全容は不明である。検出長8.0m×最大幅1.6m×深度0.16mの規模である。底面は南から北に向かい緩やかに傾斜する。覆土は単層で、砂利を含んでいる。成因、性格は不明である。

出土遺物は土師器、須恵器、石器が認められる。土師器には坏(1)、碗(3)、皿(2)、壺(6)の器種が認められる。坏・皿はヘラミガキ後黒色処理が施されている。須恵器は坏(4・5)、甕(7)の器種が認められる。石器(8)は磨石である。

基本的に本址と切り合うH12号住居址と同様な時期の平安時代VII期、10世紀後半の土器がほとんどであり、本来H12号住居址に帰属する遺物の可能性が高いため、本址の年代は不明である。

#### OM4号溝址 (第89図)

XIVケ7グリットで検出された。H18号住居址に切られ、南端が調査区外に延びるため全容は不明である。検出長4.8m×最大幅0.64m×深度0.16mの規模である。底面は南から北に向かい緩やかに傾斜する。成因・性格は不明である。

出土遺物は弥生土器の壺体部辺が1点出土したのみであり、本址の時期は不明である。

#### OM5号溝址 (第90図)

XXウ1グリットで検出された。H14号住居址に切られ、南端が調査区外に延びるため全容は不明である。検出長3.36m×最大幅2.96m×深度0.16mの規模である。底面は南から北に向かい緩やかに傾斜する。成因・性格は不明である。また、出土遺物も皆無なため時期も不明であるが、H14に切られることから、弥生時代中期前半以前の構築である。

第 55 表 宮浦遺跡 I M 2 号溝址出土遺物観察表 (1)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	縄文土器	注口付深鉢	—	—	—		沈線、縄文、繊維、前期関山	破片実測・拓本	N 区	
2	縄文土器	深鉢	—	—	—		縄文、繊維、前期関山	破片実測・拓本	S 区	
3	縄文土器	深鉢	—	—	—		縄文環付末端、繊維、前期関山	破片実測・拓本	S 区	
4	縄文土器	深鉢	—	—	—		コンパス文、縄文、繊維、前期関山	破片実測・拓本	N 区	
5	縄文土器	深鉢	—	—	—		結束、羽状縄文、繊維、前期関山	破片実測・拓本	S 区	
6	縄文土器	深鉢	—	—	—		結束、羽状縄文、繊維、前期関山	破片実測・拓本	N 区	
7	縄文土器	深鉢	—	—	—		羽状縄文、繊維、前期関山	破片実測・拓本	N 区	
8	縄文土器	深鉢	—	—	—		羽状縄文、繊維、前期関山	破片実測・拓本	N 区	
9	縄文土器	深鉢	—	—	—		羽状縄文、繊維、前期関山	破片実測・拓本	S 区	
10	縄文土器	深鉢	—	—	—		櫛状工具による刺突列、前期有尾	破片実測・拓本	N 区	
11	縄文土器	深鉢	—	—	—		曲降線文、中期中葉	破片実測・拓本		
12	縄文土器	深鉢	—	—	—		鱗状短沈線、中期後半	破片実測・拓本	N 区	
13	縄文土器	深鉢	—	—	—		縄文、沈線、中期後半	破片実測・拓本	N 区	
14	縄文土器	深鉢	—	—	—		縄文、中期	破片実測・拓本	N 区	
15	縄文土器	深鉢	—	—	—		縄文、中期	破片実測・拓本	S 区	
16	縄文土器	深鉢	—	—	—		凸帯文、後期	破片実測・拓本	N 区	
17	縄文土器	深鉢	—	—	—		凸帯文、後期	破片実測・拓本	N 区	
18	縄文土器	深鉢	—	—	—		沈線、刺突列、後期堀之内	破片実測・拓本	S 区	
19	縄文土器	注口	4.0	—	—		把手、後期	破片実測	N 区	
20	弥生土器	甕	—	—	—		口唇部押捺、前期?、21 と同一個体	破片実測・拓本	N 区	
21	弥生土器	甕	—	—	—		口唇部押捺、前期?	破片実測・拓本	N 区	
22	弥生土器	高坏	(18.8)	—	—		赤彩	回転実測	N 区	
23	弥生土器	高坏	20.0	—	—		赤彩	回転実測	N 区	
24	弥生土器	高坏	—	(12.9)	—		ナデ	回転実測	N 区	
25	弥生土器	高坏	—	13.0	—		ハケ目	回転実測	N 区	
26	弥生土器	高坏	—	14.1	—		ナデ	回転実測	N 区	
27	弥生土器	高坏	—	15.8	—		ナデ	回転実測	N 区	
28	弥生土器	高坏	—	—	—		赤彩	完全実測	S 区	
29	弥生土器	蓋	—	—	—		赤彩	完全実測	N 区	
30	弥生土器	甕	(12.0)	—	—		口唇部・体部に縄文、中期後半	回転実測・拓本	N 区	
31	弥生土器	甕	(14.2)	—	—		受口、櫛描波状文・簾状文、円形貼付文、中期後半	回転実測・拓本	N 区	
32	弥生土器	甕	(14.6)	—	—		受口、櫛描波状文、中期後半	回転実測・拓本	N 区	
33	弥生土器	甕	(18.4)	—	—		受口、ヘラ描波状文、櫛描簾状文・縦位羽状文、中期後半	回転実測・拓本	S 区	
34	弥生土器	甕	(19.4)	—	—		櫛描波状文・斜位条線、中期後半	回転実測	N 区	
35	弥生土器	甕	(27.8)	—	—		受口、櫛描波状文・斜位条線、中期後半	回転実測	N 区	
36	弥生土器	甕	—	6.2	—		ナデ	完全実測	N 区	
37	弥生土器	甕	—	6.2	—		ナデ	完全実測	S 区	
38	弥生土器	甕	—	(7.0)	—		ナデ	完全実測	N 区	
39	弥生土器	甕	—	7.8	—		櫛描簾状文・斜位条線、中期後半	完全実測	S 区	
40	弥生土器	台付甕	—	—	—		ナデ	完全実測	N 区	
41	弥生土器	甕	—	—	—		受口、櫛描波状文、中期後半	破片実測・拓本	N 区	
42	弥生土器	甕	—	—	—		口唇部押捺、櫛描簾状文、中期後半	破片実測・拓本	N 区	
43	弥生土器	甕	—	—	—		折返口縁、後期	破片実測・拓本	N 区	
44	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描縦位羽状文、中期後半	回転実測	N 区	
45	弥生土器	甕	—	—	—		刻目、櫛描縦位羽状文、中期後半	破片実測・拓本	N 区	
46	弥生土器	甕	—	—	—		口唇部刻目、横羽状条痕文、中期後半?	破片実測・拓本	N 区	
47	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描波状文、横位条線、後期	破片実測・拓本	S 区	
48	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描波状文、横位羽状文、後期	破片実測・拓本	S 区	
49	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描波状文、縦位羽状文、後期	破片実測・拓本	N 区	
50	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描縦位条線、波状文、中期後半	破片実測・拓本	N 区	
51	弥生土器	甕	—	—	—		櫛描波状文、刻目、中期後半	破片実測・拓本	N 区	
52	弥生土器	甕	—	—	—		口唇部縄文、櫛描波状文、中期後半	破片実測・拓本	S 区	
53	弥生土器	甕	—	—	—		口唇部縄文、斜位の沈線、中期後半	破片実測・拓本	N 区	
54	弥生土器	甕	—	—	—		縦位沈線、筒形土器?、中期前半?	破片実測・拓本	S 区	
55	弥生土器	甕	—	—	—		口唇部刻目、頸部簾状文、櫛描波状文、縦位条線、中期後半	破片実測・拓本	N 区	
56	弥生土器	甕	—	—	—		口唇部押捺、中期後半	破片実測・拓本	N 区	

第56表 宮浦遺跡Ⅰ M2号溝址出土遺物観察表(2)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
57	弥生土器	甕	—	—	—	—	口唇部刻目、縦位平行沈線間帯による刺突列、中期前半?	破片実測・拓本	N区	
58	弥生土器	甕	—	—	—	—	口唇部押捺、縦位条線、中期後半	破片実測・拓本	N区	
59	弥生土器	甕	—	—	—	—	頸部簾状文、縦位羽状文、後期	破片実測・拓本	S区	
60	弥生土器	甕	—	—	—	—	櫛描横位羽状文、刻目、中期後半	破片実測・拓本	N区	
61	弥生土器	甕	—	—	—	—	頸部簾状文、縦位羽状文、後期	破片実測・拓本	S区	
62	弥生土器	壺	(6.0)	—	—	—	ハケ目、中期後半	完全実測	N区	
63	弥生土器	壺	(12.8)	—	—	—	口唇部縄文、口縁部櫛描波状文、円形貼付文、中期後半	回転実測・拓本	S区	
64	弥生土器	壺	(13.8)	—	—	—	頸部ヘラ描平行沈線間に縄文、中期後半	完全実測	N区	
65	弥生土器	壺	16.0	—	—	—	口縁部に突起、頸部沈線、中期後半	回転実測	S区	
66	弥生土器	壺	(16.0)	—	—	—	頸部条線、時期不明	回転実測・拓本	N区	
67	弥生土器	壺	(18.2)	(7.8)	—	—	頸部平行沈線間に縄文、波状文、中期後半	回転実測	N区	
68	弥生土器	壺	—	4.6	—	—	中期後半?	回転実測	N区	
69	弥生土器	壺	—	6.8	—	—	頸部櫛描波状文	回転実測	N区	
70	弥生土器	壺	—	(7.0)	—	—	赤彩	回転実測	S区	
71	弥生土器	壺	—	7.8	—	—	ハケ目、ヘラミガキ、中期後半	完全実測	N・S区	
72	弥生土器	壺	—	(8.1)	—	—		回転実測	S区	
73	弥生土器	壺	—	8.2	—	—		完全実測	N区	
74	弥生土器	壺	—	(8.2)	—	—	ヘラ描沈線、弧線文、縄文、刺突、中期後半	回転実測	N区	
75	弥生土器	壺	—	—	—	—		完全実測	N区	
76	弥生土器	壺	—	—	—	—		回転実測	N区	
77	弥生土器	壺	—	—	—	—		回転実測	S区	
78	弥生土器	壺	—	—	—	—	ヘラ描沈線、中期後半	回転実測・拓本	S区	
79	弥生土器	壺	—	—	—	—	口唇部に櫛歯状工具による刺突列、中期後半	破片実測・拓本	N区	
80	弥生土器	壺	—	—	—	—	口唇部に櫛歯状工具による刺突列、中期後半	破片実測・拓本	N区	
81	弥生土器	壺	—	—	—	—	口唇・口縁部縄文、頸部縦位条線、中期前半	破片実測・拓本	S区	
82	弥生土器	壺	—	—	—	—	口唇・口縁部縄文、中期前半	破片実測・拓本		
83	弥生土器	壺	—	—	—	—	鋸歯文、内面赤彩、中期後半	破片実測・拓本	N区	
84	弥生土器	壺	—	—	—	—	ヘラ描沈線文、列点文、中期後半	破片実測・拓本	N区	
85	弥生土器	壺	—	—	—	—	弧線文・縄文、中期後半	破片実測・拓本	N区	
86	弥生土器	壺	—	—	—	—	「T」字文、後期	破片実測・拓本	N区	
87	弥生土器	壺	—	—	—	—	沈線文、縄文、中期後半	破片実測・拓本	N区	
88	弥生土器	壺	—	—	—	—	「U」字状懸垂文、中期後半	破片実測・拓本	N区	
89	弥生土器	壺	—	—	—	—	ヘラ描平行沈線間に縄文、中期後半	破片実測・拓本	N区	
90	弥生土器	壺	—	—	—	—	櫛描横位条線、斜位の短条線、中期後半	破片実測・拓本	S区	
91	弥生土器	壺	—	—	—	—	棒状工具による横位羽状文、中期前半	破片実測・拓本	N区	
92	弥生土器	壺	—	—	—	—	弧線文、中期後半	破片実測・拓本	N区	
93	弥生土器	壺	—	—	—	—	鋸歯文、赤彩、中期後半	破片実測・拓本	N区	
94	弥生土器	壺	—	—	—	—	鋸歯文、赤彩、中期後半	破片実測・拓本	N区	
95	弥生土器	壺	—	—	—	—	横位沈線、櫛描波状文、後期	破片実測・拓本	N区	
96	弥生土器	壺	—	—	—	—	縄文、中期前半	破片実測・拓本	N区	
97	弥生土器	壺	—	—	—	—	「U」字状懸垂文、中期後半	破片実測・拓本	S区	
98	弥生土器	壺	—	—	—	—	櫛描横位条線下に縦位条線、中期前半	破片実測・拓本	N区	
99	弥生土器	壺	—	—	—	—	弧線文、縄文、中期後半	破片実測・拓本	S区	
100	弥生土器	壺	—	—	—	—	鋸歯文、中期後半	破片実測・拓本	N区	
101	弥生土器	壺	—	—	—	—	櫛描簾状文、横位羽状?、後期?	破片実測・拓本	S区	
102	弥生土器	甕	—	7.0	—	—	単孔	完全実測	S区	
103	土師器	坏	(12.0)	(4.8)	(3.0)	—		ヘラケズリ	回転実測	N・S区
104	土師器	坏	12.0	5.2	3.2	—		ヘラケズリ	完全実測・拓本	N区
105	土師器	坏	(12.0)	(5.5)	(3.5)	—	黒色処理	方向不明回転系切	回転実測	N区
106	土師器	坏	(12.2)	5.6	(3.4)	—		右回転系切	完全実測	N区
107	土師器	坏	(12.4)	(4.8)	(3.8)	—	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	N区
108	土師器	坏	12.4	5.2	4.0	—		右回転系切	完全実測・拓本	N区
109	土師器	坏	12.5	5.0	3.5	—	放射暗文・黒色処理	右回転系切	完全実測・拓本	N区
110	土師器	坏	(12.6)	(6.4)	(3.8)	—	黒色処理	右回転系切	回転実測・拓本	N区
111	土師器	坏	12.8	4.8	4.2	—	放射暗文・黒色処理	右回転系切	完全実測・拓本	N区
112	土師器	坏	(13.0)	(7.0)	(4.0)	—		方向不明回転系切	回転実測	N区

第 57 表 宮浦遺跡 I M 2 号溝址出土遺物観察表 (3)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
113	土師器	坏	(13.0)	(7.4)	(3.6)			ヘラケズリ	回転実測	N 区
114	土師器	坏	(13.1)	5.6	(3.9)			ヘラケズリ	完全実測	N 区
115	土師器	坏	(13.2)	6.8	(2.95)		放射暗文・黒色処理	左回転糸切、ヘラケズリ	完全実測	N 区
116	土師器	坏	13.4	4.8	3.7		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	N 区
117	土師器	坏	(13.4)	(6.8)	(4.2)		ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	N 区
118	土師器	坏	(13.6)	6.2	(3.1)		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	N 区
119	土師器	坏	(13.8)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理		回転実測	S 区
120	土師器	坏	14.0	6.0	4.0		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	N 区
121	土師器	坏	(14.0)	(7.0)	(4.2)		ヘラミガキ・黒色処理	底部周縁までヘラケズリ	回転実測・拓本	N 区
122	土師器	坏	(14.0)	(7.2)	(4.0)		ヘラミガキ・黒色処理	底部周縁までヘラケズリ	回転実測・拓本	S 区
123	土師器	坏	(14.5)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理		回転実測	N 区
124	土師器	坏	(14.6)	(7.4)	(3.9)		黒色処理	方向不明回転糸切	回転実測	S 区
125	土師器	坏	—	(4.6)	—		放射暗文・黒色処理	方向不明回転糸切	回転実測	N 区
126	土師器	坏	—	5.3	—		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	N 区
127	土師器	坏	—	5.4	—		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	S 区
128	土師器	坏	—	5.6	—			右回転糸切	完全実測	N 区
129	土師器	坏	—	(5.6)	—			ヘラケズリ	回転実測	N 区
130	土師器	坏	—	5.6	—		ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	完全実測	S 区
131	土師器	坏	—	5.8	—		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	N 区
132	土師器	坏	—	(5.8)	—		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切	完全実測	N 区
133	土師器	坏	—	5.8	—		ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	S 区
134	土師器	坏	—	(5.8)	—		放射暗文・黒色処理	右回転糸切	回転実測	N 区
135	土師器	坏	—	5.8	—		黒色処理	右回転糸切、墨書「？」	完全実測・拓本	N 区
136	土師器	坏	—	6.0	—		放射暗文・黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	N 区
137	土師器	坏	—	(6.0)	—		放射暗文・黒色処理	右回転糸切	回転実測	N 区
138	土師器	坏	—	(6.4)	—		黒色処理	右回転糸切	回転実測	N 区
139	土師器	坏	—	(6.4)	—		黒色処理	右回転糸切	回転実測	N 区
140	土師器	坏	—	(8.0)	—		ヘラミガキ・黒色処理	底部周縁までヘラケズリ	回転実測	N 区
141	土師器	碗	(13.7)	(7.6)	(5.8)		放射暗文・黒色処理	回転糸切、付高台	回転実測・拓本	N 区

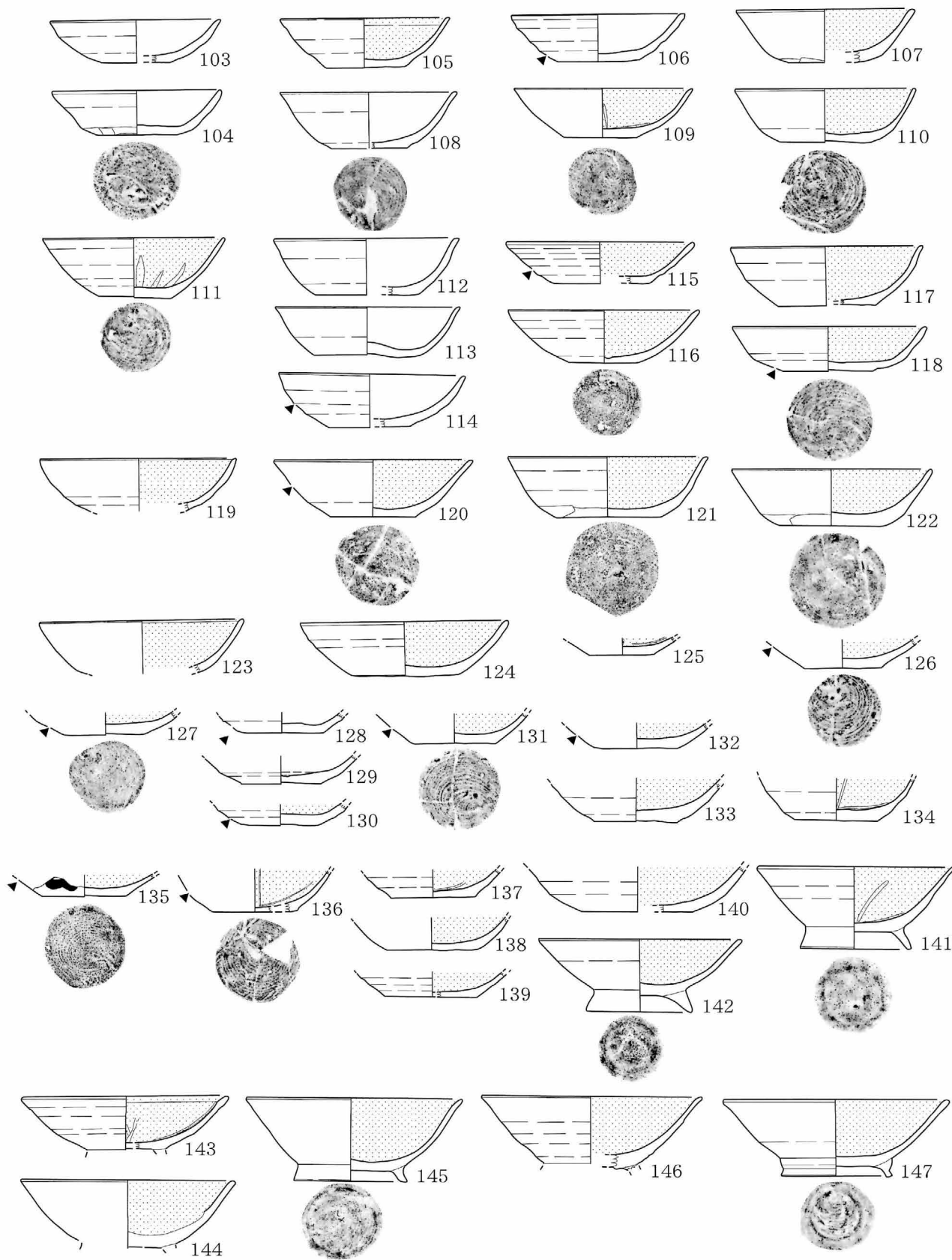
## 第 5 節 ピット

### ○ピット (第91図)

H 2 号住居址から H 6 号住居址周辺部において集中が認められるが、M 2 以西においてまんべんなく検出された。総数は 121 基である。これらのうち、遺物の出土が認められたものは XIV エ 1 グリット、XIV カ 2 グリットとその周辺に集中している。

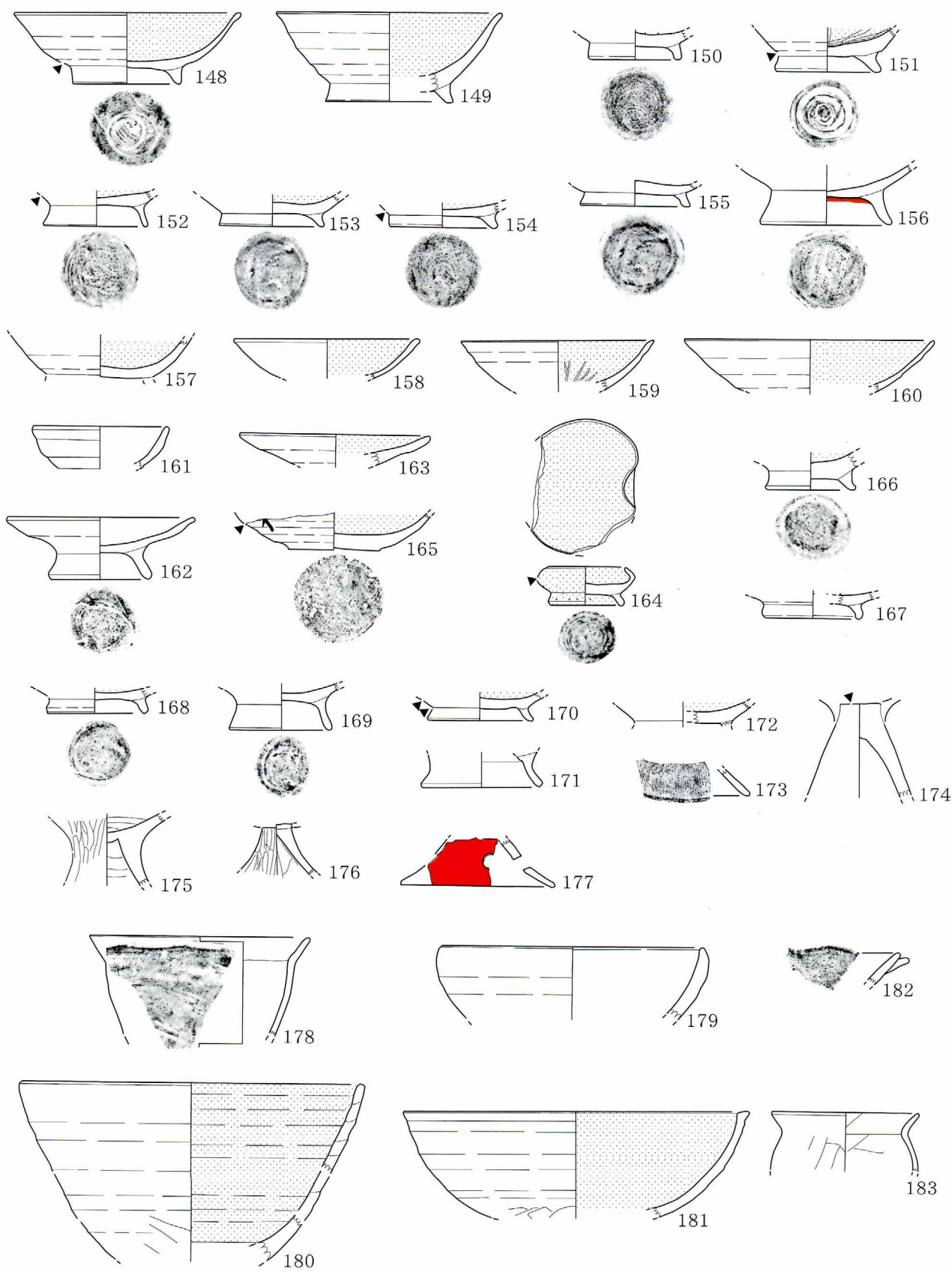
以下、各ピット毎に出土遺物の概略を述べていく。

- P 6 - 安山岩製の削器と、断面方形を呈する棒状の鉄器片が出土している。
- P 8 - 中期初頭の縄文土器深鉢片 (1)、弥生中期後半の壺片 (2・3)、土師器の壺片 (4) が出土している。
- P 9 - 平安時代の土師器坏片 (1) とロクロ甕片 (2) が出土している。
- P 10 - 須恵器坏片 (1)、川床礫を用いた砥石 (2) が出土している。
- P 15 - 内面黒色処理が施される土師器坏片が出土している。
- P 16 - 弥生土器壺片が 2 点出土している。
- P 18 - 弥生中期後半の壺口縁部片が出土している。P 22 - 弥生中期後半の壺片が 2 点出土している。
- P 51 - 弥生中期後半の甕片が出土している。
- P 52 - 黒曜石製の削器が出土している。
- P 58 - 弥生中期後半の甕体部が出土している。
- P 62 - 平安時代の土師器坏片が出土している。
- P 63 - 平安時代の土師器坏 2 点 (1・2)、坏片 (3)、ロクロ甕片 (4) が出土している。
- P 74 - 中期後半の弥生土器の壺片 3 点と、打製石斧片 1 点が出土している。

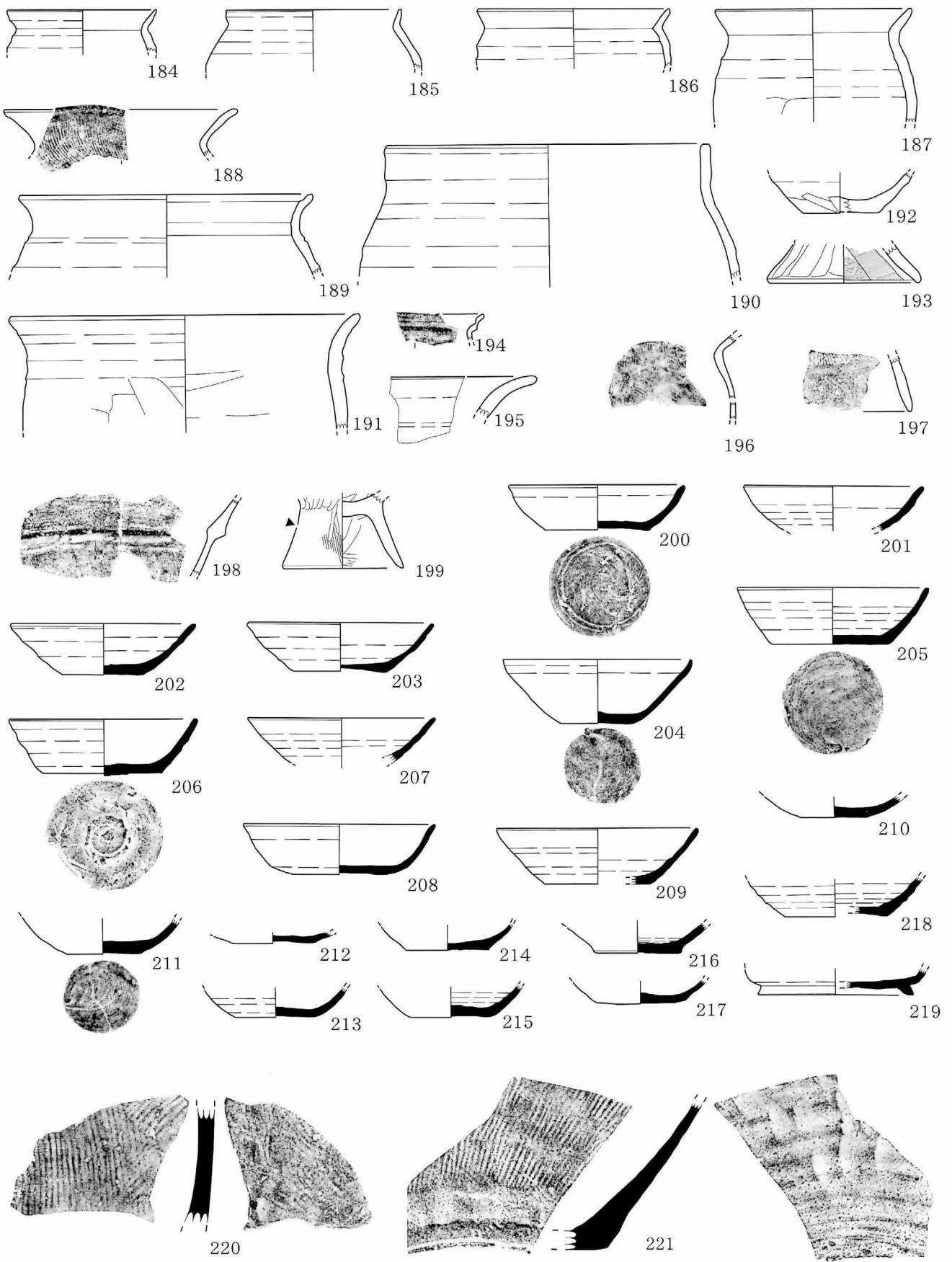


第 82 图 M2号沟址 (5)

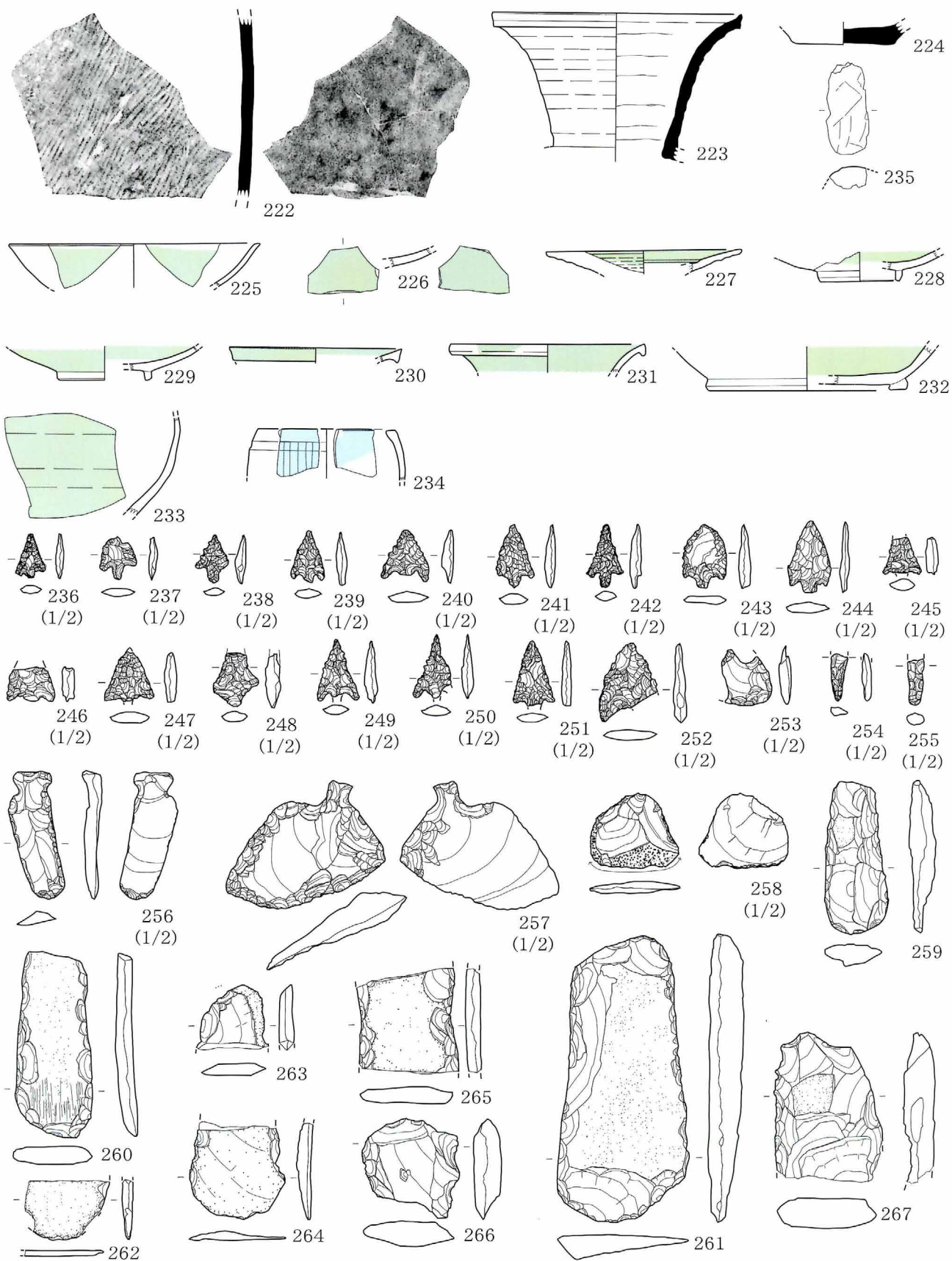




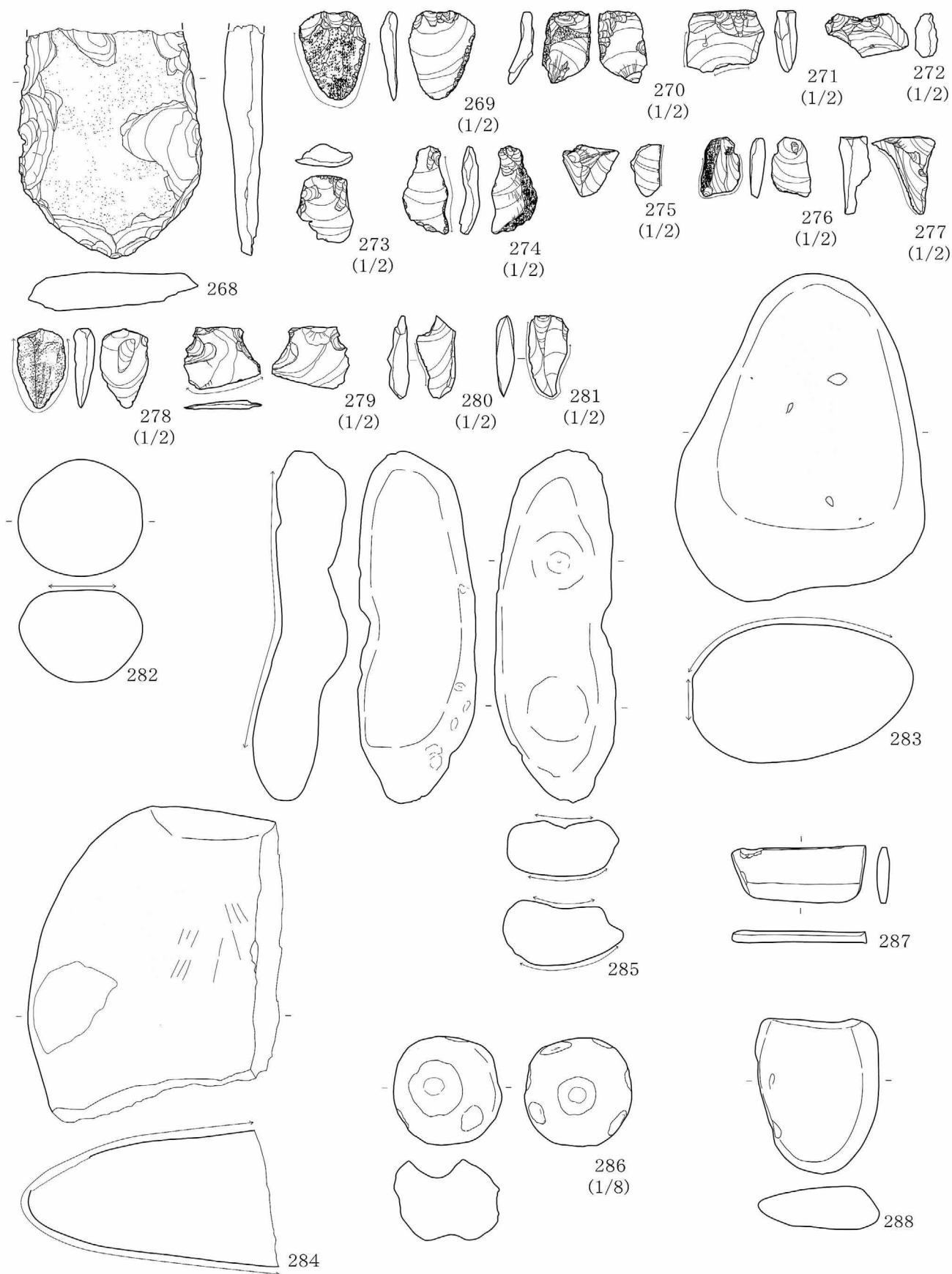
第 83 图 M2 号沟址 (6)



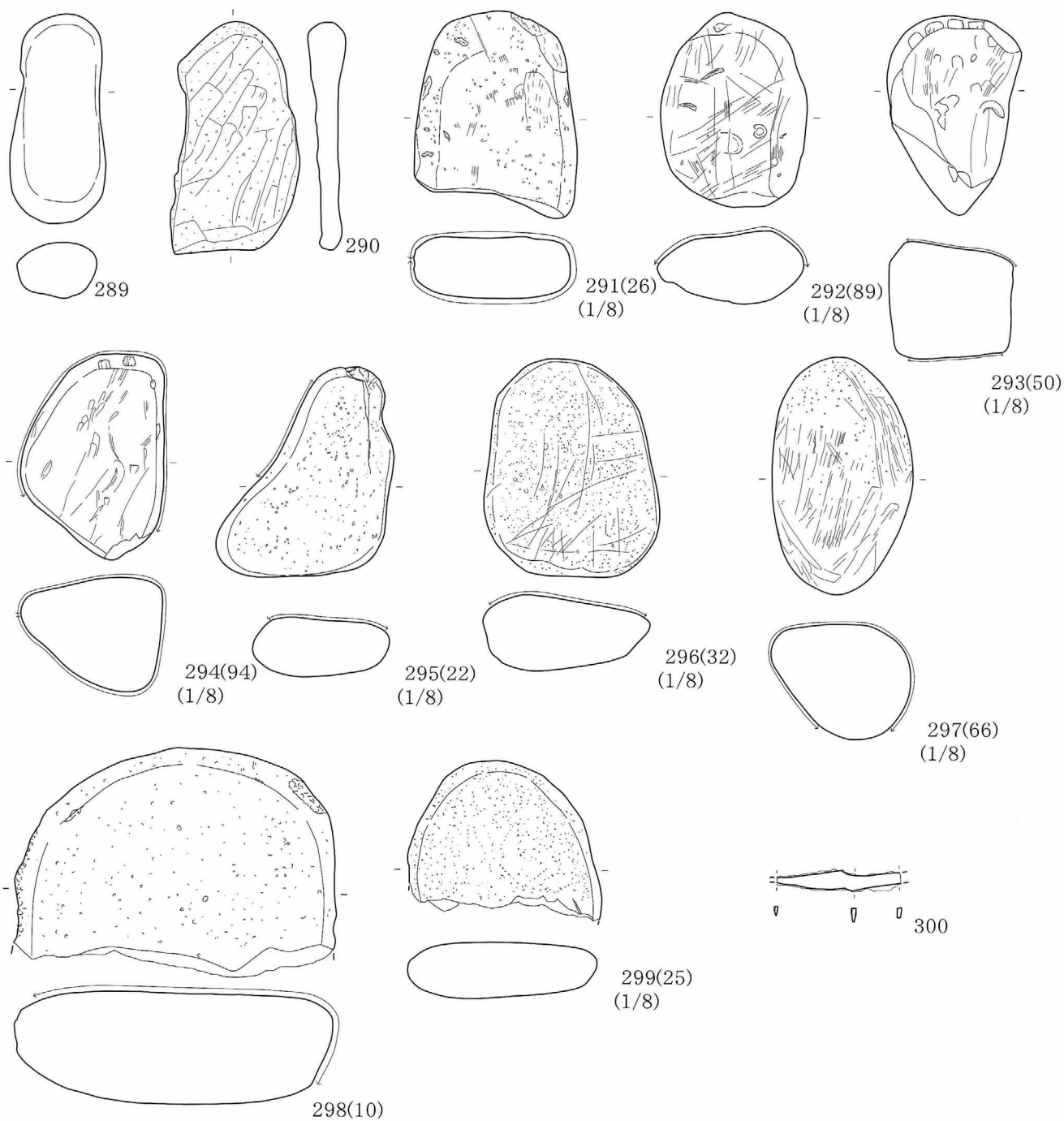
第 84 图 M2 号沟址 (7)



第 85 图 M2 出土遺物 (8)

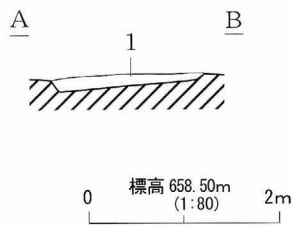
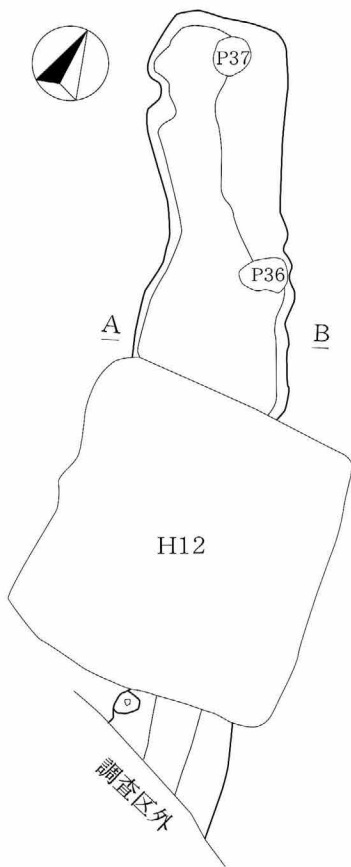


第 86 图 M2 号沟址 (9)

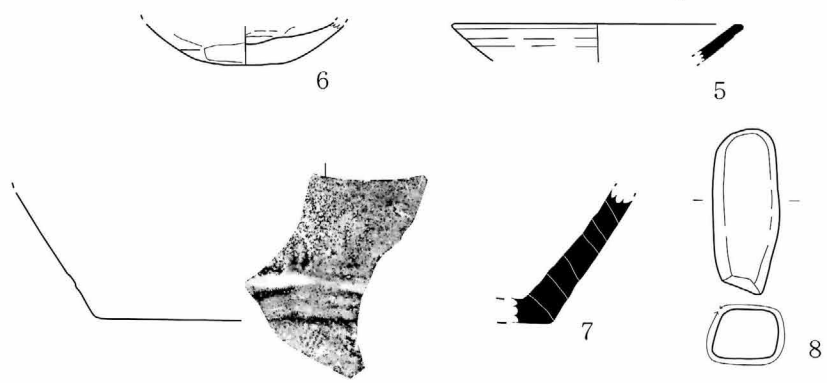


第 87 図 M2号溝址 (10)

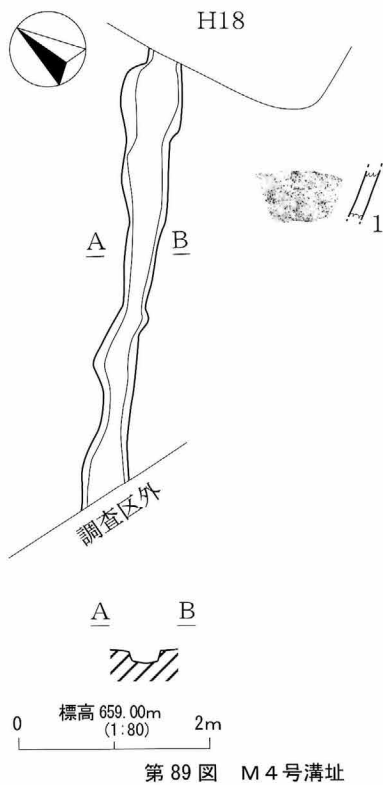
- P76-中期と思われる縄文土器片が2点出土している。
- P77-櫛描羽状文が施される弥生土器甕片が出土している。
- P78-平安時代の土師器坏片(1)、須恵器甕片(2)、川床礫を用いた砥石(3~5)が出土している。
- P80-縄文時代中期と思われる深鉢片が出土している。
- P81-弥生土器壺片が出土している。
- P83-縄文時代中期と思われる深鉢片(1)と弥生中期後半の甕片(2)が出土している。
- P87-古墳時代前期の土師器器台片(1)と台付甕の台部片(2)が出土している。



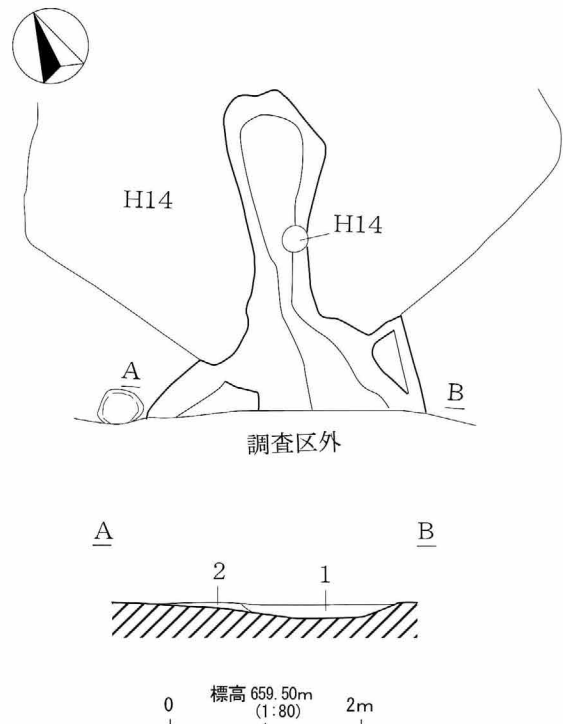
1. 黒褐色土層 (10YR3/1) 砂利含む。



第 88 図 M3号溝址



第 89 図 M4号溝址

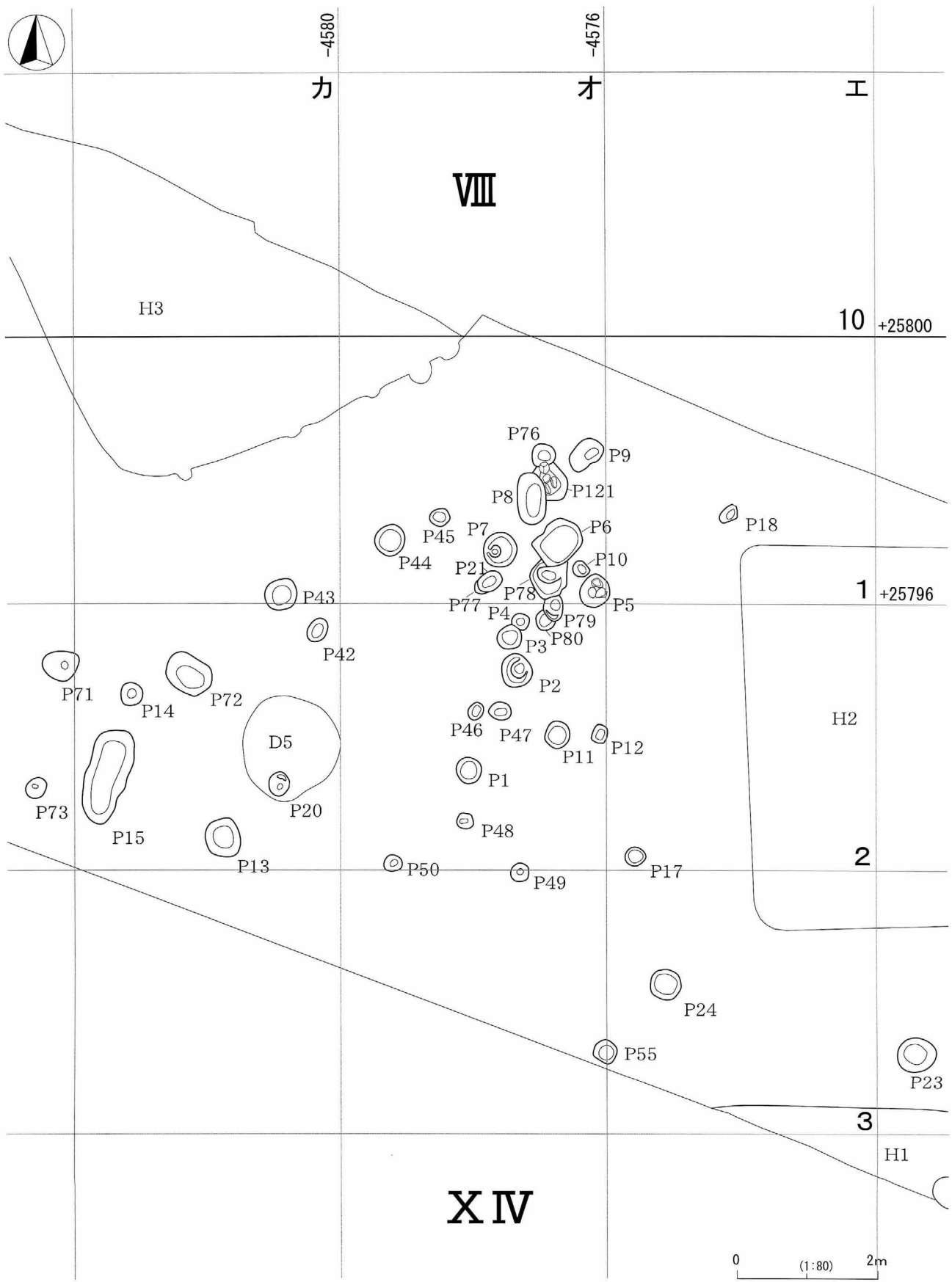


1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR5/6 含む。  
2. 黄褐色土層 (10YR5/6) 主体。10YR2/2 少含。

第 90 図 M5号溝址

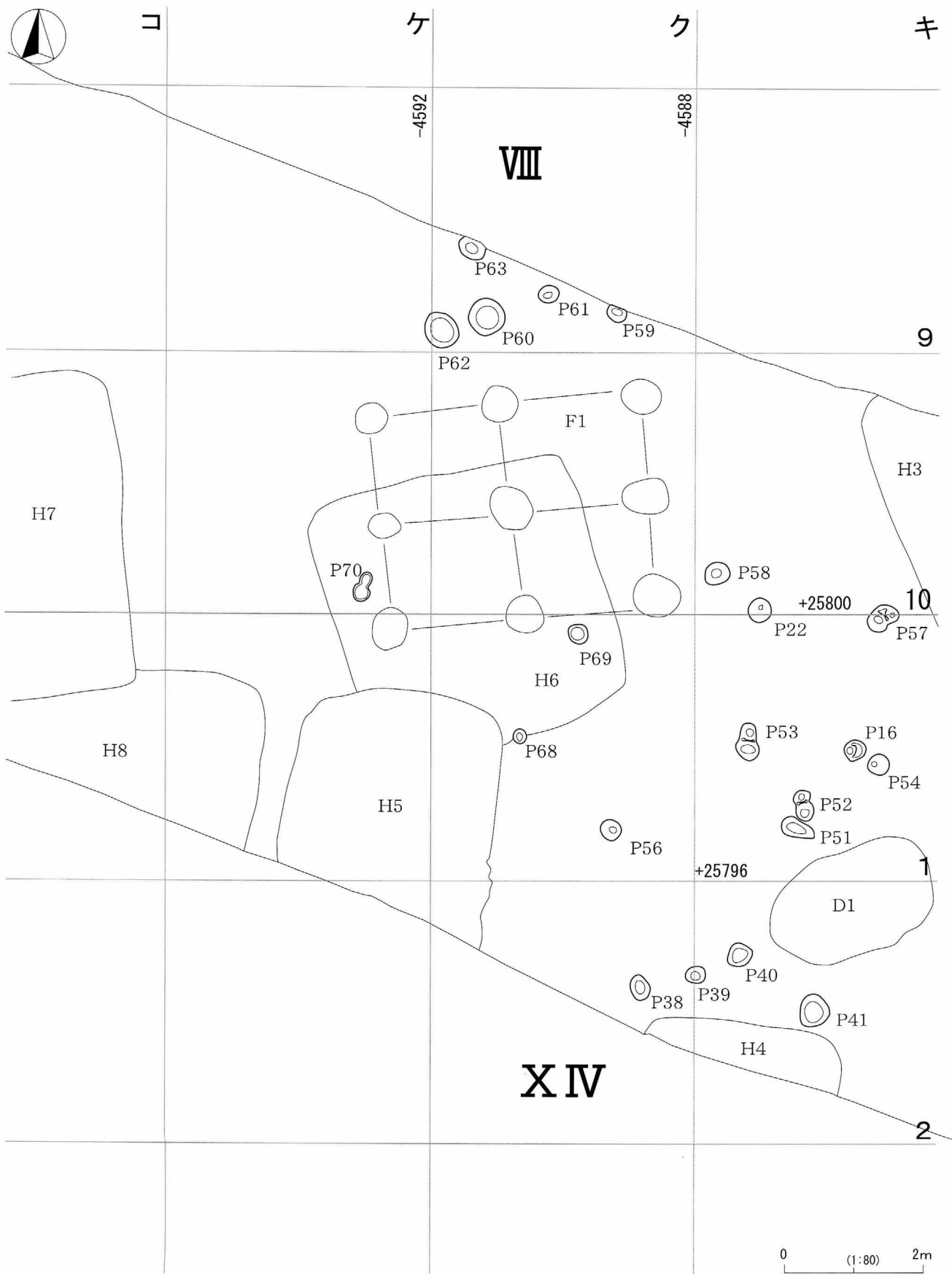
第 58 表 宮浦遺跡 I M2号溝址出土遺物観察表 (4)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
142	土師器	碗	14.2	7.4	5.1		黒色処理	回転糸切、付高台	完全実測・拓本	N区
143	土師器	碗	14.6	5.5	—		ヘラミガキ・黒色処理	回転ヘラケズリ、付高台	回転実測	N区
144	土師器	碗	(15.2)	—	—		黒色処理	回転糸切、付高台	回転実測	N区
145	土師器	碗	15.4	8.0	6.0		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切、付高台	完全実測・拓本	S区
146	土師器	碗	(15.4)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理	高台剥離	回転実測	S区
147	土師器	碗	(15.8)	(7.8)	(5.6)		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切、付高台	回転実測・拓本	N区
148	土師器	碗	(16.0)	(7.6)	(5.0)		ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切、付高台、ヘラ記号	完全実測・拓本	S区
149	土師器	碗	(16.0)	(9.0)	—		ヘラミガキ・黒色処理	付高台、被熱受ける	回転実測	N区
150	土師器	碗	—	(6.6)	—		黒色処理	右回転糸切、付高台	回転実測・拓本	N区
151	土師器	碗	—	7.4	—		ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ、付高台	完全実測・拓本	S区
152	土師器	碗	—	7.4	—		黒色処理	付高台	完全実測・拓本	S区
153	土師器	碗	—	(7.4)	—		黒色処理	回転糸切、付高台	回転実測・拓本	N区
154	土師器	碗	—	7.7	—		ヘラミガキ・黒色処理	付高台	完全実測・拓本	S区
155	土師器	碗	—	(7.8)	—		ヘラミガキ・黒色処理	付高台	回転実測・拓本	S区
156	土師器	碗	—	(9.0)	—		ヘラケズリ、付高台	高台内に煤付着	回転実測・拓本	S区
157	土師器	碗	—	—	—		ヘラミガキ・黒色処理	高台剥離	回転実測	S区
158	土師器	坏?	(13.1)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理	口縁部煤付着	回転実測	N区
159	土師器	坏?	(13.6)	—	—		暗文・黒色処理		回転実測	S区
160	土師器	坏?	(17.6)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理		回転実測	S区
161	土師器	皿	9.6	5.6	3.0				完全実測	S区
162	土師器	皿	(13.2)	(6.8)	(4.4)		右回転糸切、付高台	高台端部に焼成前刻目	回転実測・拓本	N区
163	土師器	皿	(13.6)	—	—		黒色処理		回転実測	N区
164	土師器	耳皿	(9.6-5.6)	5.2	(2.7)		黒色処理	黒色処理、回転糸切、付高台	完全実測・拓本	S区
165	土師器	皿	—	6.4	—		ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切、墨書「?」	完全実測・拓本	N区
166	土師器	碗?	—	(6.4)	—		黒色処理	付高台	回転実測・拓本	N区
167	土師器	碗?	—	6.6	—		ヘラミガキ・黒色処理		回転実測	N区
168	土師器	碗?	—	7.0	—		ヘラミガキ・黒色処理	右回転糸切、付高台	完全実測・拓本	N区
169	土師器	碗?	—	(7.2)	—			右回転ヘラケズリ、付高台	回転実測・拓本	N区
170	土師器	碗?	—	(7.5)	—		ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切、付高台	完全実測	S区
171	土師器	碗?	—	8.6	—			付高台	完全実測	N区
172	土師器	碗?	—	—	—		ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切、付高台	完全実測	S区
173	土師器	高坏	(20.6)	—	—		ハケ目	ハケ目	破片実測・拓本	S区
174	土師器	高坏	—	2.9	—				完全実測	N区
175	土師器	高坏	—	—	—				完全実測	S区
176	土師器	高坏	—	—	—			ヘラミガキ	完全実測	S区
177	土師器	器台	—	10.8	—			ミガキ、赤彩、円孔	回転実測	N区
178	土師器	鉢	(15.4)	—	—				回転実測・拓本	N区
179	土師器	鉢	(18.6)	—	—				回転実測	S区
180	土師器	鉢	(24.3)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理	底部周縁ヘラケズリ	回転実測	N区
181	土師器	鉢	(24.4)	—	—		ヘラミガキ・黒色処理	底部周縁ヘラケズリ	回転実測	N区
182	土師器	片口	—	—	—				破片実測・拓本	N区
183	土師器	ロクロ甕	(10.4)	—	—			ヘラケズリ	回転実測	N区
184	土師器	ロクロ甕	(10.8)	—	—				回転実測	S区
185	土師器	ロクロ甕	(12.8)	—	—				回転実測	N区
186	土師器	ロクロ甕	(14.0)	—	—				回転実測	N区
187	土師器	ロクロ甕	(14.2)	—	—			ヘラケズリ	回転実測	N区
188	土師器	甕	(17.2)	—	—		ハケ目	ハケ目	回転実測・拓本	N区
189	土師器	ロクロ甕	(21.6)	—	—				回転実測	N区
190	土師器	ロクロ甕	23.5	—	—		カキ目		回転実測	N区
191	土師器	ロクロ甕	(25.8)	—	—			ヘラケズリ	回転実測	N区
192	土師器	ロクロ甕	—	(5.4)	—		回転糸切、底部周縁ヘラケズリ		回転実測	N区
193	土師器	台付甕	—	(11.2)	—		ハケ目	ヘラケズリ	回転実測	N区
194	土師器	台付甕	—	—	—		「S」字口縁		破片実測・拓本	N区
195	土師器	ロクロ甕	—	—	—				破片実測	S区
196	土師器	甕	—	—	—		ハケ目	ハケ目	破片実測・拓本	N区
197	土師器	台付甕	—	—	—		ハケ目	ハケ目	破片実測・拓本	N区

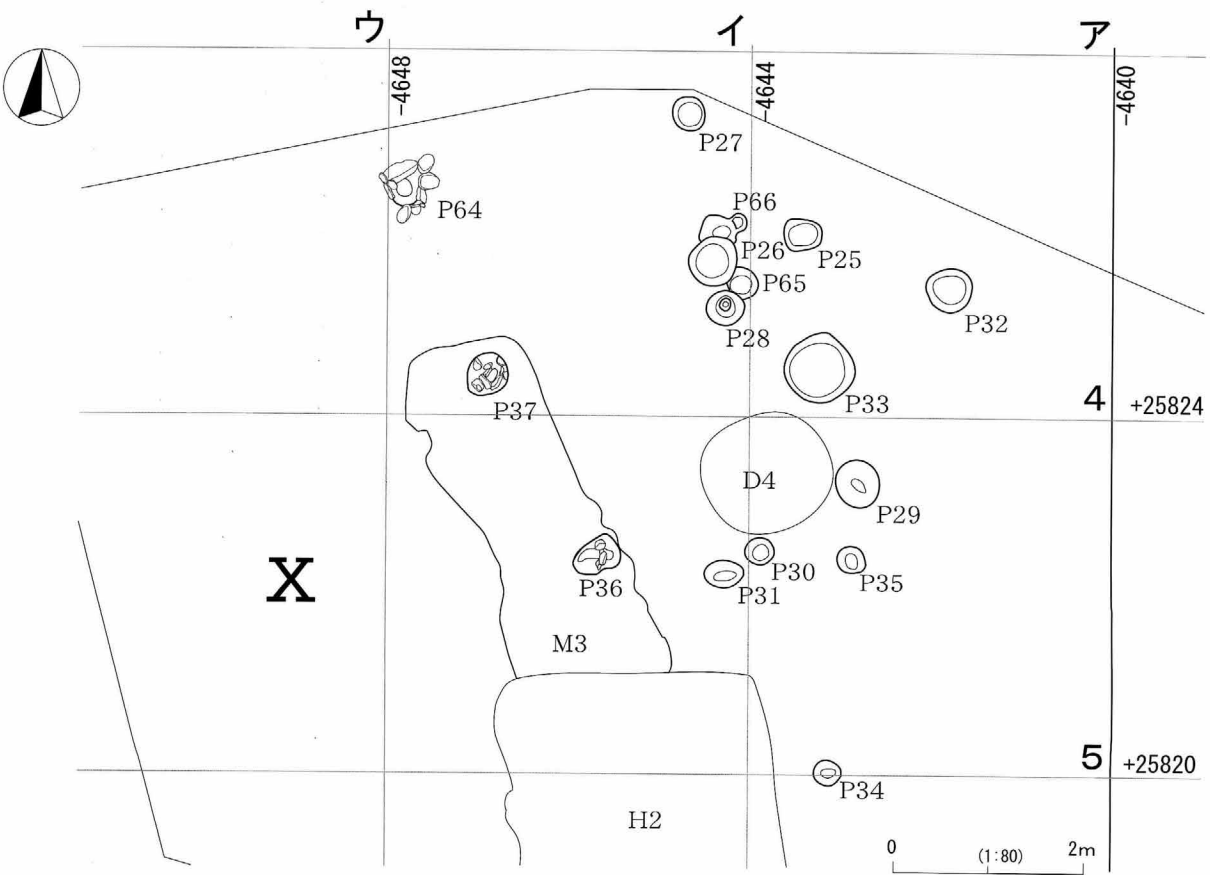
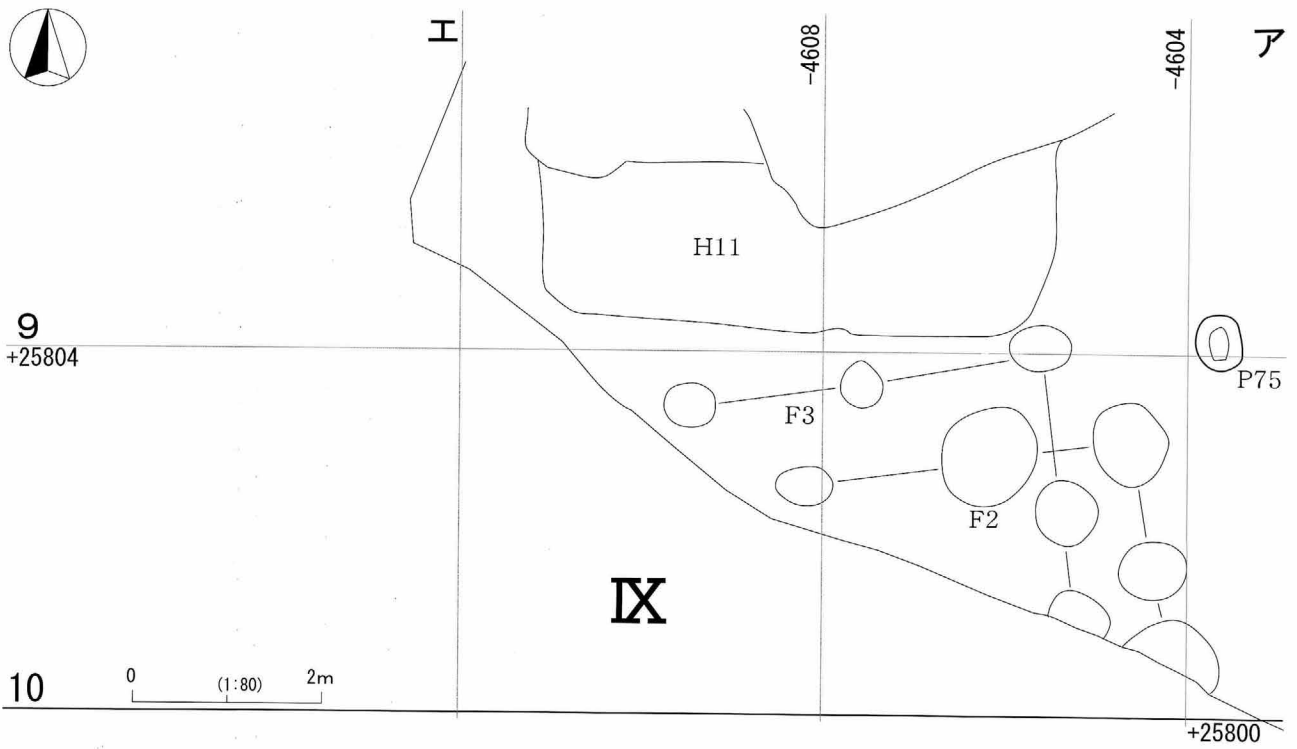


第91図 ピット平面図(1)



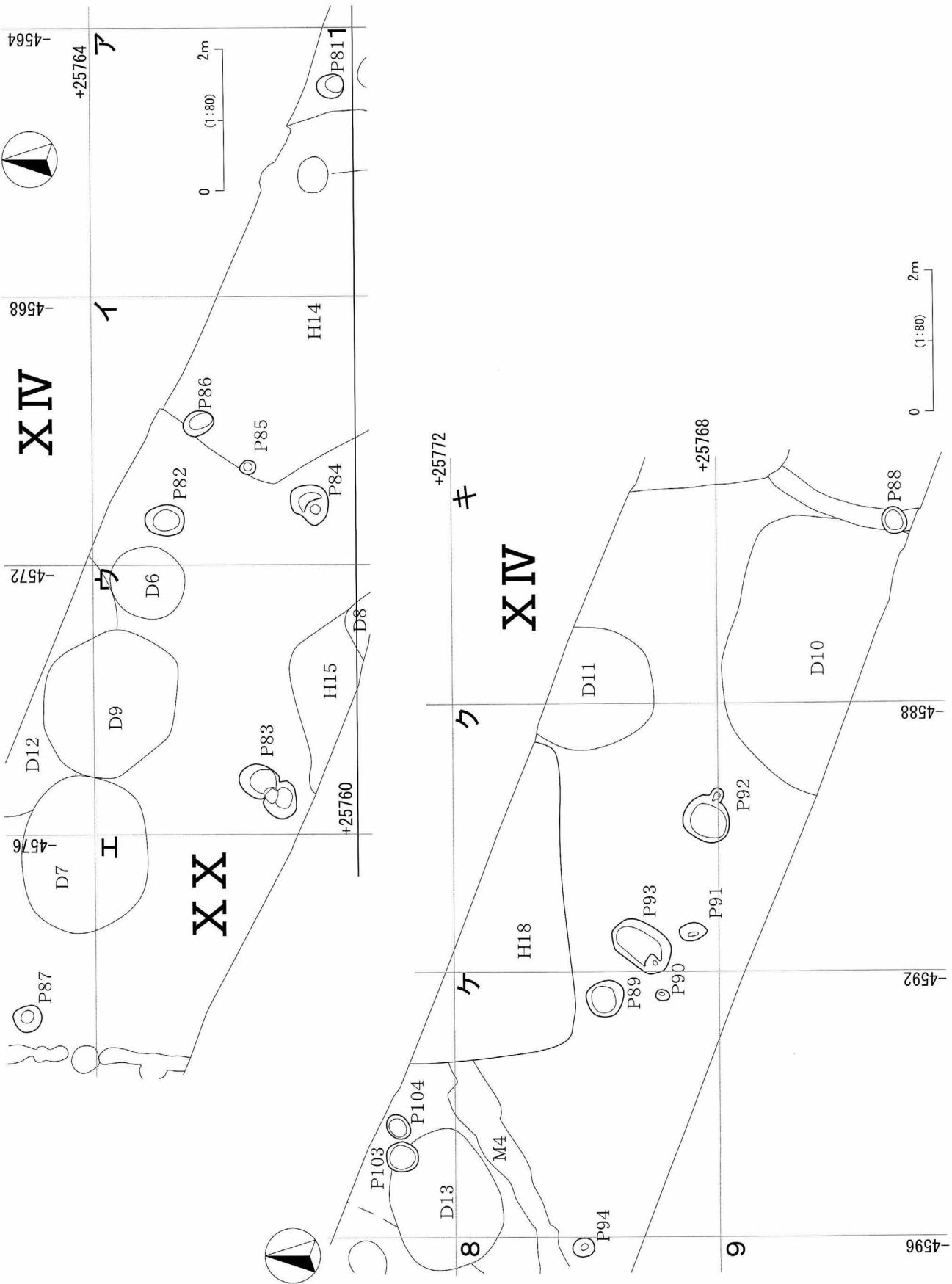


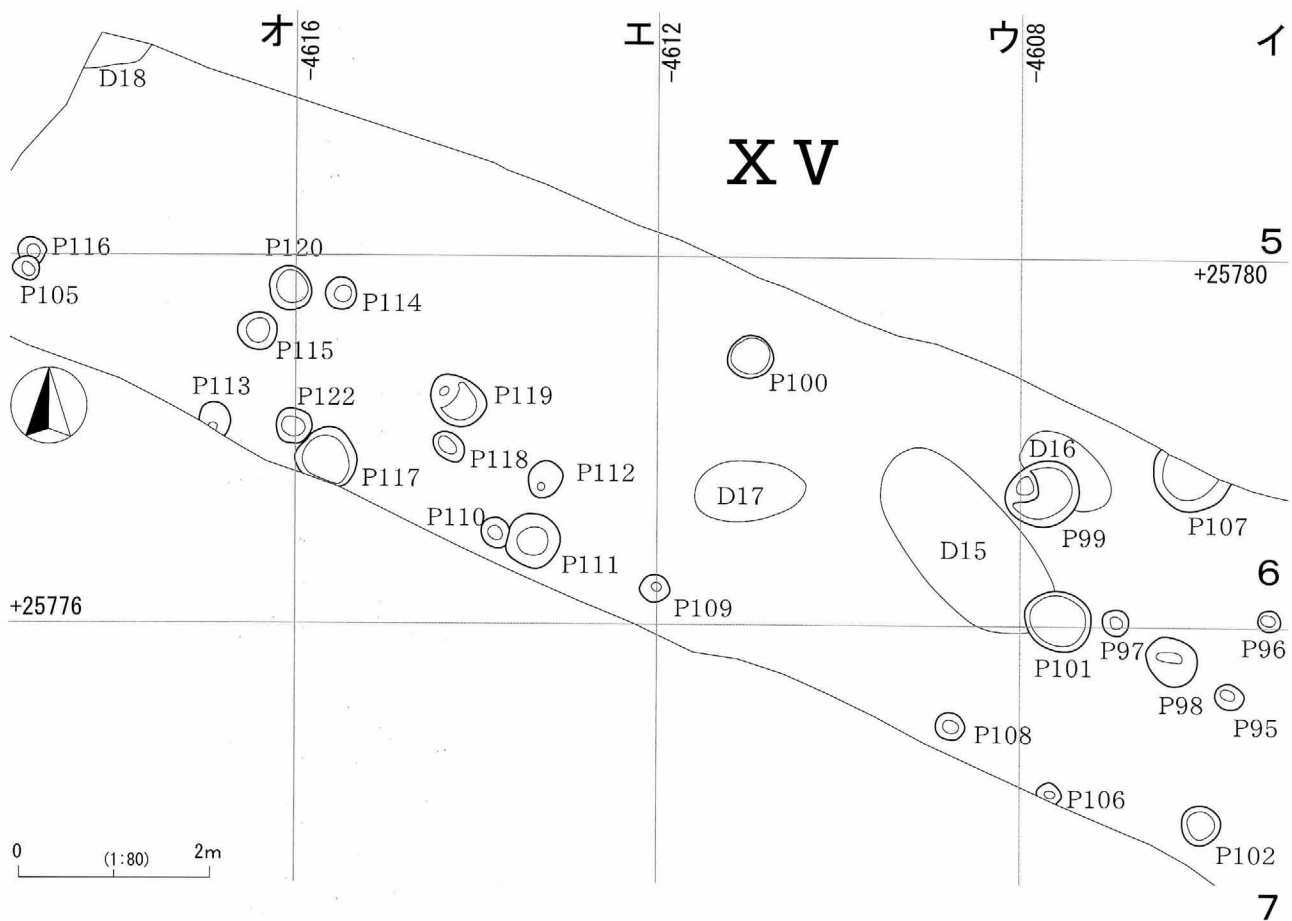
第 92 図 ピット平面図 (2)



第93図 ビット平面図(3)

(4) 断面トウゴ 図6第 94第





第95図 ピット平面図(5)

P120—弥生時代中期後半の甕(1)、甕片(2)、壺片(3)が出土している。  
 P121—弥生時代中期後半の壺片と川床礫を用いた砥石が出土している。

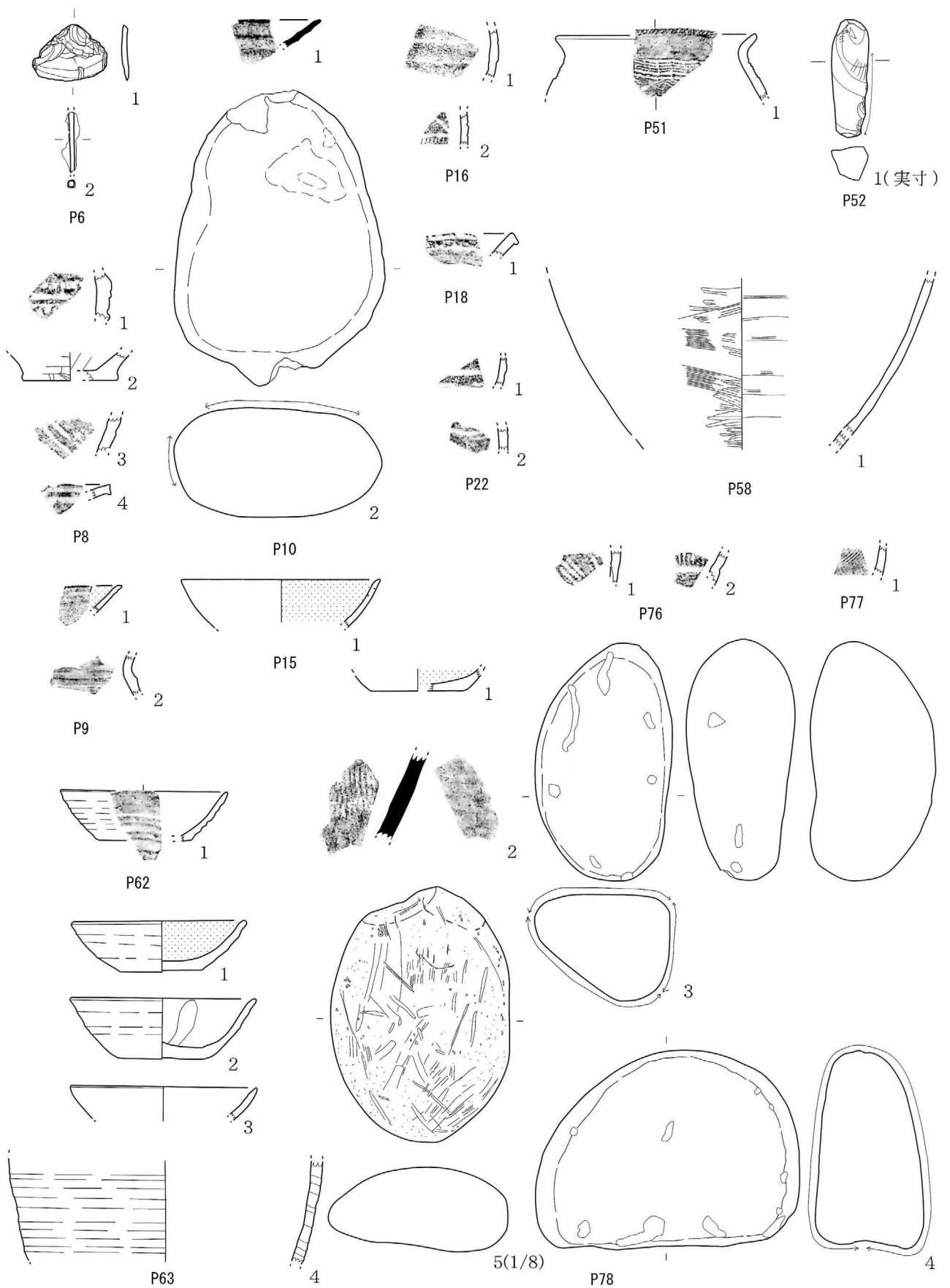
## 第6節 遺構外出土遺物

### ○遺構外出土遺物(第98・99図)

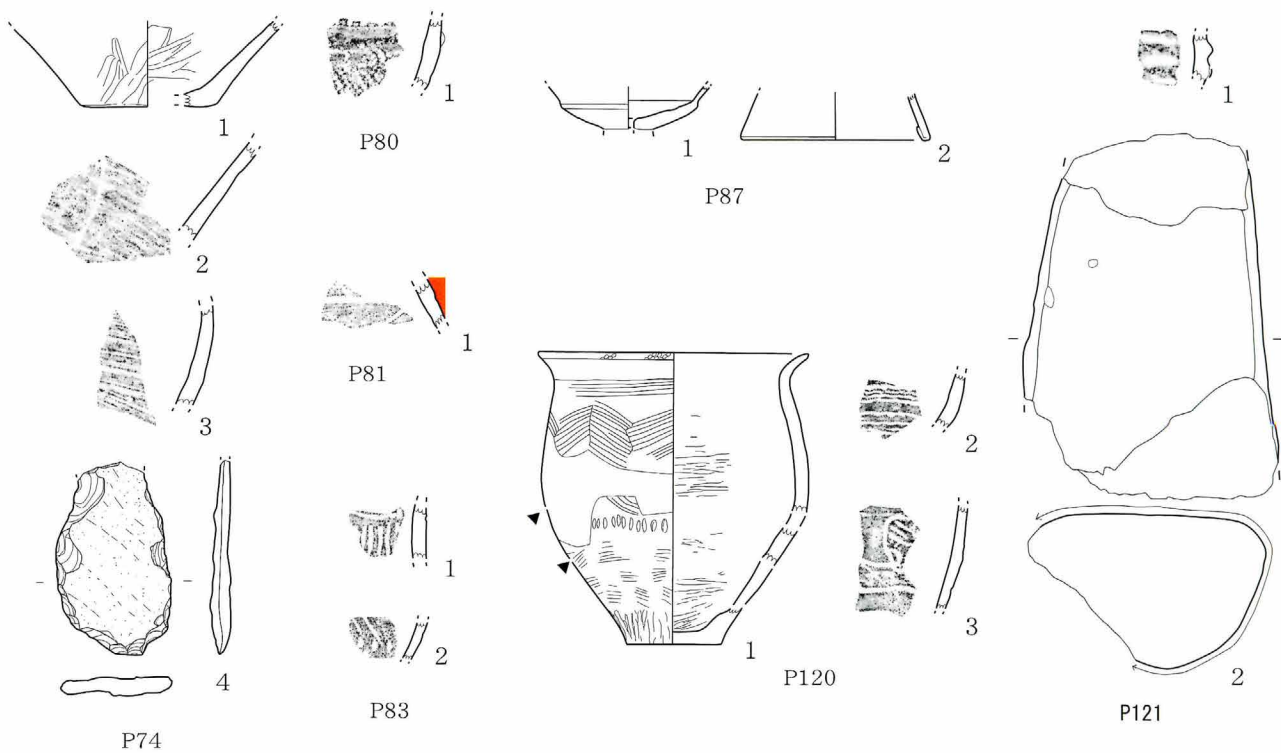
試掘調査出土遺物、グリット出土遺物、検出時(重機による表土掘削時、及び人力による遺構検出作業時)の出土遺物である。

試掘調査-1は、胎土に繊維を含む縄文時代前期の深鉢口縁部片である。関山期の所産と思われる。2は横走する平行沈線下に斜位の条線が施される縄文時代中期の深鉢体部片である。後半「曾利式」に比定される。3は口唇部に刻目、口縁部～体部上半に縦位羽状の条痕が施される弥生時代中期前半の甕と思われる。底部には布の圧痕が認められる。4は底部に右回転糸切をのこす土師器坏であり、平安時代の所産である。5は内面黒色処理で放射暗文が施される土師器碗である。平安時代の所産である。6は底部に左回転糸切をのこす土師器ロクロ甕である。平安時代の所産である。7・8はハケ目調整が顕著な土師器甕である。古墳時代の所産であろう。

遺構外-1～7は縄文土器である。1・4・5・6・7は中期後半のものであり、器種はすべて深鉢である。1・4・7は「鱗状短沈線土器」、5・6は加曾利E系と思われる。2・3は後期のもので、堀之内式である。8～15は弥生土器である。8は類例をしらないが、中期前半の所産と考えられる。口唇部には棒状工具による押捺、口縁部～体部には竹管による刺突と「コ」字重ね文が施文される。10・14も中期前半の可能性が高いものである。10は甕、14鉢ないし無頸壺と思われる。11～13は中期後半の栗林式の甕、9・15～21は壺である。15は器種不明であるが、赤彩される把手である。23～27は土師器である。23は右回転糸切の坏、24・25は碗であり、平安時代の所産である。26は



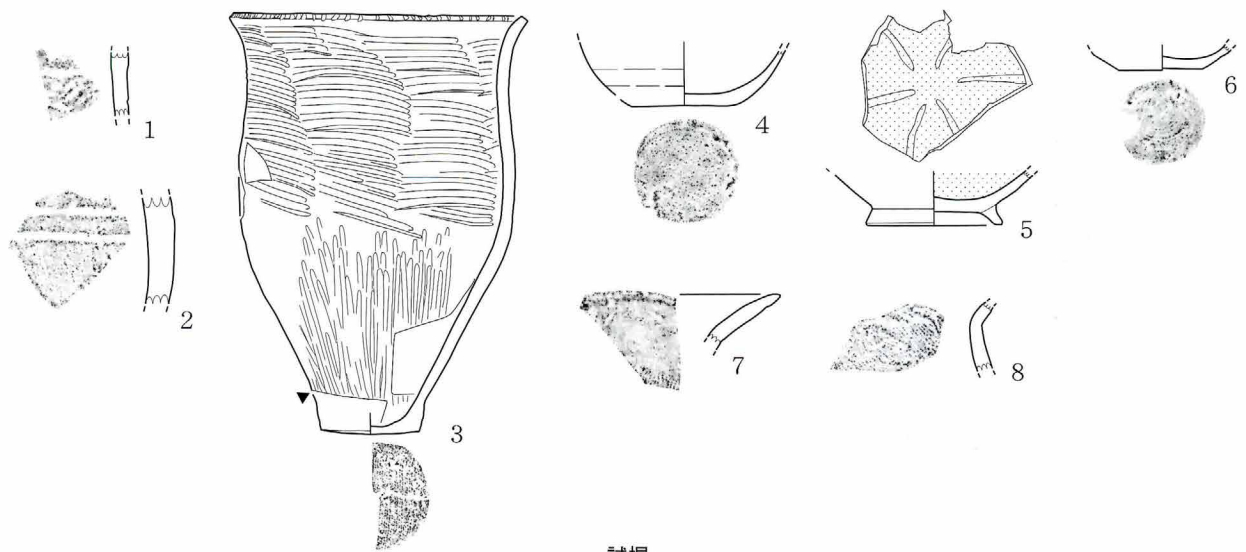
第96図 ピット出土遺物(1)



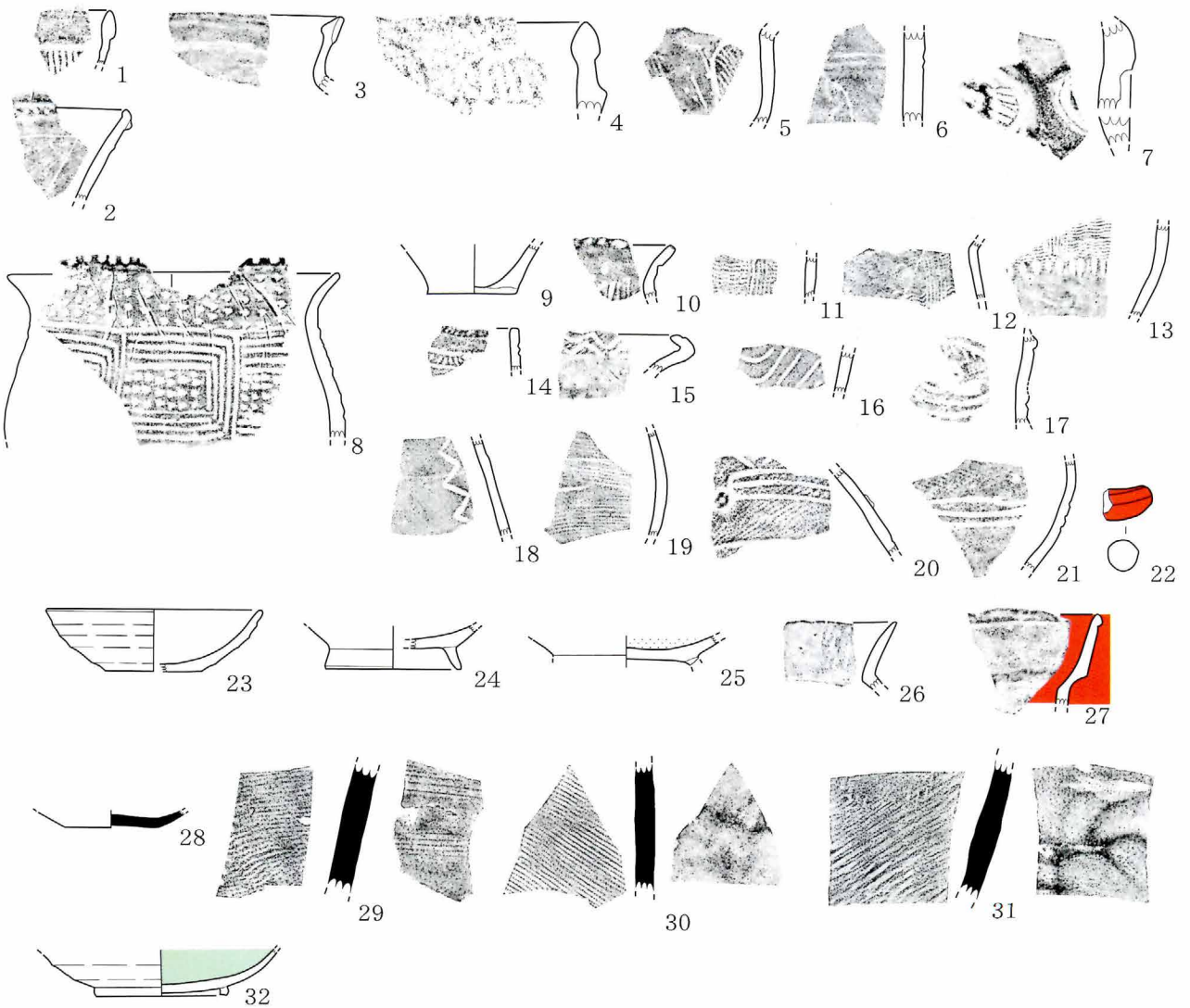
第 97 図 ピット出土遺物 (2)



宮浦遺跡景観 (東から)

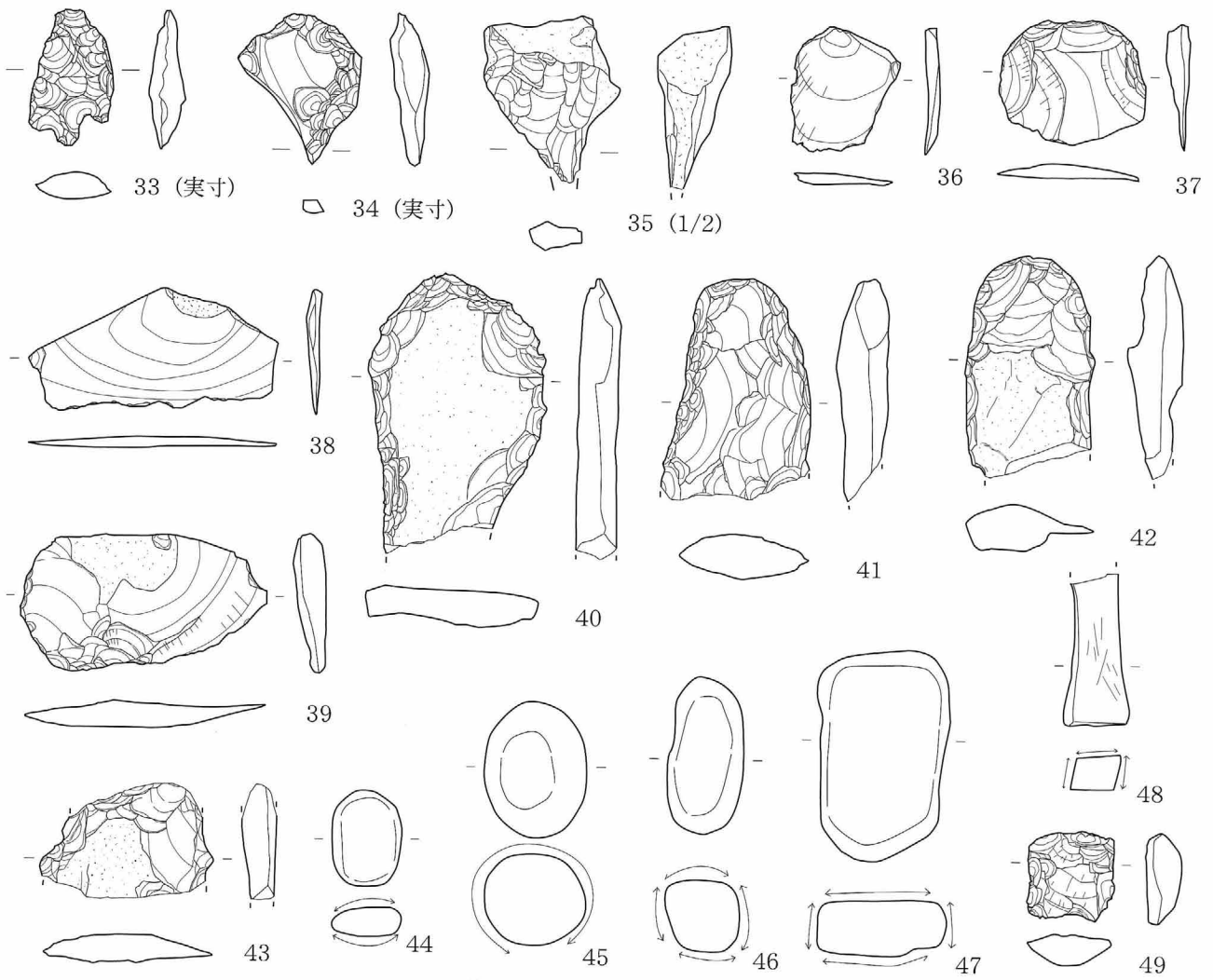


試掘



遺構外

第 98 図 遺構外出土遺物 (1)



第99図 遺構外出土遺物(2)



H17号住居址周辺



第59表 宮浦遺跡Ⅰ M2号溝址出土遺物観察表(5)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
198	土師器	鉢?	—	—	—	—	ハケ目、機内系?		破片実測・拓本	N区
199	土師器	台付甕	—	(8.8)	—	—	ハケ目	ハケ目	完全実測	S区
200	須恵器	坏	12.9	7.5	3.3	—	—	火襷、左回転糸切	完全実測・拓本	S区
201	須恵器	坏	(13.0)	—	—	—	—	—	回転実測	S区
202	須恵器	坏	(13.6)	(5.9)	(3.7)	—	火襷	火襷、回転糸切	回転実測	N区
203	須恵器	坏	(13.6)	(6.6)	(3.6)	—	—	右回転糸切	回転実測	S区
204	須恵器	坏	(13.7)	(4.8)	(4.7)	—	—	右回転糸切	回転実測・拓本	S区
205	須恵器	坏	13.8	8.4	4.2	—	火襷	火襷、右回転糸切	完全実測・拓本	S区
206	須恵器	坏	13.8	8.6	4.1	—	火襷	火襷、回転ヘラケ切り	完全実測・拓本	S区
207	須恵器	坏	(13.8)	—	—	—	—	—	回転実測	S区
208	須恵器	坏	14.1	6.8	3.7	—	火襷、左回転糸切、ヘラケズリ		回転実測	S区
209	須恵器	坏	(14.7)	(7.6)	(4.1)	—	火襷	火襷、回転糸切	回転実測	S区
210	須恵器	坏	—	(4.8)	—	—	—	右回転糸切	回転実測	S区
211	須恵器	坏	—	5.4	—	—	—	右回転糸切	完全実測・拓本	S区
212	須恵器	坏	—	(5.8)	—	—	—	右回転糸切	回転実測	S区
213	須恵器	坏	—	(5.8)	—	—	—	右回転糸切	回転実測	N区
214	須恵器	坏	—	(6.0)	—	—	—	右回転糸切	回転実測	N区
215	須恵器	坏	—	(6.0)	—	—	—	ヘラケズリ	回転実測	N区
216	須恵器	坏	—	(6.4)	—	—	—	回転糸切	回転実測	N区
217	須恵器	坏	—	(6.4)	—	—	—	右回転糸切、ヘラケズリ	回転実測	S区
218	須恵器	坏	—	(7.4)	—	—	—	回転糸切	回転実測	S区
219	須恵器	有台坏	—	(11.2)	—	—	—	回転糸切、ヘラケズリ	回転実測	N区
220	須恵器	甕	—	—	—	—	当具痕、円滑	平行叩目	破片実測・拓本	S区
221	須恵器	甕	—	—	—	—	当具痕	平行叩目	破片実測・拓本	S区
222	須恵器	甕	—	—	—	—	当具痕	平行叩目	破片実測・拓本	N区
223	須恵器	長頸壺	(18.0)	—	—	—	—	—	回転実測	N区
224	須恵器	長頸壺?	—	(8.6)	—	—	—	右回転糸切	回転実測	N区
225	灰釉陶器	碗	(18.0)	—	—	—	施釉	施釉	回転実測	N区
226	灰釉陶器	碗	—	—	—	—	施釉	施釉	破片実測	N区
227	灰釉陶器	段皿	(14.1)	—	—	—	施釉	施釉	回転実測	N区
228	灰釉陶器	皿	—	(6.0)	—	—	施釉	施釉、付高台	回転実測	N区
229	灰釉陶器	皿	—	(6.7)	—	—	施釉	施釉、付高台	回転実測	N区
230	灰釉陶器	長頸瓶	(12.4)	—	—	—	施釉	施釉	回転実測	N区
231	灰釉陶器	長頸瓶	(14.0)	—	—	—	施釉	施釉	回転実測	N区
232	灰釉陶器	短頸瓶	—	(14.2)	—	—	施釉	回転ヘラケズリ、付高台	回転実測	S区
233	灰釉陶器	瓶?	—	—	—	—	—	施釉	破片実測	N区
234	青磁	?	—	—	—	—	施釉	施釉	回転実測	カクラン
235	土製品	羽口	—	—	—	—	—	—	完全実測	S区
236	石器	打製石鎌	1.6	1.0	0.3	0.6	チャート	—	完全実測	N区
237	石器	打製石鎌	1.6	1.2	0.3	0.4	黒曜石	—	完全実測	N区
238	石器	打製石鎌	1.7	1.0	0.4	0.5	黒曜石	—	完全実測	N区
239	石器	打製石鎌	1.8	1.2	0.3	0.4	黒曜石	—	完全実測	N区
240	石器	打製石鎌	1.8	1.7	0.4	0.9	黒曜石	—	完全実測	N区
241	石器	打製石鎌	2.3	1.3	0.4	0.9	黒曜石	—	完全実測	N区
242	石器	打製石鎌	2.3	1.3	0.4	0.7	黒曜石	—	完全実測	N区
243	石器	打製石鎌	2.3	1.6	0.5	1.4	チャート	—	完全実測	N区
244	石器	打製石鎌	2.6	1.5	0.4	1.2	チャート	—	完全実測	N区
245	石器	打製石鎌	—	1.4	0.5	—	黒曜石	—	完全実測	N区
246	石器	打製石鎌	—	1.7	0.5	—	黒曜石	—	完全実測	N区
247	石器	打製石鎌	—	1.8	0.4	—	黒曜石	—	完全実測	S区
248	石器	打製石鎌	—	1.5	0.5	—	黒曜石	—	完全実測	S区
249	石器	打製石鎌	—	1.5	0.5	—	黒曜石	—	完全実測	N区
250	石器	打製石鎌	—	—	—	—	黒曜石	—	完全実測	N区
251	石器	打製石鎌	—	1.5	0.3	—	チャート	—	完全実測	N区
252	石器	打製石鎌	2.8	—	0.5	—	黒曜石	—	完全実測	S区
253	石器	打製石鎌	—	—	—	—	黒曜石、未製品?	—	完全実測	N区

第 60 表 宮浦遺跡 I M2号溝址出土遺物観察表 (6)

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
254	石器	錐	—	—	—	—	黒曜石	完全実測	N区	
255	石器	錐	—	—	—	—	黒曜石	完全実測	N区	
256	石器	石匙	4.5	1.6	0.5	4.2	縦、頁岩?	完全実測	N区	
257	石器	石匙	5.3	4.0	1.3	24.5	横、チャート	完全実測	N区	
258	石器	横刃型石器	3.2	2.7	0.4	25.9	安山岩	完全実測	N区	
259	石器	打製石斧	11.1	4.7	1.5	10.5	凝灰岩	完全実測	N区	
260	石器	打製石斧	13.1	5.6	1.3	162.6	凝灰岩	完全実測	N区	
261	石器	打製石斧	20.6	9.4	2.45	53.0	凝灰岩	完全実測	N区	
262	石器	打製石斧	—	—	0.45	—	凝灰岩	完全実測	N区	
263	石器	打製石斧	—	—	—	—	安山岩	完全実測	N区	
264	石器	打製石斧	—	6.9	1.1	—	凝灰岩	完全実測	S区	
265	石器	打製石斧	—	—	—	—	凝灰岩	完全実測	S区	
266	石器	打製石斧	—	—	1.95	—	安山岩	完全実測	S区	
267	石器	打製石斧	—	—	—	—	凝灰岩	完全実測	N区	
268	石器	打製石斧	—	—	2.85	—	凝灰岩	完全実測	N区	
269	石器	スクレイパー	3.2	2.4	0.6	31.6	頁岩	完全実測	N区	
270	石器	両極石器	2.5	1.7	0.6	2.3	黒曜石	完全実測	N区	
271	石器	両極石器	2.7	2.2	0.8	4.8	黒曜石	完全実測	N区	
272	石器	両極石器	2.8	1.4	0.7	2.5	黒曜石	完全実測	N区	
273	石器	二次加工剥片	2.4	2.0	0.8	2.6	黒曜石	完全実測	N区	
274	石器	二次加工剥片	3.2	1.6	0.6	2.5	黒曜石	完全実測	N区	
275	石器	使用痕剥片	1.9	1.8	1.0	2.9	黒曜石	完全実測	S区	
276	石器	使用痕剥片	2.0	1.4	0.6	1.3	黒曜石	完全実測	N区	
277	石器	使用痕剥片	2.7	2.2	1.1	3.2	黒曜石	完全実測	N区	
278	石器	使用痕剥片	2.8	1.6	0.7	2.8	黒曜石	完全実測	N区	
279	石器	使用痕剥片	2.8	2.2	0.3	14.8	安山岩	完全実測	N区	
280	石器	使用痕剥片	3.0	1.4	0.8	2.2	黒曜石	完全実測	S区	
281	石器	使用痕剥片	3.0	1.4	0.8	2.3	黒曜石	完全実測	S区	
282	石器	磨石	8.1	8.0	6.8	770.0	安山岩	完全実測	N区	
283	石器	磨石	23.6	16.7	12.6	5350.0	安山岩	完全実測	N区	
284	石器	磨石	—	—	—	—	安山岩、削痕	完全実測	N区	
285	石器	磨・凹石	24.7	8.4	5.0	1130.0	安山岩、凹径 3.9 ~ 4.5、凹深 0.4 ~ 0.7	完全実測	N区	
286	石器	凹石	15.9	15.5	12.9	3350.0	安山岩、9カ所の凹、凹径 2.7 ~ 5.0、凹深 0.6 ~ 2.8	完全実測	N区	
287	石器	石包丁	9.6	4.1	0.9	48.0	未製品?	完全実測	N区	
288	石器	編物石	11.8	8.8	2.9	460.0	安山岩	完全実測	N区	
289	石器	編物石	13.7	6.4	3.5	440.0	安山岩	完全実測	N区	
290	石器	砥石	14.9	7.9	2.4	370.0	安山岩	完全実測	N区	
291	石器	砥石	24.2	21.4	8.0	8090.0	安山岩	完全実測	N区、No26	
292	石器	砥石	25.2	19.1	10.4	6710.0	安山岩	完全実測	N区、No89	
293	石器	砥石	26.1	17.1	18.7	10960.0	安山岩	完全実測	N区、No50	
294	石器	砥石	26.7	18.65	15.0	10070.0	安山岩	完全実測	N区、No94	
295	石器	砥石	26.8	21.6	8.5	6,660.0	安山岩	完全実測	N区、No22	
296	石器	砥石	28.3	23.0	10.0	9,790.0	安山岩	完全実測	N区、No32	
297	石器	砥石	31.2	18.2	15.0	11300.0	安山岩	完全実測	N区、No66	
298	石器	砥石	—	—	—	—	安山岩	完全実測	N区、No10	
299	石器	砥石	—	—	—	—	安山岩	完全実測	N区、No25	
300	鉄器	刀子	—	身幅 1.2	棟厚 0.3	—	—	完全実測	S区	

甕の口縁部片で、内外面ともにハケ目調整が施される。27は内外面赤彩の壺の口縁部片であり、有段である。2点共に前期の所産であろう。28~31は須恵器で、28は坏、29~31は外面平行叩目、内面当具痕の甕である。平安時代の所産と思われる。32は灰釉陶器の碗である。内面施釉で、高台断面は四角形であり、K14期の可能性が高い。33~49は石器である。33は黒曜石製の打製石鏃、34・35は黒曜石製の錐である。36・37は削器、38・39は横刃形石器である。40~43は打製石斧、44~47は磨石、48は砥石、49は石核とおもわれる。

第61表 宮浦遺跡Ⅰ M3号溝址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏?	(13.8)	—	—	—	ヘラミガキ、黒色処理	底部周縁ヘラケズリ	回転実測	1層
2	土師器	皿	(12.5)	6.2	(3.1)	—	ヘラミガキ、黒色処理	付高台	完全実測	1層
3	土師器	碗?	—	(7.0)	—	—	—	回転糸切、付高台	回転実測	1層
4	須恵器	坏	—	(6.8)	—	—	—	回転糸切	回転実測	1層
5	須恵器	坏?	(15.4)	—	—	—	—	—	回転実測	1層
6	土師器	壺	—	—	—	—	—	ヘラケズリ	回転実測	1層
7	須恵器	甕	—	(24.2)	—	—	ヘラケズリ	平行叩目	回転実測・拓本	1層
8	石器	磨石	8.8	3.5	2.8	150.0	全面使用	—	完全実測	1層

第62表 宮浦遺跡Ⅰ M4号溝址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	弥生土器	壺	—	—	—	—	—	ヘラケズリ	破片実測・拓本	覆土

第63表 宮浦遺跡Ⅰ ビット出土遺物観察表(1)

遺構名	No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考
				口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面	
P6	1	石器	削器	4.0	5.4	0.3	10.9	安山岩		完全実測
	2	鉄器	不明	—	—	—	—			
P8	1	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	沈線、円形刺突、中期初頭		破片実測・拓本
	2	弥生土器	壺	—	—	—	—	ヘラケズリ		回転実測
	3	弥生土器	壺	—	—	—	—	ヘラ描沈線文		破片実測・拓本
	4	土師器	壺?	—	—	—	—			破片実測・拓本
P9	1	土師器	坏?	—	—	—	—	ヘラミガキ・黒色処理		破片実測・拓本
	2	土師器	ロクロ甕	—	—	—	—			破片実測・拓本
P10	1	須恵器	坏?	—	—	—	—			破片実測・拓本
	2	石器	砥石	15.2	7.9	3630.0	—	安山岩		完全実測
P15	1	土師器	坏?	—	—	—	—			破片実測
P16	1	弥生土器	壺	—	—	—	—	ヘラ描沈線文		破片実測・拓本
	2	弥生土器	壺	—	—	—	—	ヘラ描沈線文		破片実測・拓本
P18	1	弥生土器	壺	—	—	—	—			破片実測・拓本
P22	1	弥生土器	壺	—	—	—	—	ヘラ描沈線文		破片実測・拓本
	2	弥生土器	壺	—	—	—	—	ヘラ描沈線文		破片実測・拓本
P51	1	弥生土器	甕	(14.6)	—	—	—	口唇部縄文、頸部櫛描簾状文、体部櫛描波状文		回転実測・拓本
P52	1	石器	削器	4.2	1.3	1.2	6.3	黒曜石		完全実測
P58	1	弥生土器	壺	—	—	—	—	ハケ目		回転実測
P62	1	土師器	坏	—	—	—	—	回転糸切		回転実測・拓本
P63	1	土師器	坏	12.6	5.9	3.65	—	黒色処理	右回転糸切	完全実測
	2	土師器	坏	(13.4)	(6.8)	(4.3)	—	十字暗文・黒色処理	右回転糸切	回転実測
	3	土師器	坏?	—	—	—	—			回転実測
	4	土師器	ロクロ甕	—	—	—	—			回転実測
P74	1	弥生土器	壺	—	(7.0)	—	—	ヘラミガキ		回転実測
	2	弥生土器	壺	—	—	—	—			破片実測・拓本
	3	弥生土器	壺	—	—	—	—	櫛描条線		破片実測・拓本
	4	石器	打製石斧	(10.3)	(5.9)	(1.0)	(80.0)			完全実測
P76	1	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	縄文、中期		破片実測・拓本
	2	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	縄文、中期		破片実測・拓本
P77	1	弥生土器	甕	—	—	—	—	櫛描横位羽状文		破片実測・拓本
P78	1	土師器	坏	—	—	—	—	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切	回転実測
	2	須恵器	甕	—	—	—	—	平行叩目		破片実測・拓本

第 64 表 宮浦遺跡 I ピット出土遺物観察表(2)

遺構名	No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考
				口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面	
P78	3	石器	砥石	17.3	9.9	7.7	1660.0	全面使用		完全実測
	4	石器	砥石	14.4	19.1	7.9	3180.0	全面使用		完全実測
	5	石器	砥石	37.0	26.0	12.6	15480.0	全面使用		完全実測
P80	1	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	隆帯、縄文、中期		破片実測・拓本
P81	1	弥生土器	壺	—	—	—	—	赤彩、へら描沈線		破片実測・拓本
P83	1	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	条線、中期		破片実測・拓本
	2	弥生土器	甕	—	—	—	—	刻目、条線		破片実測・拓本
P87	1	土師器	器台	—	—	—	—	孔径 6 mm、古墳時代前期		回転実測
	2	土師器	台付甕	—	(10.0)	—	—	脚端部折返、古墳時代前期		回転実測
P120	1	弥生土器	甕	14.2	5.0	15.5	—	口唇部縄文、頸部櫛描条線、体部縦位羽状文・刻目		完全実測
	2	弥生土器	甕	—	—	—	—	櫛描条線		破片実測・拓本
	3	弥生土器	壺	—	—	—	—	—		破片実測・拓本
P121	1	弥生土器	壺	—	—	—	—	隆帯		破片実測・拓本
	2	石器	砥石	—	12.85	8.2	2580.0	全面使用		完全実測

第 65 表 宮浦遺跡 I 遺構外出土遺物観察表(1)

遺構名	No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考
				口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面	
試掘	1	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	含繊維、羽状縄文末端、前期「関山」		破片実測・拓本
	2	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	平行沈線、中期		破片実測・拓本
	3	弥生土器	甕	(15.8)	(5.3)	(22.3)	—	口唇部刻目、縦羽状条痕、底部布圧痕		完全実測・拓本
	4	土師器	坏	—	5.8	—	—	—	右回転糸切	完全実測・拓本
	5	土師器	碗	—	(7.2)	—	—	黒色処理、暗文	回転糸切、付高台	回転実測
	6	土師器	ロクロ甕	—	(4.4)	—	—	—	左回転糸切	回転実測・拓本
	7	土師器	甕	—	—	—	—	—	八ケ目	破片実測・拓本
	8	土師器	甕	—	—	—	—	八ケ目	八ケ目	破片実測・拓本
検出	1	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	縄文、中期後半		破片実測・拓本
	2	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	後期堀之内式		破片実測・拓本
	3	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	後期		破片実測・拓本
XIVキ2	4	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	中期後半「鱗状短沈線土器」		破片実測・拓本
	5	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	中期後半「加曾利E」		破片実測・拓本
XIVキ2	6	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	中期後半、平行沈線、縄文		破片実測・拓本
	7	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	中期後半「鱗状短沈線土器」		破片実測・拓本
	8	弥生土器	甕	(9.4)	—	—	—	口唇部押捺、刺突、「コ」字重文、中期前半		回転実測・拓本
	9	弥生土器	甕	—	5.1	—	—	中期後半?		完全実測
	10	弥生土器	甕	—	—	—	—	口唇部押捺、縦位条線、中期前半?		破片実測・拓本
	11	弥生土器	甕	—	—	—	—	波状文、縦位条線、中期後半栗林		破片実測・拓本
	12	弥生土器	甕	—	—	—	—	波状文、縦位条線、中期後半栗林		破片実測・拓本
13	弥生土器	甕	—	—	—	—	波状文、縦位条線、刺突、中期後半栗林		破片実測・拓本	
14	弥生土器	無頸壺	—	—	—	—	口唇部縄文、平行沈線、刺突、孔φ5mm		破片実測・拓本	

作業風景 (表土掘削)→



第 66 表 宮浦遺跡 I 遺構外出土遺物観察表 (2)

遺構名	No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考
				口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面	
検出	15	弥生土器	壺	-	-	-	-	縄文、波状文、中期後半栗林	破片実測・拓本	
	16	弥生土器	壺	-	-	-	-	弧線文、縄文、中期後半栗林	破片実測・拓本	
	17	弥生土器	壺	-	-	-	-	弧線文、縄文、中期後半栗林	破片実測・拓本	
	18	弥生土器	壺	-	-	-	-	縦位山形文、中期後半栗林	破片実測・拓本	
	19	弥生土器	壺	-	-	-	-	横位条線、中期後半栗林	破片実測・拓本	
	20	弥生土器	壺	-	-	-	-	縄文、横位条線、円形貼付文、中期後半栗林	破片実測・拓本	
	21	弥生土器	壺	-	-	-	-	縄文、へら描弧線文、中期後半栗林	破片実測・拓本	
	22	弥生土器	把手	-	-	-	-	赤彩、土製品の可能性有	完全実測	
Ⅸコ5	23	土師器	坏	(12.3)	(5.4)	(3.6)	-		右回転糸切	回転実測
Ⅸイ4	24	土師器	碗	-	(7.8)	-	-		付高台	回転実測
Ⅸコ5	25	土師器	皿	-	-	-	-	ヘラミガキ・黒色処理	付高台	回転実測
	26	土師器	甕	-	-	-	-	ハケ目	ハケ目	破片実測・拓本
	27	土師器	壺	-	-	-	-	ハケ目、赤彩	ハケ目赤彩、有段口縁	破片実測・拓本
Ⅸコ5	28	須恵器	坏	-	(5.4)	-	-		ヘラケズリ	回転実測
Ⅸイ4	29	須恵器	甕	-	-	-	-	ハケ目	平行叩目	破片実測・拓本
Ⅸイ4	30	須恵器	甕	-	-	-	-	当具痕	平行叩目	破片実測・拓本
Ⅸイ4	31	須恵器	甕	-	-	-	-	当具痕	平行叩目	破片実測・拓本
	32	灰釉陶器	碗	-	(7.6)	-	-	全面施釉	付高台(角)、K14?	回転実測
	33	石器	打製石鏃	1.9	1.1	0.5	0.7	黒曜石		完全実測
	34	石器	錐	2.1	1.8	0.5	1.3	黒曜石		完全実測
	35	石器	錐	-	3.8	2.1	-	黒曜石		完全実測
	36	石器	削器	6.9	5.9	0.7	36.8			完全実測
	37	石器	削器	7.0	8.2	1.2	65.4			完全実測
	38	石器	横刃形石器	6.5	14.0	0.7	79.6			完全実測
	39	石器	横刃形石器	7.5	14.0	1.6	175.0			完全実測
	40	石器	打製石斧	-	9.8	2.3	-			完全実測
	41	石器	打製石斧	-	-	2.9	-			完全実測
	42	石器	打製石斧	-	-	3.1	-			完全実測
	43	石器	打製石斧	-	-	-	-			完全実測
	44	石器	磨石	5.5	4.0	1.6	65.0			完全実測
	45	石器	磨石	7.7	5.7	5.6	290.0			完全実測
	46	石器	磨石	8.9	4.4	4.6	230.0			完全実測
Ⅹイ4	47	石器	磨石	11.8	7.4	3.3	554.0			完全実測
	48	石器	砥石	-	-	-	-			完全実測
	49	石器	石核?	4.8	4.7	1.8	60.1			完全実測



中学生の職場体験

第 67 表 宮浦遺跡 I 遺構計測表(1)

遺構名	検出位置	重複関係	長軸方位	長軸長	短軸長	深度	ピット	付属施設	備考	時期
H 1	XIVウ 4	なし	—	—	—	0.41	1、堀 1	周溝	床面上に炭化物散乱	弥中後半
H 2	XIVウ 2	なし	N-135° -W	—	—	—	4	—	支柱穴、床面のみ残存	奈平Ⅶ期
H 3	Ⅷカ 10	なし	N-0° -W	—	—	0.16	10、堀 3	周溝・間仕切	南壁に壁柱穴	弥中後半
H 4	Ⅷカ 2	なし	—	—	—	0.28	2、堀 1	—	—	奈平Ⅶ期
H 5	XIVウ 10	H6 を切る	N-5° -E	—	—	3.28	9、堀 3	—	東カマド	奈平Ⅶ期
H 6	Ⅷク 10	H5・F1・P68～70 に切られる	N-15° -W	(4.16)	4.08	0.08	1	—	—	不明
H 7	Ⅷコ 10	H8 を切る	N-0° -W	5.37	5.28	0.24	16、堀 4	周溝・ベット状遺構	—	奈平Ⅴ期
H 8	XIVコ 1	H7 に切られる	—	—	—	0.08	7	—	—	奈平Ⅶ期
H 9	Ⅸイ 8	H10・11・13 を切る	N-32° -W	4.96	4.88	0.48	10	—	—	奈平Ⅵ期
H10	Ⅸウ 8	H9・13 に切られる	—	—	—	0.16	5	—	—	奈平Ⅵ期
H11	Ⅸウ 9	H9・13 に切られる	—	—	5.64	0.20	6	出入口ピット	—	奈平Ⅴ期
H12	Xイ 6	M3 を切る	N-9° -W	3.20	3.04	0.20	3	周溝	—	奈平Ⅶ期
H13	Ⅸウ 8	H9 に切られ、H11 を切る	N-0° -W	4.00	—	0.24	—	—	—	奈平Ⅴ期
H14	XIVイ 10	F4・P85・86 に切られ、M5 を切る	—	—	4.64	0.24	9	周溝・土坑	平面五角形?	弥中前半
H15	XIVエ 10	D8 に切られる	—	—	—	0.24	1	—	—	弥中後半
H16	XIVカ 8	H17 を切る	—	—	—	0.24	5	—	—	古前
H17	XIVカ 9	H16 に切られる	N-0° -W	—	6.32	0.00	12	周溝・出入口ピット	楕円	弥中後半
H18	XIVキ 7	M4 を切る	—	—	—	0.08	4	—	—	奈平Ⅵ期
H19	XVア 8	H20 を切る	N-84° -E	—	—	0.12	2	周溝・間仕切	—	奈平Ⅶ期
H20	XVア 7	H19・D13 に切られる	—	—	—	—	17	炉	—	弥中後半
F 1	Ⅷキ 10	H6 を切る	N-84° -E	4.08	3.04	0.20	9	—	総柱	不明
F 2	Ⅸイ 10	なし	—	—	—	0.24	5	—	—	奈平Ⅶ期
F 3	Ⅸイ 10	なし	—	—	—	0.28	5	側柱	柱径φ16 cm	不明
F 4	XIVア 10	H14 を切る	—	—	—	0.36	4	側柱	柱径φ16 cm	弥中後半

第 68 表 宮浦遺跡 I 遺構計測表(2)

遺構名	検出位置	重複関係	長軸方位	長軸長	短軸長	深度	時期
D 1	XIVカ 2	なし	N-63° -E	2.60	1.60	0.32	奈平Ⅵ期
D 2	XⅢオ 5	なし	N-21° -E	0.96	0.56	0.16	不明
D 3	XⅢコ 4	M2 を切る	—	—	—	0.48	弥中後半
D 4	Xア 5	P67 を切る	N-0° -W	1.36	1.28	0.16	不明
D 5	XIVオ 2	P20 に切られる	N-35° -E	1.52	1.48	0.16	不明
D 6	XIVウ 2	なし	N-25° -E	2.16	2.08	0.24	弥中後半
D 7	XIVエ 8	D12 を切る	N-82° -W	2.32	1.88	0.24	奈平Ⅳ期
D 8	XXウ 1	H15 を切る	—	—	—	0.48	不明
D 9	XIVウ 9	D12 を切る	N-67° -W	2.20	1.92	0.52	弥中後半
D10	XIVカ 8	H17・P88 に切られる	—	—	—	0.4	弥中後半
D11	XIVカ 7	なし	N-0° -W	—	1.76	0.32	弥中後半
D12	XIVウ 9	D7・D9 に切られる	—	—	—	0.56	弥中後半
D13	XIVケ 6	P103 に切られる	N-71° -E	2.08	1.60	0.12	不明
D14	XVオ 5	なし	—	—	—	0.16	不明
D15	XVウ 5	P101 を切る	N-44° -W	2.44	1.12	0.56	不明
D16	XVイ 5	P99 に切られる	N-58° -W	1.12	0.68	0.16	不明
D17	XVウ 5	なし	N-84° -E	—	—	0.40	不明
D18	XVオ 4	なし	—	—	—	0.40	弥中後半
M 1	XⅢエ 3～6	なし	N-6° -E	13.76	1.84	0.32	古 I
M 2	XⅢ～XⅨ	D3 に切られる	N-0° -W	21.60	10.72	0.80	不明
M 3	Xイ 5	H2・P36・P37 に切られる	N-26° -W	8.00	1.60	0.16	不明
M 4	XIVケ 7	H18 に切られる	N-60° -E	4.80	0.64	0.16	不明
M 5	XXウ 1	H14 に切られる	N-14° -E	3.36	2.96	0.16	不明

第 69 表 宮浦遺跡 I ピット計測表

No	検出位置	長径	深度	覆土	No	検出位置	長径	深度	覆土	No	検出位置	長径	深度	覆土
P1	XIVオ2	0.330	0.233	10YR4/2	P42	XIVカ2	0.374	0.098	10YR4/2	P83	XIVエ10	0.977	0.250	10YR3/2
P2	XIVオ2	0.491	0.189	10YR3/1	P43	XIVカ1	0.498	0.099	10YR4/2	P84	XIVウ10	0.618	0.216	10YR3/2
P3	XIVオ2	0.369	0.154	10YR3/1	P44	XIVオ1	0.449	0.110	10YR4/2	P85	XIVウ10	0.227	0.108	10YR2/2
P4	XIVオ2	0.242	0.142	10YR3/1	P45	XIVオ1	0.284	0.131	10YR3/2	P86	XIVウ10	0.442	0.270	10YR2/2
P5	XIVオ1	0.484	0.158	10YR4/2	P46	XIVオ2	0.269	0.095	10YR4/2	P87	XIVエ9	0.436	0.199	10YR2/2
P6	XIVオ1	0.715	0.157	10YR4/2	P47	XIVオ2	0.338	0.086	10YR4/2	P88	XIVカ9	0.429	0.048	10YR2/2
P7	XIVオ1	0.534	0.192	10YR4/2	P48	XIVオ2	0.239	0.236	10YR4/2	P89	XIVケ5	0.549	0.321	10YR5/6
P8	XIVオ1	0.788	0.181	10YR4/2	P49	XIVオ2	0.276	0.311	10YR4/2	P90	XIVケ5	0.198	0.132	10YR2/2
P9	XIVオ1	0.551	0.096	10YR3/1	P50	XIVオ2	0.265	0.362	10YR4/2	P91	XIVク5	0.390	0.104	10YR2/2
P10	XIVオ1	0.248	0.063	10YR3/1	P51	XIVキ1	0.487	0.121	10YR3/2	P92	XIVク5	0.814	0.281	10YR3/2
P11	XIVオ2	0.419	0.114	10YR4/2	P52	XIVキ1	0.482	0.313	10YR3/2	P93	XIVク5	0.959	0.276	10YR3/2
P12	XIVオ2	0.267	0.074	10YR4/2	P53	XIVキ1	0.547	0.351	10YR3/2	P94	XIVケ5	0.307	0.228	10YR2/2
P13	XIVカ2	0.608	0.155	10YR4/2	P54	XIVキ1	0.292	0.304	10YR3/2	P95	XVイ7	0.294	0.135	10YR2/2
P14	XIVカ2	0.301	0.313	10YR3/1	P55	XIVオ3	0.342	0.214	10YR3/2	P96	XVイ6	0.252	0.102	10YR2/2
P15	XIVカ2	1.442	0.175	10YR3/1	P56	XIVク1	0.307	0.162	10YR3/2	P97	XVイ6	0.284	0.187	10YR5/4
P16	XIVキ1	0.324	0.345	10YR3/1	P57	XIVキ1	0.475	0.392	10YR3/2	P98	XVイ7	0.583	0.309	10YR2/2
P17	XIVエ2	0.309	0.080	10YR4/2	P58	VIIIキ1	0.363	0.134	10YR3/2	P99	XVイ6	0.815	0.344	10YR2/2
P18	XIVエ1	0.304	0.115	砂利	P59	VIIIク9	0.298	0.150	10YR3/2	P100	XVウ6	0.483	0.269	10YR2/2
P20	XIVカ2	0.333	0.353	10YR4/2	P60	VIIIク9	0.506	0.112	10YR3/2	P101	XIVイ6	0.743	0.280	10YR3/2
P21	XIVオ1	0.357	0.086	砂利	P61	VIIIク9	0.326	0.162	10YR3/2	P102	XIVイ7	0.431	0.069	10YR3/2
P22	VIIIキ1	0.419	0.189	10YR4/2	P62	VIIIク9	0.536	0.105	10YR3/2	P103	XIVケ7	0.517	0.091	10YR2/2
P23	XIVウ3	0.540	0.139	10YR4/2	P63	VIIIク9	0.400	—	10YR3/2	P104	XIVケ7	0.40	0.113	10YR2/2
P24	XIVエ3	0.458	0.124	10YR4/2	P64	Xイ4	—	—	10YR3/2	P105	XVオ6	0.292	0.234	10YR2/2
P25	Xア4	0.415	0.083	10YR5/2	P65	Xイ4	0.345	0.245	10YR3/2	P106	XVイ7	0.274	0.130	10YR2/2
P26	Xイ4	0.578	0.210	10YR2/2	P66	Xイ4	—	0.254	10YR3/2	P107	XVイ6	—	0.133	10YR2/2
P27	Xイ4	0.371	0.393	10YR2/2	P67	Xア5	0.412	0.177	10YR4/2	P108	XVウ7	0.303	0.083	10YR2/2
P28	Xイ4	0.430	0.290	10YR5/2	P68	XIVク1	0.214	—	10YR4/2	P109	XVウ6	0.337	0.184	10YR2/2
P29	Xア5	0.566	0.270	10YR5/2	P69	XIVク1	0.325	0.122	10YR4/2	P110	XVエ6	0.321	0.078	10YR2/2
P30	Xア5	0.300	0.107	10YR5/2	P70	VIIIケ10	0.474	0.089	10YR4/2	P111	XVエ6	0.587	0.113	10YR2/2
P31	Xイ5	0.399	0.138	10YR5/2	P71	XIVキ2	0.529	0.328	10YR4/2	P112	XVエ6	0.388	0.421	10YR2/2
P32	Xア4	0.493	0.064	10YR5/2	P72	XIVカ2	0.740	0.208	10YR4/2	P113	XVオ6	0.371	0.286	10YR2/2
P33	Xア4	0.784	0.089	10YR5/2	P73	XIVキ2	0.342	0.193	10YR3/2	P114	XVエ6	0.344	0.312	10YR2/2
P34	Xア5	0.298	0.118	10YR5/2	P75	IXア9	0.620	0.218	10YR4/2	P115	XVオ6	0.411	0.091	10YR2/2
P35	Xア5	0.341	0.270	10YR5/2	P76	XIVオ1	0.359	0.104	10YR3/2	P116	XVオ5	0.316	0.174	10YR2/2
P36	Xイ5	0.551	0.434	10YR2/2	P77	XIVオ1	—	0.042	10YR3/2	P117	XVエ6	0.659	0.112	10YR2/2
P37	Xイ4	0.506	0.274	10YR2/2	P78	XIVオ1	0.633	0.152	10YR3/2	P118	XVエ6	0.379	0.065	10YR2/2
P38	XIVク2	0.368	0.118	10YR4/2	P79	XIVオ1	0.372	0.132	10YR3/2	P119	XVエ6	0.621	0.430	10YR2/2
P39	XIVキ2	0.305	0.334	10YR4/2	P80	XIVオ2	—	0.069	10YR3/2	P120	XVオ6	0.489	0.125	10YR2/2
P40	XIVキ2	0.401	0.082	10YR4/2	P81	XIVイ10	0.382	0.170	10YR5/4	P121	XIVオ1	0.597	0.138	10YR2/2
P41	XIVキ2	0.477	0.091	10YR4/2	P82	XIVウ10	0.580	0.230	10YR5/4	P122	XIVエ6	0.394	0.104	10YR2/2

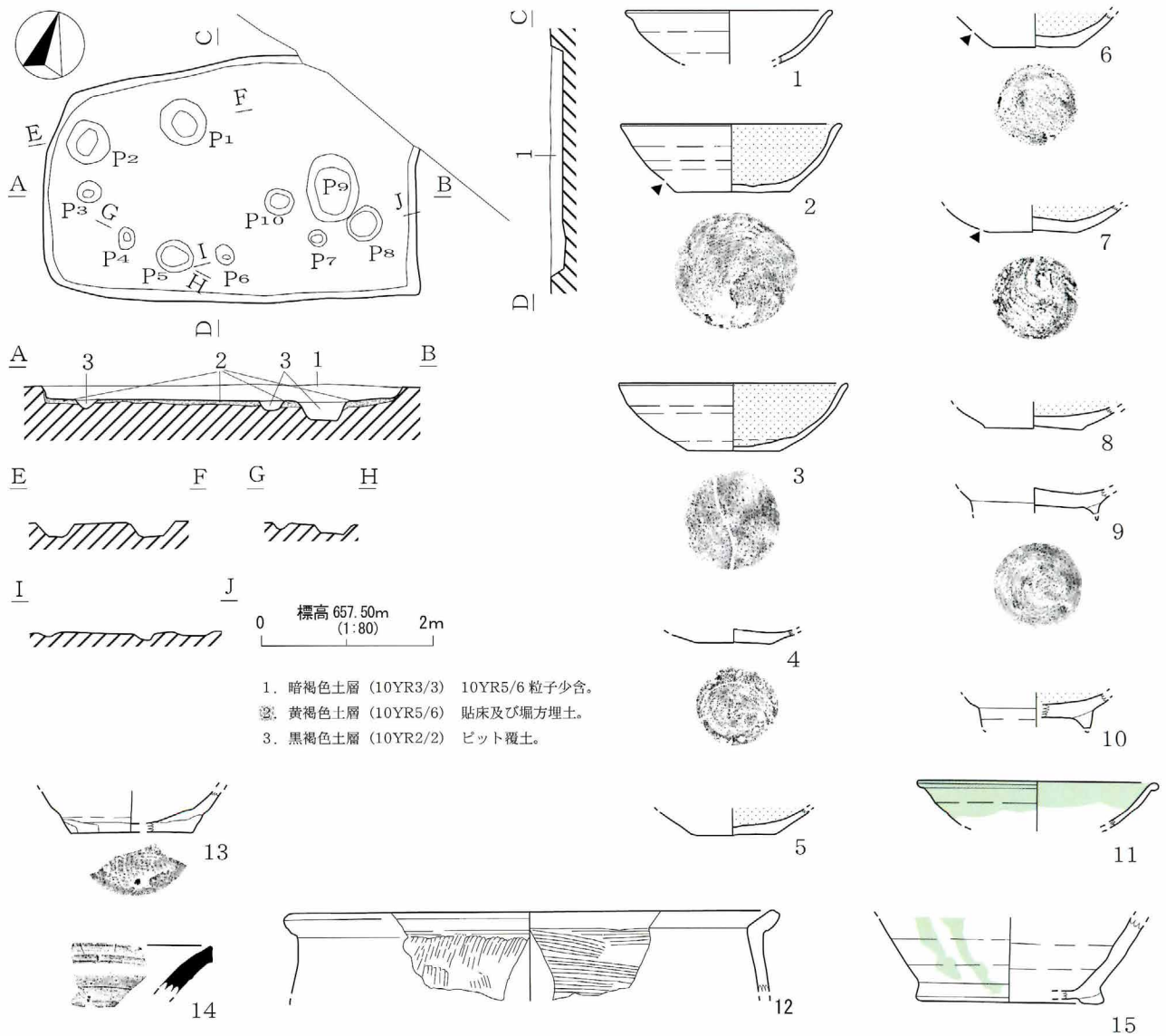
# 第VI章 北畑遺跡Ⅲ

## 第1節 住居址

### OH 1号住居址 (第100図)

Vキ8グリットで検出された。H 2号住居址を切る。N-75°-Eに長軸方位をとる。長軸長4.4m×短軸長2.88m×深度0.16mの規模を有する。ピットは床面上で10基検出されたが、支柱穴は判然としない。地山を少し掘り下げると川床礫になるため、堀方は認められない。カマド・周溝等の付属施設は有さない。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土した。土師器には坏(1~8)、碗(9・10)、甕(12・13)の器種が認められる。坏は1を除き黒色処理が施されるが、ヘラミガキは行われぬ。また、1は煤が付着しており、灯明に使用されたものと思われる。ロクロからの切り離しは右回転糸切で行われているが、3はヘラケズリである。碗も坏と同様である。甕は13のロクロ甕と12の甲斐型甕が認められる。須恵器は14の甕の口縁部片が出土している。灰釉陶器は



第100図 H 1号住居址



第70表 北畑遺跡Ⅲ H1号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(11.8)	—	—		煤付着		回転実測	ケン
2	土師器	坏	12.8	6.5	4.0		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	I区・ケン
3	土師器	坏	13.4	5.4	4.0		黒色処理	ヘラケズリ	完全実測・拓本	IV区
4	土師器	坏	—	(4.4)	—		黒色処理	右回転糸切	回転実測・拓本	ケン
5	土師器	坏	—	(4.4)	—		黒色処理	右回転糸切	回転実測	IV区
6	土師器	坏	—	4.8	—		黒色処理	右回転糸切→ヘラナデ	完全実測・拓本	Ⅲ区
7	土師器	坏	—	4.8	—		黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	ケン
8	土師器	坏	—	(5.7)	—		黒色処理	方向不明回転糸切	完全実測	Ⅲ区
9	土師器	碗	—	—	—		黒色処理	右回転糸切→付高台	回転実測・拓本	ケン
10	土師器	碗	—	—	—		黒色処理	付高台	回転実測	ケン
11	灰釉陶器	碗	—	—	—		ツケ掛け		回転実測	I・II区
12	土師器	甕	(28.0)	—	—		ハケ目、甲斐型		回転実測	P4
13	土師器	ロクロ甕	—	(7.0)	—		方向不明回転糸切→底部周縁ヘラケズリ		回転実測・拓本	II区
14	須恵器	甕	—	—	—				破片実測・拓本	Ⅲ区
15	灰釉陶器	瓶	—	(10.4)	—		回転ヘラケズリ、付高台 施釉		回転実測	I区

碗(11)と瓶(15)の器種が認められる。

以上の出土遺物から本址は奈良・平安時代Ⅶ期に比定され、10世紀前半の実年代が想定される。

#### OH2号住居址(第101・102図)

Vキ9グリットで検出された。H1・P186～P188に着られる。N-65°-Eに長軸方位をとる。長軸長4.32m、深度0.24mの規模を有する。北壁の中央部分にカマドが構築されていたが、堀方に近い状態まで破壊されていた。ピットは7基検出されたが主柱穴は判然としない。H1同様に堀方は認められない。本址はH1号住居址の旧住居と考えられる。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、石器が出土した。土師器には坏(1～19)、碗(20～24)、鉢(28)、甕(29～34)の器種が認められる。坏の内3・4は杓状であり、この2点と10・13・16以外は全てヘラミガキ後黒色処理が施されている。ロクロからの切り離しは回転糸切であるが、ヘラケズリ調整を加えるものもある。15は焼成後、底部に1ヶの孔が穿たれており、坏以外に2次利用されたようである。碗も坏同様であり、高台は付高台である。鉢は28が1点出土した。甕は32・33以外はロクロ甕である。32については土師器ではない、33は甕でない可能性もあるが判然としない。須恵器は甕の体部片が出土している。灰釉陶器は皿(25)、碗(26・27)の器種が認められる。大原2号～虎溪山1号窯式のものと思われる。石器は37の砥石が1点出土している。

以上の出土遺物から本址は奈良・平安時代Ⅶ期に比定され、10世紀前半の実年代が想定されるが、重複関係どおりH1よりは僅かに古い土器様相が認められる。

#### OH3号住居址(第103図)

Vオ9グリットで検出された。P55～57・104・204に切られ、北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。N-24°-Wに長軸方位をとる。深度0.16mの規模である。ピットは12基検出されたが、主柱穴は判然としない。調査範囲にはカマドは存在しなかった。

遺物は土師器が3点出土している。器種は坏(1・2)、ロクロ甕(3)が認められる。

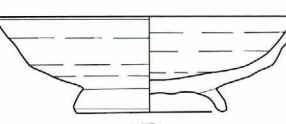
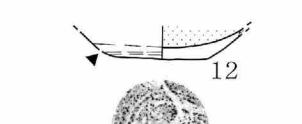
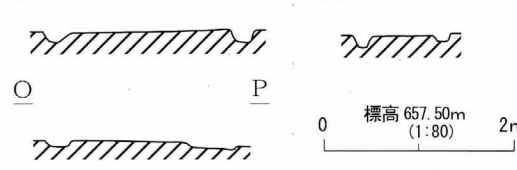
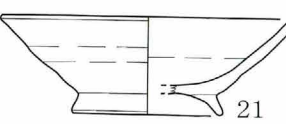
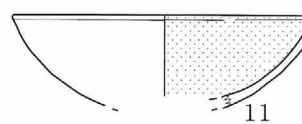
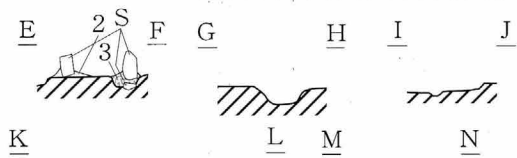
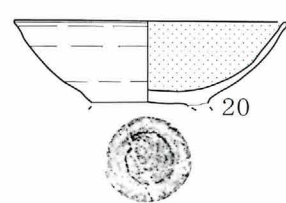
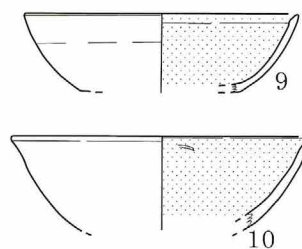
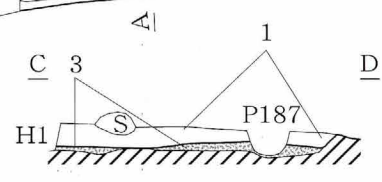
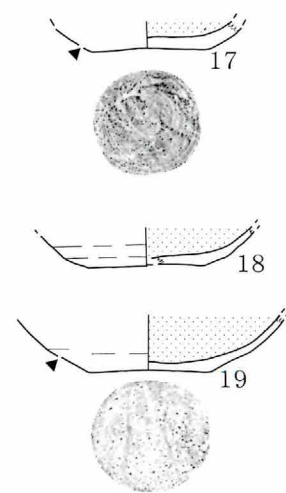
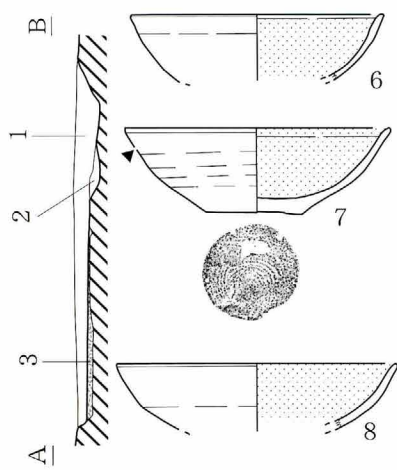
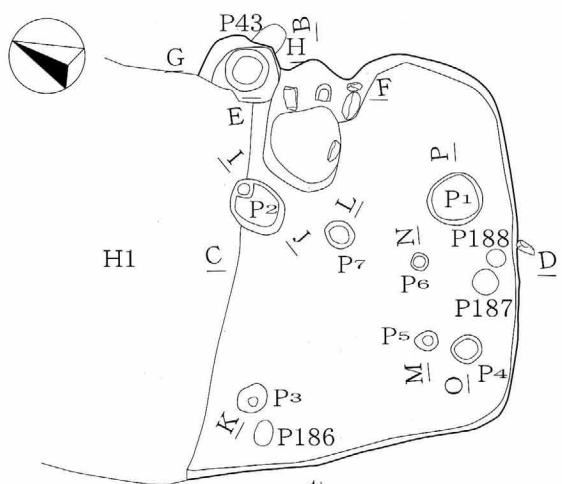
以上の出土遺物から本址は奈良・平安時代Ⅶ期に比定され、10世紀前半の実年代が想定される。

#### OH4号住居址(第104図)

XIカ1グリットで検出された。Ta2・P69・94・109・197・198・203に切られる。床面が部分的に残存していただけであり、出土遺物も皆無であるため規模、時期共に不明である。

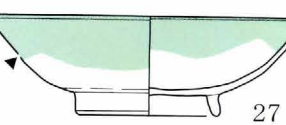
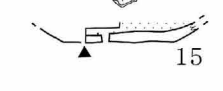
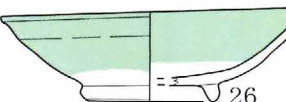
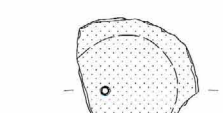
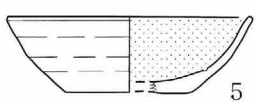
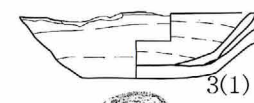
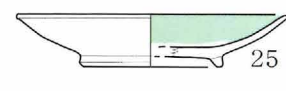
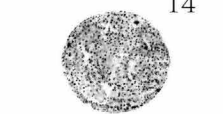
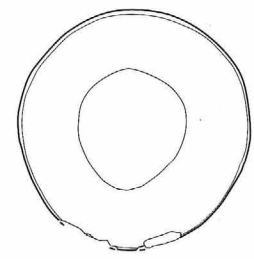
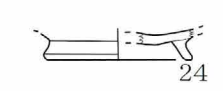
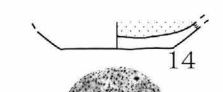
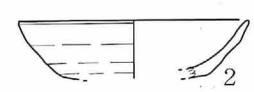
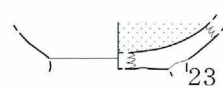
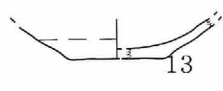
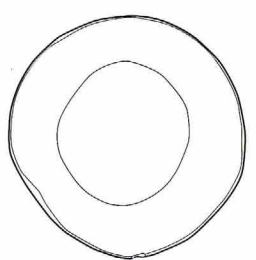
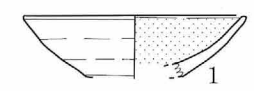
## 第2節 竪穴建物址

#### OTa1号竪穴建物址(第105・106図)

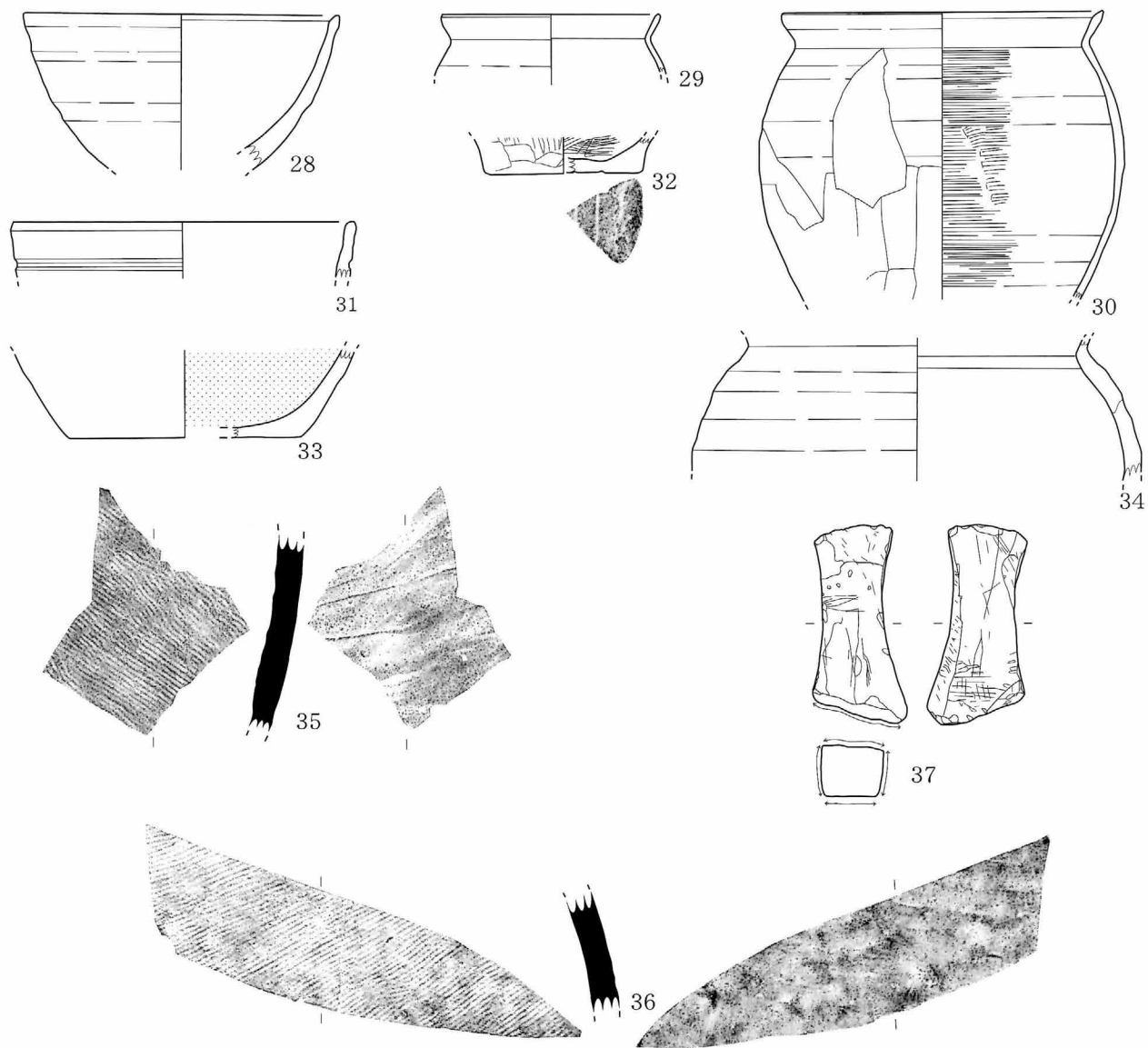


標高 657.50m  
(1:80) 2m

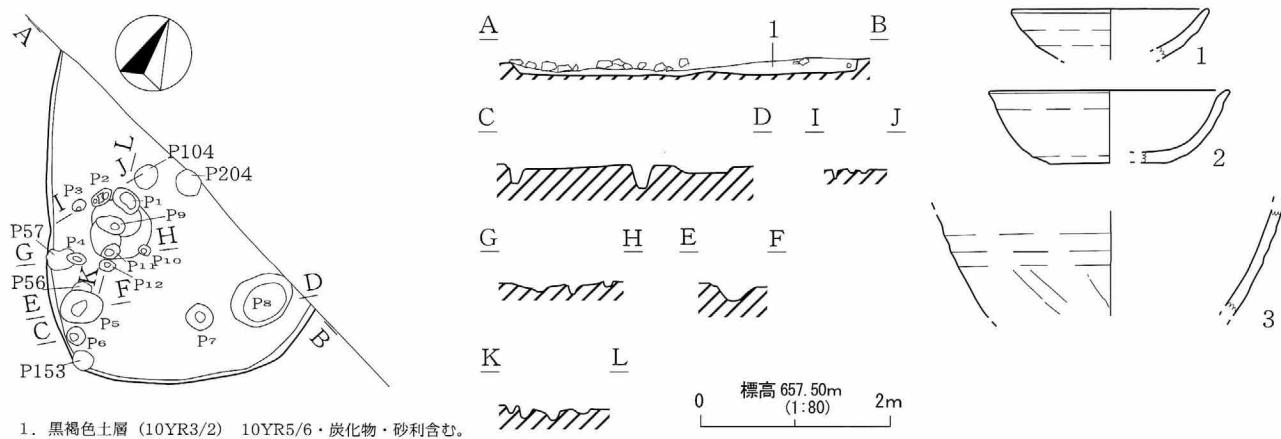
- 1. 暗褐色土層 (10YR3/3) 10YR5/6 少含。
- 2. 黄褐色土層 (10YR5/6) 糞土・炭化物少含。
- 3. 黄褐色土層 (10YR5/6) 10YR3/2 含む。貼床・堀方埋土。



第101图 H2号住居址(1)



第102図 H2号住居址 (2)



第103図 H3号住居址

第71表 北畑遺跡Ⅲ H2号住居址出土遺物観察表

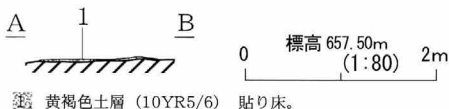
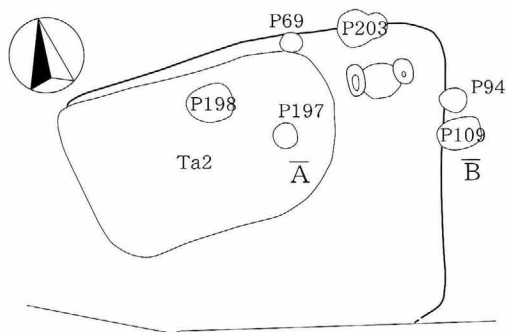
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	11.8	—	—		ミガキ・黒色処理		回転実測	Ⅲ区
2	土師器	坏	12.2	—	—		ミガキ・黒色処理?		回転実測	Ⅱ区
3	土師器	杓状坏	12.2/12.9	4.2	3.05/3.8				完全実測・拓本	No1
4	土師器	杓状坏	12.4/12.9	6.0/6.3	3.7/3.5				完全実測・拓本	No3
5	土師器	坏	(12.7)	(6.6)	(4.1)		ミガキ・黒色処理	方向不明回転糸切	回転実測	Ⅲ・Ⅳ区
6	土師器	坏	(13.4)	—	—		ミガキ・黒色処理		回転実測	Ⅳ区・ホリ
7	土師器	坏	14.0	5.0	4.6		ミガキ・黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	Ⅱ区
8	土師器	坏	(14.0)	—	—		ミガキ・黒色処理		回転実測	Ⅱ区
9	土師器	坏	(14.4)	(8.4)	(4.15)		ミガキ・黒色処理		回転実測	P7・Ⅱ区
10	土師器	坏	(16.0)	—	—		ナデ・黒色処理	ナデ	回転実測	Ⅰ区
11	土師器	坏	(16.2)	—	—		ミガキ・黒色処理		回転実測	Ⅱ区
12	土師器	坏	—	5.0	—		ミガキ・黒色処理	左回転糸切	完全実測・拓本	ケン
13	土師器	坏	—	5.4	—			ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ区
14	土師器	坏	—	5.8	—		ミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	完全実測・拓本	Ⅱ区
15	土師器	坏	—	5.8	—		ミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	完全実測	ケン
16	土師器	坏	—	(5.8)	—			方向不明回転糸切	回転実測	P2
17	土師器	坏	—	6.0	—		ミガキ・黒色処理	右回転糸切	完全実測・拓本	Ⅱ区
18	土師器	坏	—	(6.2)	—		ミガキ・黒色処理	左回転糸切	回転実測	Ⅱ区
19	土師器	坏	—	6.2	—		ミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	完全実測・拓本	Ⅱ区
20	土師器	碗	14.2	—	—		ミガキ・黒色処理	回転糸切→付高台	完全実測・拓本	Ⅱ区
21	土師器	碗	(15.6)	(7.7)	(5.15)			回転糸切→付高台	回転実測	Ⅲ区
22	土師器	碗	(16.4)	(8.0)	(5.05)		黒色処理消失	回転糸切→付高台	回転実測・拓本	No2
23	土師器	碗	—	(5.2)	—		ミガキ・黒色処理	回転糸切→付高台	回転実測	カマド
24	土師器	碗	—	7.7	—		ミガキ・黒色処理	回転糸切→付高台	完全実測	Ⅱ区
25	灰釉陶器	皿	(14.1)	(7.0)	(2.8)		見込円滑・ツケ掛、回転糸切→付高台		回転実測	ケン
26	灰釉陶器	碗	16.0	6.6	4.7		見込円滑・刷毛、回転糸切→付高台		完全実測	Ⅱ区
27	灰釉陶器	碗	16.4	7.0	5.3		見込円滑・ツケ掛、回転糸切→付高台		完全実測	Ⅰ・Ⅱ区
28	土師器	鉢	(18.2)	—	—		ナデ	ナデ	回転実測	Ⅱ区
29	土師器	ロクロ甕	(12.6)	—	—		ナデ	ナデ	回転実測	Ⅱ区
30	土師器	ロクロ甕	(18.6)	—	—		ナデ・カキ目	ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区・P6
31	土師器	ロクロ甕	(19.6)	—	—				回転実測	P2
32	土師器	甕	—	(9.2)	—		ハケ目	ハケナデ・ヘラケズリ	回転実測・拓本	カマド
33	土師器	甕?	—	(13.2)	—		黒色処理	ナデ	回転実測	Ⅱ区
34	土師器	ロクロ甕	—	—	—		ナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ区
35	須恵器	甕	—	—	—		ヘラケズリ	叩目	破片実測・拓本	ケン
36	須恵器	甕	—	—	—		当具痕→ヘラケズリ	叩目	破片実測・拓本	Ⅱ区・ケン
37	石器	砥石	11.6	3.75	3.05	298.0	使用面5面		完全実測	ケン

第72表 北畑遺跡Ⅲ H3号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(10.6)	—	—				回転実測	ケン
2	土師器	坏	(12.8)	(6.4)	(3.8)			方向不明回転糸切	回転実測	ケン
3	土師器	ロクロ甕	—	—	—			ヘラケズリ	回転実測	ケン

Vコ8グリットで検出された。P20に切られる。N-10°-Wに長軸方位をとる。長軸長は北方向に調査区外に延びるため不明であるが、短軸長5.84m×深度0.48mの規模である。複数の堅穴が連結した形態であり、大型の建物である。25基検出されたピットは全てが柱穴と思われる。火処等は調査範囲には存在しなかった。床面は貼床状に構築されるが、堀方は認められなかった。壁の立ち上がりは緩やかであり、古代の堅穴住居址のように垂直ではない。

遺物は須恵器、陶器、磁器、鉄製品が出土している。須恵器は1の甕片が出土しているが、混入であろう。陶器は瀬戸前期Ⅱの瓶子(2)、古瀬戸の前期おろし皿(3)、常滑の甕(4・5)が認められる。磁器は中国龍泉窯の青磁が出土している。碗(6)、盤(7)、皿(8)の器種が認められる。また、図化できないが、青白磁の水注が出土している。これらの陶磁器の年代は2が13C前半、3が13C、4・5は大まかに中世、6・8・9は13C、7は13世紀後半である。鉄製品(10~25)は釘・鏝であり、本址の上屋に使用されていたものであろう。



黄褐色土層 (10YR5/6) 貼り床。

第104図 H4号住居址

以上の出土遺物から、本址の時期は鎌倉時代13Cに比定される。

○Ta2号竪穴建物址 (第107図)

Vカ10グリットで検出された。H4号住居址を切り、P197・198に切られる。N-87° - Eに長軸方位をとり、長軸長2.8m×短軸長1.76m×深度0.12mの規模を有する。ピット、火処等、周溝等は有さない。堀方も認められない。

遺物も皆無であり、時期・性格共に不明である。

第3節 土坑

○OD1号土坑 (第108図)

VIイ7グリットで検出された。P1に切られる。西方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.24mの規模である。平面形は不明、断面は逆梯形である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

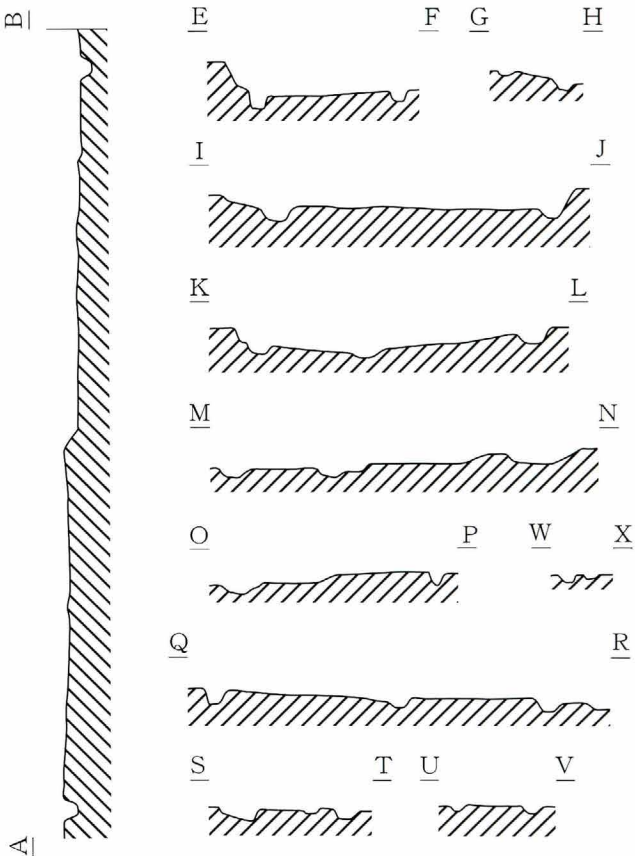
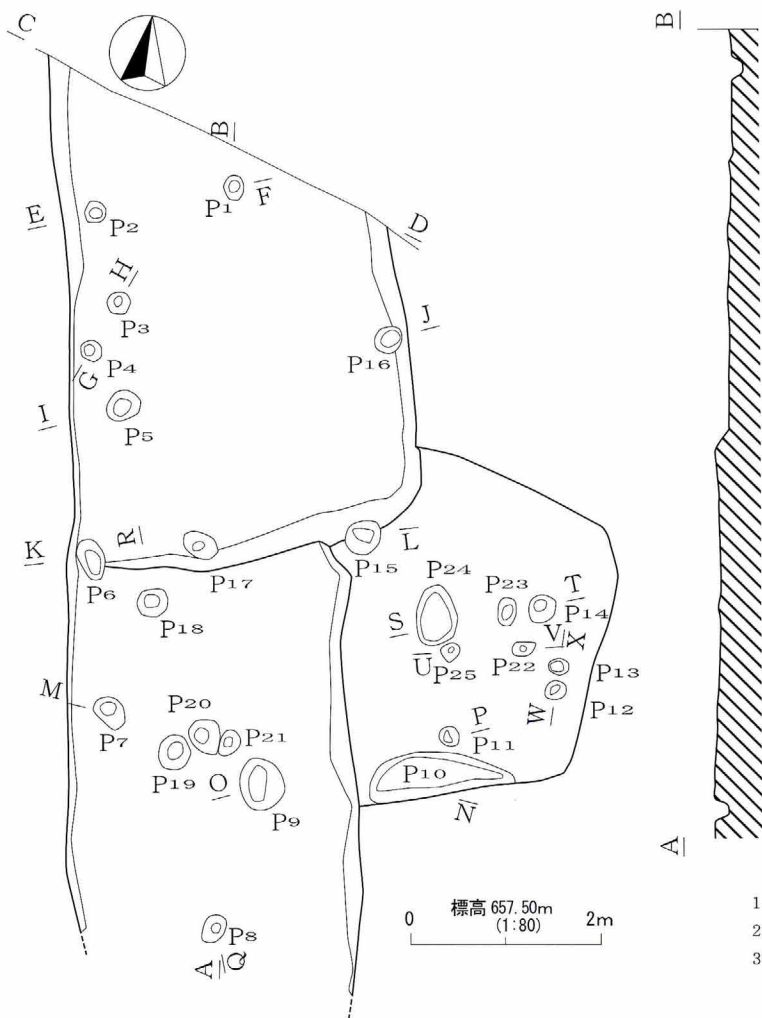
○OD2号土坑 (第109図)

VIア7グリットで検出された。P161に切られる。N-82° - Eに長軸方位をとる。長軸長2.0m×短軸長1.92m×深度0.12mの規模を有する。平面方形、断面逆梯形の形態である。

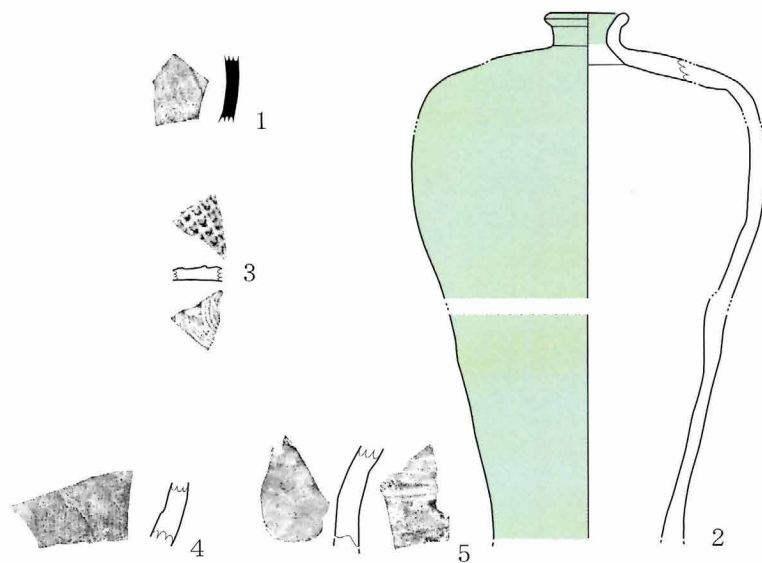
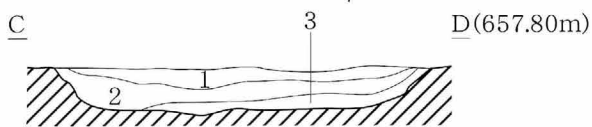
出土遺物は13C後半の常滑焼の甕片(1)と鉄釘(2)が認められることから、本址の時期は13C後半と思われる。

第73表 北畑遺跡Ⅲ Ta1号竪穴建物址出土遺物観察表

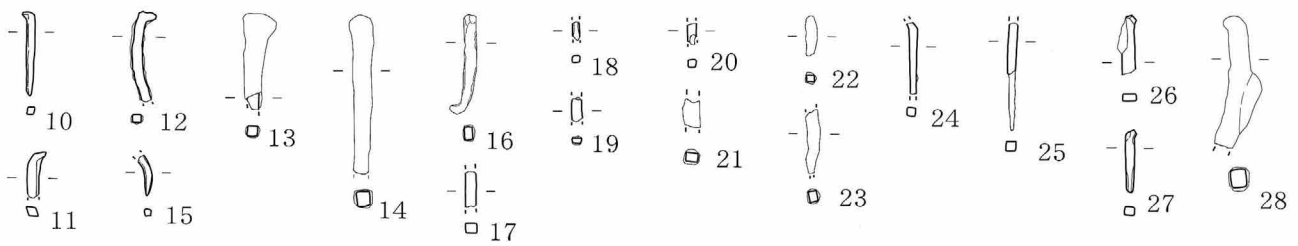
No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	須恵器	甕	-	-	-			平行叩目	破片実測・拓本	V区
2	陶器	瓶子	(4.4)	-	-			瀬戸前期Ⅱ13C前半	回転実測	V区
3	陶器	おろし皿	-	-	-			古瀬戸前期13C	破片実測・拓本	Ⅱ区
4	陶器	甕	-	-	-			常滑中世	破片実測・拓本	ケン
5	陶器	甕	-	-	-			常滑中世	破片実測・拓本	Ⅱ区
6	磁器	碗	(16.8)	(5.4)	7.2			青磁 龍泉窯13C、連弁文	回転実測	Ⅲ区
7	磁器	盤	(22.6)	(11.35)	(6.3)			青磁 龍泉窯13C後半、見込に魚	回転実測	Ⅱ・V区
8	磁器	皿	(23.0)	(12.0)	(5.7)			青磁 龍泉窯13C	回転実測	V区
9	磁器	水注	-	-	-			青白磁、凶化不可、13C	未凶化	V区
10	鉄製品	釘	4.4	0.4	0.4	(1.5)			完全実測	Ⅱ区
11	鉄製品	釘	-	0.5	0.5	(1.3)			完全実測	床
12	鉄製品	釘	-	0.5	0.4	(3.2)			完全実測	I区
13	鉄製品	釘	-	0.5	0.5	(10.8)			完全実測	Ⅱ区
14	鉄製品	釘	-	0.7	0.8	(13.9)			完全実測	I区
15	鉄製品	釘	-	0.3	0.3	(0.8)			完全実測	覆土
16	鉄製品	釘	-	0.4	0.7	(4.8)			完全実測	V区
17	鉄製品	釘?	-	0.6	0.5	(0.9)			完全実測	V区
18	鉄製品	釘	-	0.4	0.4	(0.1)			完全実測	V区
19	鉄製品	釘	-	0.5	0.3	(0.4)			完全実測	V区
20	鉄製品	釘	-	0.4	0.4	(0.3)			完全実測	V区
21	鉄製品	釘	-	0.7	0.5	(1.1)			完全実測	V区
22	鉄製品	釘	-	0.5	0.4	(1.0)			完全実測	V区
23	鉄製品	釘	-	0.5	0.6	(1.1)			完全実測	V区
24	鉄製品	釘	-	0.5	0.5	(1.5)			完全実測	I区
25	鉄製品	釘	-	0.5	0.5	(3.2)			完全実測	V区
26	鉄製品	鏝	-	0.7	0.4	(3.2)			完全実測	覆土
27	鉄製品	鏝	-	0.5	0.4	(1.4)			完全実測	V区
28	鉄製品	?	-	0.8	0.8	(20.9)			完全実測	V区



1. 黑褐色土層 (10YR3/2) φ2 cm以下砂利多含。10YR5/6 粒子含む。
2. 黑褐色土層 (10YR2/2) φ3 cm以下砂利多含。10YR5/6 粒子含む。
3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) φ3 cm以下砂利多含。10YR5/6 粒子含む。



第 105 図 Ta1 竖穴建物址 (1)



第106図 Ta1号竪穴住居址(2)

第74表 北畑遺跡Ⅲ 土坑出土遺物観察表

遺構名	No.	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考
				口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面	
D 2	1	陶器	甕	—	—	—	—	常滑 13C 後半		破片実測・拓本
	2	鉄製品	釘	—	0.6	0.6	6.1			完全実測
D 5	1	陶器	壺	(16.0)	—	—	—	常滑 13C 後半		回転実測
	2	陶器	甕	—	—	—	—	常滑 13C 後半		破片実測・拓本
	3	鉄製品	釘	(9.4)	(1.0)	(1.0)	(17.1)			完全実測
D 8	1	陶器	鉢 or 山茶碗	—	—	—	—	尾張産 13C 中葉		破片実測・拓本
D 11	1	陶器	壺	—	—	—	—	常滑 13C 後半		破片実測・拓本

#### OD 3号土坑 (第110図)

VIア6グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。東方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.2mの規模である。平面は判然としないが、断面は逆梯形の形態である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

#### OD 4号土坑 (第111図)

VIア6グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-56°-Eに長軸方位をとり、長軸長1.2m×短軸長0.72m×深度0.16mの規模を有する。平面楕円、断面逆梯形の形態である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

#### OD 5号土坑 (第112図)

VIア7グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-31°-Eに長軸方位をとる。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。短軸長1.2m×深度0.12mの規模である。平面楕円、断面逆梯形の形態である。

出土遺物は常滑焼の壺(1)、甕(2)、鉄釘(3)が認められる。1の壺は13C後半の特徴を備えており、本址の時期も13C後半を想定しておく。性格については不明である。

#### OD 6号土坑 (第113図)

Vケ7グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.24mの規模である。平面は判然としないが、断面は逆梯形の形態である。覆土中には多量の礫が包含されていた。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

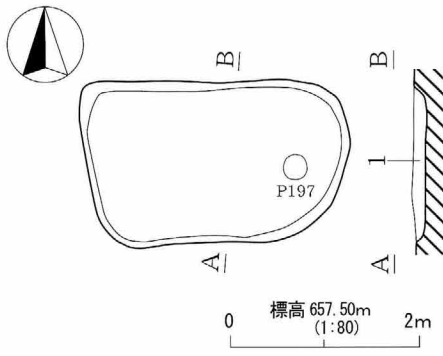
#### OD 7号土坑 (第114図)

Vケ7グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.16mの規模である。平面は判然としないが、断面は逆梯形の形態である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

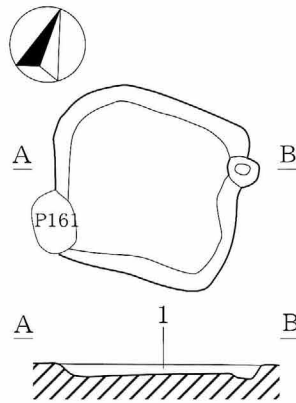
#### OD 8号土坑 (第115図)

Vオ9グリットで検出された。P 209を切る。N-69°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.84m×短軸長0.8m×深度



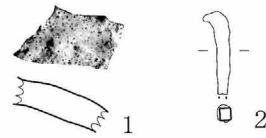
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 砂利含む。10YR5/6 少含。

第 107 図 Ta2 竪穴建物址

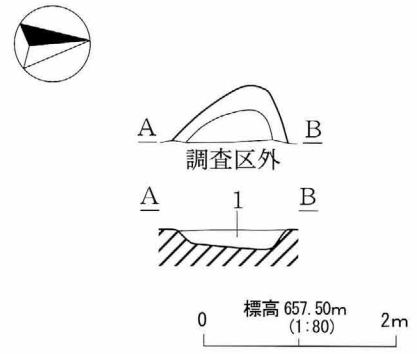


1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 砂利・10YR5/6 含む。

第 109 図 D2 号土坑

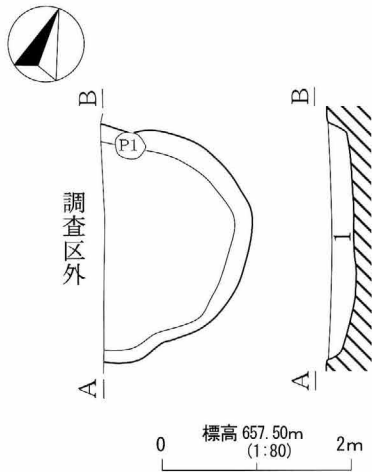


第 109 図 D2 号土坑



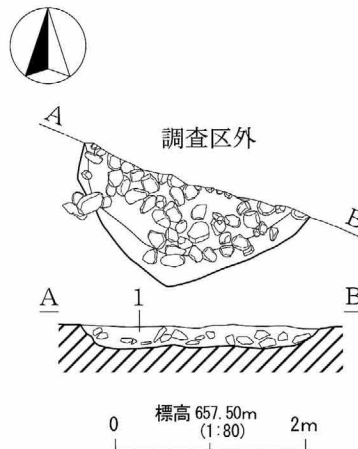
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 砂利含む。10YR5/2 多含。

第 110 図 D3 号土坑



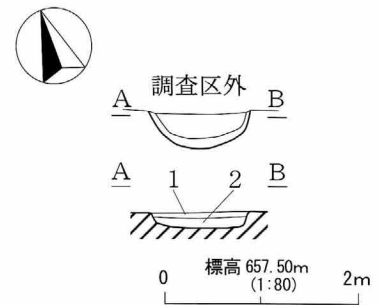
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 砂利・10YR5/6 含む。

第 108 図 D1 号土坑



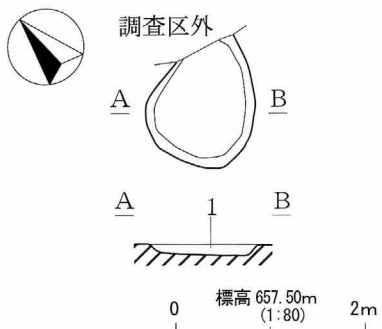
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR5/6 少含。

第 113 図 D6 号土坑



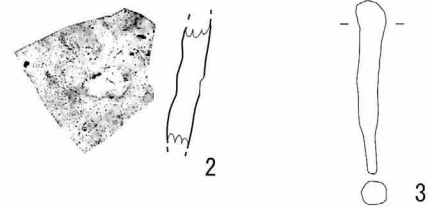
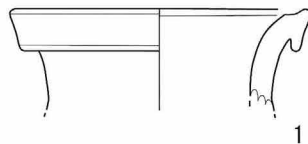
1. にぶい黄橙色土層 (10YR6/4) 10YR5/6 多含。  
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 含む。

第 114 図 D7 号土坑



1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 炭化物・焼土粒子含む。

第 112 図 D5 号土坑





0.24mの規模を有する。平面楕円、断面逆梯形の形態で、中央北よりの底面上には2ヶの礫が存在する。

出土遺物は、13C中葉の尾張産の山茶碗か鉢の口縁部片が1点認められる。本址の時期についても13C中葉を想定しておく。

#### OD 9号土坑 (第116図)

Vカ10グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-115° - Eに長軸方位をとる。長軸長1.2m×短軸長0.8m×深度0.12mの規模を有する。平面楕円、断面逆梯形の形態である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

#### OD 10号土坑 (第117図)

XIカ1グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。深度0.2mの規模を有する。平面は判然としないが、断面は逆梯形の形態である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

#### OD 11号土坑 (第118図)

Vオ10グリットで検出された。P222に切られる。N-26° - Wに長軸方位をとる。深度0.2mの規模を有する。平面円、断面逆梯形の形態である。覆土中には炭化物を含んでいる。

出土遺物は13C後半の常滑焼壺の底部片が1点認められる。本址の時期についても13C中葉を想定しておく。

#### OD 12号土坑 (第119図)

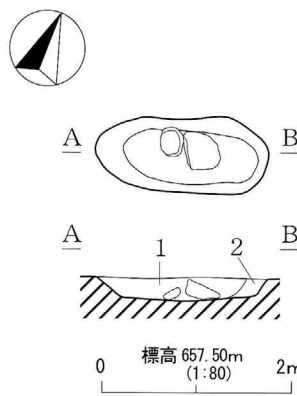
XIア9グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-21° - Eに長軸方位をとる。長軸長1.76m×短軸長0.92m×深度0.4mの規模を有する。平面楕円、断面は2段落の逆梯形の形態である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

### 第4節 ピット

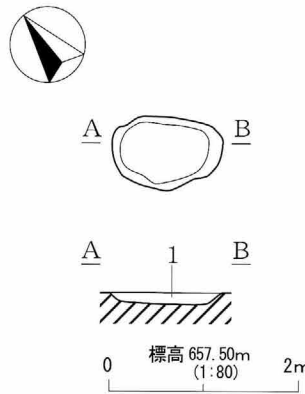
#### OPピット (第120~122図)

調査区西半部分に集中して構築されていた。Ta1南西部分に分布が希薄なのは、地



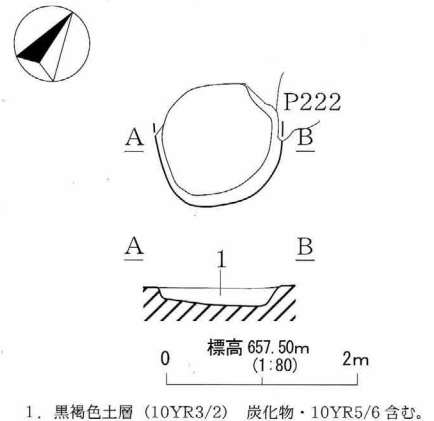
- 1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 少含。
- 2. 黄褐色土層 (10YR5/6) 10YR4/2 少含。

第115図 D8号土坑



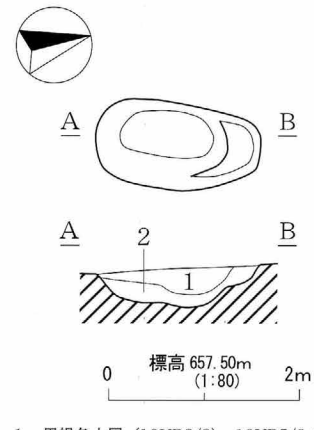
- 1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 少含。

第116図 D9号土坑



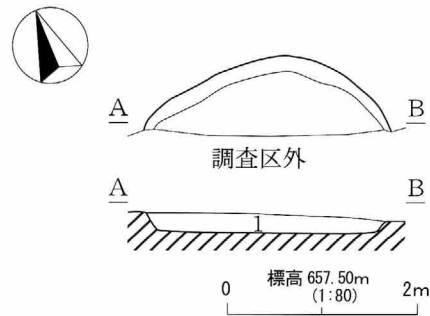
- 1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 炭化物・10YR5/6 含む。

第118図 D11号土坑



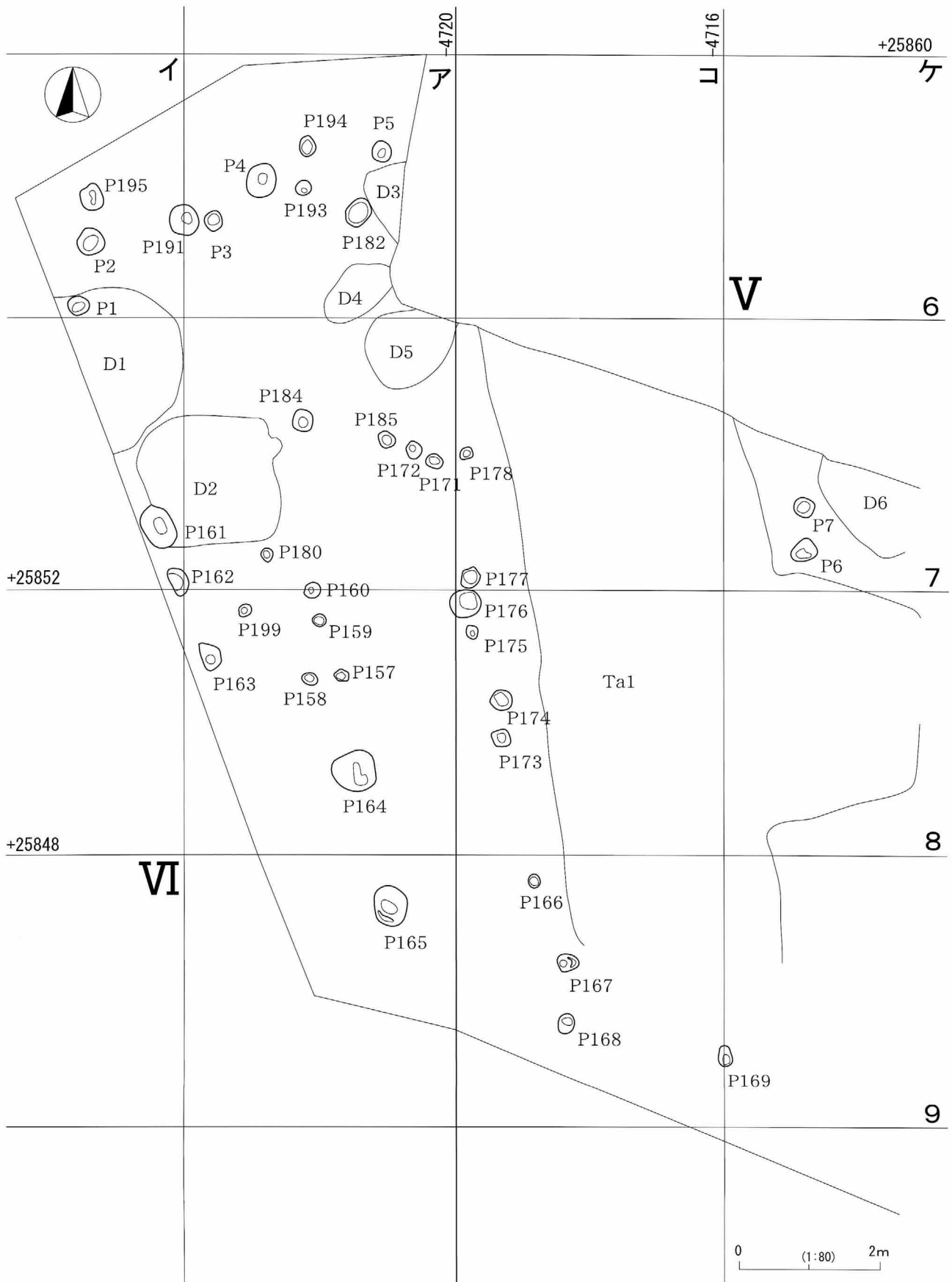
- 1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR5/6 少含。
- 2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR5/6 少含。

第119図 D12号土坑

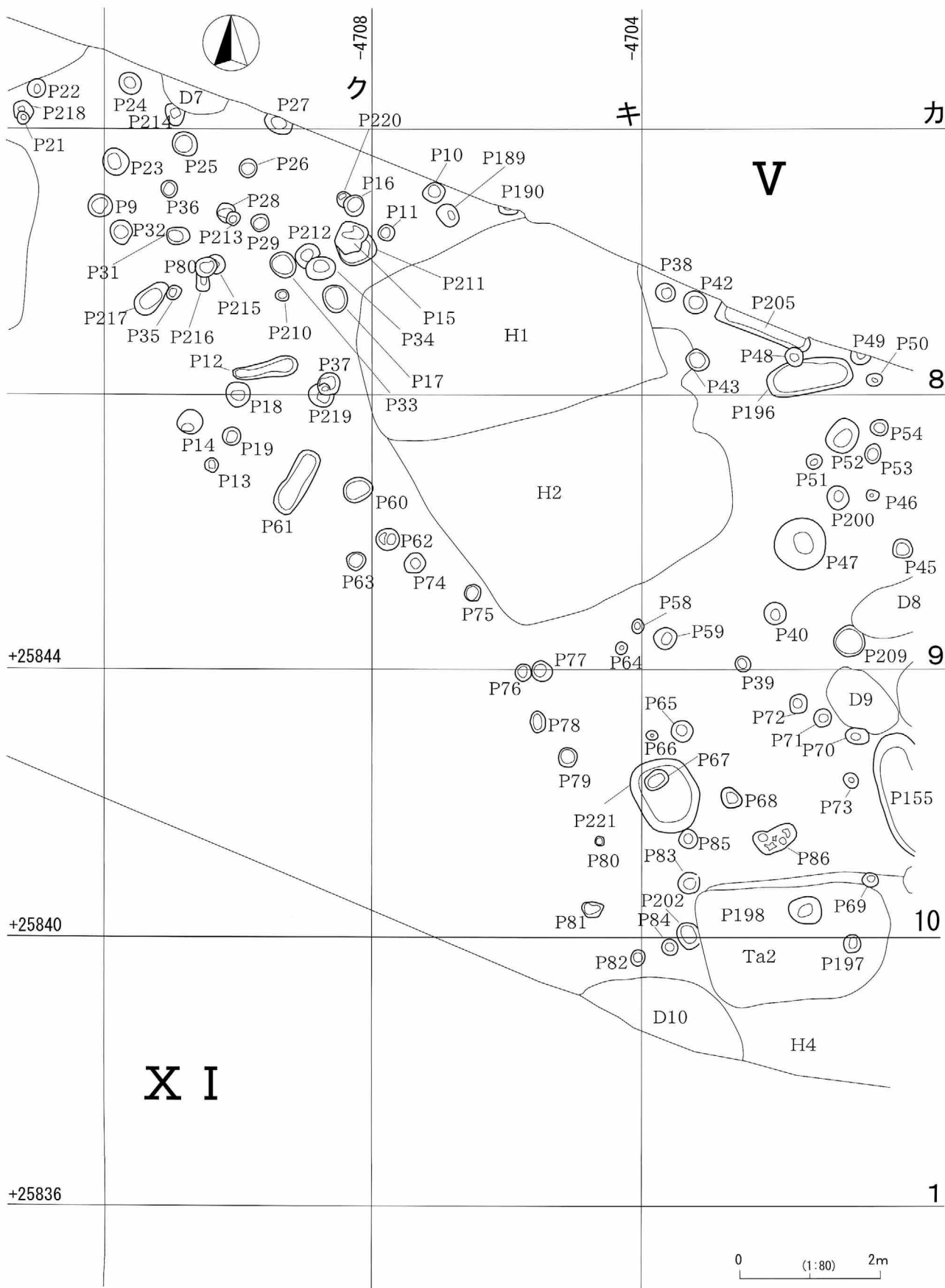


- 1. 黒褐色土層 (10YR3/2) φ2cm以下砂利・10YR5/6 多含。

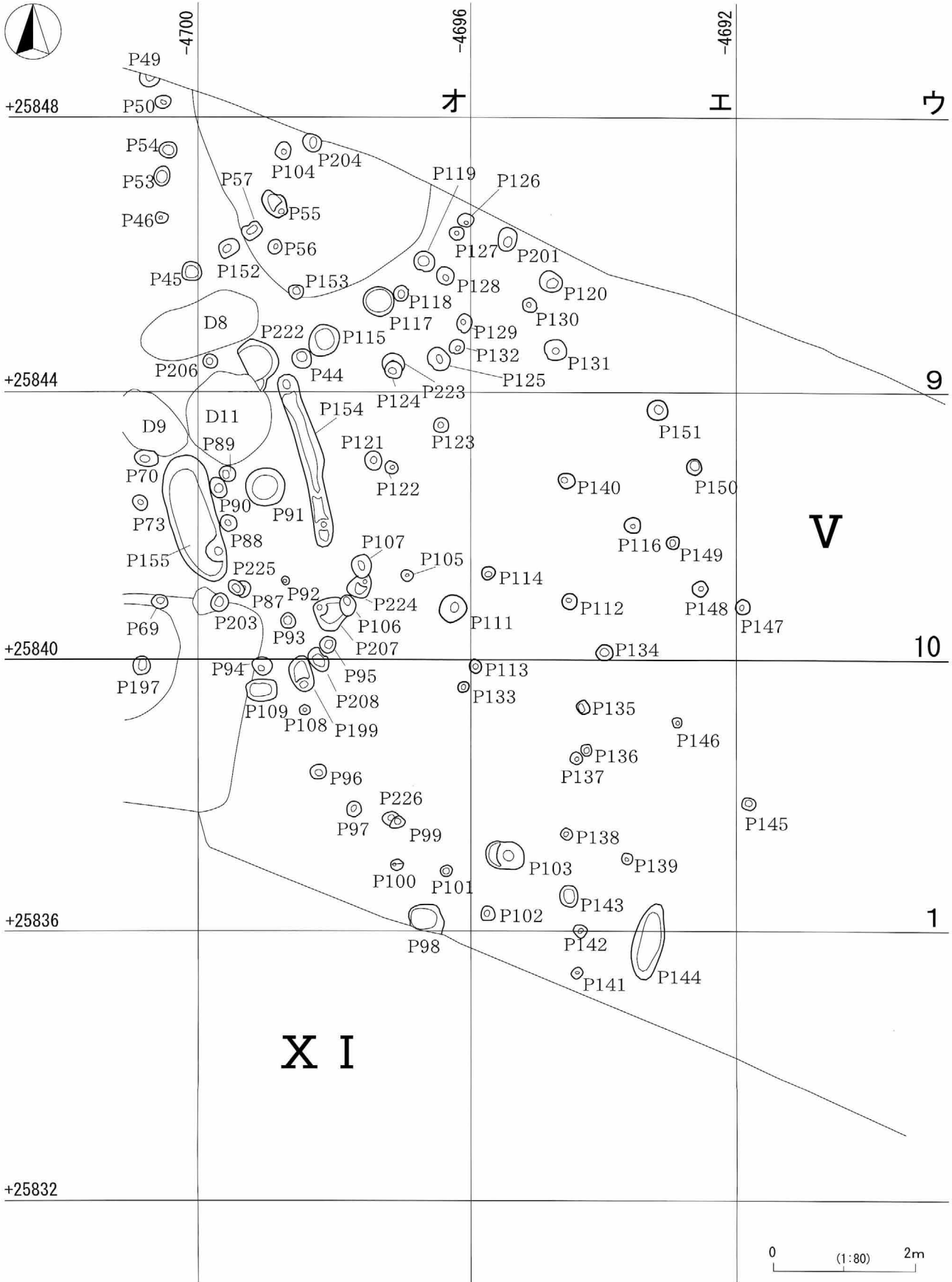
第117図 D10号土坑



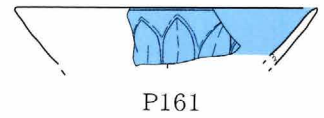
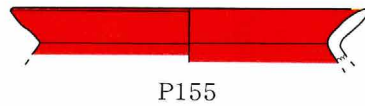
第 120 図 ピット平面図 (1)



第121図 ビット平面図(2)



第 122 図 ピット平面図 (3)



第123図 Pit出土遺物

山が片貝川の氾濫による川床礫で覆われており、ピットを構築することが不可能であったためである。時期的には中世が大半を占めるものとする。また、性格は柱穴と思われるが、その配置に規則性を見出すことは出来なかった。

以下、各ピット毎に出土遺物の概要を述べていく。

P10ー常滑焼の壺片が1点出土している。時期は中世である。

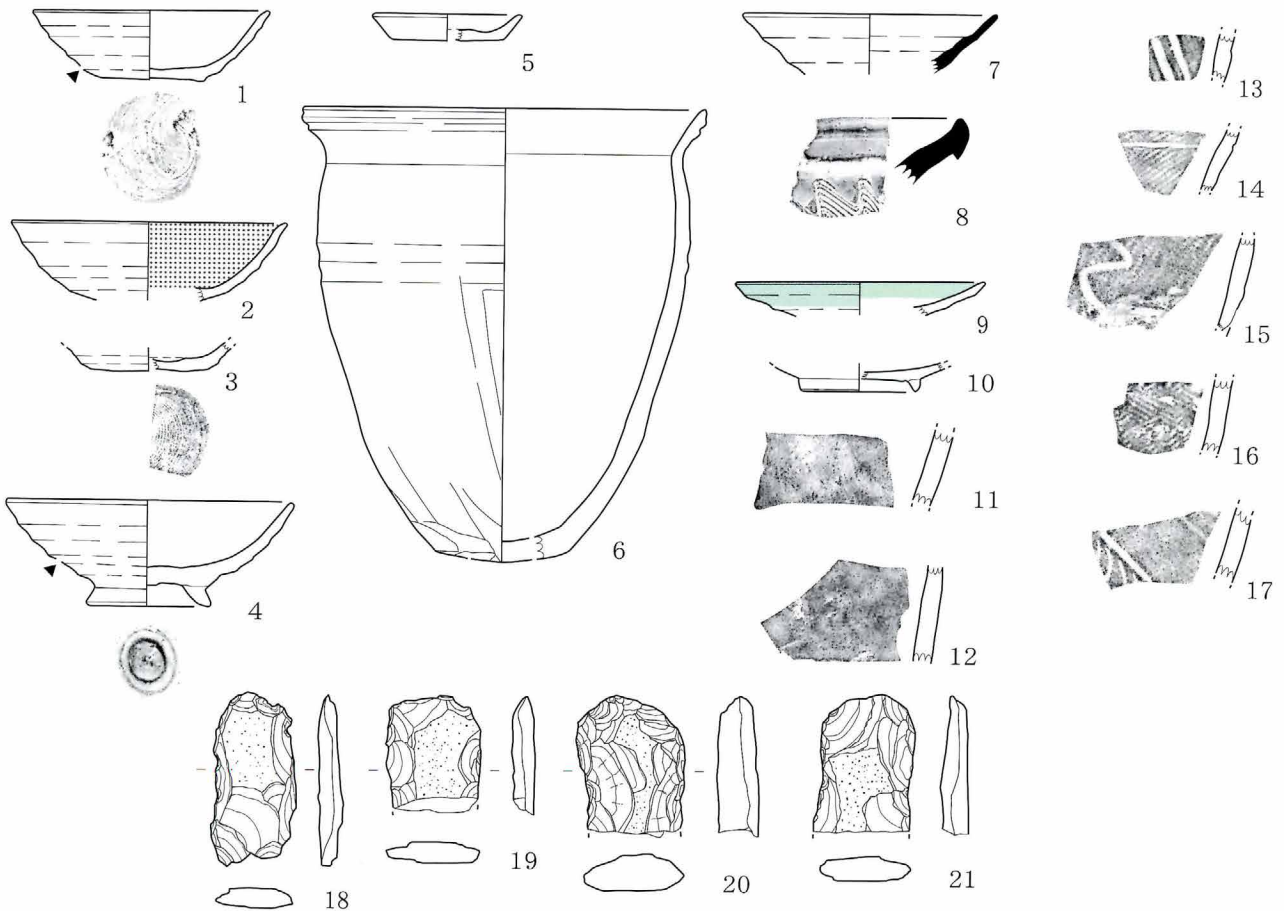
P155ー内外面に赤彩が施される土師器壺の口縁部片が1点出土している。時期は古墳時代前期である。

P161ー龍泉窯産の青磁碗片が1点出土している。時期は13Cである。

## 第5節 遺構外出土遺物

### ○遺構外出土遺物 (第123図)

グリット及び検出時(重機による表土掘削及び人力による遺構検出作業)に出土した遺物である。土師器、須恵器、灰釉陶器、陶器、縄文土器、石器が出土している。土師器は坏(1~3)、碗(4)、かわらけ(5)、ロクロ甕(6)の器種が認められる。2の坏は内面黒色処理が施される。時期的には5のかわらけが中世(13C)の他は奈良平安時代VII



第124図 遺構外出土遺物

期(10C前半)の所産と思われる。須恵器は坏(7)、甕(8)の器種が認められる。時期的は須恵器と同様であろう。灰釉陶器は2点共に皿(9・10)である。丸石2窯式期と思われる。陶器は2点共に常滑焼の甕(11・12)片である。時期は中世という大枠の中でしか捉えられない。縄文土器は5点出土している。器種は全て深鉢である。時期的には16は胎土に繊維を含み、前期関山式に比定される他は、中期後半のものであり、17が鱗状短沈線文土器の他は加曾利E式である。石器は4点全て打製石斧である。

第75表 北畑遺跡Ⅲ 遺構計測表

遺構名	検出位置	重複関係	長軸方位	長軸長	短軸長	深度	ピット	付属施設	備考	時期
H1	Vキ8	H2を切る	N-75°-E	4.4	2.88	0.16	10	-	-	奈平Ⅶ期
H2	Vキ9	H1・P186～P188に切られる	N-65°-E	4.32	-	0.24	(7)	カマド	-	奈平Ⅶ期
H3	Vオ9	P55～P57・P104・P204に切られる	N-24°-W	-	-	0.16	12	-	-	奈平Ⅶ期
H4	XIカ1	Ta2・P69・94・109・197・198・203に切られる	-	-	-	0	-	-	-	奈平Ⅶ期
Ta1	Vコ8	P20に切られる	N-10°-W	-	5.84	0.48	25	-	3基の竪穴の連結	不明
Ta2	Vカ10	H4を切り、P197・P198に切られる	N-87°-E	2.8	1.76	0.12	-	-	-	13世紀
D1	VIイ7	P1に切られる	-	-	-	0.24	-	-	-	不明
D2	VIア7	P161に切られる	N-82°-E	2.0	1.92	0.12	-	-	-	不明
D3	VIア6	なし	-	-	-	0.20	-	-	-	13世紀
D4	VIア6	なし	N-56°-E	1.2	0.72	0.16	-	-	-	不明
D5	VIア7	なし	N-31°-E	-	1.20	0.12	-	-	-	不明
D6	Vケ7	なし	-	-	-	0.24	-	-	覆土中に礫多含	不明
D7	Vク7	なし	-	-	-	0.16	-	-	-	不明
D8	Vオ9	P209を切る	N-69°-E	1.84	0.8	0.24	-	-	-	13世紀
D9	Vカ10	なし	N-115°-E	1.20	0.8	0.12	-	-	-	不明
D10	XIカ1	なし	-	-	-	0.20	-	-	-	不明
D11	Vオ10	P222に切られる	N-26°-W	-	-	0.16	-	-	-	13世紀
D12	XIア9	なし	N-21°-E	1.76	0.92	0.40	-	-	-	不明

## 第Ⅶ章 まとめ

今回調査された5ヵ所の遺跡毎にその成果を概観しまとめとする。

### 市道遺跡Ⅴ

昭和51年に刊行された「市道遺跡」の発掘調査報告書は県内の考古学徒の教科書として活用され続け、いまだ色褪せていない。長野県の考古学史に残るであろう調査が行われた市道遺跡は、その後Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次と発掘調査が行われ、今回5回目の緊急発掘調査が実施された。

成果としては遺跡北端の一部が明らかとなったこと、放射性炭素年代測定によるH3号住居址の年代、6世紀末～7世紀初頭が土器編年により導き出された6世紀中葉～7世紀初頭と概ね合致したことである。また、放射性炭素年代測定に用いられた試料は焼失住居址であるH3の床面上に散乱した炭化材のうち、芯持丸太であるNo32で、樹種はコナラであった。市道遺跡Ⅲにおいて実施された炭化材の樹種同定においてもコナラがその大半を占めていた。今回のH3号住居址出土の炭化材も同様であった。佐久市北部の「聖原遺跡」においても同様の結果が出ている。このことから、コナラは古代佐久における主要な建築材であったことが明らかとなってきた。当時の集落周辺にはコナラを主体とする広大な雑木林(里山)が展開していたことが推測される。

### 平馬塚遺跡Ⅱ

平馬塚遺跡M2号溝址から出土した、弥生時代前期の壺形土器内面に付着した炭化物の放射性炭素年代測定を実施した結果、紀元前5世紀頃(2,380±30yrBP; calBC481-calBC400(1σ))という年代が推定された。佐久市内で放射性炭素年代測定を実施した弥生時代前期の試料は東五里田遺跡(2,370±40)、下信濃石(2,390±30)、東大門先遺跡Ⅱ(2,430±25yrBP; calBC537-calBC412(1σ))の3例がある。

放射性炭素年代測定の年代を基準に本遺跡例も含めた4例を並べると、最も古い試料が東大門先、次が下信濃石、そして本例が続き、東五里田遺跡例が最も新しくなる。本遺跡例を除く3例についてはいずれも報文において中沢道彦が位置付けをおこなっており、その見解は東五里田が氷Ⅱ式、下信濃石が氷Ⅱ式の最も古い部分、もしくは中沢の氷Ⅰ式新段階、東大門先が氷Ⅱ式となる。放射性炭素年代測定の結果とは齟齬が生じるが、誤差の範囲と思われる。出土遺物量の差も考える必要がある。

平馬塚例も本文中でも述べたように、前期後半氷Ⅱ式と考えられ、佐久市出土の弥生前期資料は全てが同一型式「氷

第76表 北畑遺跡Ⅲ ピット計測表

No	検出位置	長径	深度	覆土	No	検出位置	長径	深度	覆土	No	検出位置	長径	深度	覆土
P1	VIイ6	0.330	0.129	10YR4/2	P57	Vオ8	0.317	0.125	10YR4/2	P111	Vオ10	0.440	0.371	10YR3/2
P2	VIイ6	0.419	0.166	10YR4/2	P58	Vキ9	0.223	0.129	10YR2/2	P112	Vエ10	0.256	0.142	10YR3/2
P3	VIア6	0.308	0.204	10YR4/2	P59	Vカ9	0.350	0.182	10YR2/2	P113	XIエ1	0.226	0.078	10YR3/2
P4	VIア6	0.537	0.250	10YR4/2	P60	Vク9	0.454	0.120	10YR3/2	P114	Vエ10	0.210	0.194	10YR3/2
P5	VIア6	0.319	0.182	10YR4/2	P61	Vク9	1.032	0.096	10YR5/3	P115	Vオ8	0.516	0.160	10YR3/2
P6	Vケ7	0.387	0.150	10YR4/2	P62	Vキ9	0.364	0.119	10YR4/2	P116	Vエ10	0.248	0.171	10YR3/2
P7	Vケ7	0.310	0.158	10YR2/2	P63	Vク9	0.284	0.116	10YR2/2	P117	Vオ8	0.458	0.097	10YR5/4
P9	Vケ8	0.353	0.221	10YR3/2	P64	Vキ9	0.186	0.058	10YR4/2	P118	Vオ8	0.219	0.109	10YR5/4
P10	Vキ8	0.342	0.156	10YR4/3	P65	Vカ10	0.301	0.102	10YR3/2	P119	Vオ8	0.331	0.296	10YR2/2
P11	Vキ8	0.255	0.198	10YR2/2	P66	Vカ10	0.181	0.063	10YR3/2	P120	Vエ9	0.344	0.347	10YR2/2
P12	Vク8	0.985	0.120	10YR5/2	P67	Vカ10	0.376	0.082	10YR2/2	P121	Vオ10	0.296	0.198	10YR3/2
P13	Vク9	0.220	0.104	10YR3/2	P68	Vカ10	0.355	0.085	10YR2/2	P122	Vオ10	0.211	0.110	10YR4/2
P14	Vク9	0.395	0.342	10YR3/2	P69	Vカ10	0.238	0.152	10YR2/2	P123	Vオ10	0.230	0.204	10YR2/2
P15	Vク8	0.552	0.326	10YR2/2	P70	Vカ10	0.371	0.162	10YR3/2	P124	Vオ8	0.259	0.245	10YR2/2
P16	Vク8	0.319	0.076	10YR5/2	P71	Vカ10	0.278	0.112	10YR4/2	P125	Vオ8	0.387	0.354	10YR2/2
P17	Vク8	0.413	0.091	10YR5/2	P72	Vカ10	0.307	0.123	10YR4/2	P126	Vオ8	0.245	0.154	10YR2/2
P18	Vク8	0.374	0.199	10YR4/2	P73	Vカ10	0.235	0.070	10YR4/2	P127	Vオ8	0.235	0.086	10YR2/2
P19	Vク9	0.278	0.075	10YR5/2	P74	Vキ9	0.319	0.112	10YR3/2	P128	Vオ8	0.266	0.294	10YR3/2
P20	Vケ8	0.337	0.122	10YR5/2	P75	Vキ9	0.261	0.124	10YR5/3	P129	Vオ8	0.263	0.204	10YR3/2
P21	Vケ7	0.180	0.122	10YR4/2	P76	Vキ10	0.267	0.161	10YR5/3	P130	Vエ9	0.237	0.172	10YR3/2
P22	Vケ7	0.285	0.210	10YR3/2	P77	Vキ10	0.312	0.129	10YR5/3	P131	Vエ9	0.370	0.290	10YR4/2
P23	Vク8	0.399	0.178	10YR4/1	P78	Vキ10	0.322	0.113	10YR5/3	P132	Vオ8	0.255	0.375	10YR3/2
P24	Vク7	0.341	0.141	10YR4/1	P79	Vキ10	0.293	0.108	10YR3/2	P133	XIエ1	0.178	0.148	10YR3/2
P25	Vク8	0.388	0.127	10YR3/2	P80	Vキ10	0.154	0.041	10YR3/2	P134	XIエ1	0.255	0.150	10YR2/2
P26	Vク8	0.283	0.192	10YR4/2	P81	Vキ10	0.319	0.097	10YR3/2	P135	XIエ1	0.188	0.243	10YR2/2
P27	Vク7	0.423	0.270	10YR3/2	P82	XIキ1	0.244	0.111	10YR3/2	P136	XIエ1	0.183	0.039	10YR3/1
P28	Vク8	0.193	0.150	10YR3/1	P83	Vカ10	0.343	0.188	10YR3/2	P137	XIエ1	0.191	0.094	10YR4/2
P29	Vク8	0.267	0.194	10YR2/2	P84	XIカ1	0.258	0.095	10YR4/2	P138	XIエ1	0.165	0.180	10YR4/2
P30	Vク8	0.331	0.194	10YR2/2	P85	Vカ10	0.284	0.101	10YR5/2	P139	XIエ1	0.185	0.158	10YR4/2
P31	Vク8	0.339	0.112	10YR5/3	P86	Vカ10	0.615	0.201	10YR2/2	P140	Vエ10	0.260	0.269	10YR4/2
P32	Vク8	0.377	0.148	10YR5/3	P87	Vオ10	0.278	0.268	10YR2/2	P141	XIエ2	0.183	0.086	10YR4/2
P33	Vク8	0.403	0.113	10YR5/3	P88	Vオ10	0.252	0.172	10YR3/2	P142	XIエ2	0.206	0.071	10YR4/2
P34	Vク8	0.448	0.139	10YR2/2	P89	Vオ10	0.258	0.222	10YR3/2	P143	XIエ1	0.329	0.090	10YR5/3
P35	Vク8	0.242	0.073	10YR2/2	P90	Vオ10	0.310	0.100	10YR4/2	P144	XIエ2	1.126	0.167	10YR4/2
P36	Vク8	0.260	0.079	10YR5/2	P91	Vオ10	0.614	0.150	10YR3/2	P145	Vウ10	0.214	0.110	10YR5/3
P37	Vク8	0.356	0.251	10YR2/2	P92	Vオ10	0.134	0.102	10YR3/2	P146	XIエ1	0.165	0.082	10YR4/2
P38	Vカ8	0.305	0.313	10YR3/2	P93	Vオ10	0.233	0.124	10YR5/4	P147	Vウ9	0.225	0.213	10YR4/2
P39	Vカ10	0.236	0.183	10YR4/2	P94	XIオ1	0.317	0.198	10YR5/4	P148	Vエ10	0.250	0.141	10YR5/3
P40	Vカ9	0.343	0.189	10YR4/2	P95	Vオ10	0.245	0.147	10YR5/4	P149	Vエ10	0.206	0.140	10YR3/2
P42	Vカ8	0.364	0.233	10YR3/2	P96	XIオ1	0.241	0.256	10YR3/2	P150	Vエ10	0.240	0.223	10YR2/2
P43	Vカ8	0.358	0.129	10YR3/2	P97	XIオ1	0.224	0.281	10YR3/2	P151	Vエ10	0.322	0.276	10YR3/2
P44	Vオ8	0.315	0.314	10YR4/2	P98	XIオ1	0.563	0.122	10YR3/2	P152	Vオ8	0.329	0.190	10YR2/2
P45	Vカ9	0.312	0.097	10YR4/2	P99	XIオ1	0.224	0.127	10YR3/2	P153	Vオ8	0.248	0.296	10YR2/2
P46	Vカ9	0.205	0.165	10YR4/2	P100	XIオ1	0.191	0.082	10YR3/2	P154	Vオ10	2.637	0.230	10YR5/3
P47	Vカ9	0.783	0.391	10YR4/2	P101	XIオ1	0.173	0.140	10YR2/2	P155	Vカ10	1.925	0.310	10YR5/3
P48	Vカ8	0.277	0.153	10YR3/2	P102	XIエ1	0.219	0.180	10YR2/2	P157	VIア8	0.232	0.084	10YR2/2
P49	Vカ8	0.300	0.213	10YR3/2	P103	XIエ1	0.585	0.285	10YR5/4	P158	VIア8	0.253	0.058	10YR2/2
P50	Vカ8	0.245	0.217	10YR3/2	P104	Vオ8	0.276	0.276	10YR2/2	P159	VIア8	0.209	0.042	10YR2/2
P51	Vカ9	0.244	0.084	10YR5/3	P105	Vオ10	0.171	0.142	10YR3/2	P160	VIア7	0.264	0.108	10YR2/2
P52	Vカ9	0.516	0.108	10YR5/3	P106	Vオ10	0.317	0.252	10YR3/2	P161	VIイ7	0.640	0.390	10YR2/2
P53	Vカ9	0.300	0.119	10YR4/2	P107	Vオ10	0.322	0.160	10YR3/2	P162	VIイ7	0.429	0.144	10YR2/2
P54	Vカ9	0.277	0.050	10YR4/2	P108	XIオ1	0.166	0.104	10YR2/2	P163	VIア8	0.420	0.218	10YR2/2
P55	Vオ8	0.455	0.138	10YR2/2	P109	XIオ1	0.450	0.154	10YR4/2	P164	VIア8	0.710	0.279	10YR2/2
P56	Vオ8	0.231	0.134	10YR2/2	P110	Vオ10	0.288	0.147	10YR2/2	P165	VIア9	0.612	0.223	10YR2/2

Ⅱ式」の範疇に収まることとなる。下信濃石資料は他の3遺跡例よりも若干古い位置付けであるが、他の3例については現時点では同一型式内の所産と認識し、資料の蓄積を待ちたい。

北裏遺跡Ⅱ

北裏遺跡からは2条の溝址が検出された。出土土器から弥生中期後半栗林期の所産であることが判明した。中部横断道に伴い調査を実施した、北裏遺跡Ⅰで検出された溝址同様に本址も水路の可能性が高い。時期的にもほぼ同時期の所産と考えられる。北裏遺跡の集落や墓域は南方の台地上に存在することが長野県埋蔵文化財調査センターの中部

横断道本線部分等の調査で明らかとなっており、水路が検出される台地下は水田であったものと考えられる。

#### 宮浦遺跡Ⅰ

宮浦遺跡Ⅰの調査成果としては弥生時代中期中葉の遺構・遺物の検出があげられる。遺構としてはH14号住居址が該当する。栗林式の土器が混在するのは、本址が調査区外に延びており全体が調査出来なかった事に起因するのかもしれない。4・7・9の甕や25・33・40の壺などが代表的な遺物である。40の壺などは関東地方北西部的である。古墳時代前期の溝址であるM1号からも5の甕や13の壺が出土している。多時期の遺物を出土したM2号溝址からも同時期の土器が出土している。46・58・54の甕、81・91の壺などが該当する。試掘調査で出土した3の甕は底部に布圧痕が認められる。遺構外から出土した8の甕は類例を知らないが、明科町緑ヶ丘遺跡出土の大地式土器に近いようにも思われる。

野沢地区では検出例が少ない古墳時代前期の遺構・遺物が検出されたのも成果のひとつであろう。前述したM1号溝址、H16号住居址、H9号住居址ー6・8の土師器などが該当する。

特殊な遺構としてM2号溝址西縁辺下に列状に置かれていた河床礫の存在がある。多くのものに擦痕や磨が認められた。M2は水路であったものと考えられ、その水辺がなんらかの作業空間として利用されていたものと思われる。

#### 北畑遺跡Ⅲ

北畑遺跡からは13世紀の青磁・青白磁・古瀬戸・常滑焼などの陶磁器を伴う竪穴建物址が検出された。第Ⅰ章ー第2節ー2遺跡の歴史的環境でも述べたが、調査地点北方に字名「北屋敷」の長方形区画が存在することから、今回の調査遺構もこの屋敷ないし館に伴う可能性もある。

遺跡が存在する「桜井」に係わる資料としては、源平盛衰記や平家物語に木曾義仲軍の一員として桜井太郎・桜井次郎の名がある。所謂「佐久党」の武士で、滋野一族と考えられている。また、佐久市志歴史編（二中世）に1206年3月13日の事として、鎌倉幕府御家人桜井五郎に関する記述が認められる。素直に考えれば、桜井氏は現桜井地域を本拠地とした武士であり、今回発見された中世（13世紀）の遺構・遺物は桜井氏に係わるものである可能性も否定できないものと思われる。

#### 引用・参考文献

- 1974年 小諸市誌「考古編」氷遺跡の調査とその研究 永峯光一
- 1976年 佐久市教育委員会「市道」
- 1986年 長野市教育委員会長野市の埋蔵文化財第18集「塩崎遺跡群Ⅴ」
- 1988年 三郷村教育委員会「黒沢川右岸遺跡」
- 1993年 佐久市志「歴史編（二）中世」
- 1998年 松本市教育委員会「境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ」
- 1999年 長野県考古学会 長野県考古学会誌92「栗林式土器」の成立をめぐる諸問題」安藤広道
- 2001年 長野県考古学会 長野県考古学会誌93・94「成立期の栗林式土器」寺島孝典
- 2003年 佐久市志「歴史年表」
- 2003年 小学館「考古資料大観」第1巻 弥生・古墳時代 土器Ⅰ 武末純一・石川日出志
- 2004年 佐久市教育委員会 佐久市埋蔵文化財調査報告書第117集「東五里田遺跡」
- 2005年 佐久市教育委員会 佐久市埋蔵文化財調査報告書第126集「聖原 第Ⅴ分冊」
- 2006年 佐久市教育委員会 佐久市埋蔵文化財調査報告書第134集「下信濃石遺跡」
- 2008年 佐久市教育委員会 佐久市埋蔵文化財調査報告書第148集「市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・儘田遺跡Ⅱ・西裏遺跡」
- 2010年 佐久市教育委員会 佐久市埋蔵文化財調査報告書第175集「第1分冊 西一本柳ⅩⅣ」



# 付 編

## 宮浦遺跡群他の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦

### <目次>

はじめに

1. 試料

2. 分析方法

3. 結果

4. 考察

引用文献

### <表・図版一覧>

表 1. 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

表 2. 樹種同定結果

図版 1 炭化材(1)

図版 2 炭化材(2)宮浦遺跡群他の自然科学分析

### はじめに

本報告では、市道遺跡Vの発掘調査で検出された焼失住居の年代や同住居址から出土した住居構築材とみられる炭化材の樹種および木材利用、平馬塚II遺跡の溝址より出土した土器の年代の検討を目的として、放射性炭素年代測定、樹種同定を実施した。

### 1. 試料

#### (1) 市道遺跡V

試料は、焼失住居とされるH3号住居址の床面より出土した炭化材48点(取上No.1~48)である。本分析では、炭化材全点を対象として樹種同定を実施した。また、放射性炭素年代測定には、試料観察時の所見をもとに、最外年輪が残存する芯持丸木(取上No.32;径約3cm、8年生)を選択し、外側より4年輪分を供している。

#### (2) 平馬塚遺跡II

試料は、M2号溝址から出土した変形工字文が施文された壺形土器(M2-2)の内面に付着した炭化物である。炭化物は、担当者によって採取されており、乾燥重量0.04gを計る。

### 2. 分析方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレス

して、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0（Copyright 1986-2013 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5,730 $\pm$ 40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ （ $\sigma$ は統計的に真の値が68%、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

## (2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

## 3.結果

### (1) 放射性炭素年代測定

市道遺跡VのH3号住居址より出土した炭化材（取上No.32）の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は1,450 $\pm$ 30yrBPであり、補正年代に基づく暦年較正結果(1 $\sigma$ )はcalAD 595 - calAD 640である。一方の平馬塚遺跡IIのM2号溝址から出土した壺形土器（M2-2）の内面付着炭化物は、測定結果（補正年代）は2,380 $\pm$ 30yrBPであり、暦年較正結果(1 $\sigma$ )はcalBC 481 - calBC 400である（表1）。

表1. 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果			相対比	測定機関 CodeNo.
				$\delta$	$2\delta$			
H3号住居址 No.32 炭化材 (コナラ節)	1,450 $\pm$ 30	-26.59 $\pm$ 0.25	1,452 $\pm$ 25	$\delta$	cal AD 595 - cal AD 640	cal BP 1,355 - 1,310	1.000	IAAA-131010
				$2\delta$	cal AD 566 - cal AD 648	cal BP 1,384 - 1,302	1.000	
M2号溝址 壺形土器 (M2-2) 土器内面付着 炭化物	2,380 $\pm$ 30	-22.65 $\pm$ 0.55	2,380 $\pm$ 26	$\delta$	cal BC 481 - cal BC 441	cal BP 2,430 - 2,390	0.462	IAAA-131011
					cal BC 433 - cal BC 400	cal BP 2,382 - 2,349	0.538	
				$2\delta$	cal BC 536 - cal BC 527	cal BP 2,485 - 2,476	0.020	
					cal BC 523 - cal BC 396	cal BP 2,472 - 2,345	0.980	

## (2) 樹種同定

同定結果を表2に示す。H3住居址から出土した炭化材は、針葉樹1分類群(ヒノキ科)と広葉樹5分類群(ヤナギ属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節、ヤマグワ、サクラ属)およびイネ科に同定された。炭化材試料のうち、No.18には3分類群、No.22・30にはそれぞれ2分類群が認められた。また、No.4・42の2点は、炭化物中に植物組織が認められず、由来・種類共に不明である。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

### ・ヒノキ科 (Cupressaceae)

試料は、年輪界および晩材部が残っていない。軸方向組織は、観察した範囲では仮道管のみで構成される。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は平滑で、じゅず状の肥厚は認められない。分野壁孔は、ヒノキ型かトウヒ

型のいずれかであるが、保存が悪く詳細は不明。放射組織は単列、1-10細胞高。

観察できた組織から、少なくともマツ科、コウヤマキ科、イチイ科、イヌガヤ科は除外される。また、樹脂細胞が

表 1. 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

通しNo.	遺跡略称	遺構名	取上No.	状態	分類群(樹種)	備考
1	I M V	H3	炭No.1	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
2	I M V	H3	炭No.2	破片	イネ科	
3	I M V	H3	炭No.3	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
4	I M V	H3	炭No.4	破片	不明	
5	I M V	H3	炭No.5	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
6	I M V	H3	炭No.6	破片	イネ科	
7	I M V	H3	炭No.7	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
8	I M V	H3	炭No.8	破片	バラ科ナシ亜科	
9	I M V	H3	炭No.9	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	樹皮付
10	I M V	H3	炭No.10	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
11	I M V	H3	炭No.11	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	樹皮付
12	I M V	H3	炭No.12	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
13	I M V	H3	炭No.13	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
14	I M V	H3	炭No.14	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
15	I M V	H3	炭No.15	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節	径約 5cm、樹皮付
16	I M V	H3	炭No.16	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
17	I M V	H3	炭No.17	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
18	I M V	H3	炭No.18	破片	ヒノキ科	
				破片	ヤナギ属	
				破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
19	I M V	H3	炭No.19	破片	ヤナギ属	
20	I M V	H3	炭No.20	破片	イネ科	
21	I M V	H3	No.21	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
22	I M V	H3	No.22	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	径約 1cm、4年生
				破片	ヤナギ属	
23	I M V	H3	No.23	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
24	I M V	H3	No.24	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
25	I M V	H3	No.25	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
26	I M V	H3	No.26	破片	バラ科ナシ亜科	
27	I M V	H3	No.27	ミカン割状	バラ科ナシ亜科	半径約 1.5 cm
28	I M V	H3	No.28	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
29	I M V	H3	炭No.29	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	樹皮付
30	I M V	H3	No.30	破片	バラ科ナシ亜科	
				破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
31	I M V	H3	No.31	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
32	I M V	H3	No.32	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節	径約 3cm、8年生、放射性炭素年代測定試料
33	I M V	H3	No.33	半裁状	コナラ属コナラ亜属コナラ節	径約 3cm、11年生
34	I M V	H3	No.34	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
35	I M V	H3	No.35	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
36	I M V	H3	No.36	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
37	I M V	H3	No.37	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
38	I M V	H3	No.38	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
39	I M V	H3	No.39	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
40	I M V	H3	No.40	破片	ヤマグワ	
41	I M V	H3	炭No.41	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
42	I M V	H3	炭No.42	破片	不明	
43	I M V	H3	炭No.43	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
44	I M V	H3	炭No.44	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節	径約 1.1 cm
45	I M V	H3	炭No.45	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
46	I M V	H3	炭No.46	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
47	I M V	H3	炭No.47	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
48	I M V	H3	炭No.48	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

年輪界に一樣に散在するマキ属の可能性も低い。さらに、分野壁孔がスギ型となるスギも除外される。残るのはヒノキ科のみであり、今回の試料はヒノキ科に同定される。

・ヤナギ属 (Salix) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (Quercus subgen. Quercus sect. Cerris) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸

減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または2-4個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。

・バラ科ナシ亜科 (*Rosaceae* subfam. *Maloideae*)

散孔材で、道管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単独および2-5個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

・イネ科 (*Gramineae*)

試料は、肉眼観察では薄い板状を呈するが、中央に空壁が見られ、本来は中空の円筒形をしていたと推定される。横断面では、2対4個の道管の外側に師部細胞があり、これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。維管束は、柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

#### 4. 考察

##### (1) 遺構および遺物の年代

市道遺跡VのH3号住居址から出土した炭化材のうち、芯持丸木(取上No.32)を対象とした放射性炭素年代測定の結果、6世紀末～7世紀中頃(1,450±30yrBP; calAD 595 - calAD 640 (1σ))という年代観が推定された。本遺構は出土遺物などから6世紀中葉～7世紀初頭という年代が推定されており、今回の結果は調査所見と概ね整合する年代と言える。

一方、平馬塚遺跡IIのM2号溝址から出土した壺形土器(M2-2)の付着炭化物は、紀元前5世紀頃(2,380±30yrBP; calBC 481 - calBC 400 (1σ))という年代観が推定された。長野県内および周辺地域を含む中部高地では当該期の資料が蓄積されつつあり(例えば山本,2007; 小林,2009など)、これらの資料を参考とすると、今回の結果は、弥生時代前期から弥生時代前期と中期との境界とされる年代範囲に相当する。

##### (2) 木材利用

焼失住居とされるH3号住居址から出土した炭化材は、住居址北半に多く分布するほか、支柱P3南側にも比較的まとまりをもって出土している。また、分析試料の観察では、本来の形状の特定に至らない破片が多数を占めるが、一部に確認された芯持丸木やミカン割状を呈する試料は、No.15が経5cmとなる他は、いずれも径約3cm以下であるという傾向が認められた。

これらの炭化材試料の樹種同定の結果、コナラ節を主体とする計6分類群の木材が確認された。確認された各分類群の材質等をみると、針葉樹のヒノキ科は木理が通直で割裂性と耐水性が高く、加工が容易である。広葉樹のクヌギ節、コナラ節、ヤマグワ、ナシ亜科は、比較的重硬で強度が高い。ヤナギ属は軽軟で強度・保存性は低い。

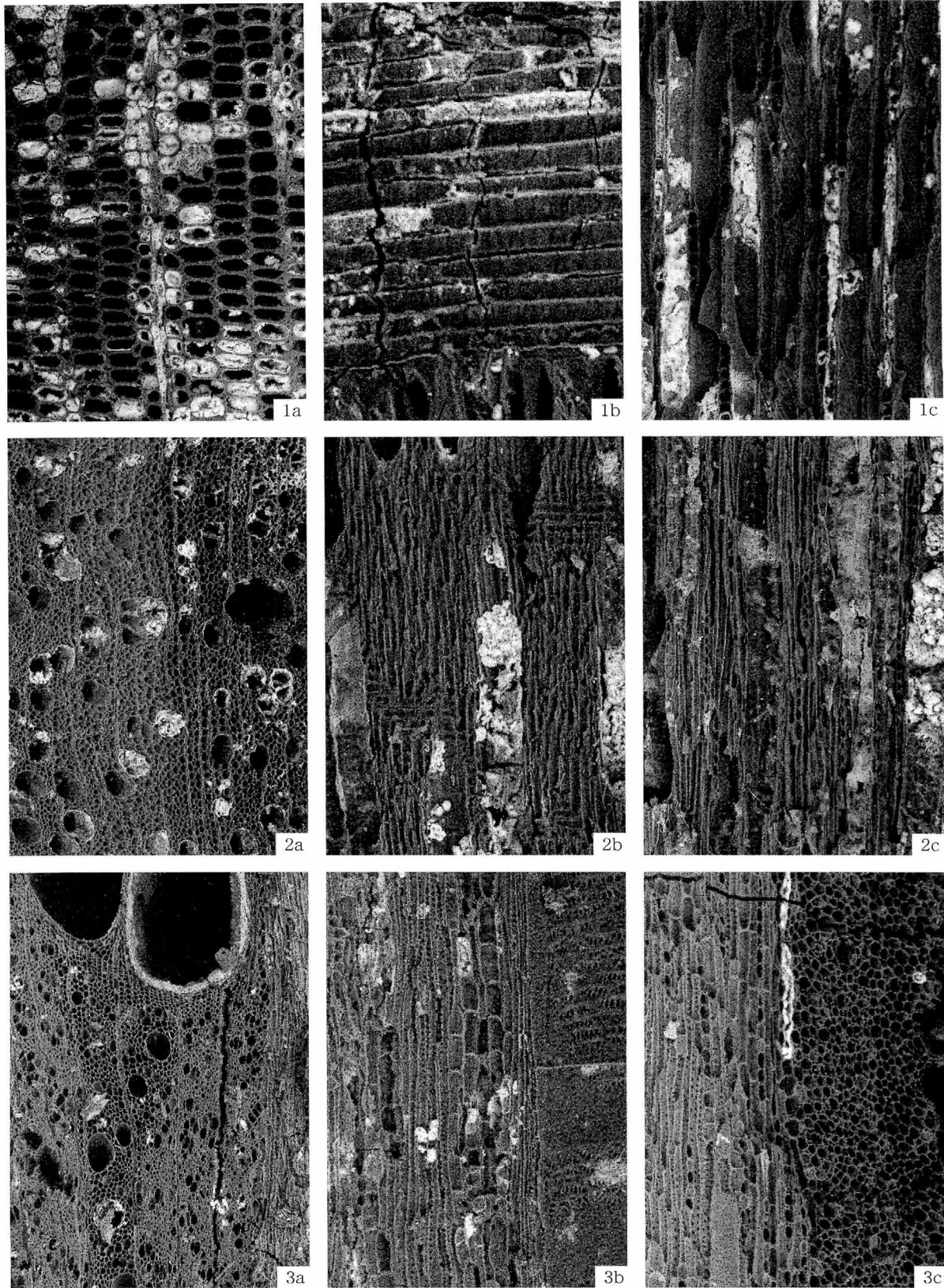
最も多く確認されたコナラ節は二次林の構成種であり、ヤナギ属、クヌギ節、ヤマグワ、サクラ属は河畔林の構成種である。これらの広葉樹は、遺跡周辺に生育した樹木より調達したと考えられ、とくにコナラ節を主体として強度の高い木材が建築材として選択利用されたと推定される。また、ヤナギ属や小径木などは、高い強度を必要としない、あるいは小径木でも利用できる部材の可能性がある。針葉樹のヒノキ科は、破片であったため本来の形状は不明であるが、割裂性が高く板状の加工が容易であること、耐水性が高いことなどの材質的特徴から、広葉樹とは異なる用途も推定される。

なお、佐久市域の概ね同時期とされる住居址から出土した炭化材の調査事例についてみると、聖原遺跡の6世紀中葉～7世紀初頭とされる住居址ではコナラ節を主体とした種類構成が確認されている(伊東・山田,2012)。また、西一本柳遺跡の古墳時代後期あるいは6世紀後半とされる住居跡ではコナラ節が、円正坊遺跡の古墳時代中期末～後期初頭や古墳時代後期とされる住居址ではコナラ節やカバノキ属が確認されている。これらの調査事例からは、コナラ節が主体となる、あるいはコナラ節が利用される状況が窺え、当該期の本地域ではコナラ節を主体とした木材利用が見られたことが示唆される。

## 引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.
- 小林謙一,2009,近畿地方以東の地域への拡散.西本豊弘編 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代,55-82.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 山本直人,2007,東海・北陸における弥生時代の開始年代.西本豊弘編 新弥生時代のはじまり 第2巻 縄文時代から弥生時代へ,35-44.

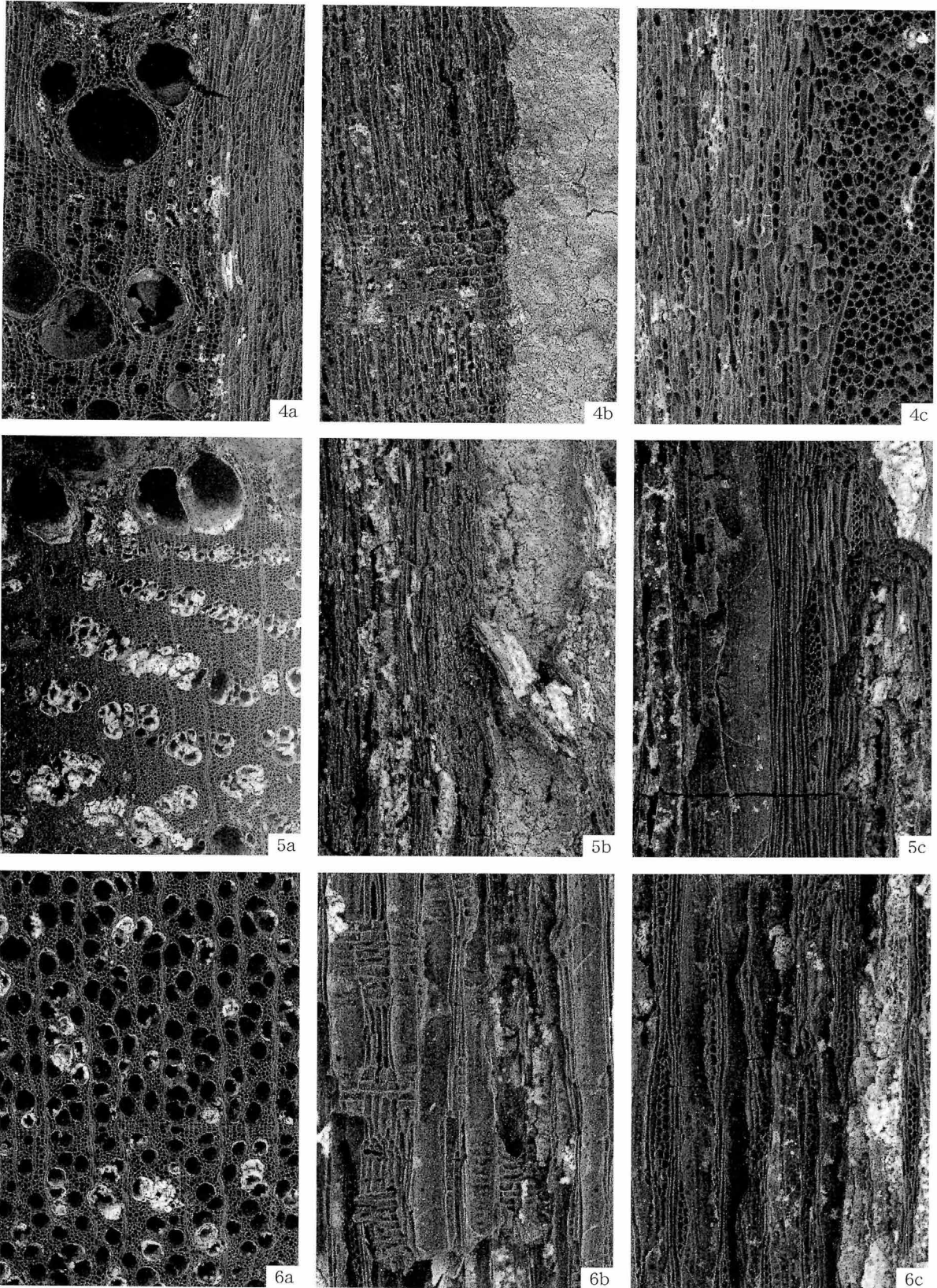
図版1 炭化材(1)



1.ヒノキ科(H3;炭No.18)  
 2.ヤナギ属(H3;No.22)  
 3.コナラ属コナラ亜属クヌギ節(H3;炭No.16)  
 a:木口,b:柁目,c:板目

200 μm:2-3a  
 200 μm:1a,2-3b,c  
 100 μm:1b,c

図版2 炭化材(2)



4.コナラ属コナラ亜属コナラ節(H3;No.32)

5.ヤマグワ(H3;No.40)

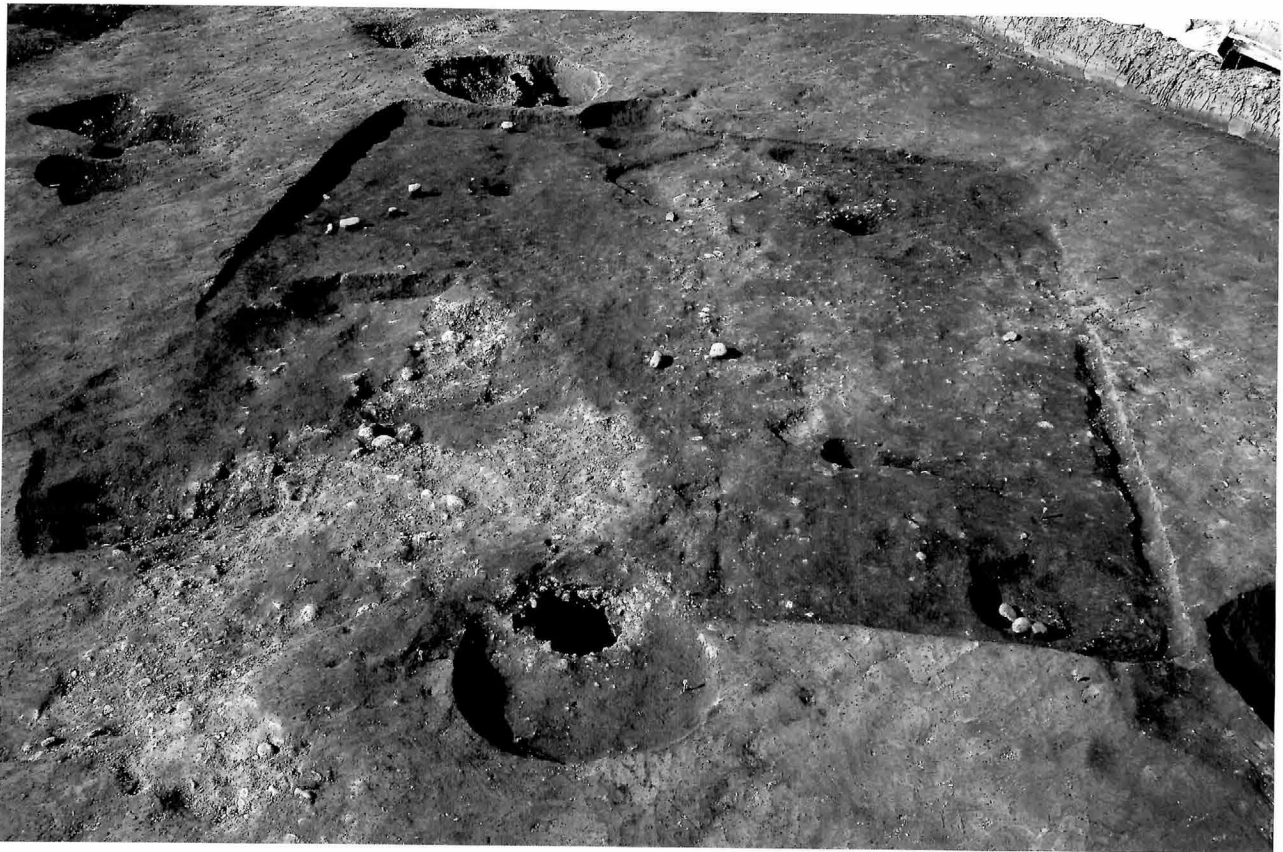
6.バラ科ナシ亜科(H3;No.27)

a:木口,b:柁目,c:板目

200 μm a  
200 μm b,c



市道遺跡V H1号住居址

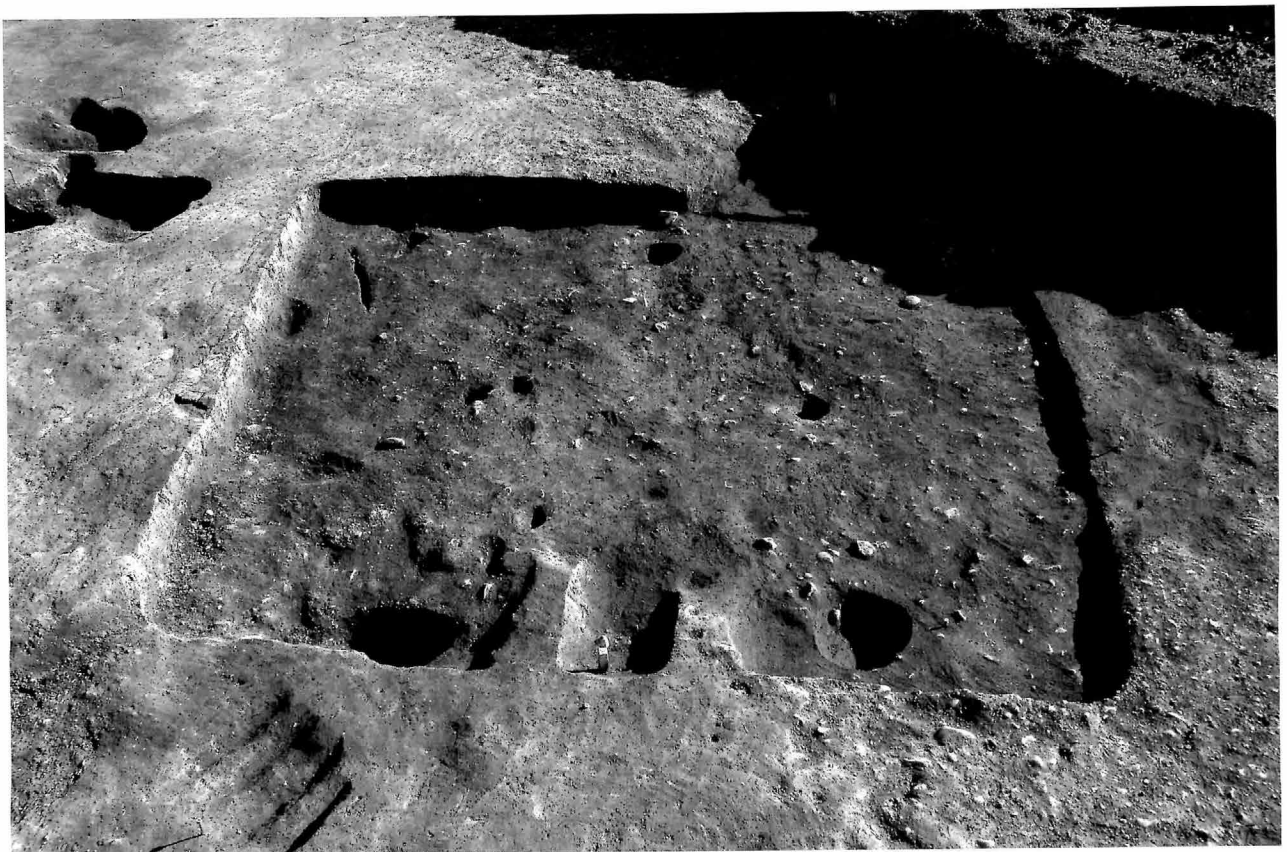


市道遺跡V H2号住居址

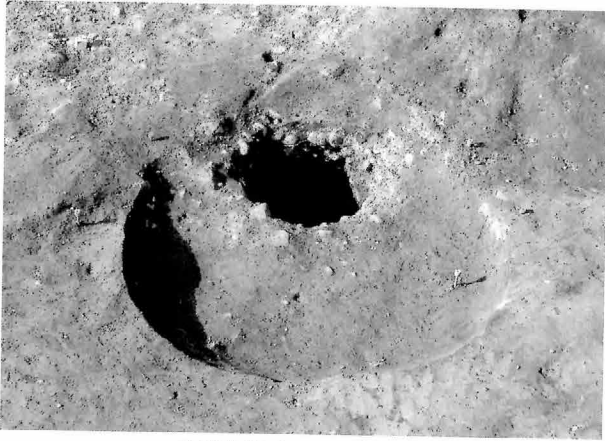




市道遺跡V H3号住居址遺物出土状況



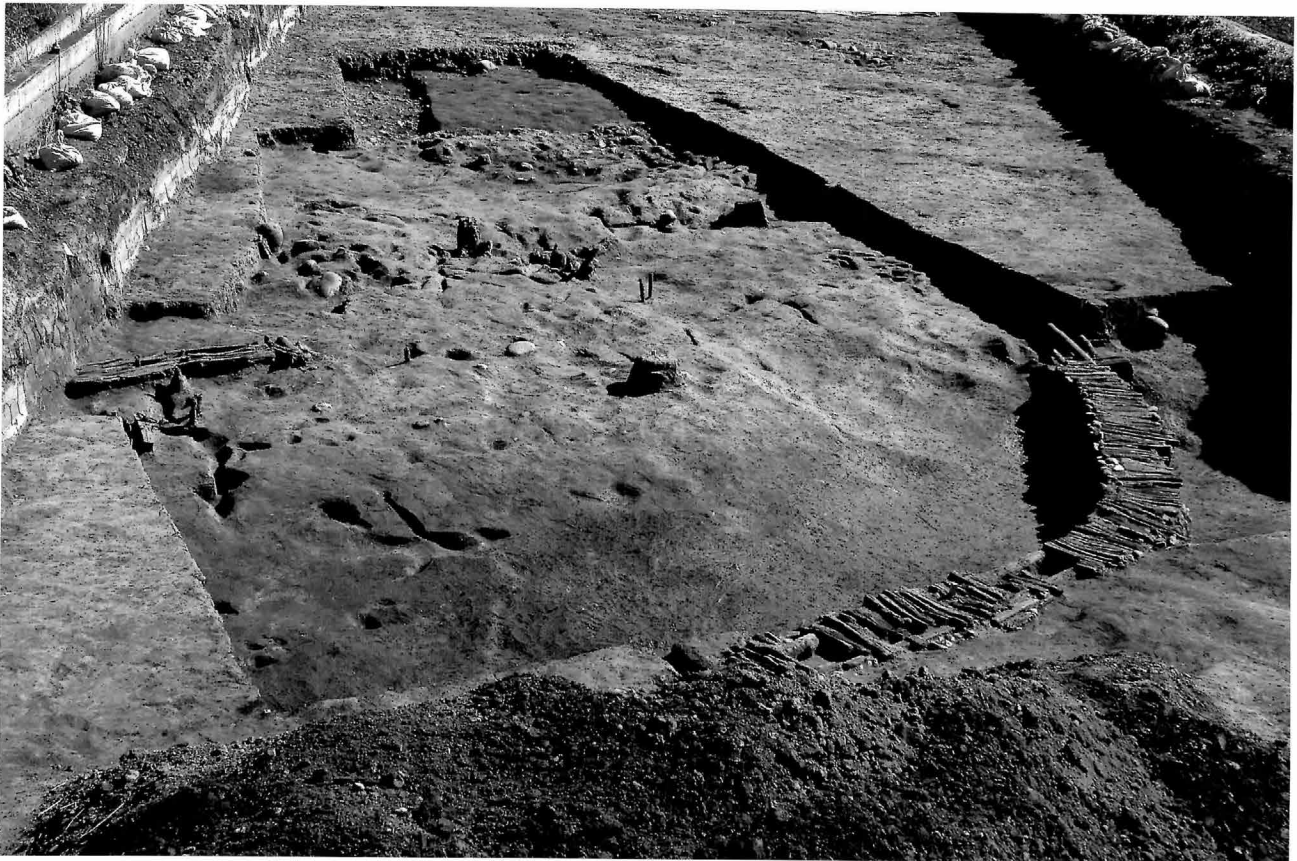
市道遺跡V H3号住居址



市道遺跡V D1号土坑



市道遺跡V D2号土坑



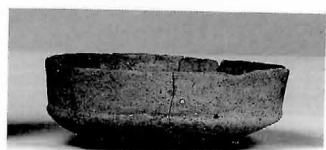
市道遺跡V 水田址



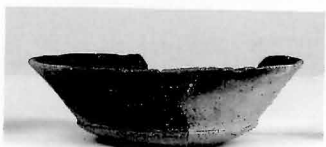
市道遺跡V 全景（西から）



市道遺跡V 全景（北から）



1



2



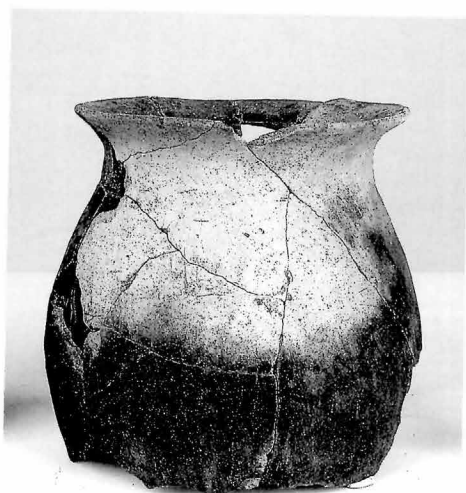
3



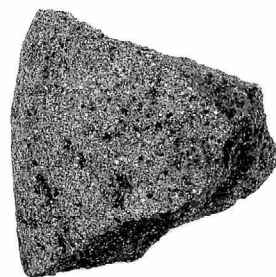
4



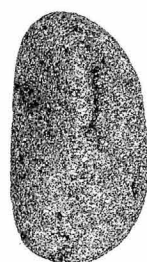
5



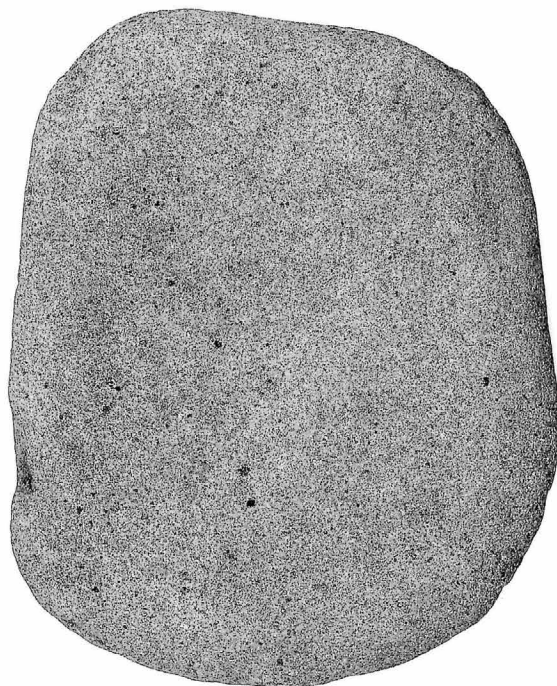
6



8



7



9



10

H 1 号住居址出土遺物



1



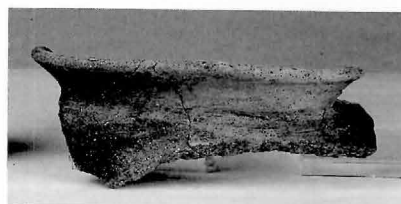
2



3



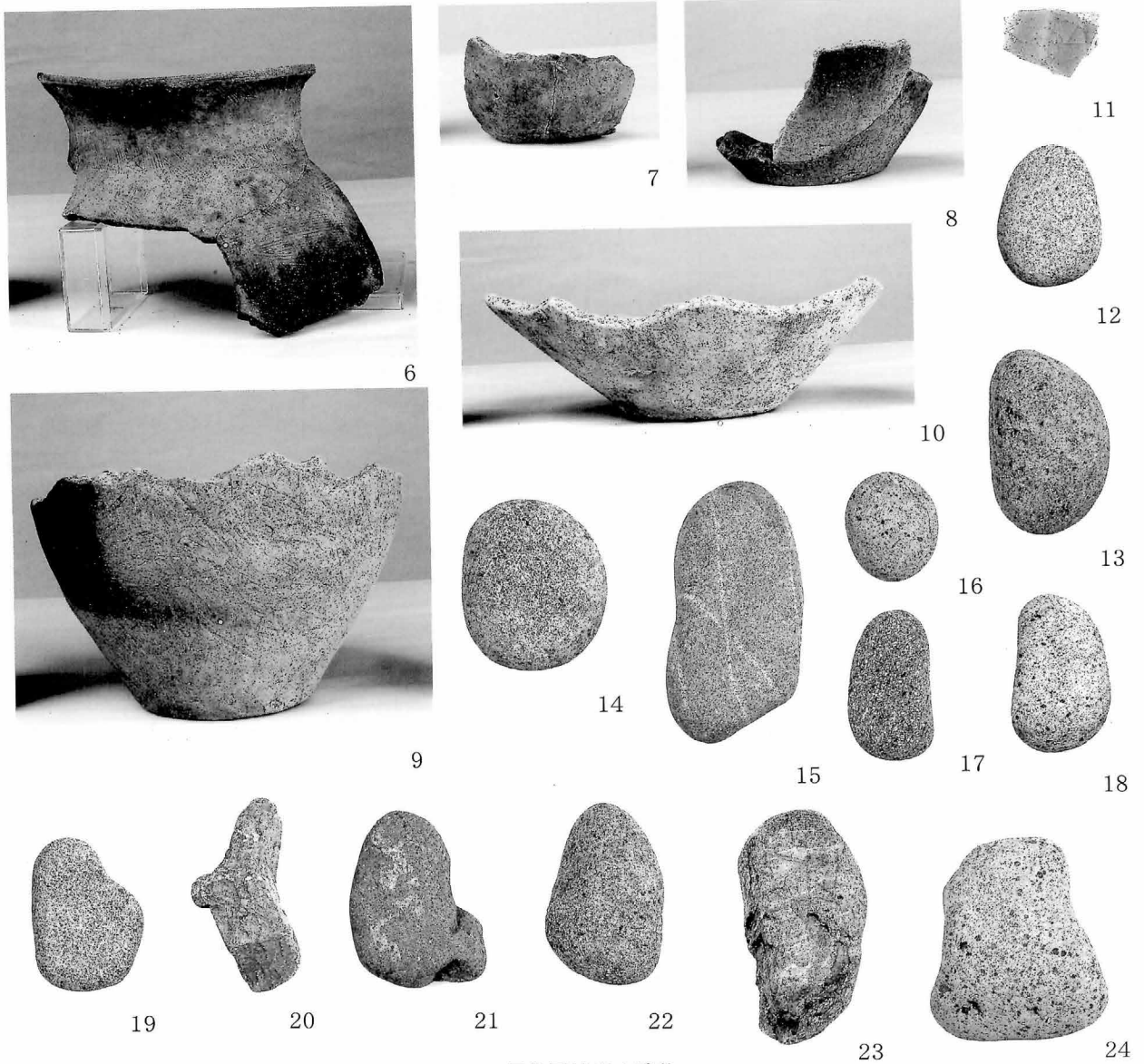
4



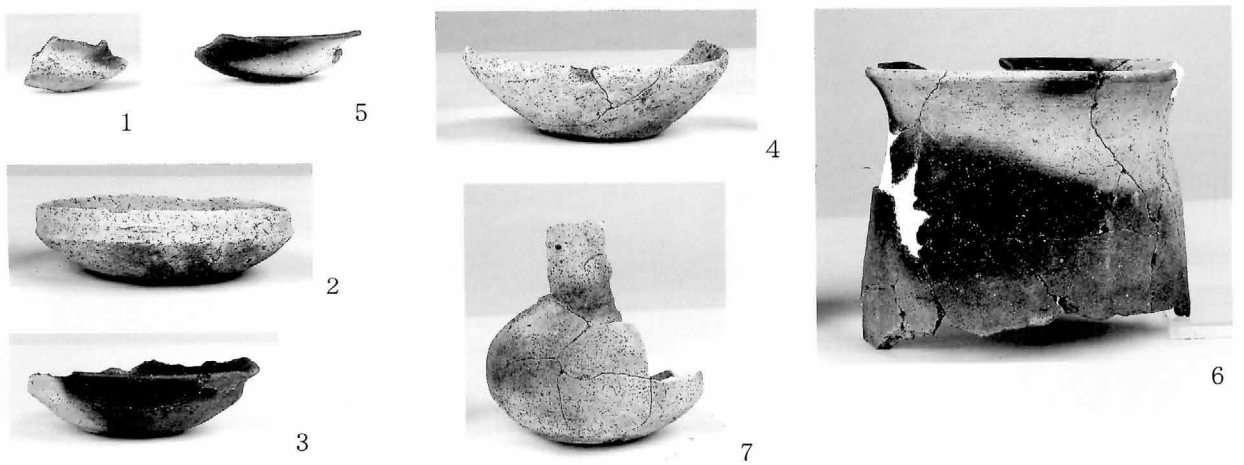
5

H 2 号住居址出土遺物

图版 6



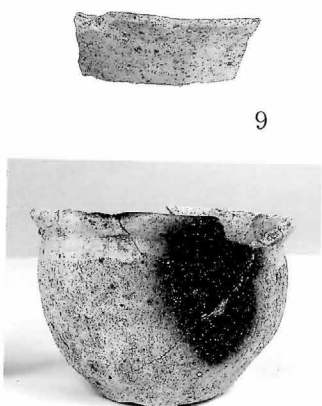
H 2 号住居址出土遺物



H 3 号住居址出土遺物



8



9



10



11



12



14



15



16



17



18



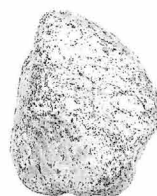
13



19



20



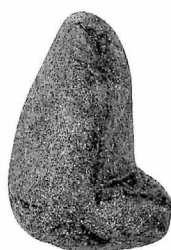
21



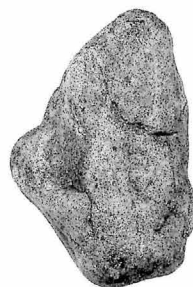
22



23



24



25



26

H 3 号住居址出土遺物



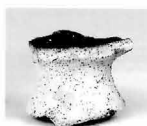
1



2



3



4



5



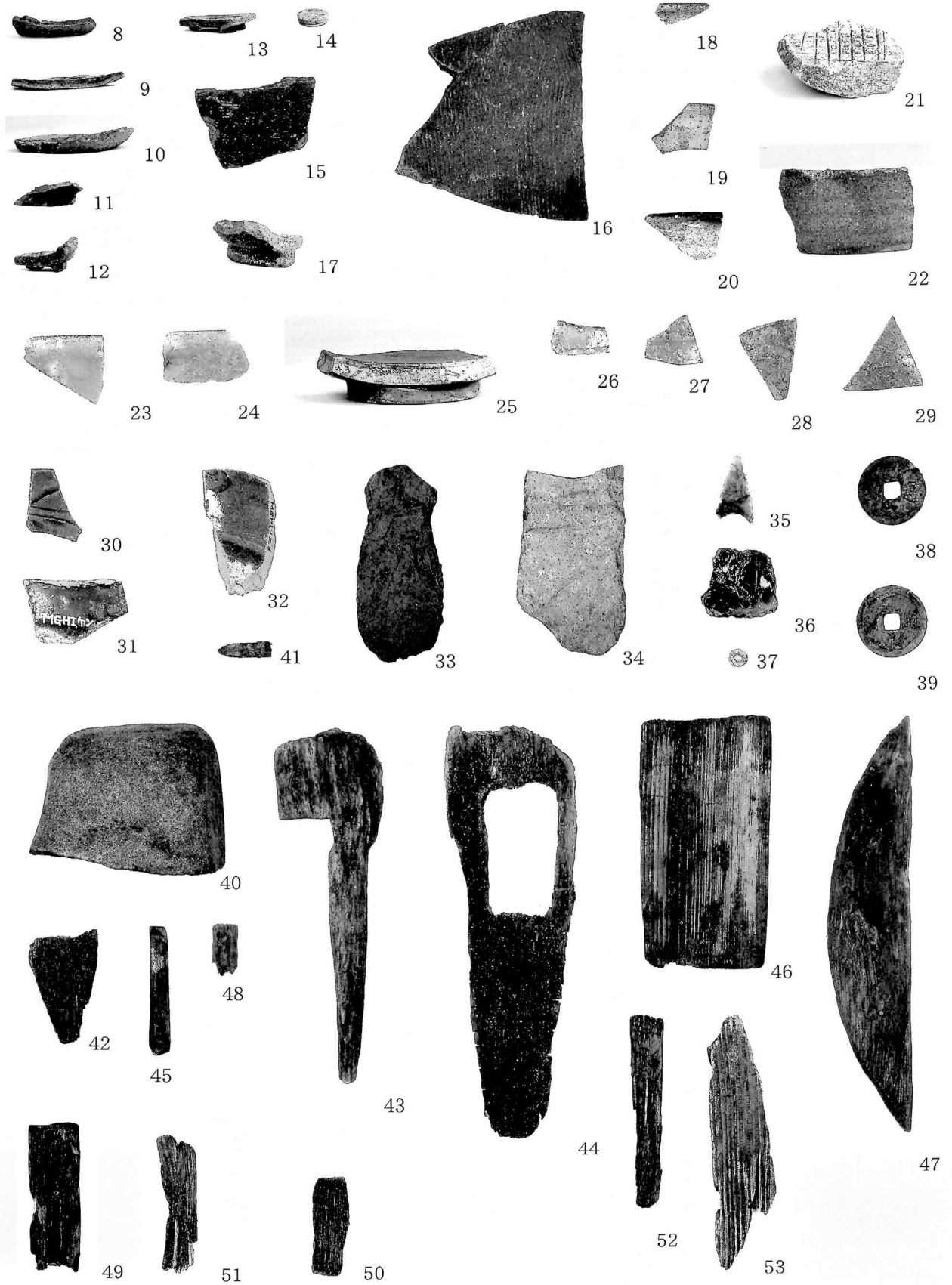
6



7

遺構外出土遺物

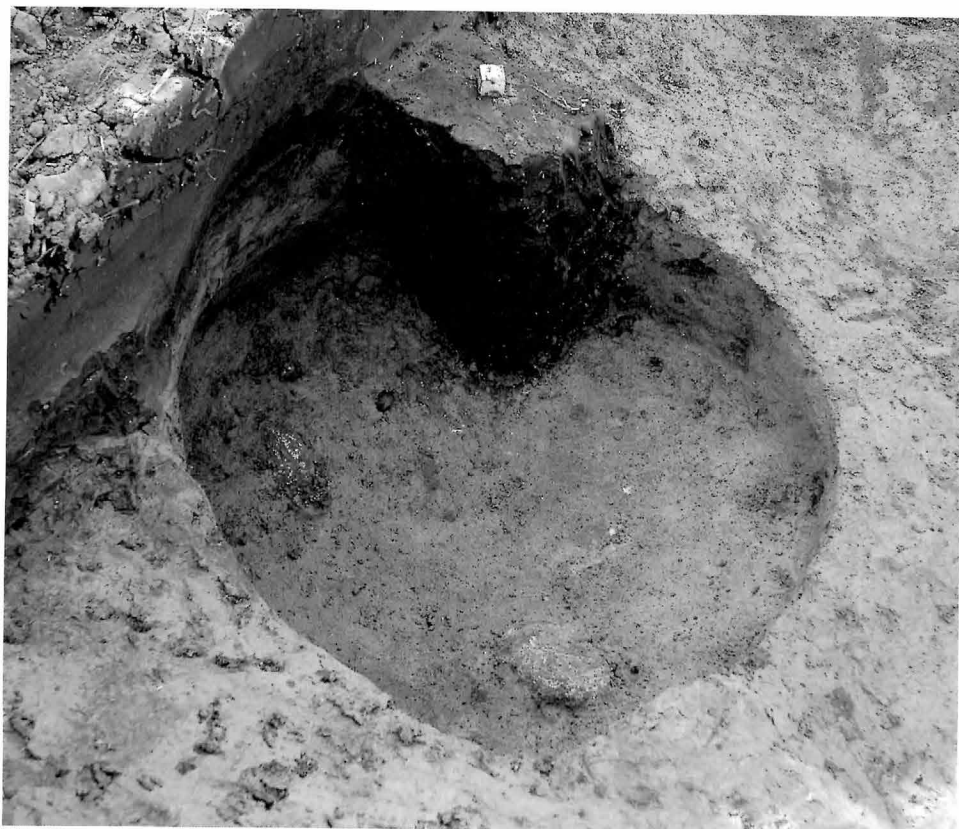
图版 8



遺構外出土遺物



平馬塚遺跡Ⅱ D 1号土坑



平馬塚遺跡Ⅱ D 2号土坑





平馬塚遺跡Ⅱ D3号土坑



平馬塚遺跡Ⅱ M1号溝址



平馬塚遺跡Ⅱ M2・M4号溝址



平馬塚遺跡Ⅱ M2号溝址



平馬塚遺跡Ⅱ M4号溝址



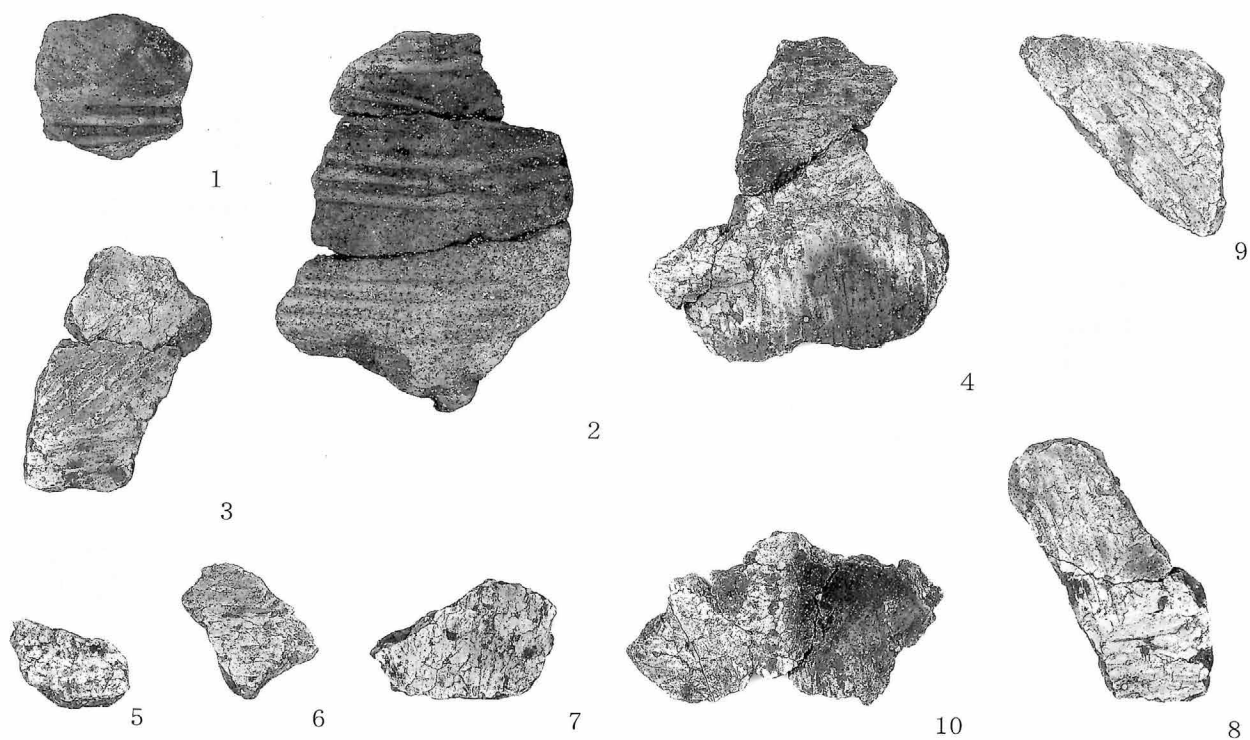
平馬塚遺跡Ⅱ M3号溝址



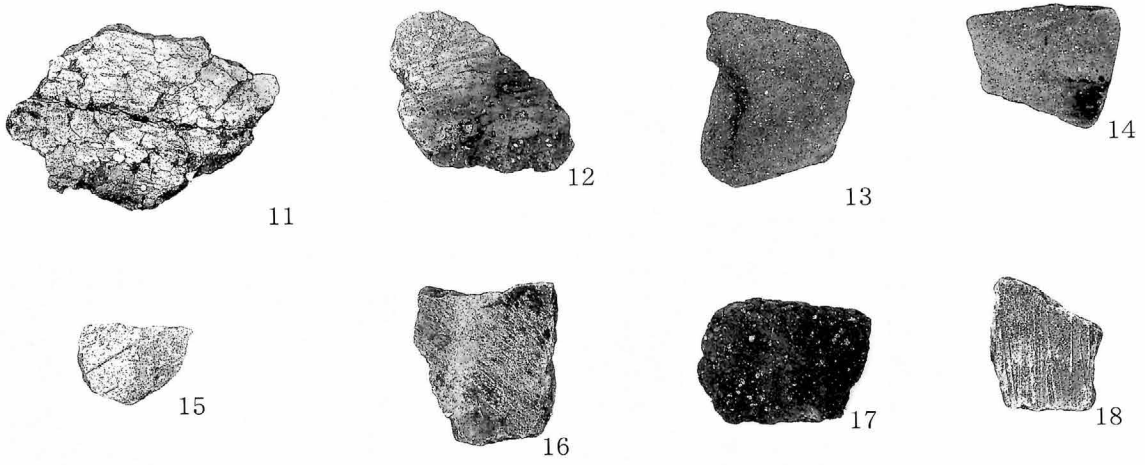
平馬塚遺跡Ⅱ 全景（西半）



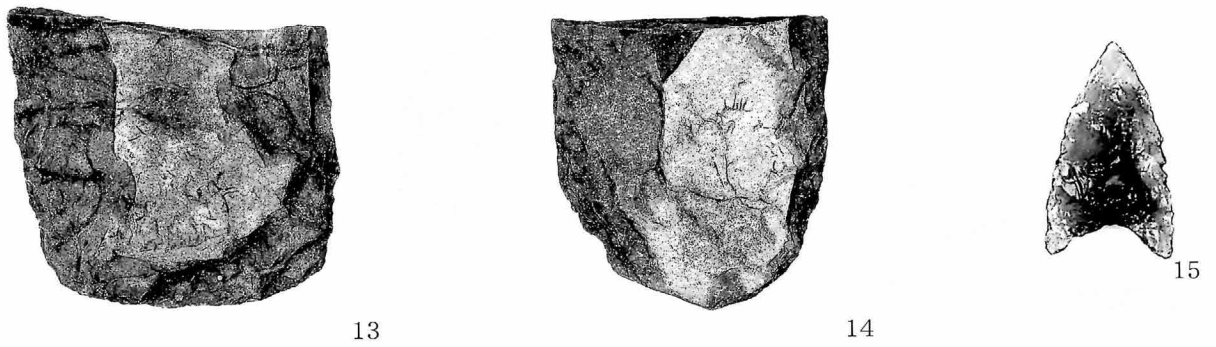
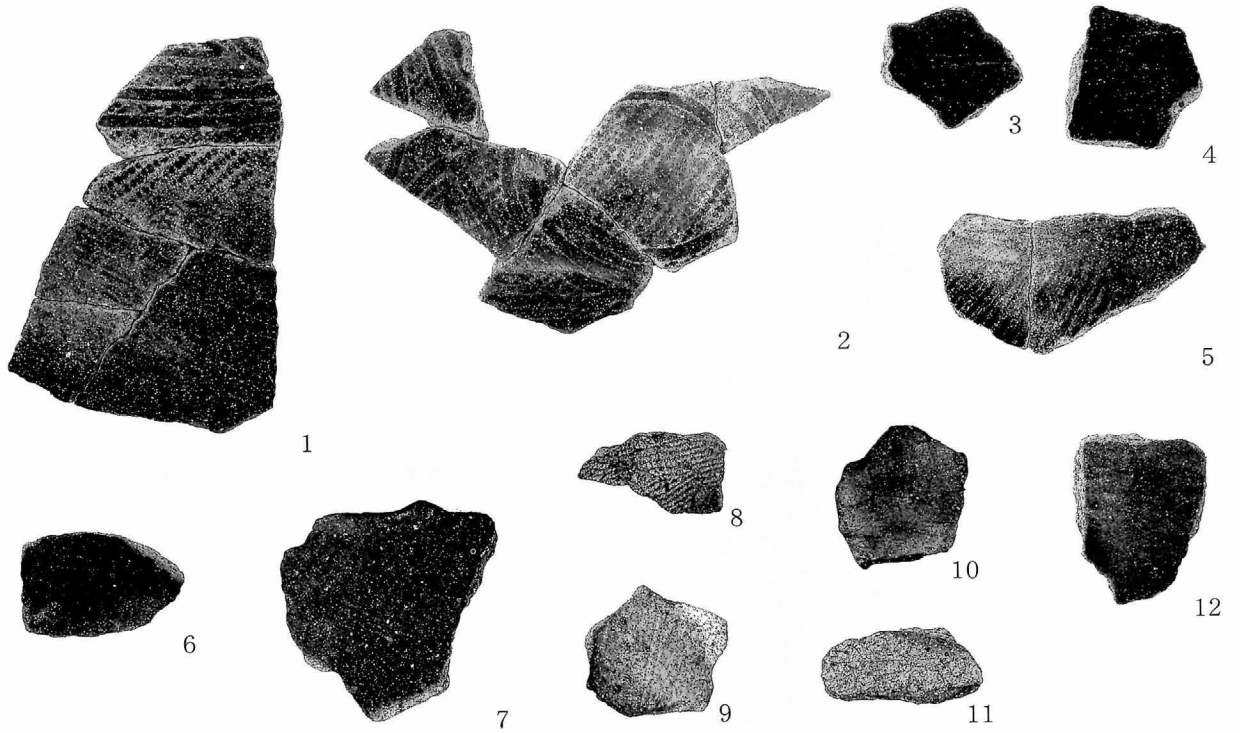
平馬塚遺跡Ⅱ 全景 (東半)



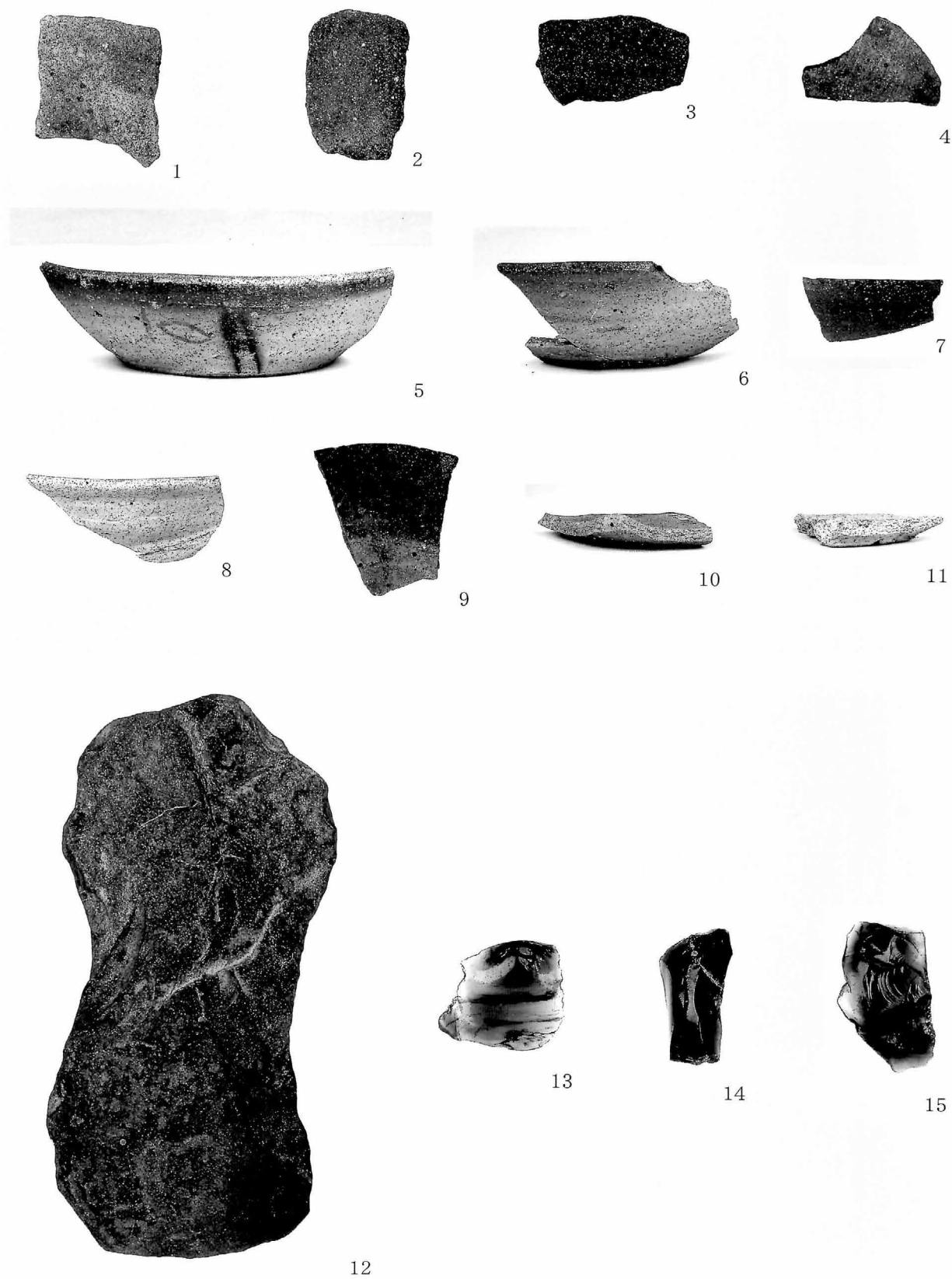
平馬塚遺跡Ⅱ M2号溝址 (縮尺：約1/2)



平馬塚遺跡Ⅱ M2号溝址 (縮尺: 約1/2)



平馬塚遺跡Ⅱ M4号溝址 (縮尺: 約1/2、15は原寸)



平馬塚遺跡Ⅱ M3号溝址 (縮尺: 約1/2)



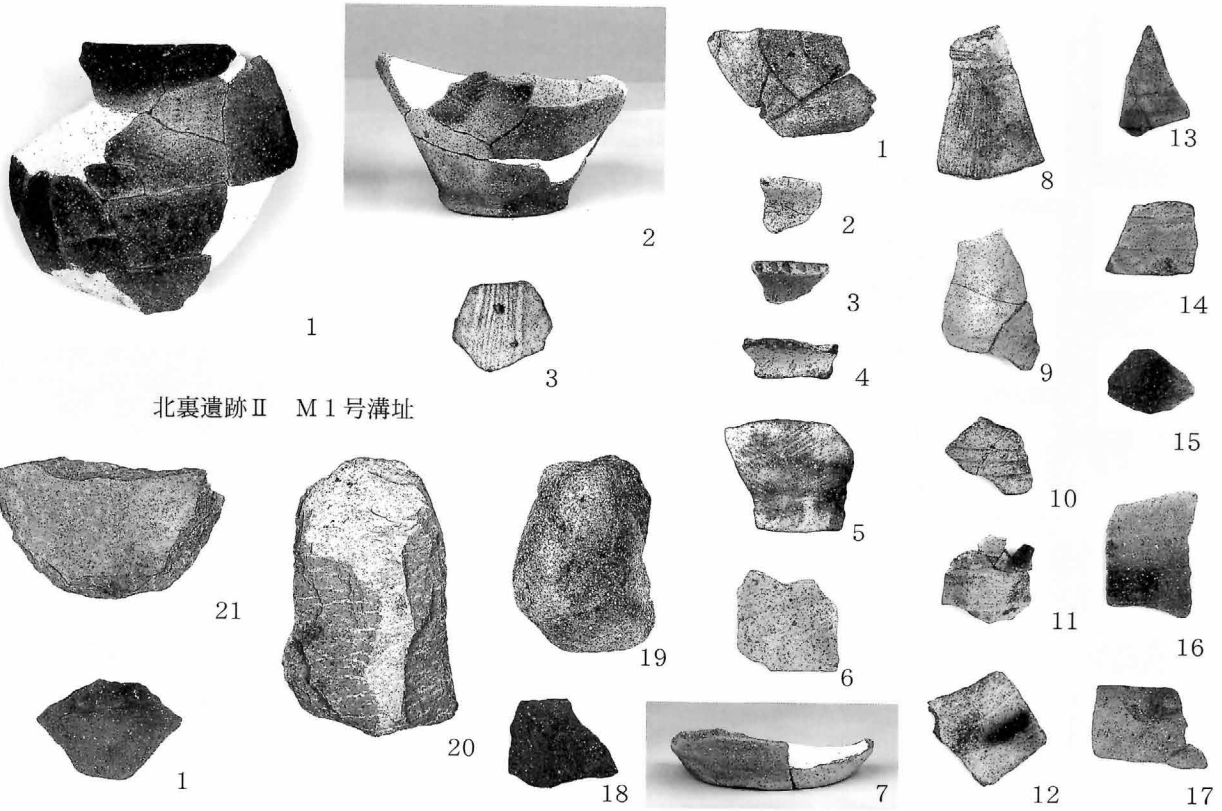
北裏遺跡Ⅱ M1・2号溝址（西から）



北裏遺跡Ⅱ M1・2号溝址（東から）



北裏遺跡Ⅱ全景（北から）



北裏遺跡Ⅱ M1号溝址

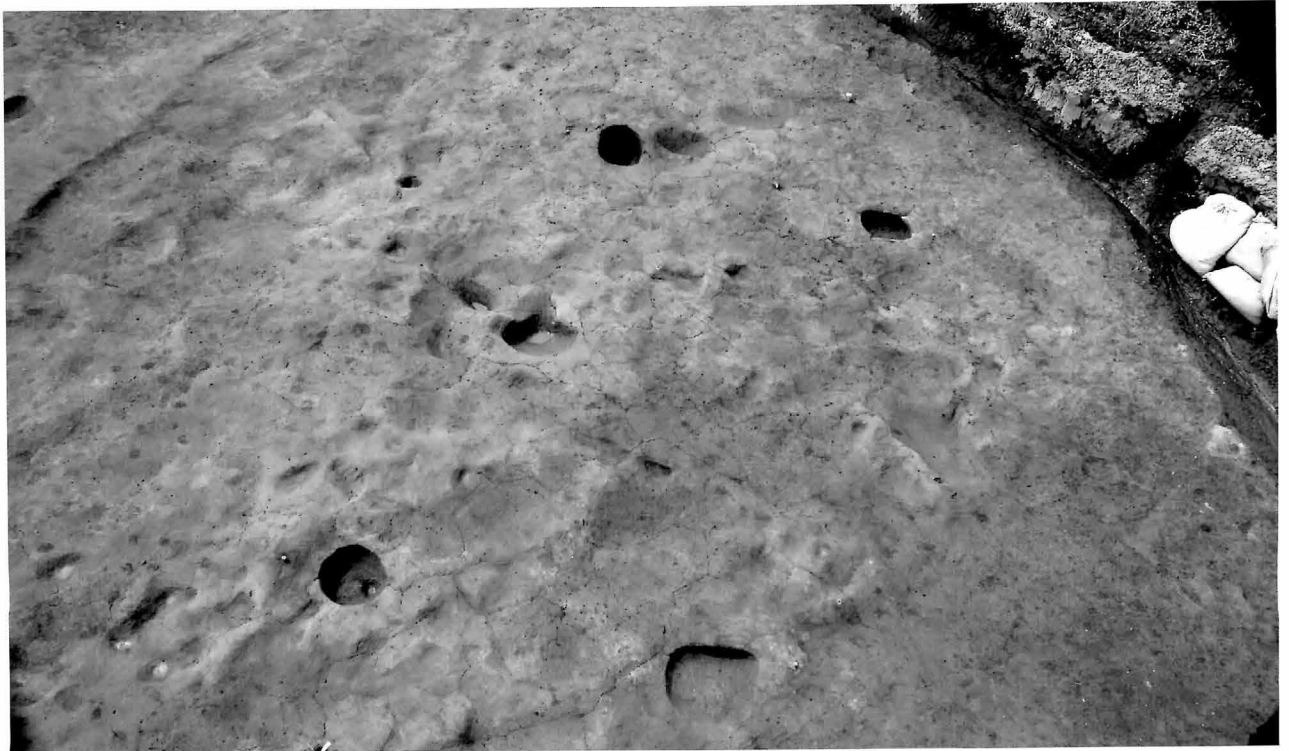
遺構外出土遺物

北裏遺跡Ⅱ M2号溝址

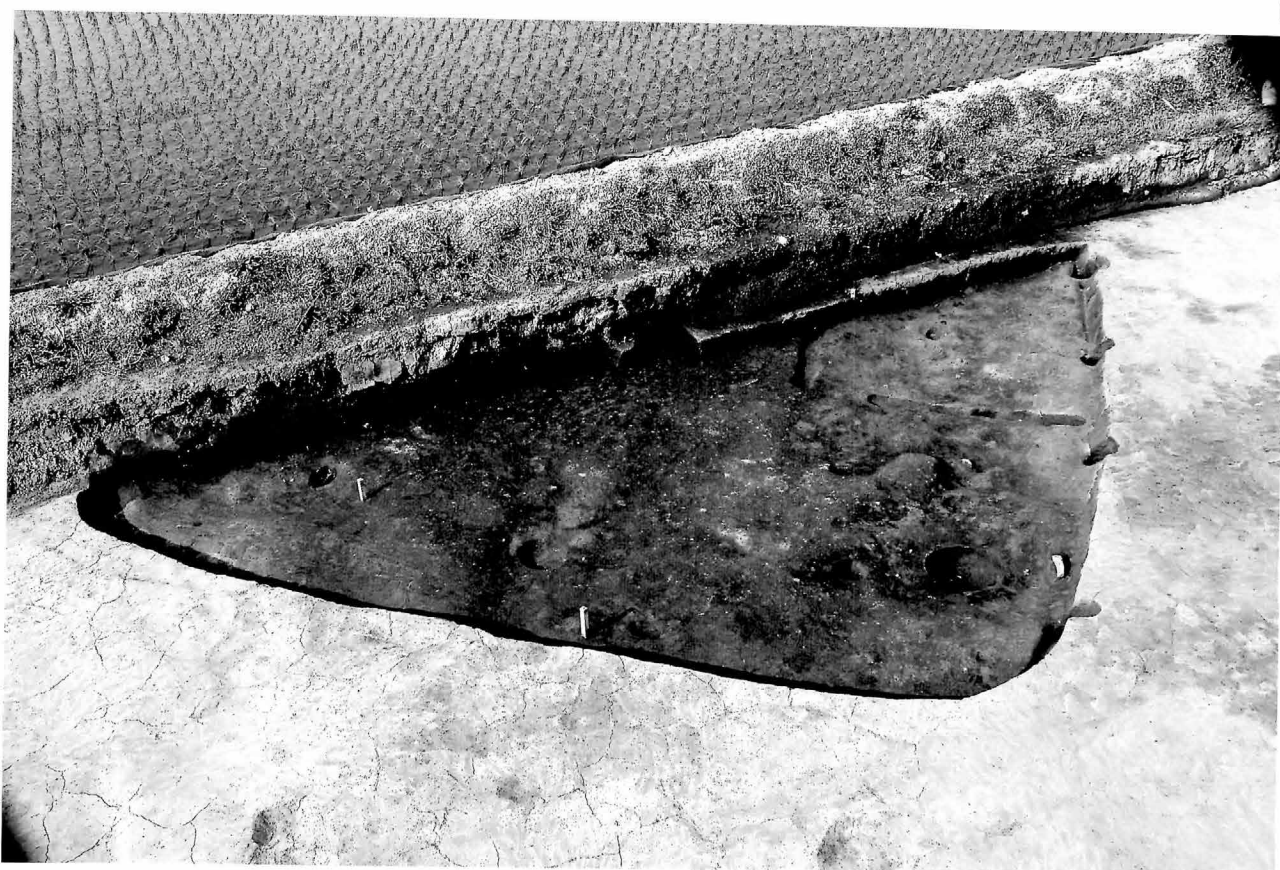




宮浦遺跡 H1号住居址



宮浦遺跡 H2号住居址



宮浦遺跡 H 3号住居址



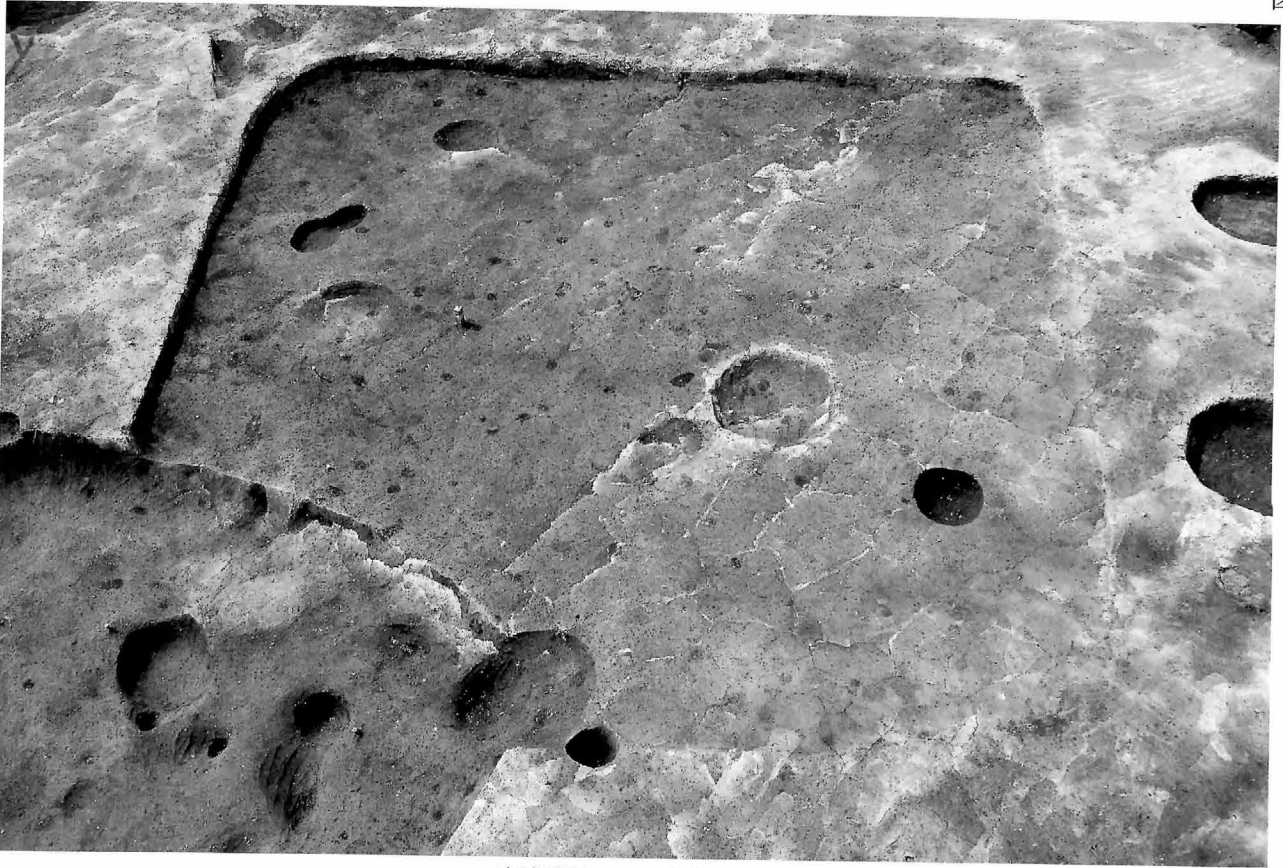
宮浦遺跡 H 4号住居址



宮浦遺跡 H5号住居址



宮浦遺跡 H5号住居址カマド



宮浦遺跡 H6号住居址



宮浦遺跡 H7号住居址



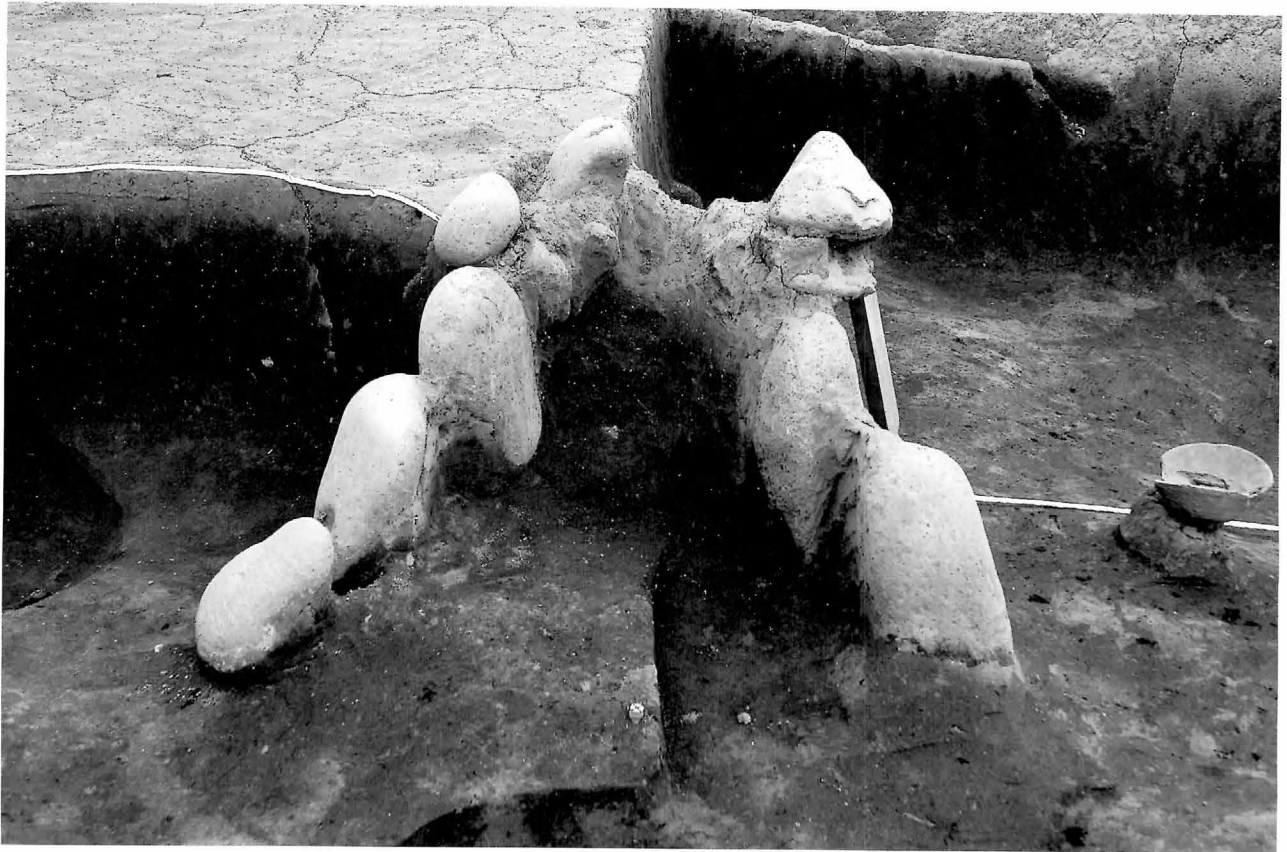
宮浦遺跡 H7号住居址カマド



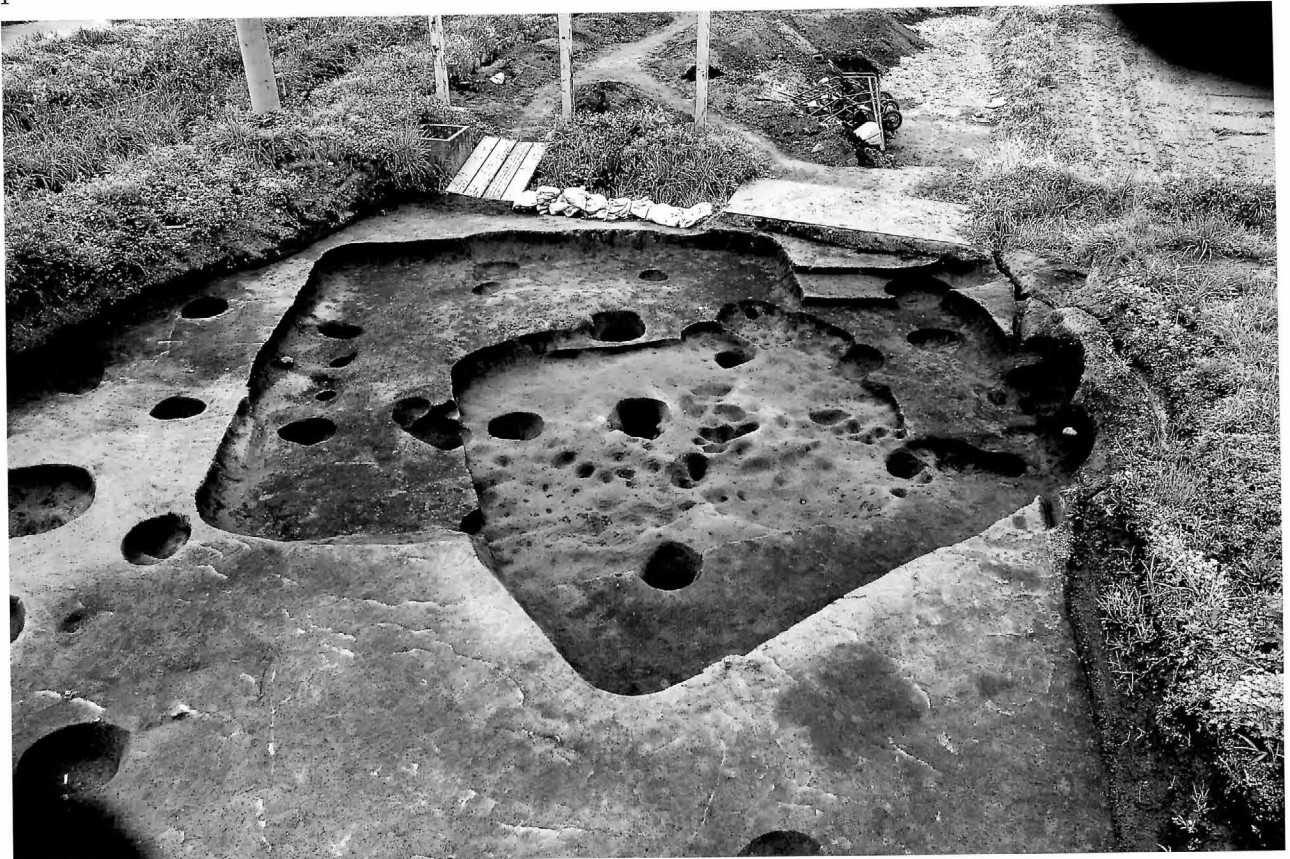
宮浦遺跡 H8号住居址



宮浦遺跡 H9号住居址



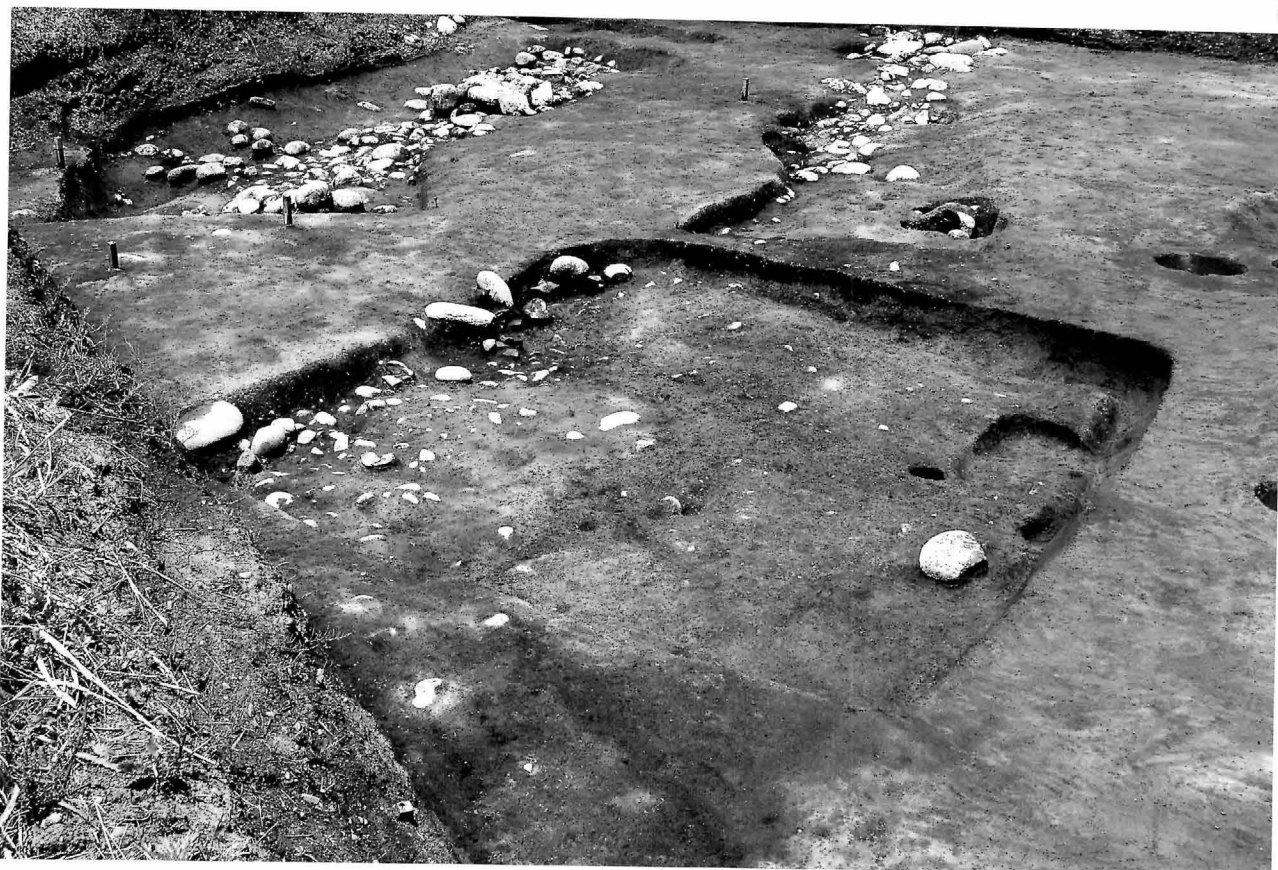
宮浦遺跡 H9号住居址カマド



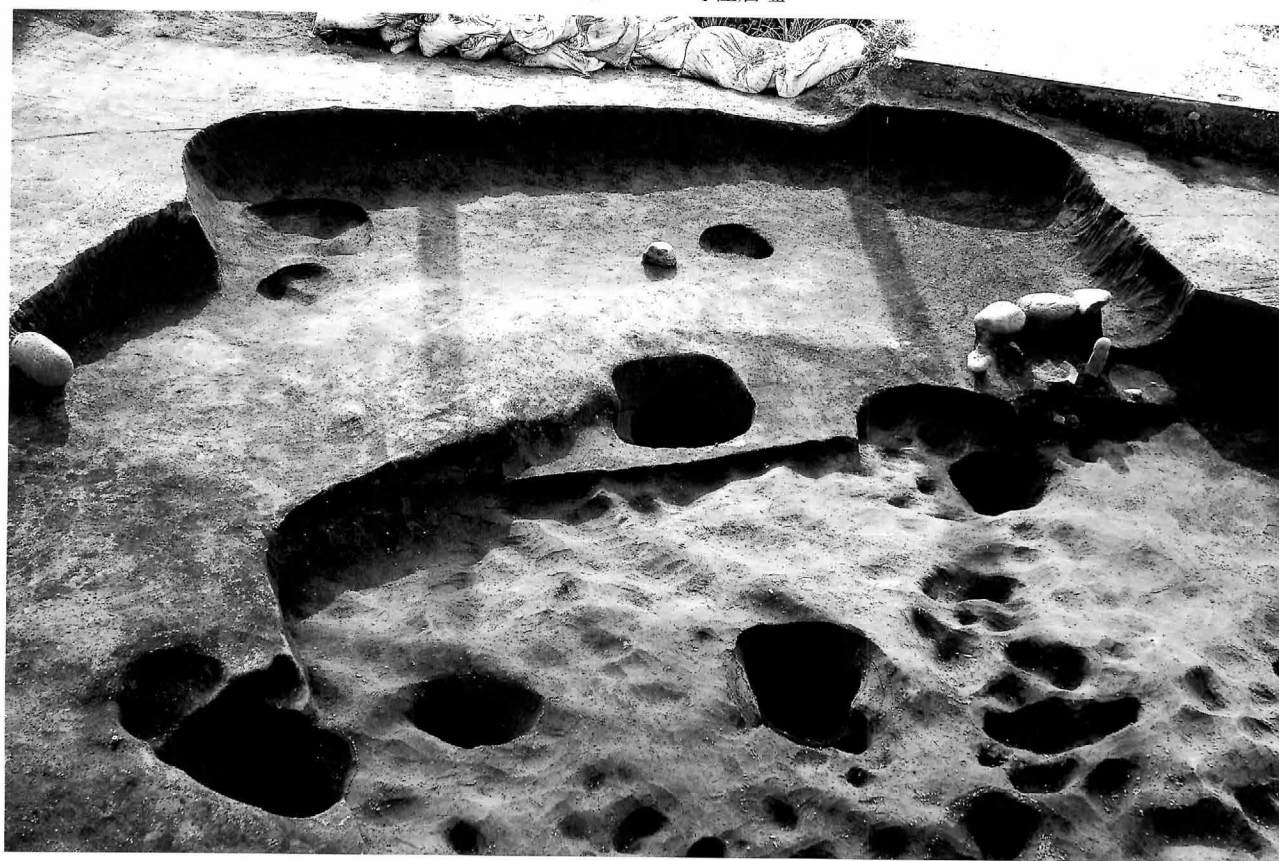
宮浦遺跡 H10・H11号住居址



宮浦遺跡 H10号住居址カマド



宮浦遺跡 H12 号住居址



宮浦遺跡 H13 号住居址

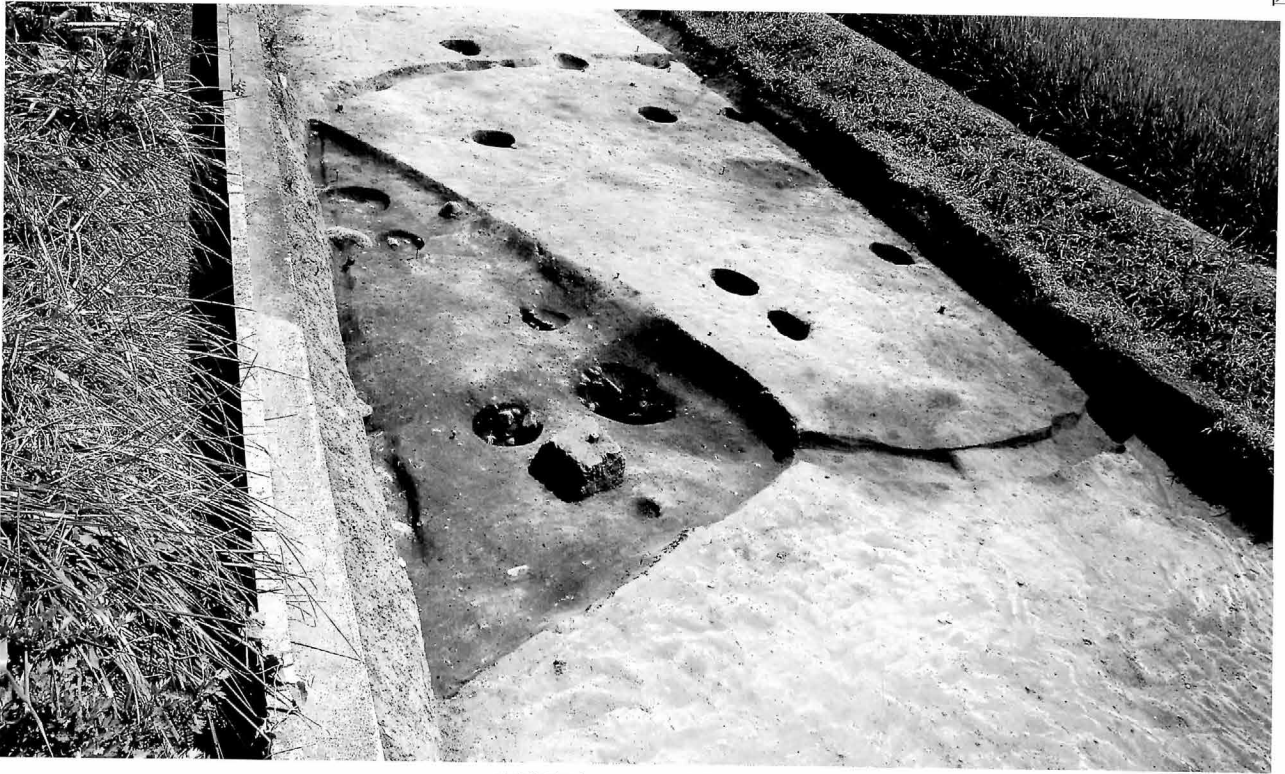




宮浦遺跡 H14号住居址



宮浦遺跡 H15号住居址



宮浦遺跡 H16号住居址



宮浦遺跡 H17号住居址



宮浦遺跡 H18号住居址



宮浦遺跡 H19号住居址



宮浦遺跡 H19号住居址カマド



宮浦遺跡 H20号住居址



宮浦遺跡 F1号掘立柱建物址



宮浦遺跡 F2・F3号掘立柱建物址



↑宮浦遺跡 F 4号掘立柱建物址



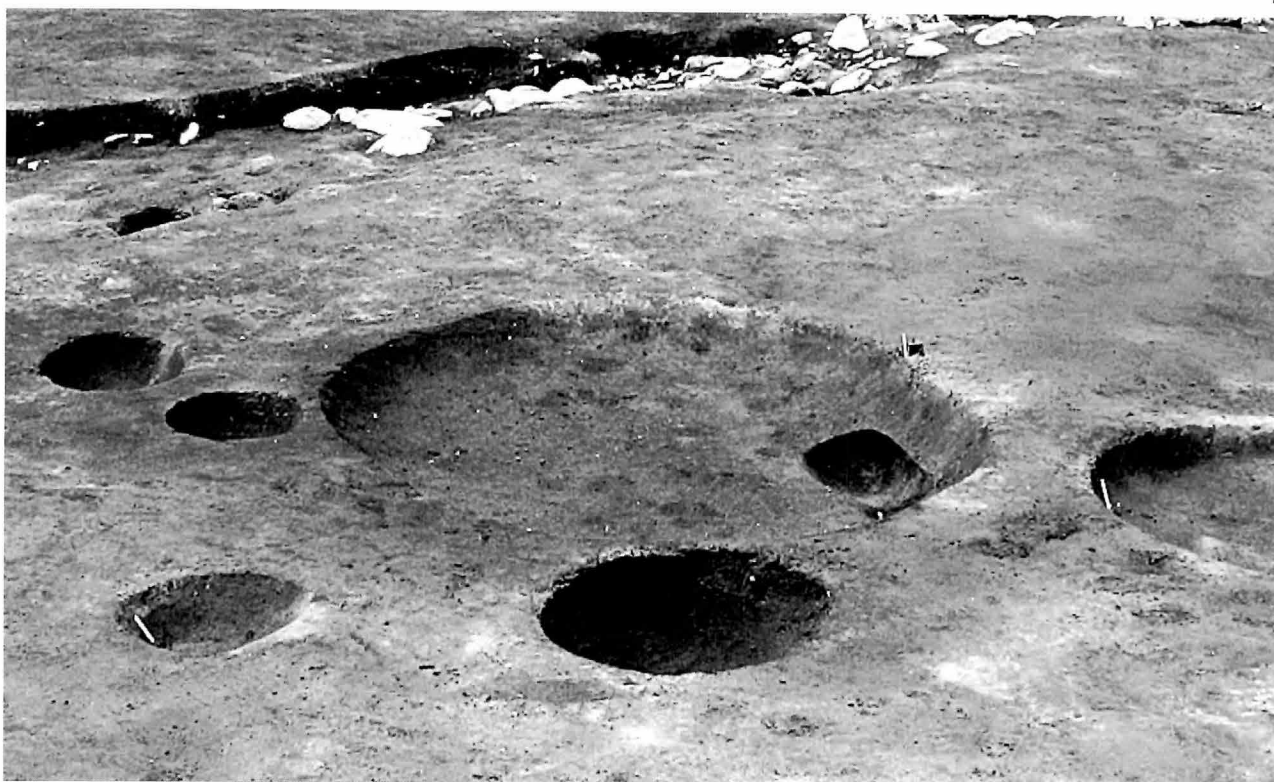
←宮浦遺跡 D 1号土坑



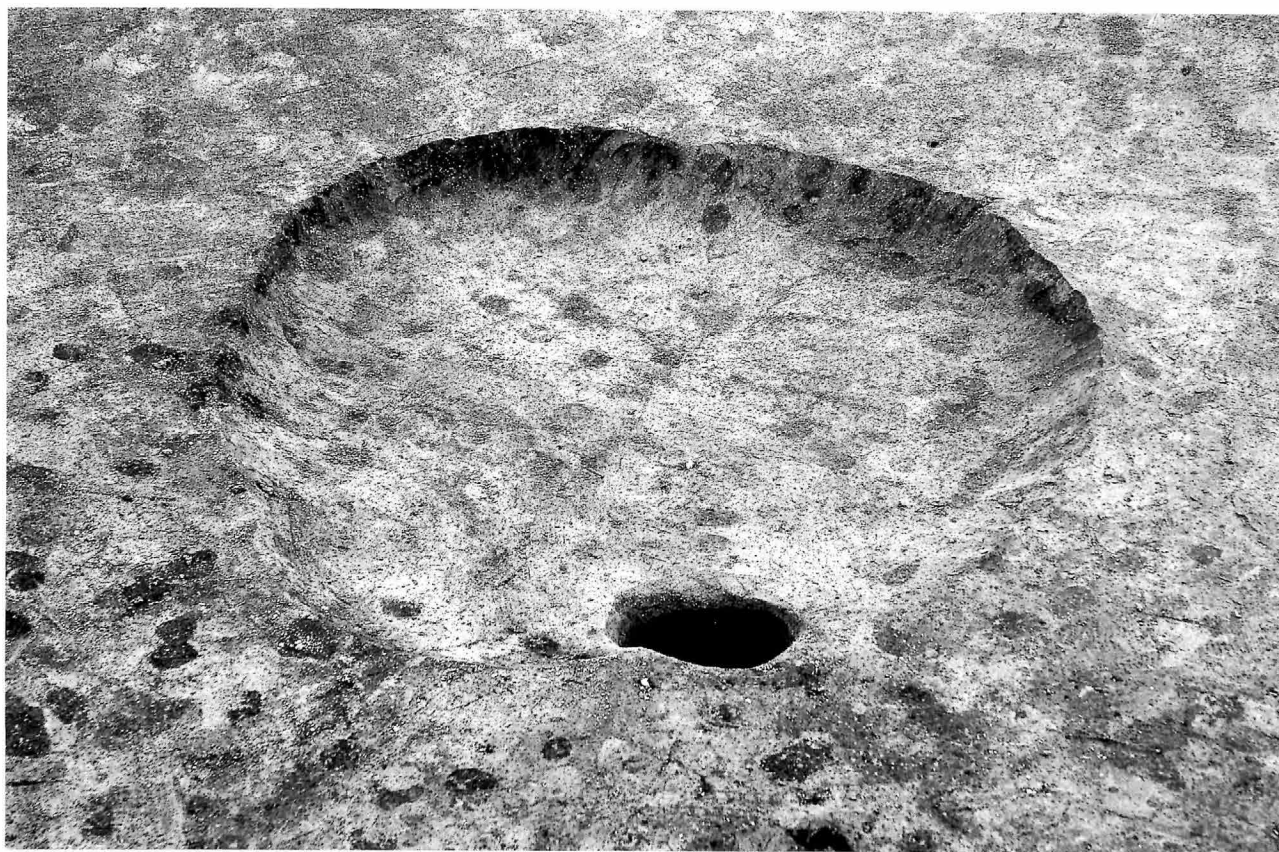
宫浦遺跡 D 2号土坑



宫浦遺跡 D 3号土坑



宫浦遺跡 D 4号土坑



宫浦遺跡 D 5号土坑





宫浦遺跡 D6号土坑



宫浦遺跡 D7号土坑



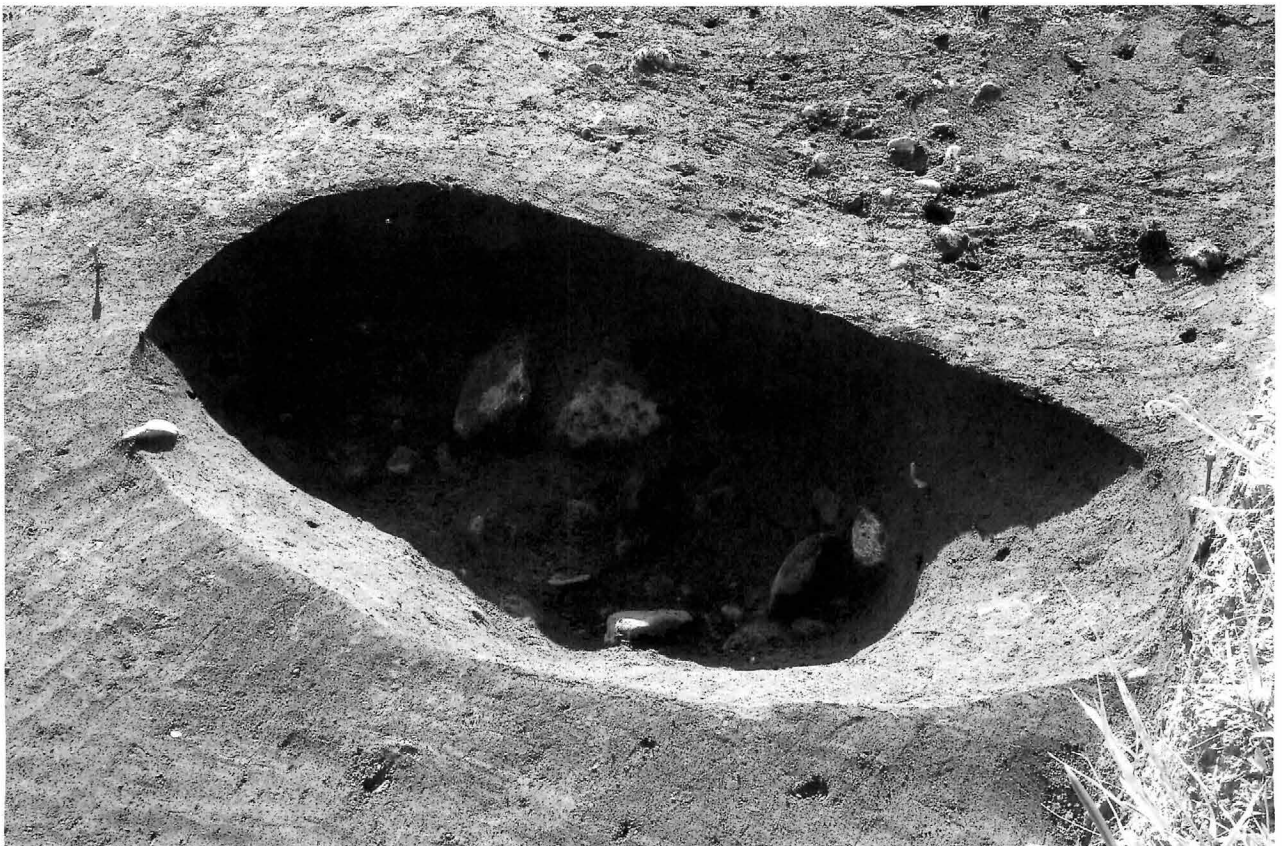
宫浦遺跡 D 9 号土坑



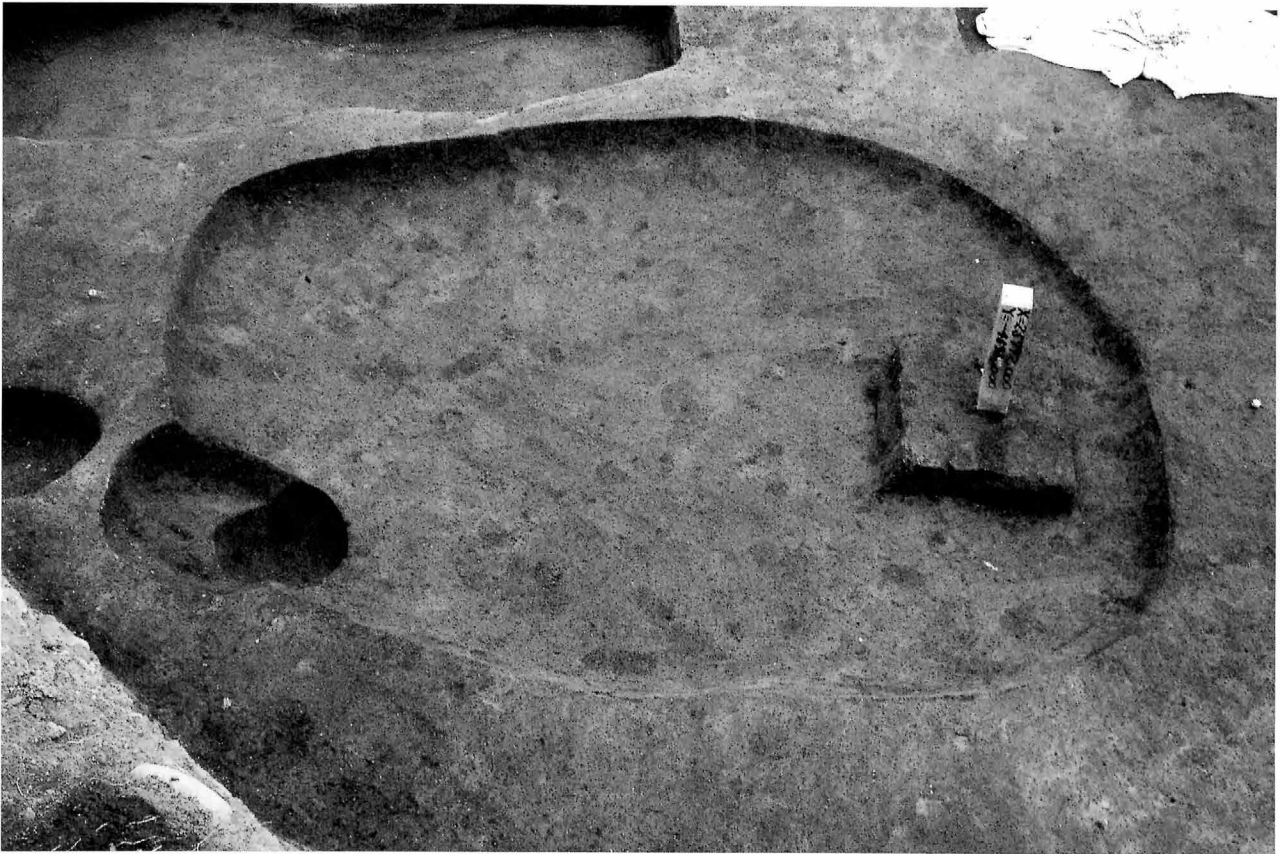
宫浦遺跡 D 10 号土坑



宮浦遺跡 D11号土坑



宮浦遺跡 D12号土坑



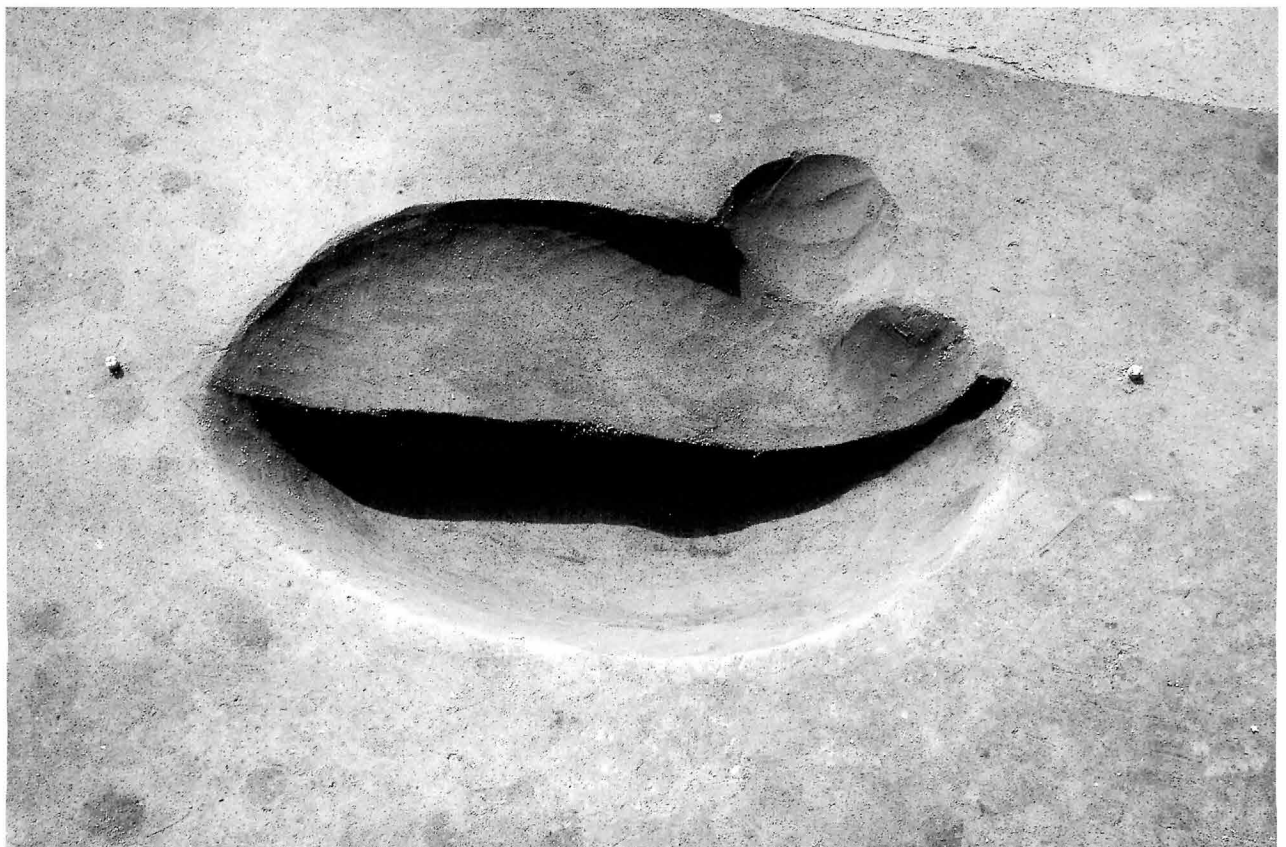
宮浦遺跡 D13号土坑



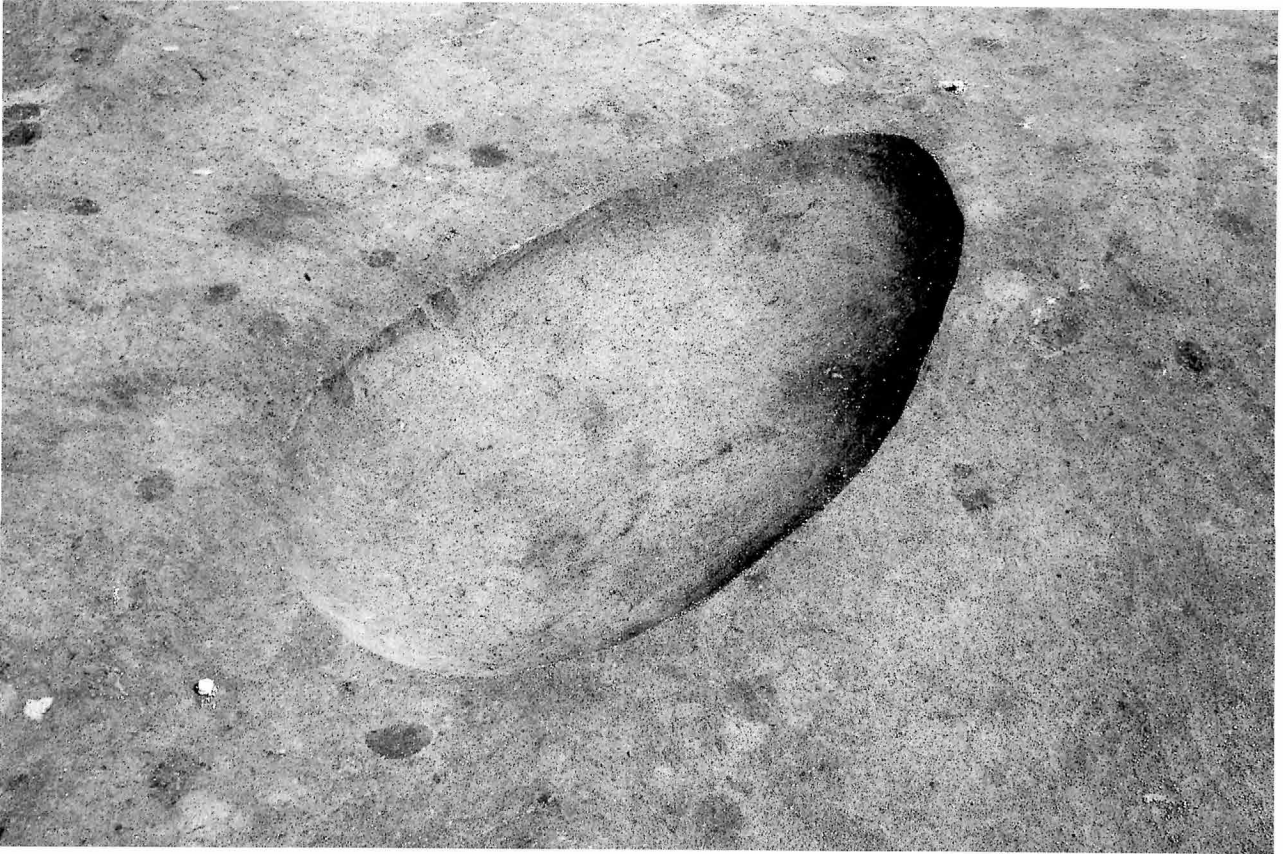
宮浦遺跡 D14号土坑



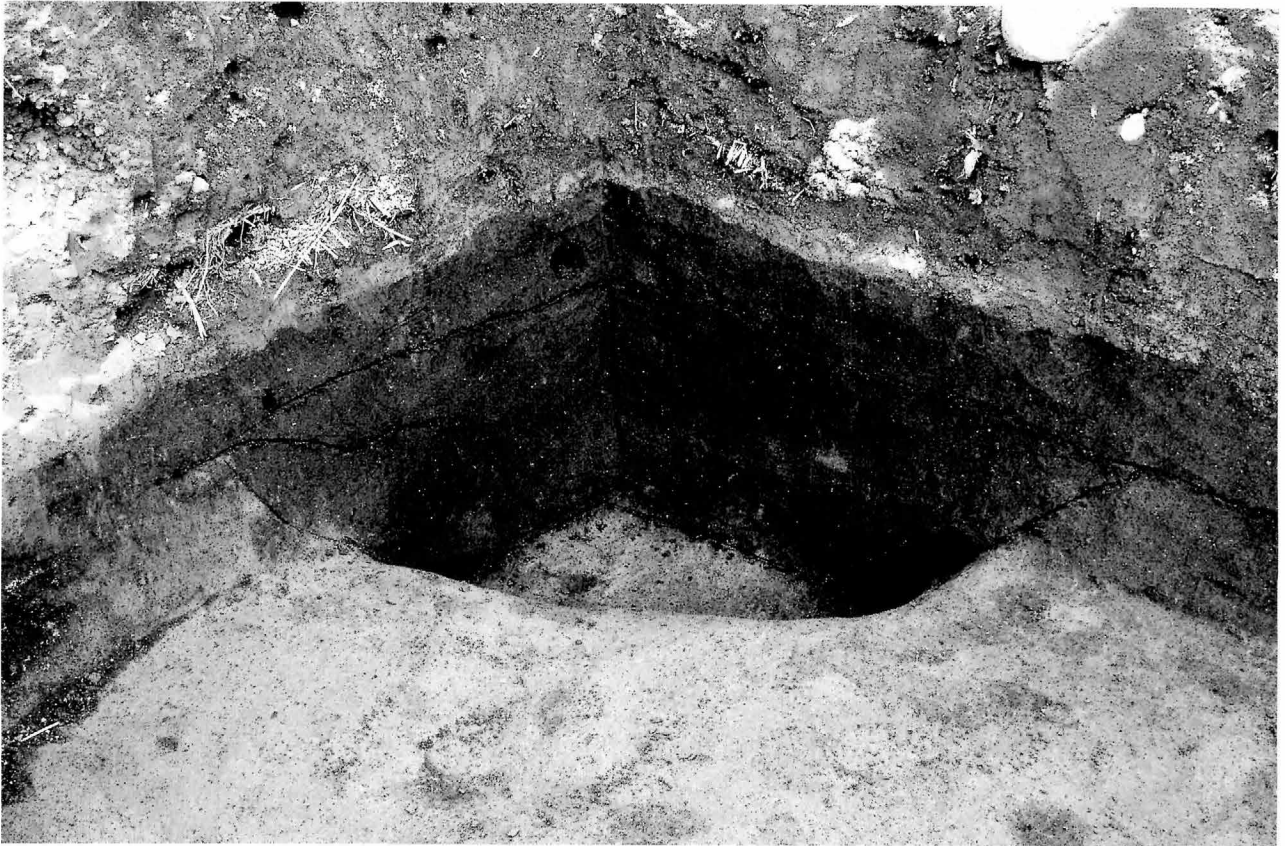
宮浦遺跡 D15号土坑



宮浦遺跡 D16号土坑



宫浦遺跡 D17 号土坑



宫浦遺跡 D18 号土坑



宮浦遺跡 M1号溝址



宮浦遺跡 M2号溝址 (南半)



宮浦遺跡 M2号溝址(北半)



宮浦遺跡 M2号溝址礫検出状況(北半)

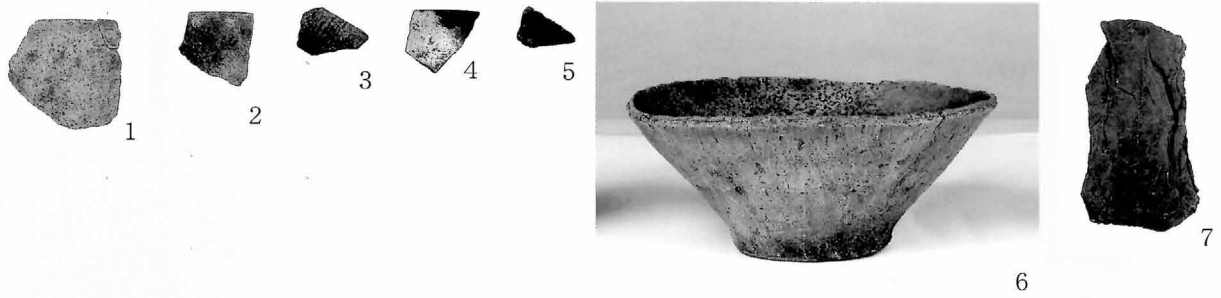




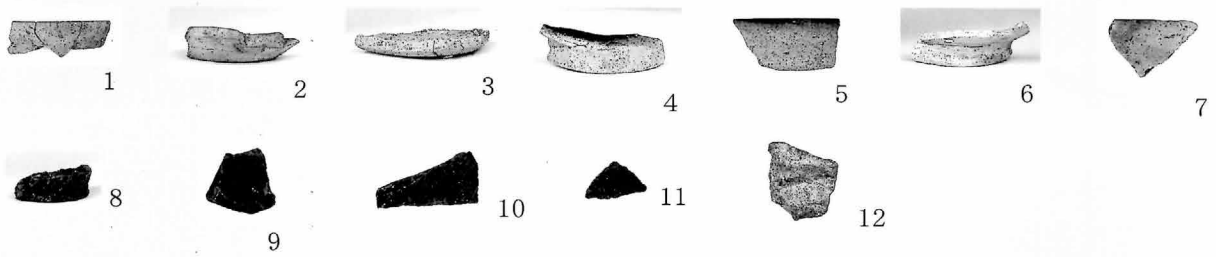
宮浦遺跡 全景（南から）



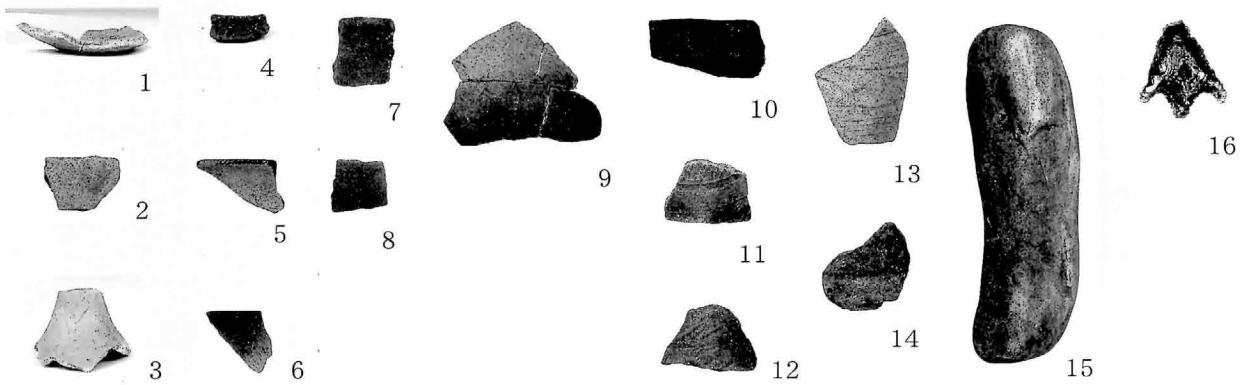
宮浦遺跡 全景（東から）



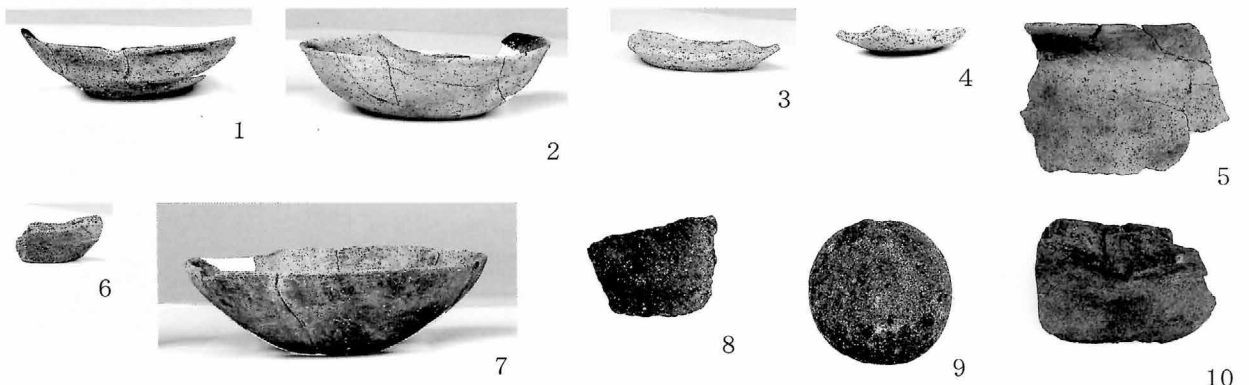
宮浦遺跡 I H 1号住居址



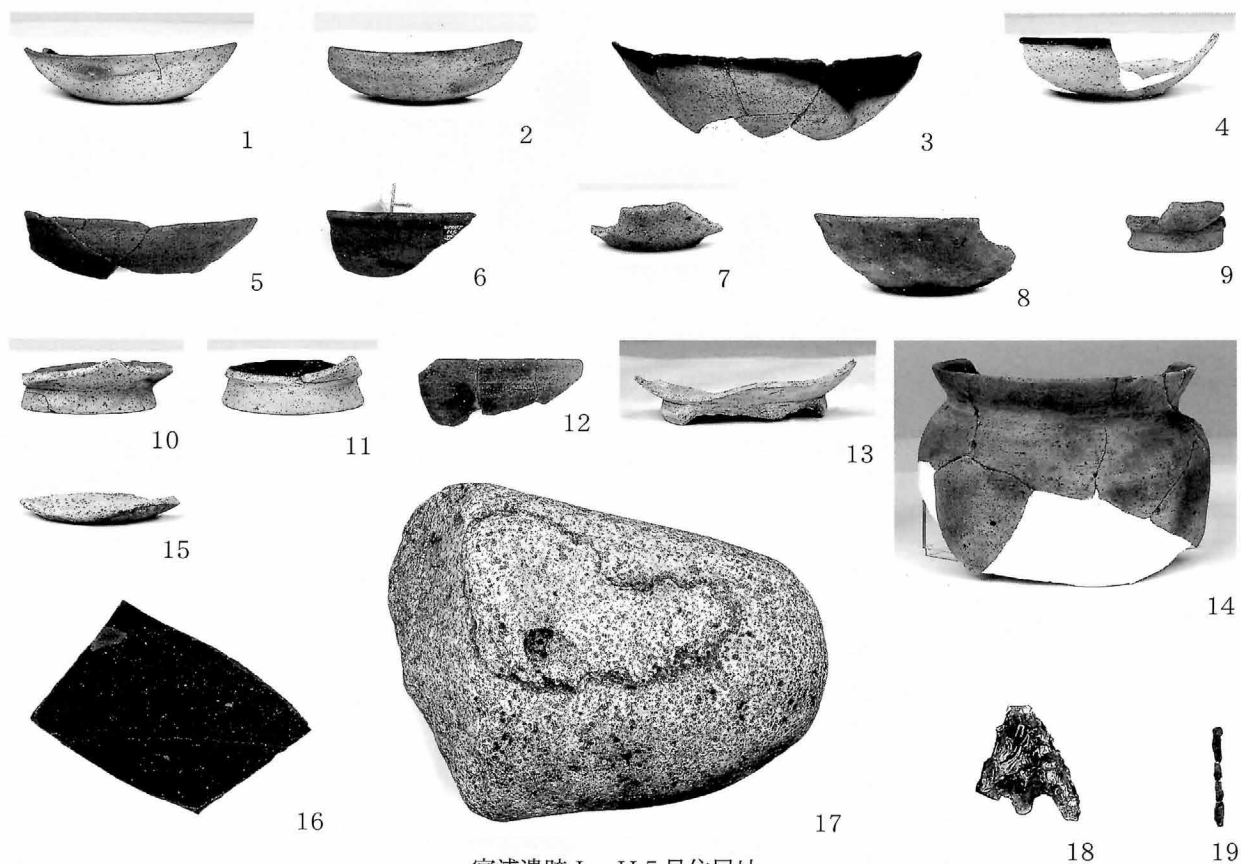
宮浦遺跡 I H 2号住居址



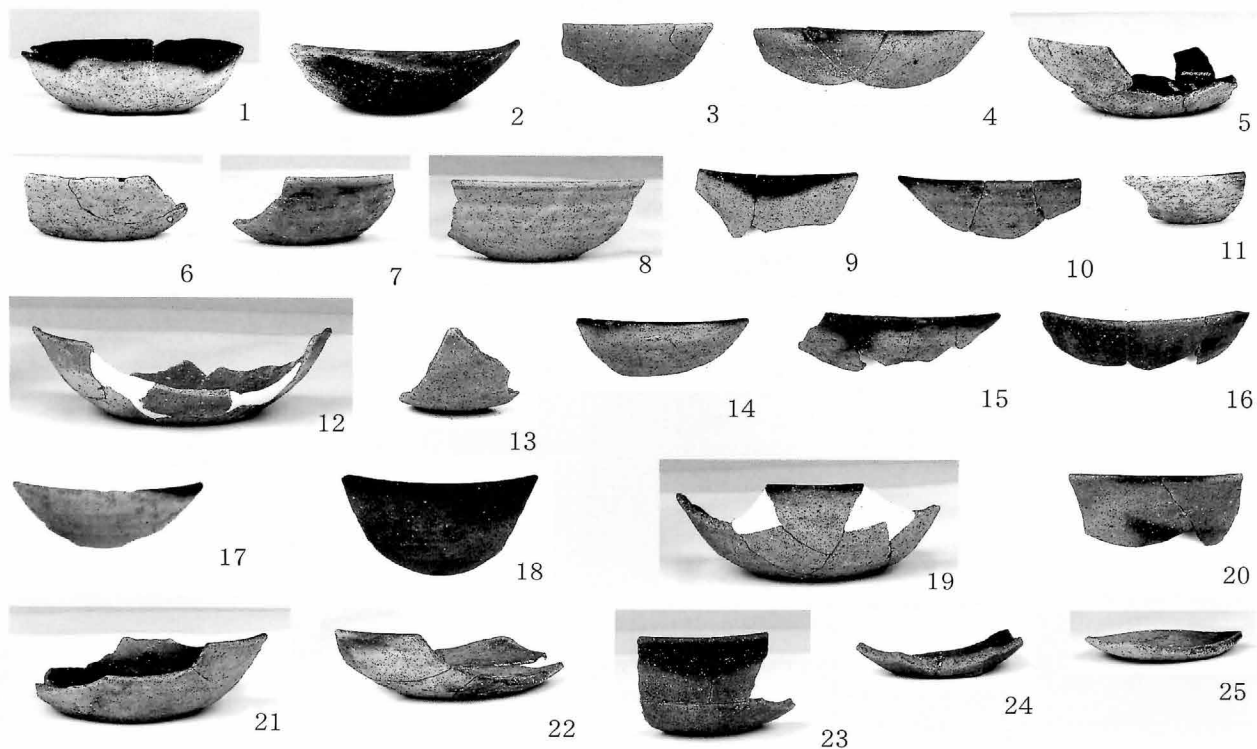
宮浦遺跡 I H 3号住居址



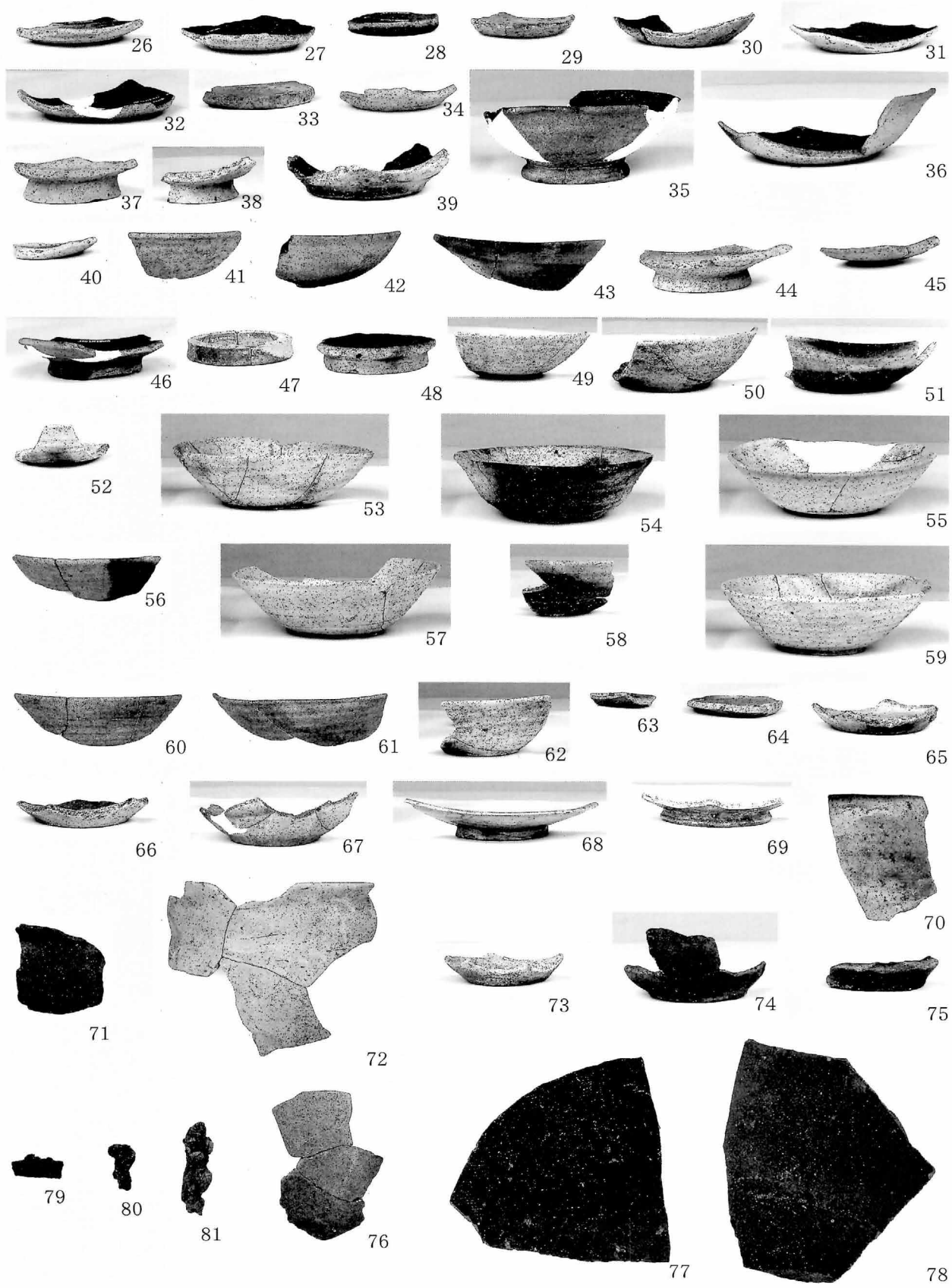
宮浦遺跡 I H 4号住居址



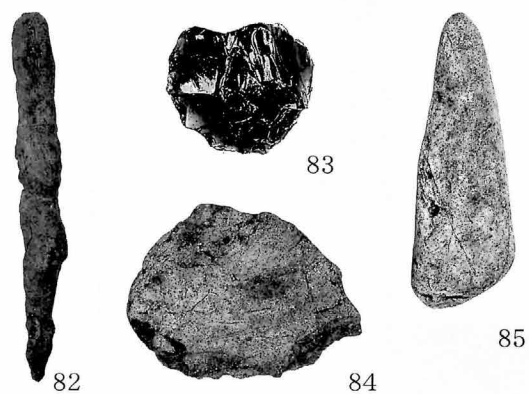
宮浦遺跡 I H5号住居址



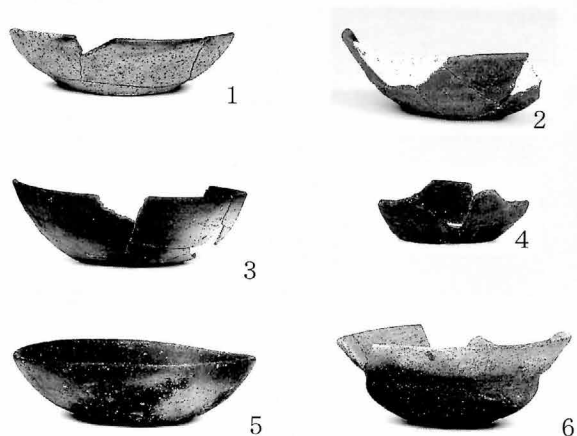
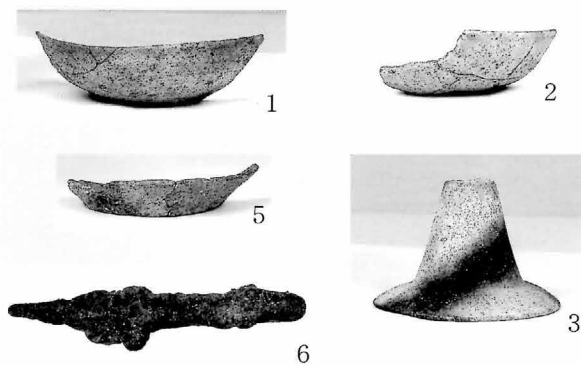
宮浦遺跡 I H7号住居址



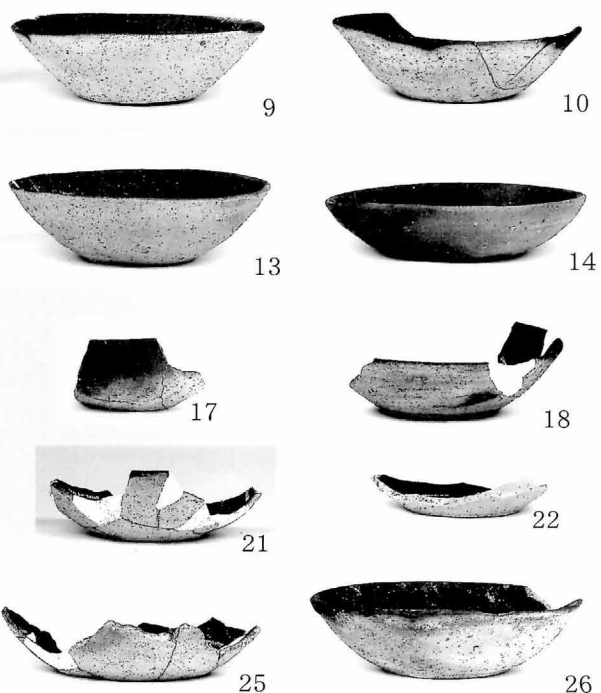
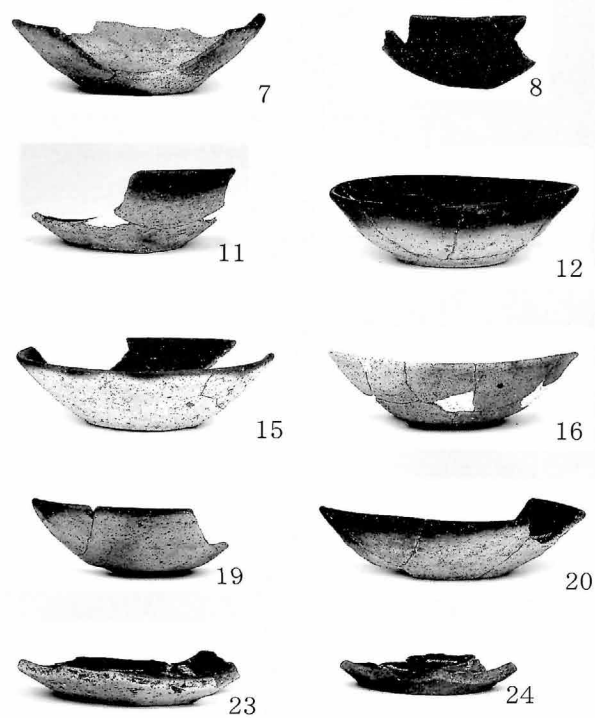
宫浦遺跡 I H 7 号住居址



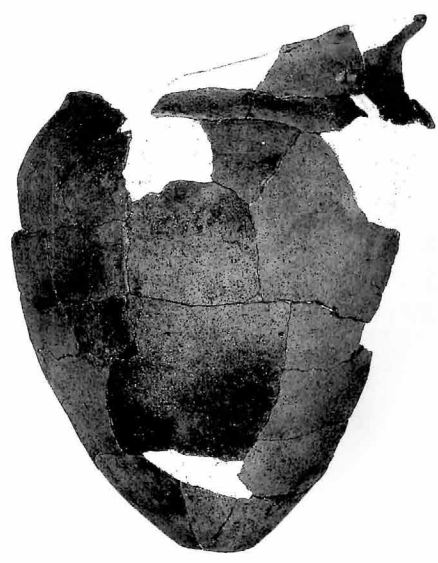
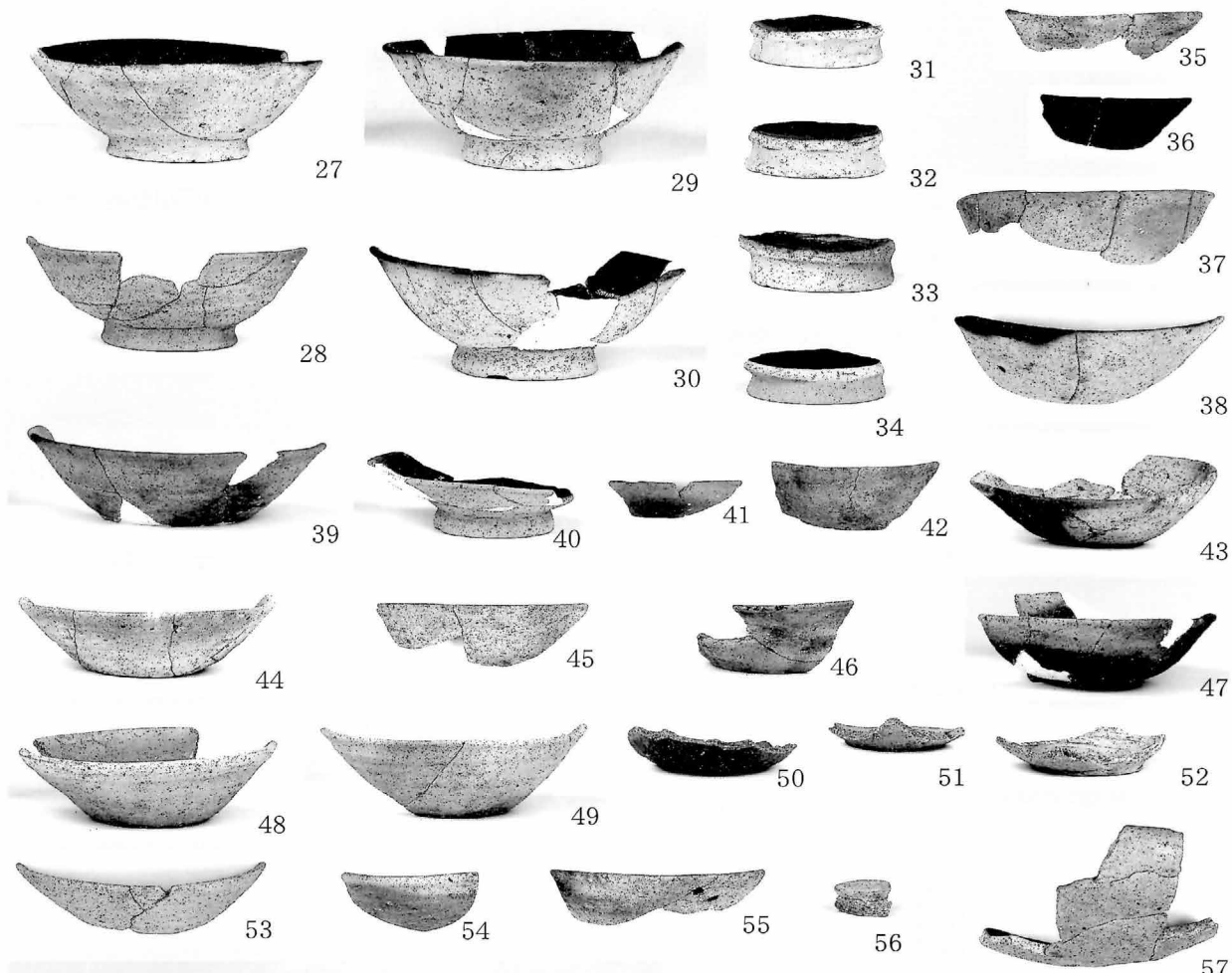
宮浦遺跡 I H 7 号住居址 (83 原寸)



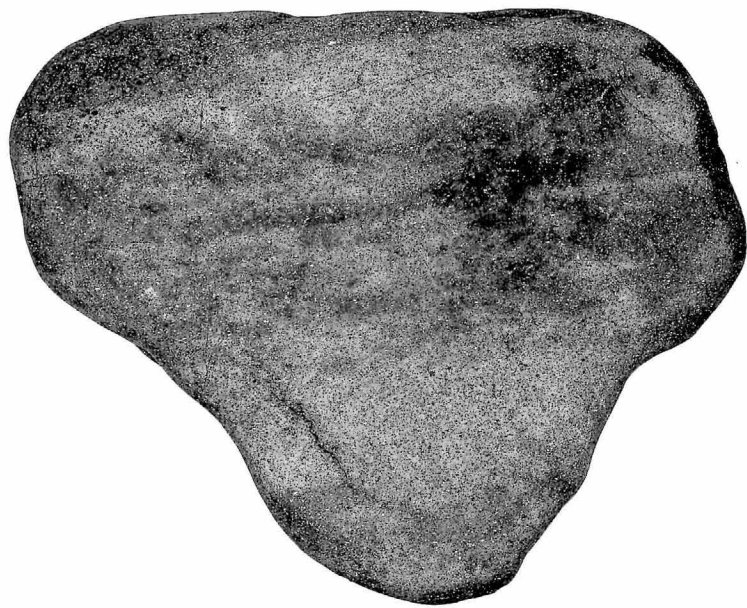
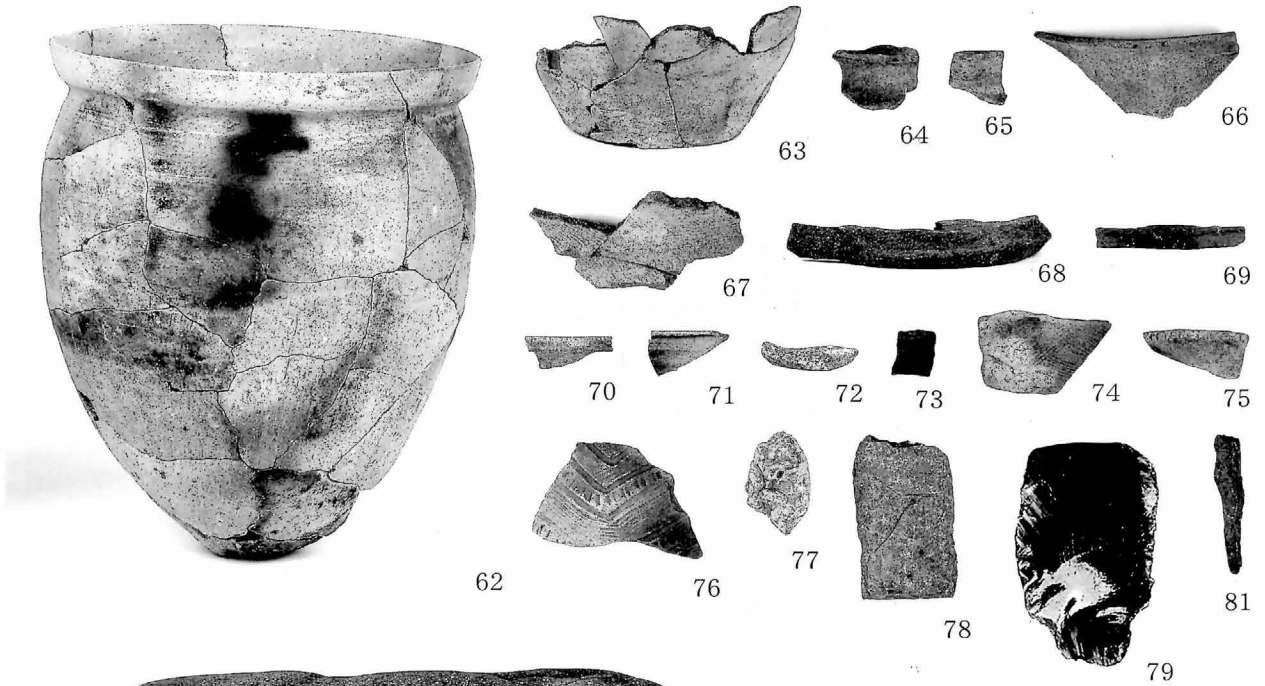
宮浦遺跡 I H 8 号住居址



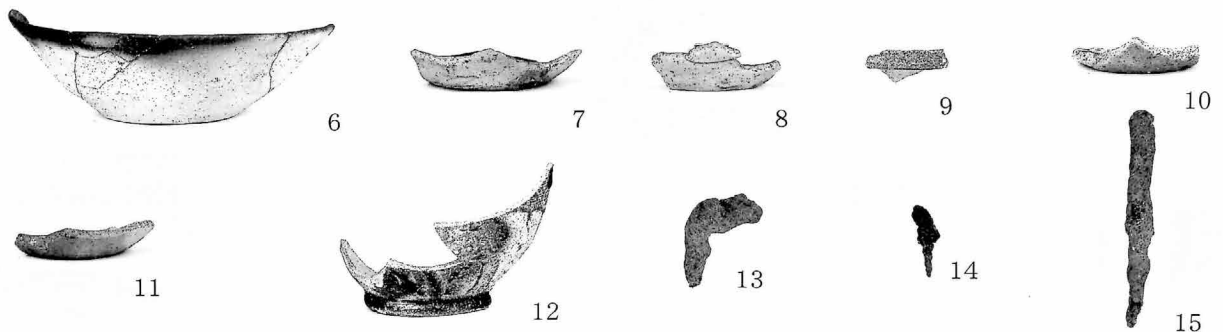
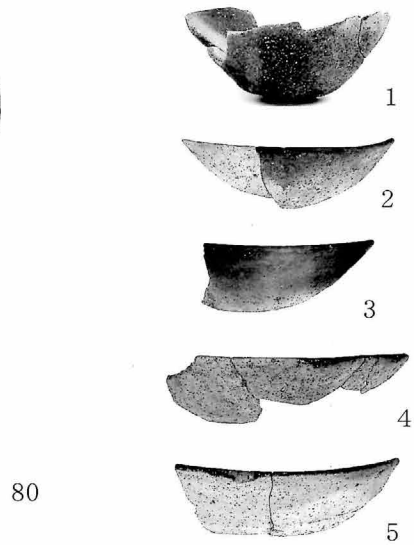
宮浦遺跡 I H 9 号住居址



宫浦遺跡 I H 9 号住居址



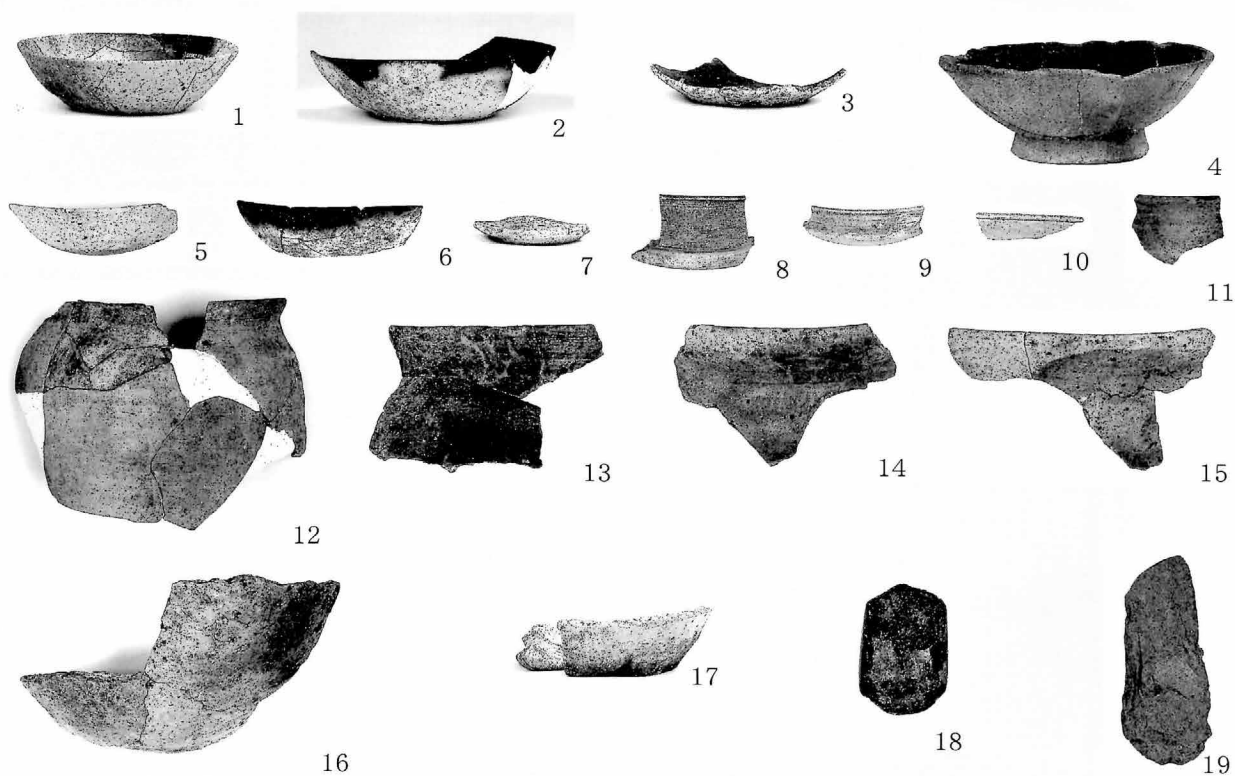
宫浦遺跡 I H9号住居址



宫浦遺跡 I H10号住居址



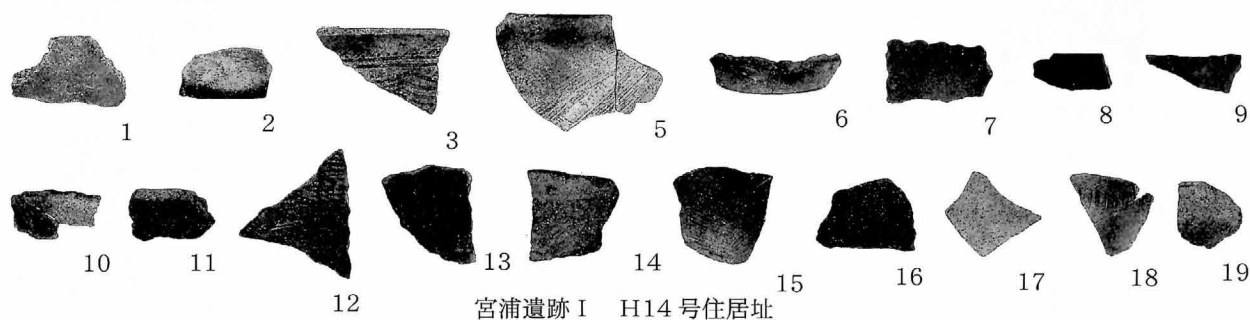
宫浦遺跡 I H11 号住居址



宫浦遺跡 I H12 号住居址

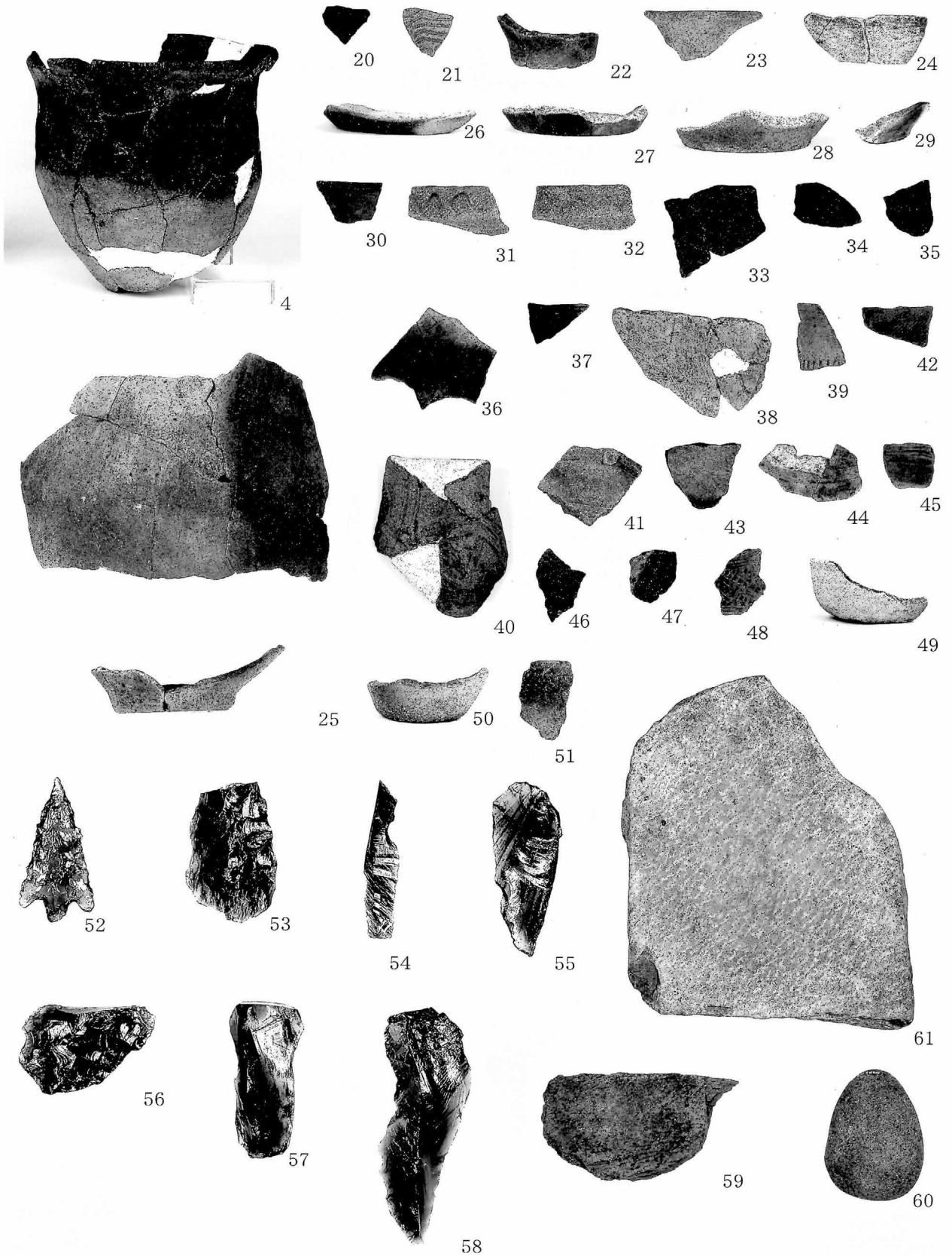


宫浦遺跡 I H13 号住居址

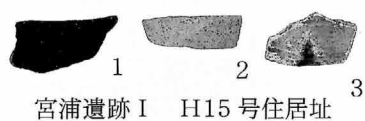


宫浦遺跡 I H14 号住居址





宮浦遺跡 I H14 号住居址



宮浦遺跡 I H15 号住居址



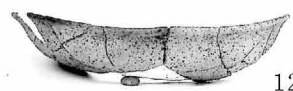
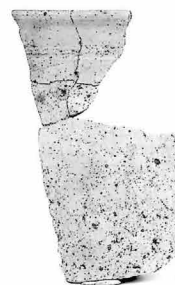
宮浦遺跡 I H16 号住居址



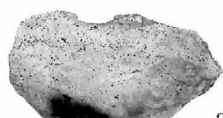
宮浦遺跡 I H17 号住居址



宮浦遺跡 I H18 号住居址

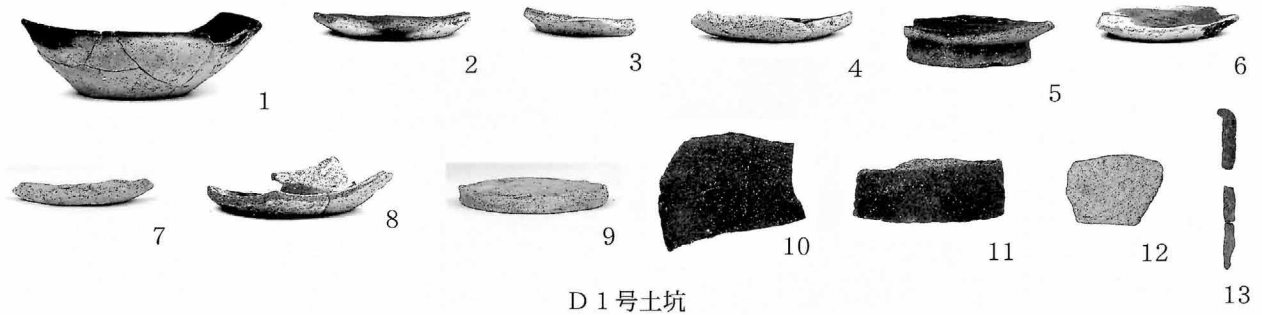


宮浦遺跡 I H19 号住居址

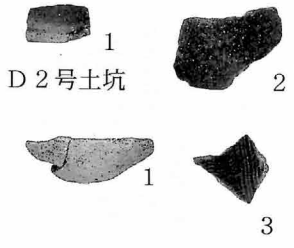


宮浦遺跡 I H20 号住居址

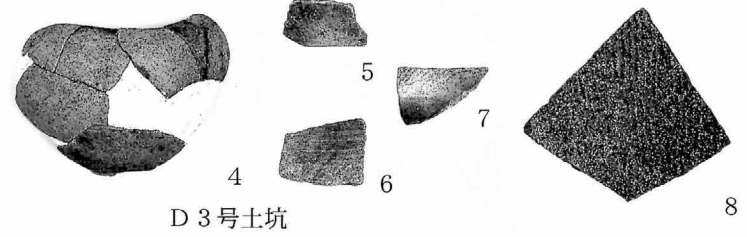
宮浦遺跡 I 掘立柱建物址



D 1号土坑



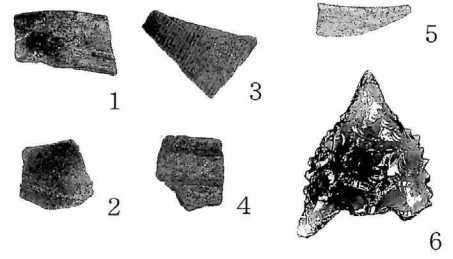
D 2号土坑



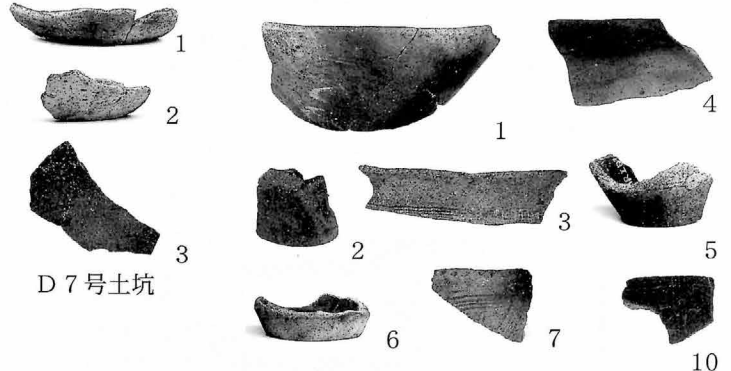
D 3号土坑



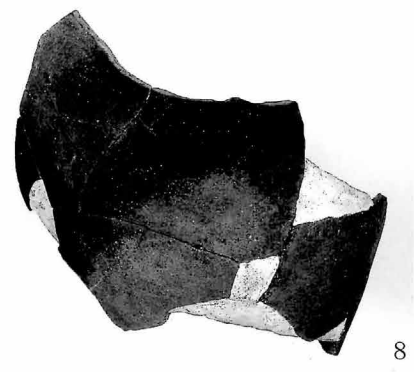
D 5号土坑



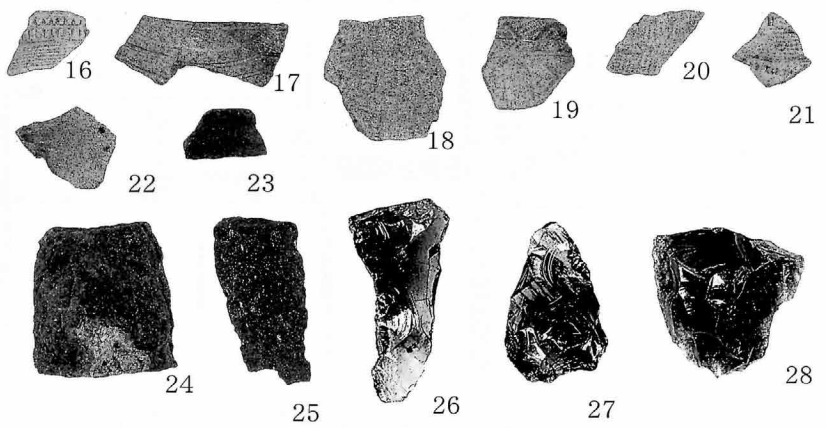
D 6号土坑



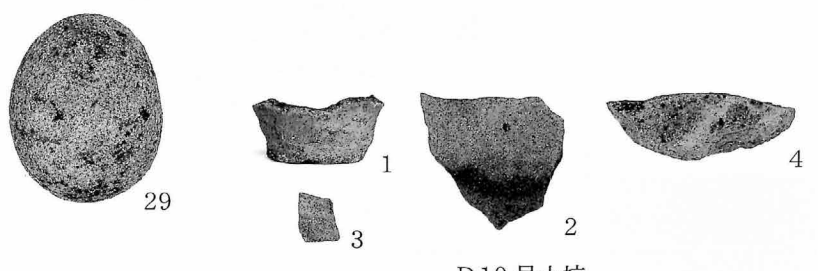
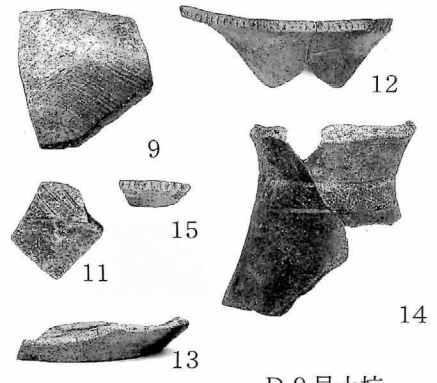
D 7号土坑

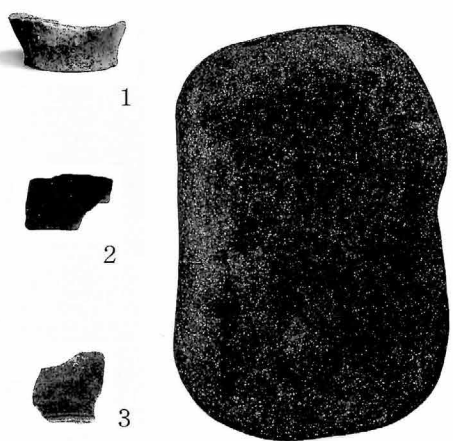


D 9号土坑

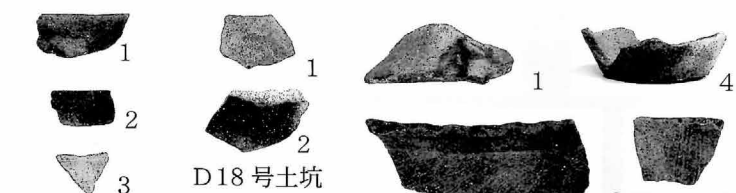


D 10号土坑

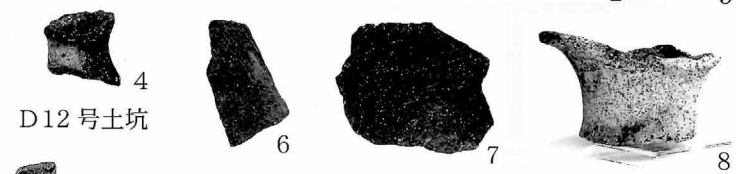




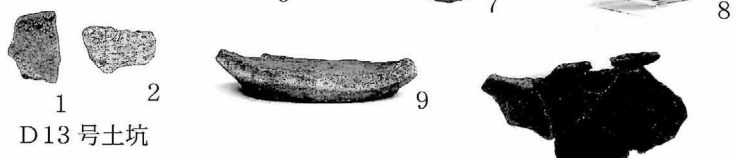
D11 号土坑



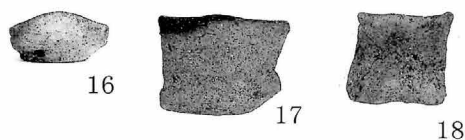
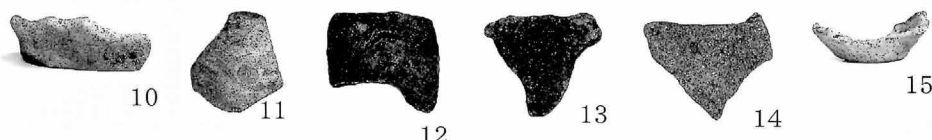
D18 号土坑



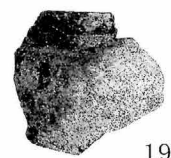
D12 号土坑



D13 号土坑



21



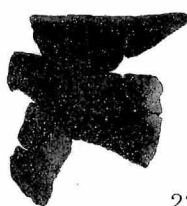
19



20



23



22



25



26



27

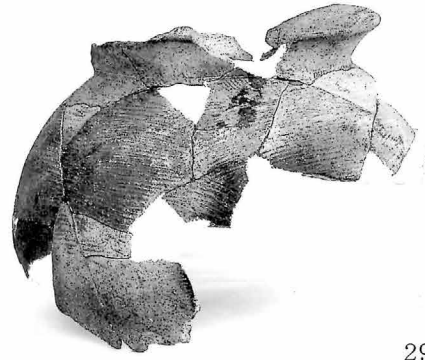


28



3

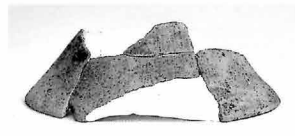
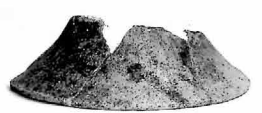
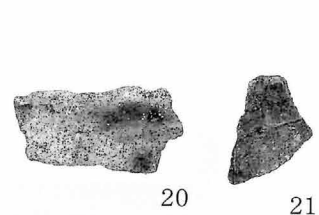
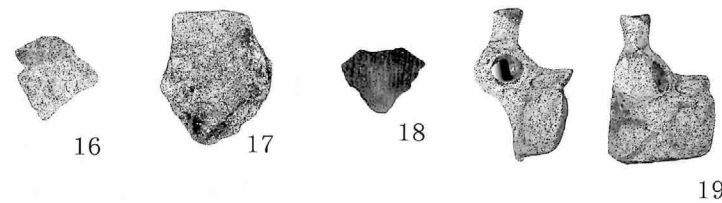
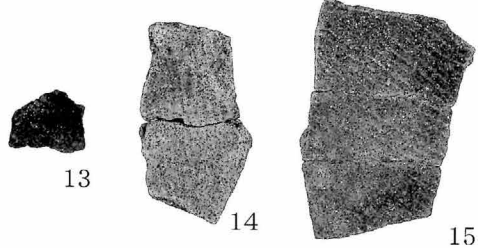
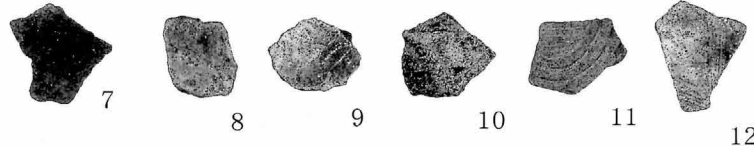
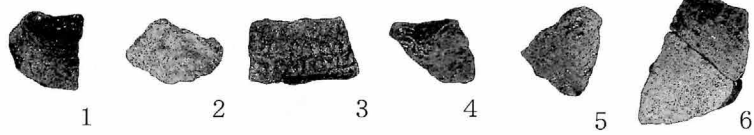
宫浦遗迹 I M1号沟址



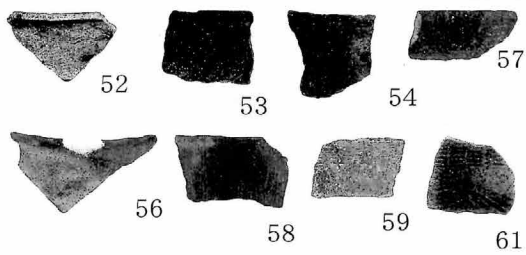
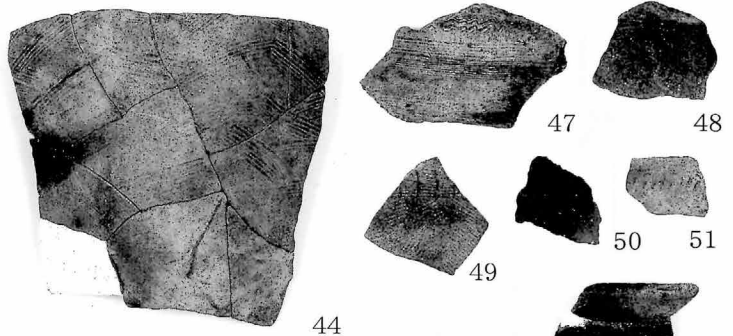
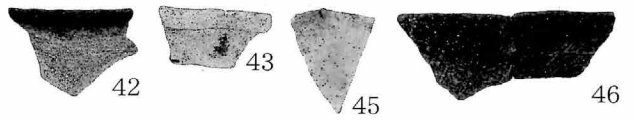
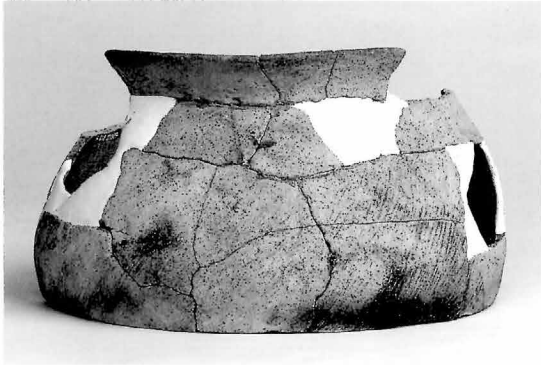
24



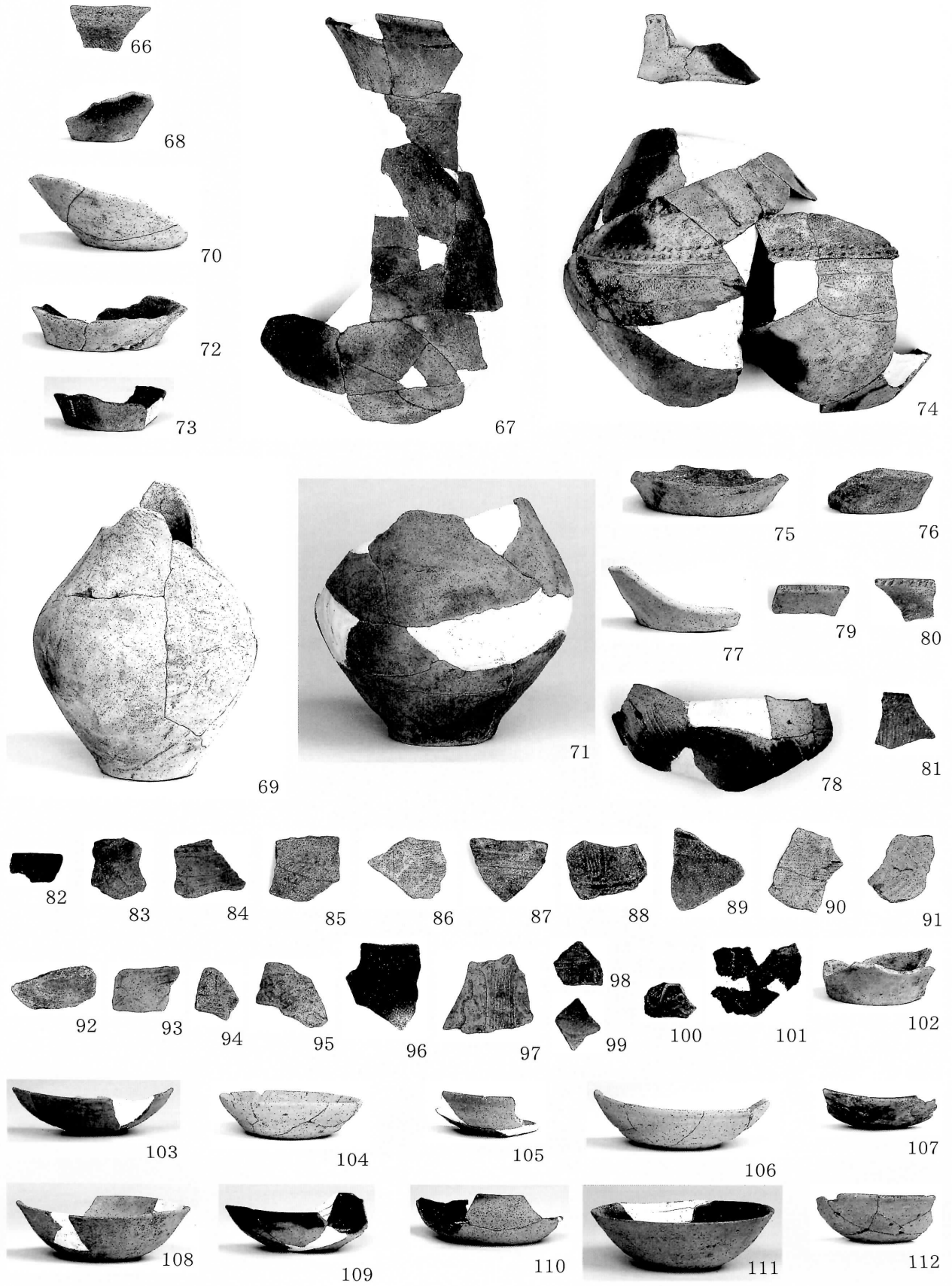
M 1号沟址

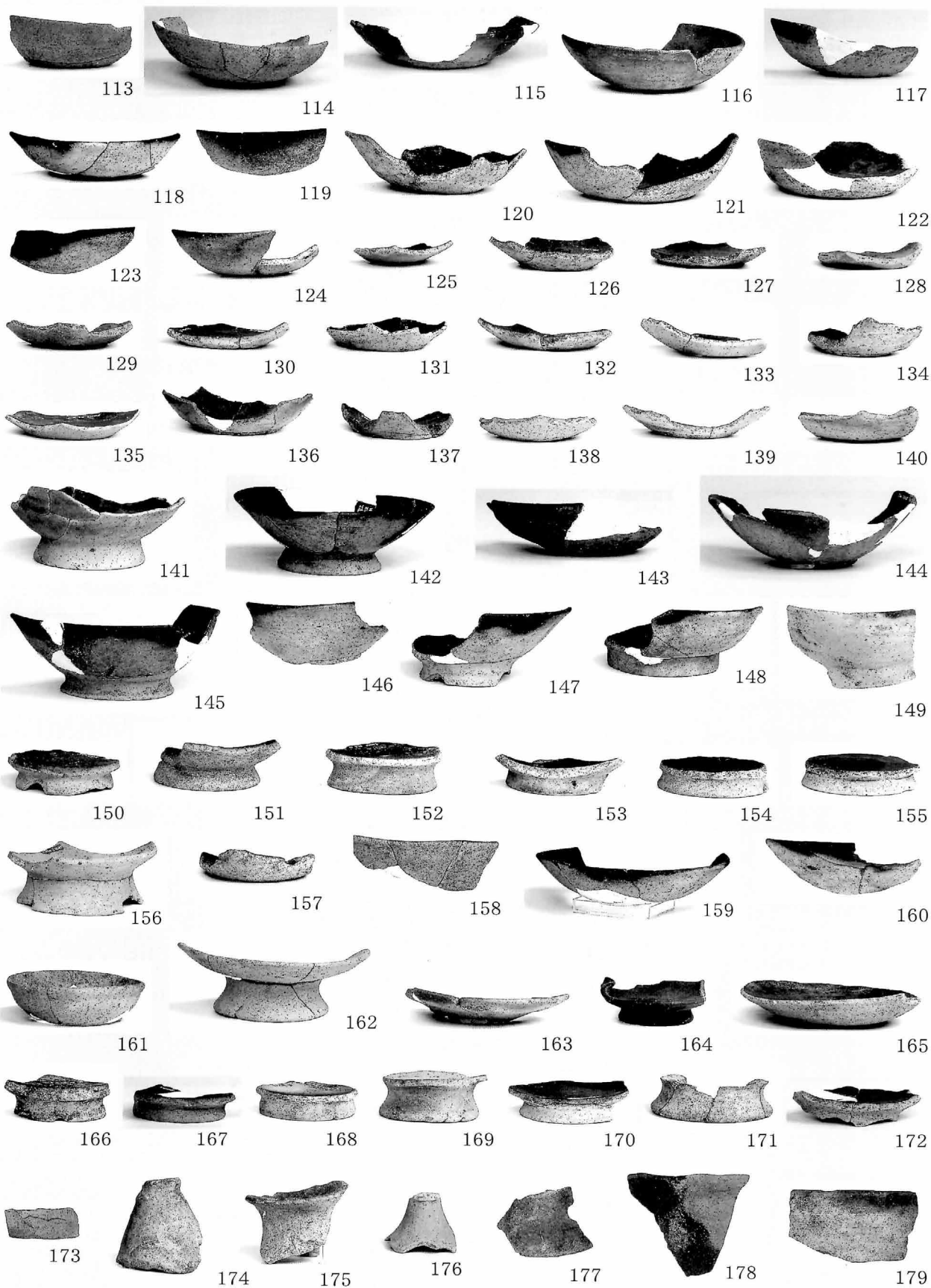


宫浦遗迹 I M 2号沟址



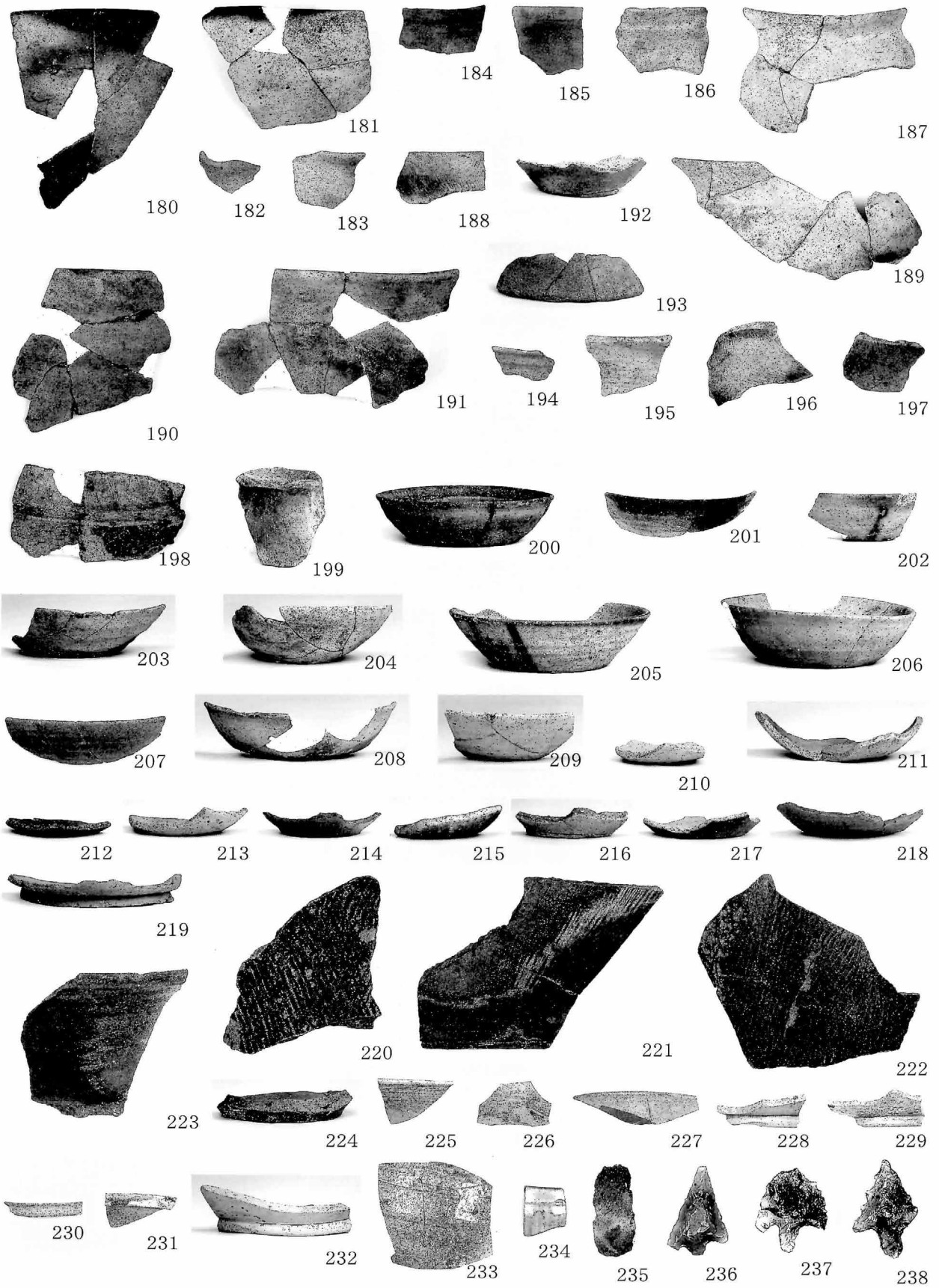
宫浦遺跡 I M2号溝址



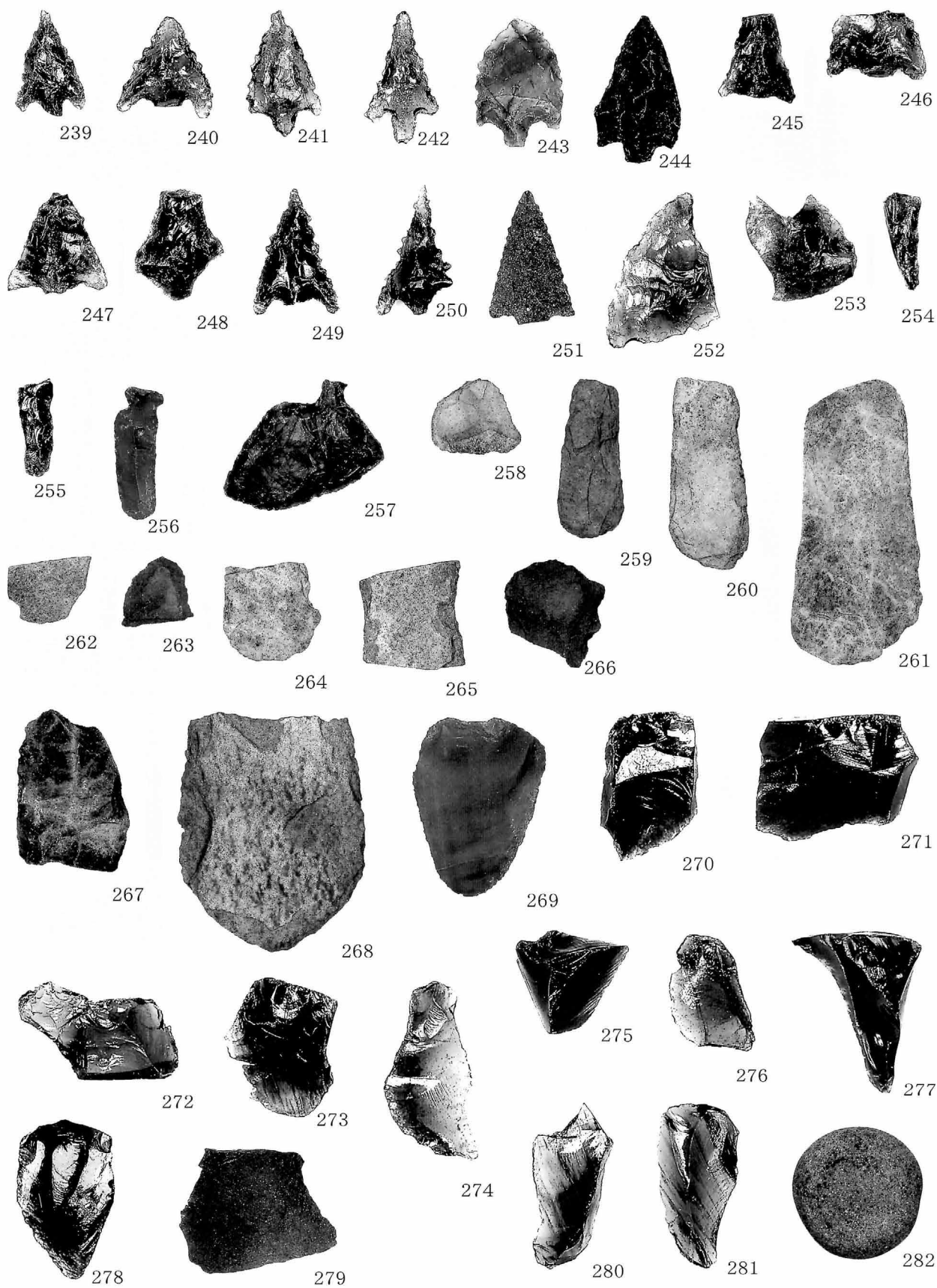


宫浦遗迹 I M2号沟址

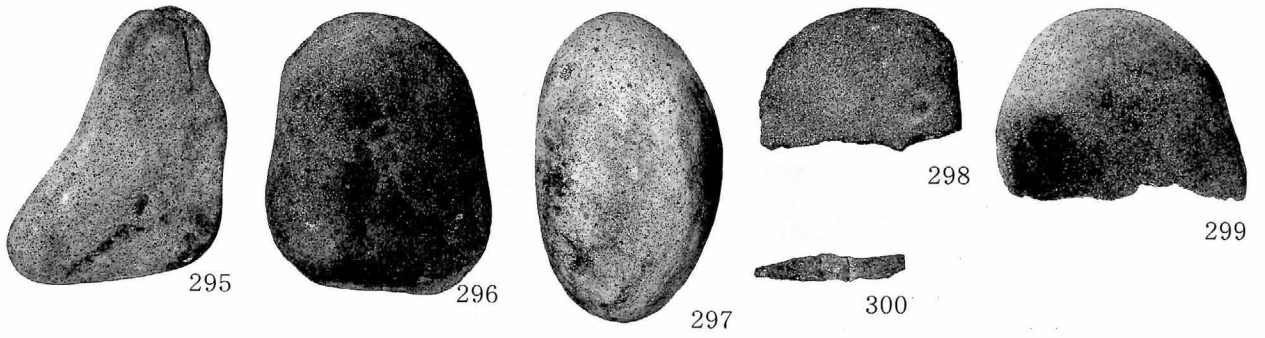
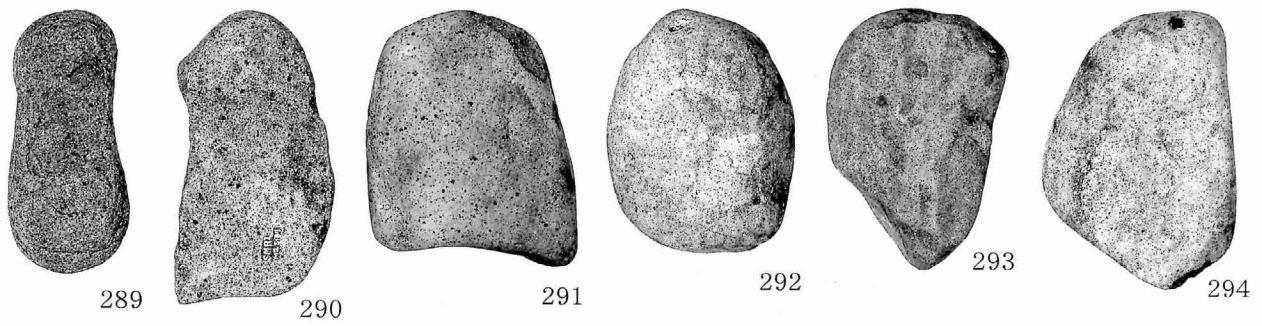
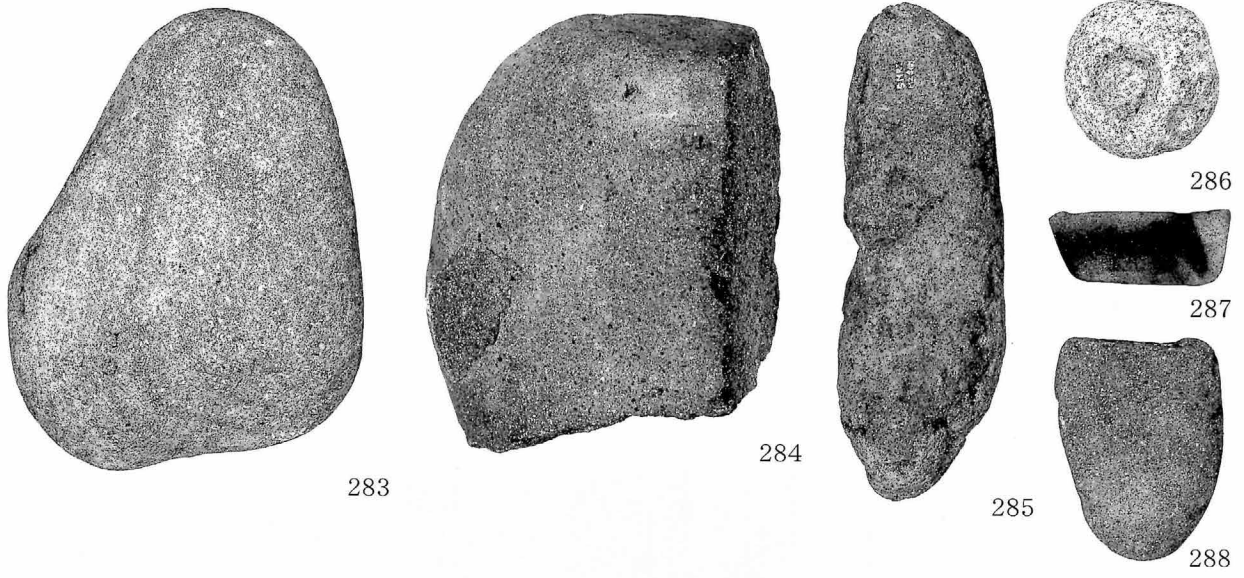




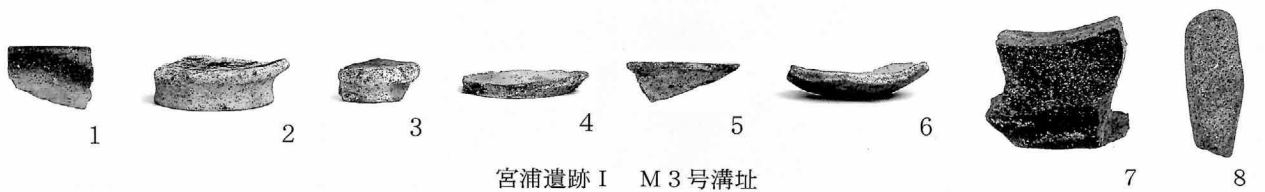
宮浦遺跡 I M2号溝址



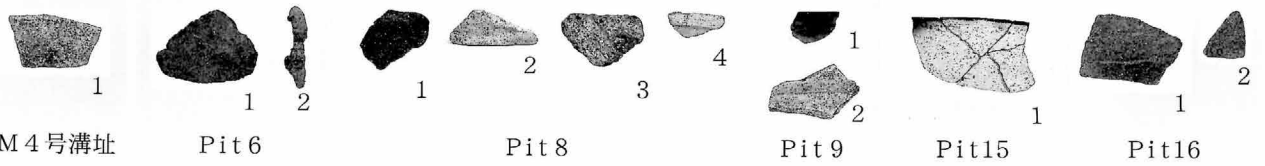
宫浦遗迹 I M2号沟址



宮浦遺跡 I M2号溝址



宮浦遺跡 I M3号溝址



M4号溝址

Pit6

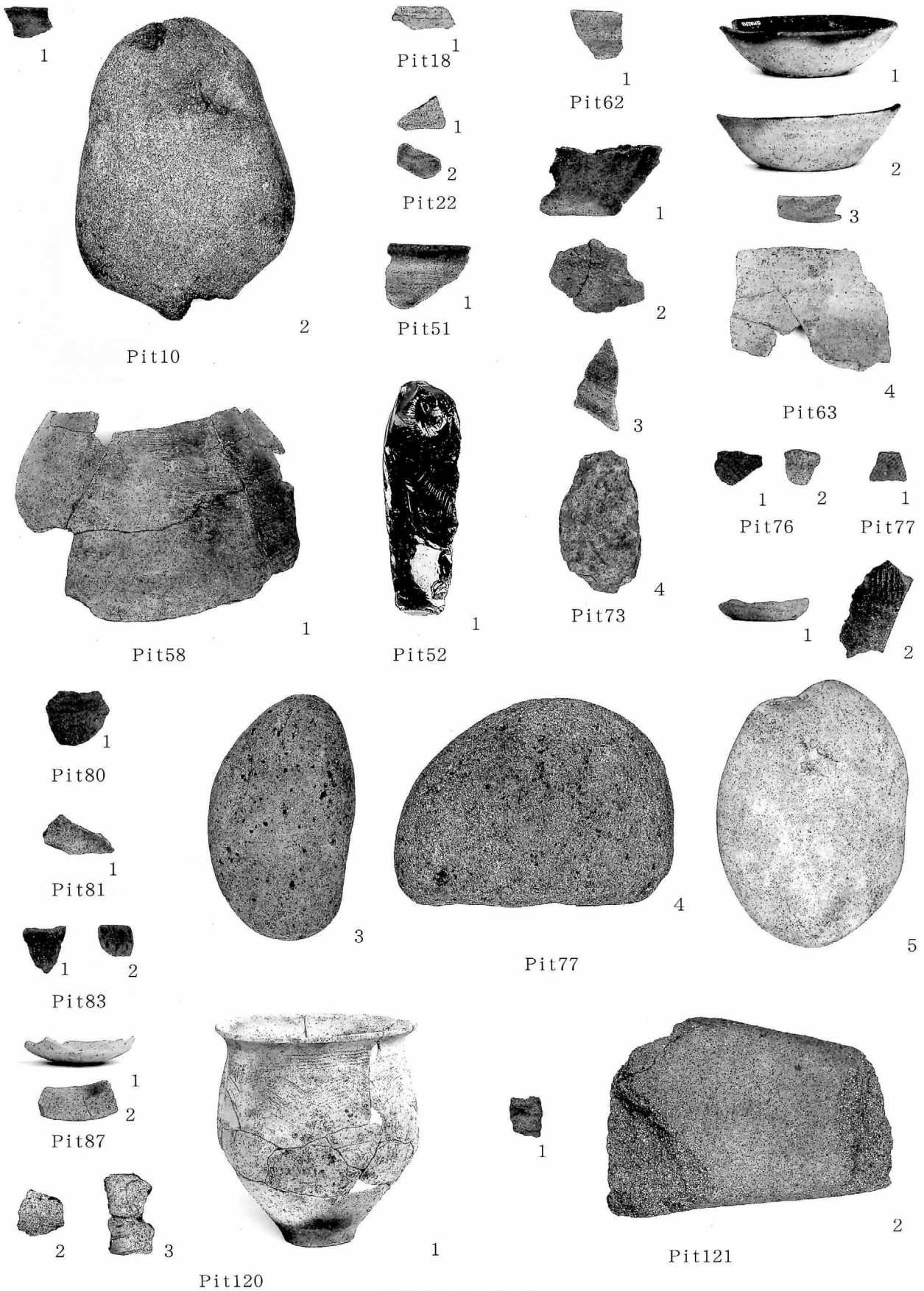
Pit8

Pit9

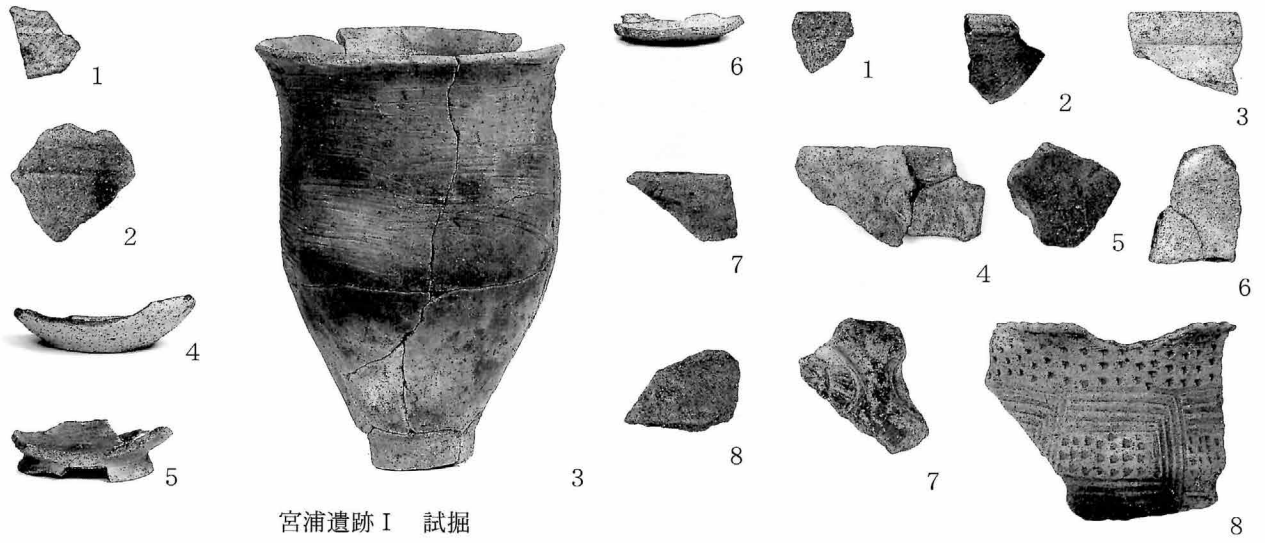
Pit15

Pit16

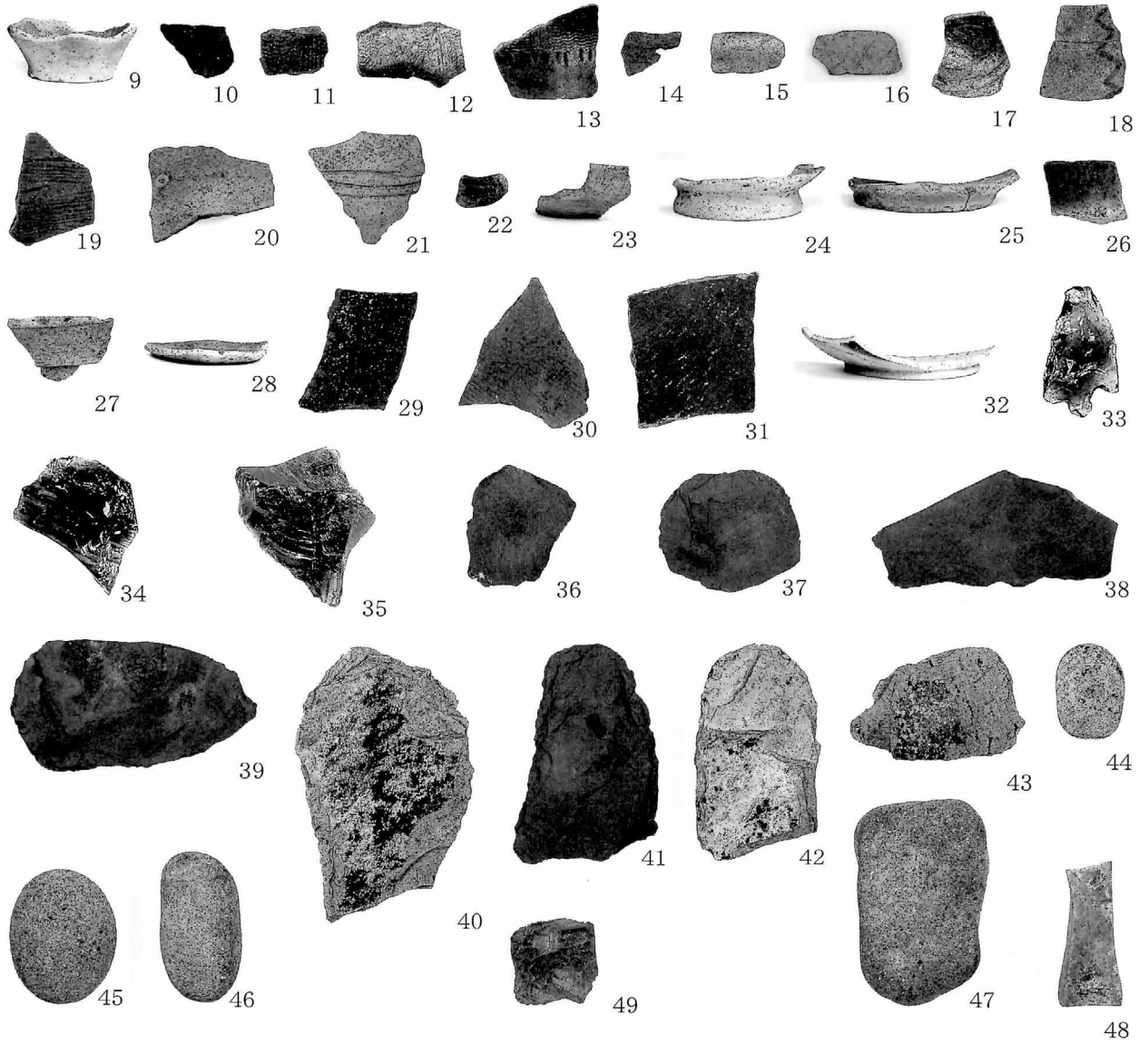
宮浦遺跡 I ピット



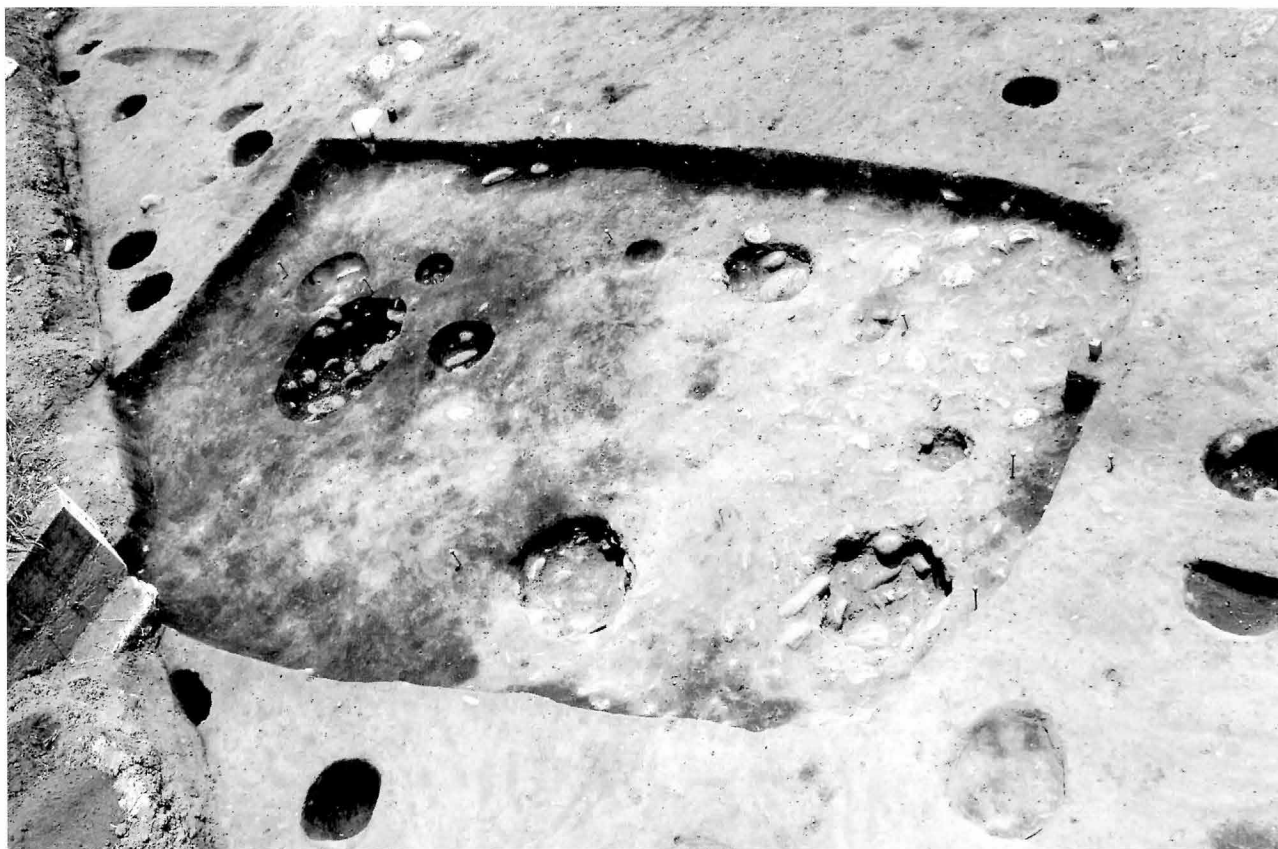
宮浦遺跡 I ピット



宮浦遺跡 I 試掘



宮浦遺跡 I 遺構外



北畑遺跡Ⅲ H1号住居址



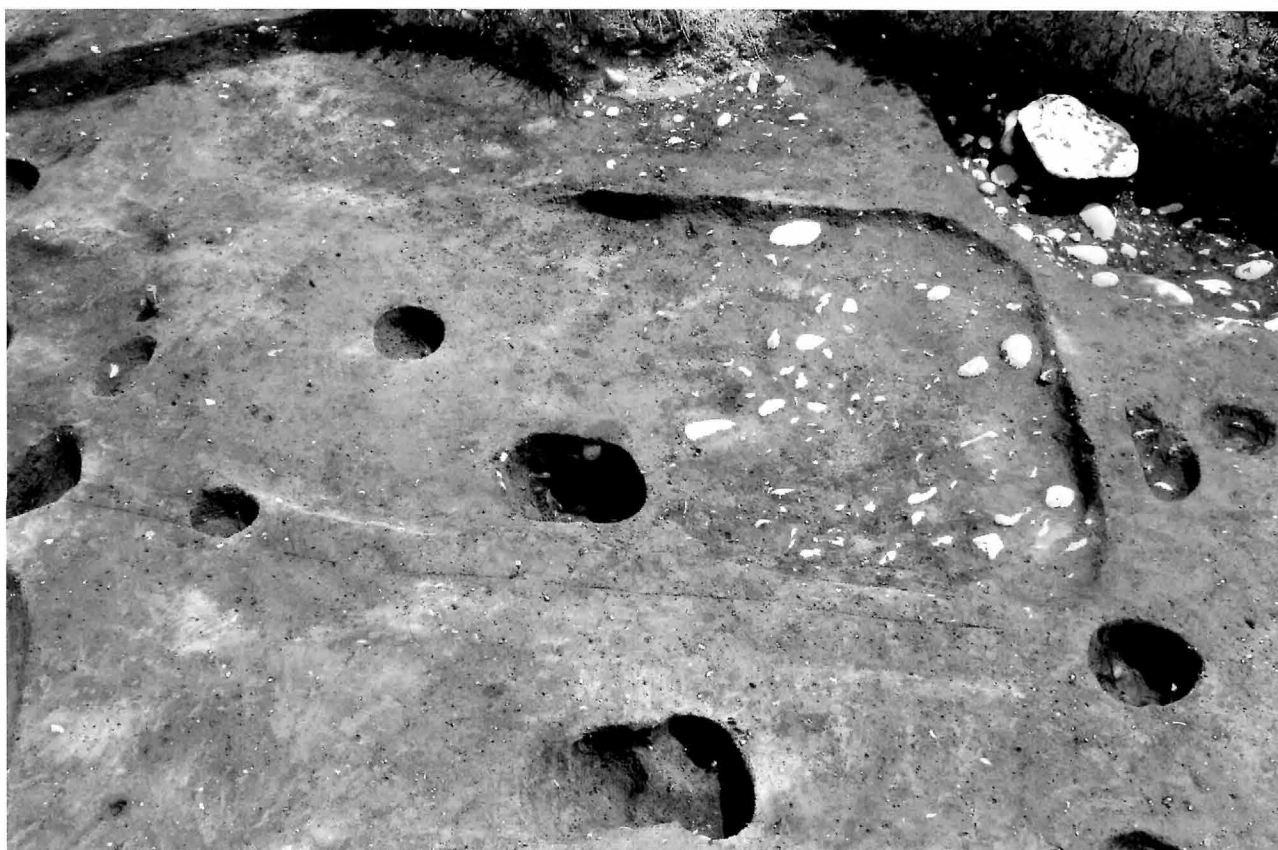
北畑遺跡Ⅲ H2号住居址



北畑遺跡Ⅲ H2号住居址カマド



北畑遺跡Ⅲ H3号住居址

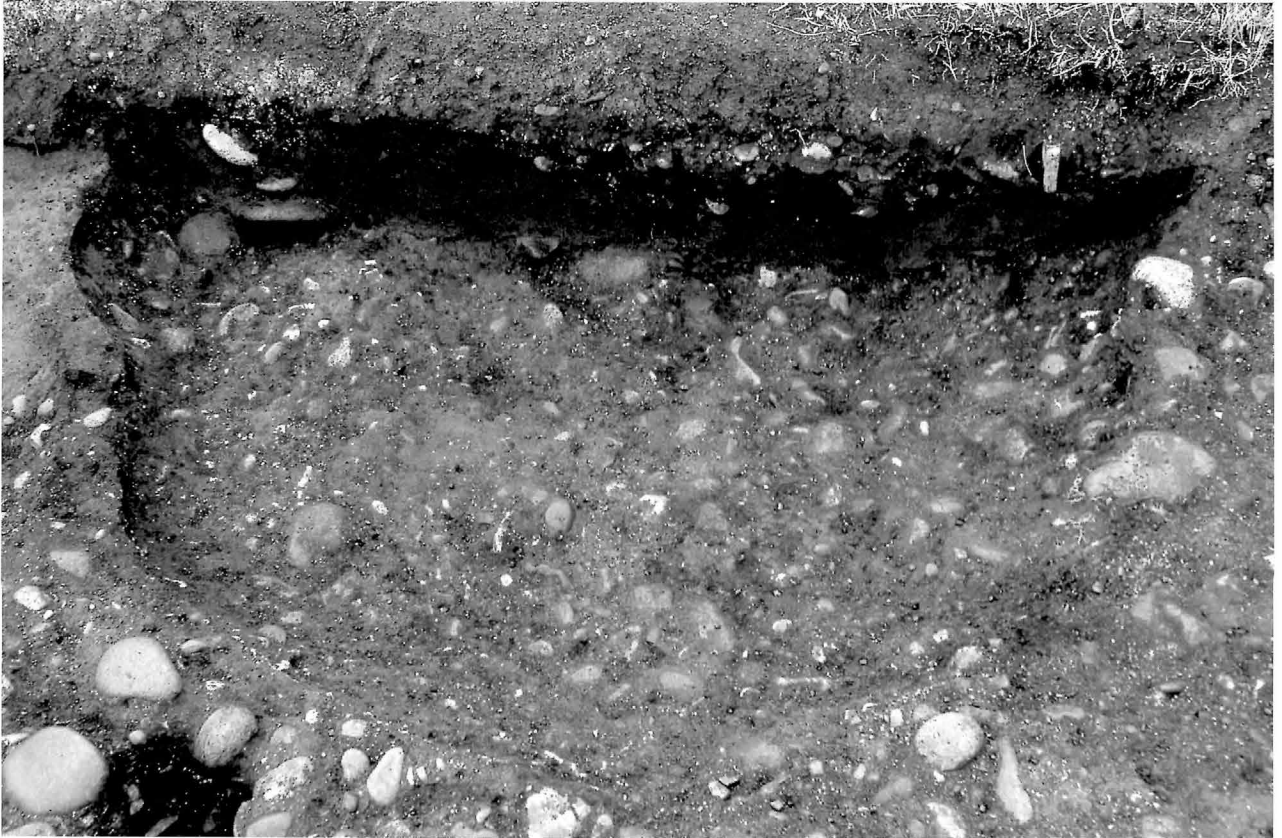


北畑遺跡Ⅲ H4号住居址・T a 2

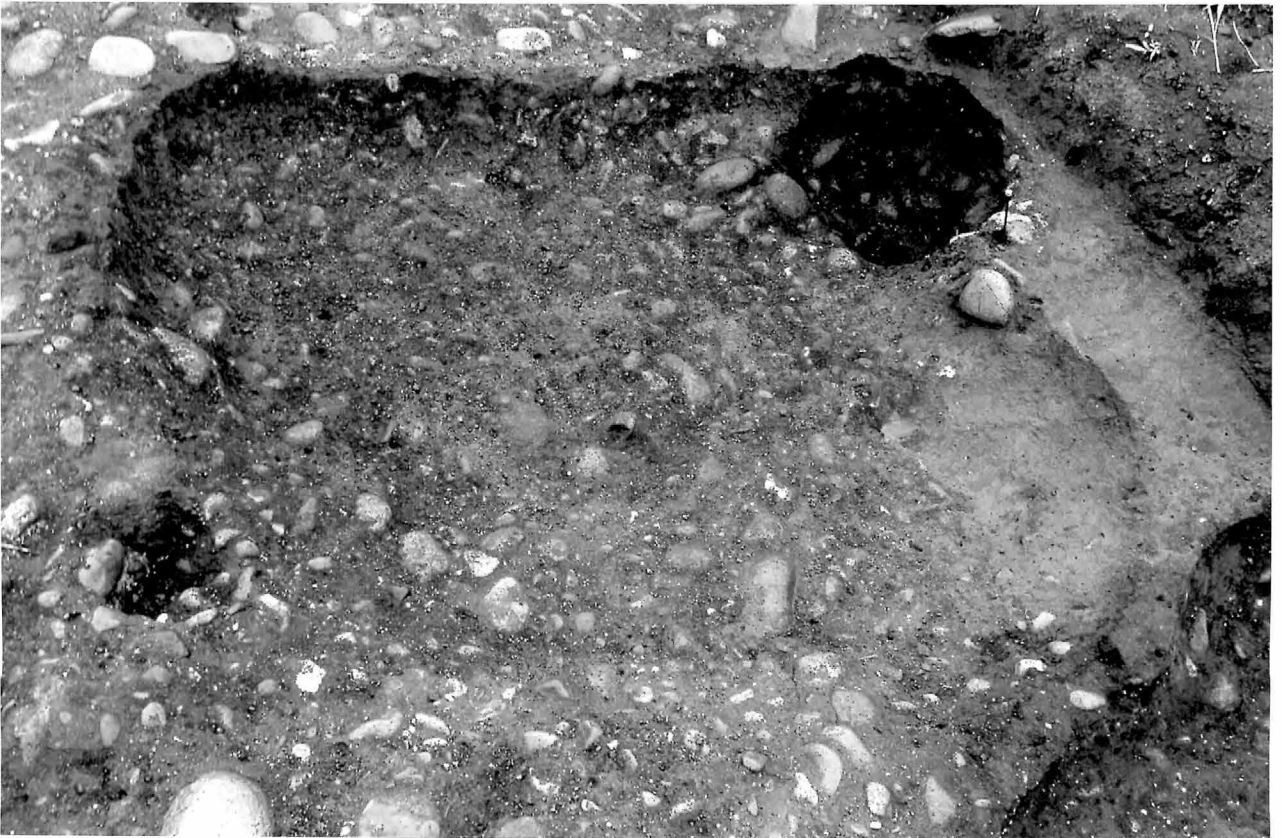


北畑遺跡Ⅲ T a 1





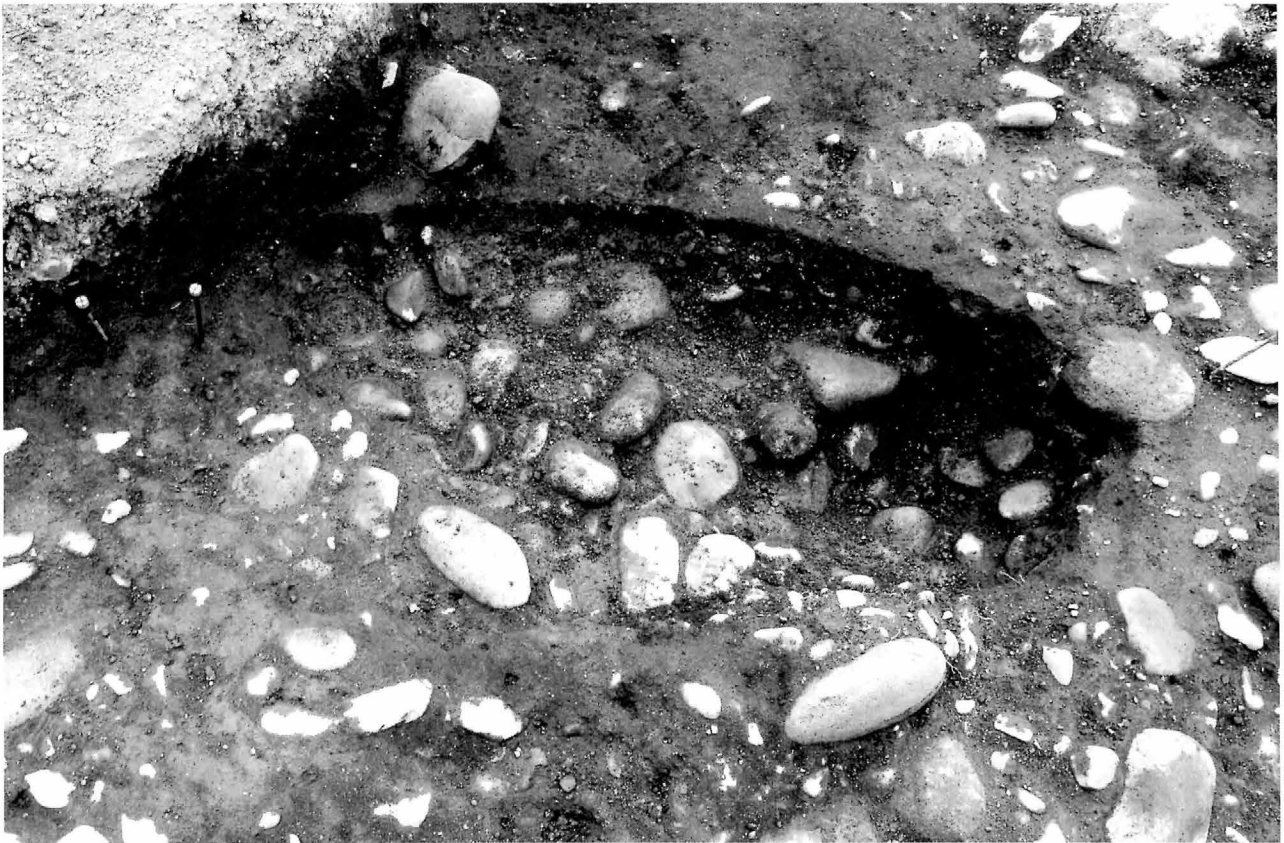
北畑遺跡Ⅲ D 1号土坑



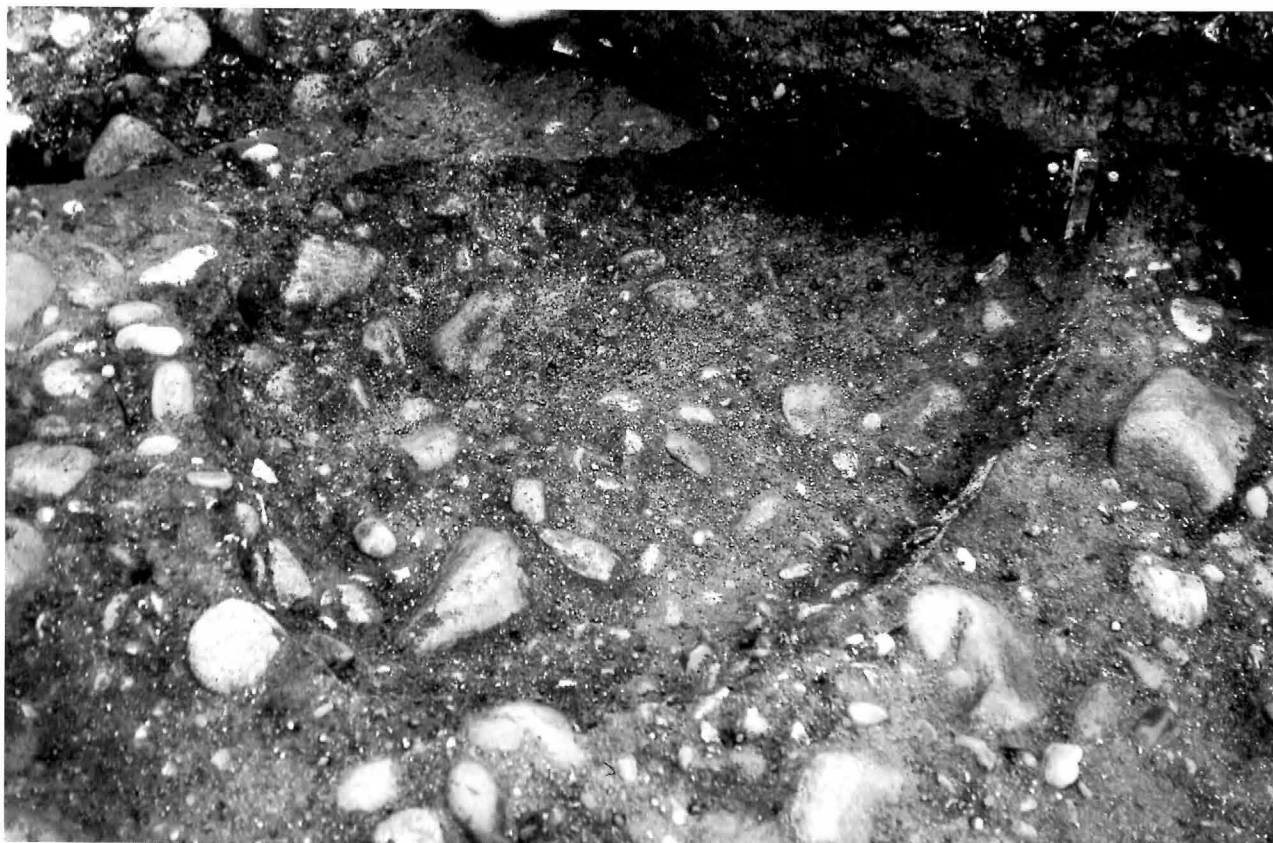
北畑遺跡Ⅲ D 2号土坑



北畑遺跡Ⅲ D3号土坑



北畑遺跡Ⅲ D4号土坑



北畑遺跡Ⅲ D5号土坑



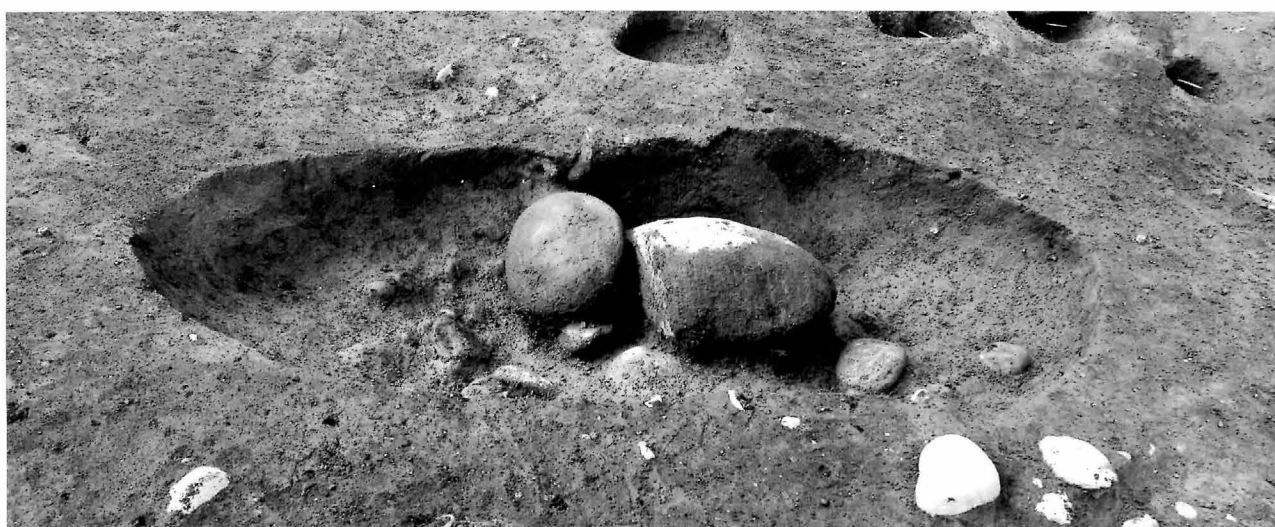
北畑遺跡Ⅲ D6号土坑



北畑遺跡Ⅲ D7号土坑



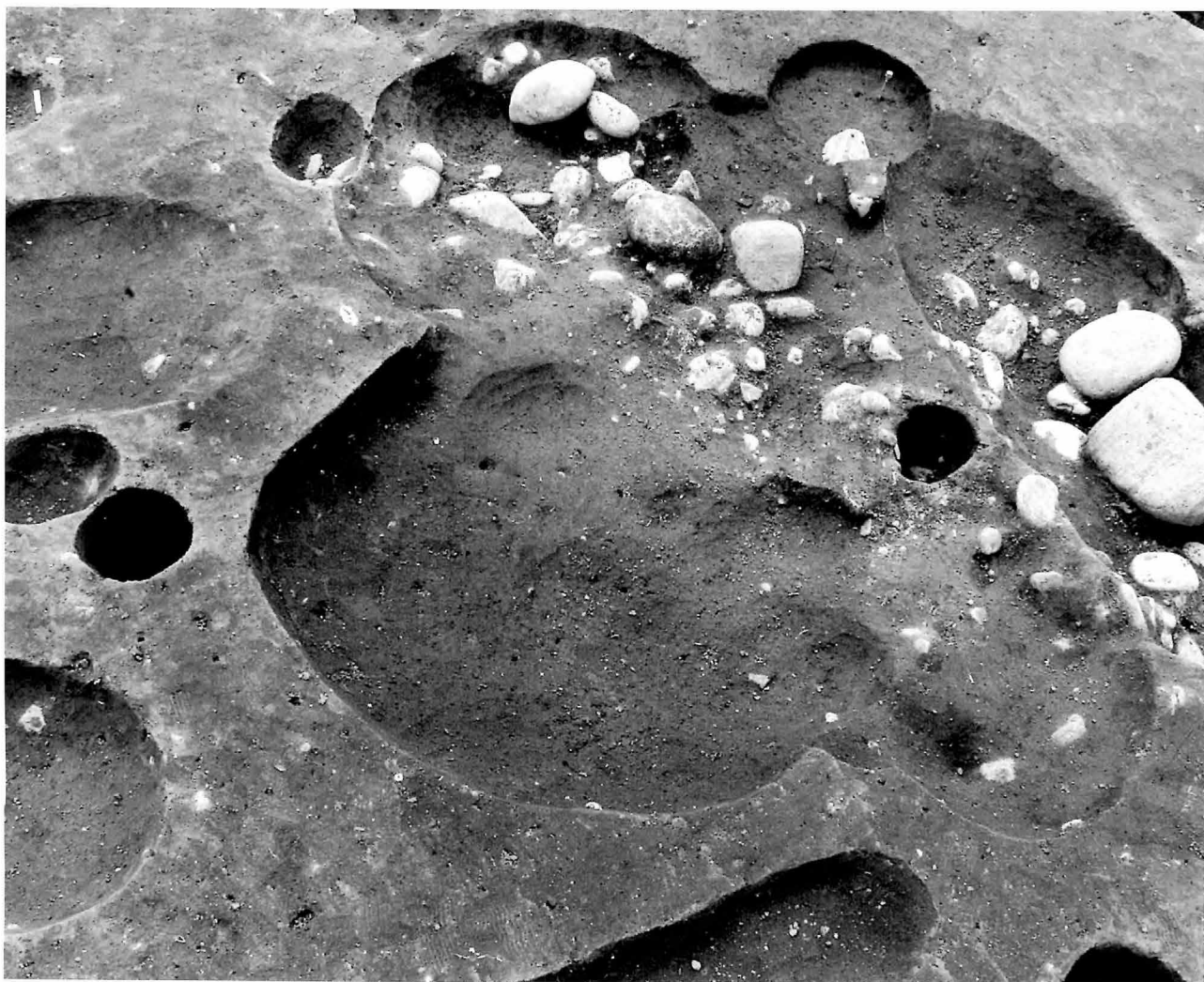
北畑遺跡Ⅲ D9号土坑



北畑遺跡Ⅲ D8号土坑



北畑遺跡Ⅲ D10号土坑



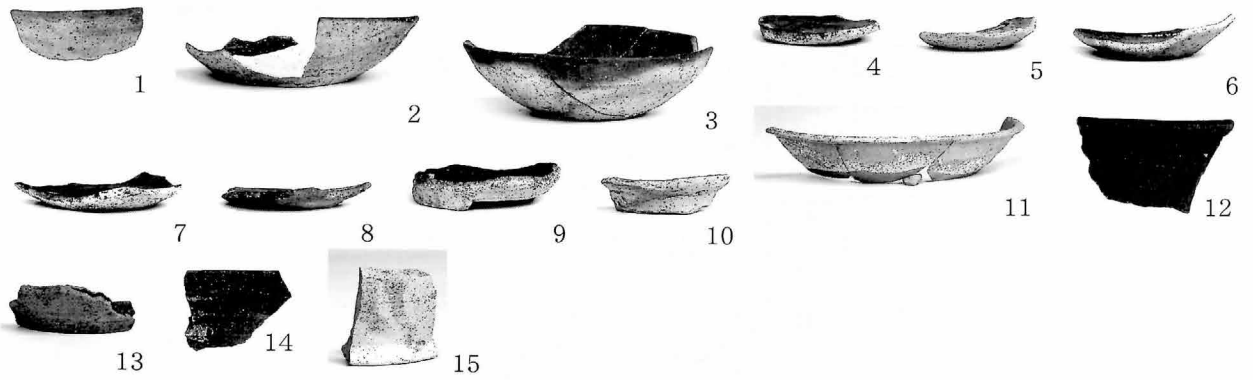
北畑遺跡Ⅲ D11号土坑



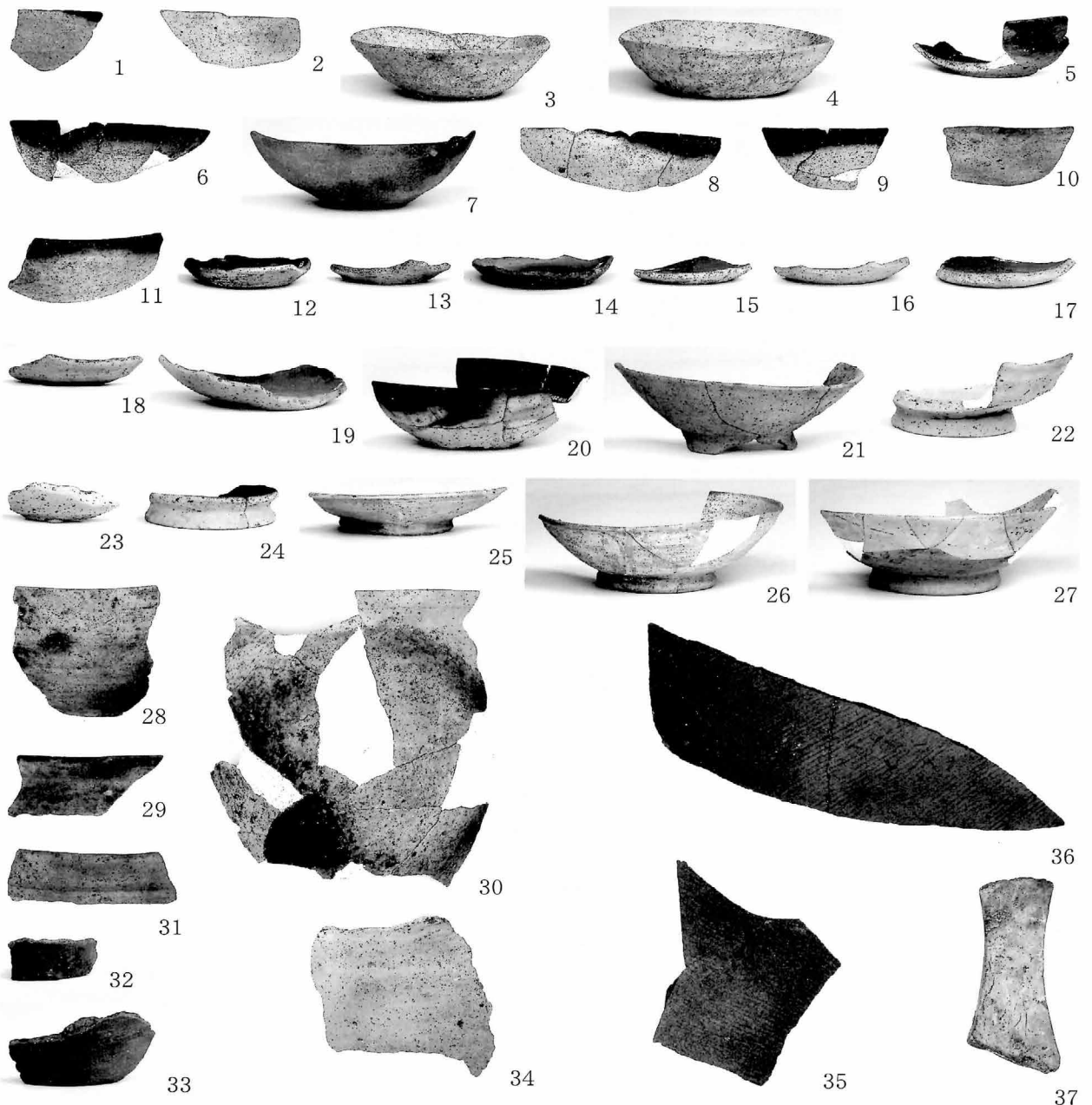
北畑遺跡Ⅲ 全景（西から）



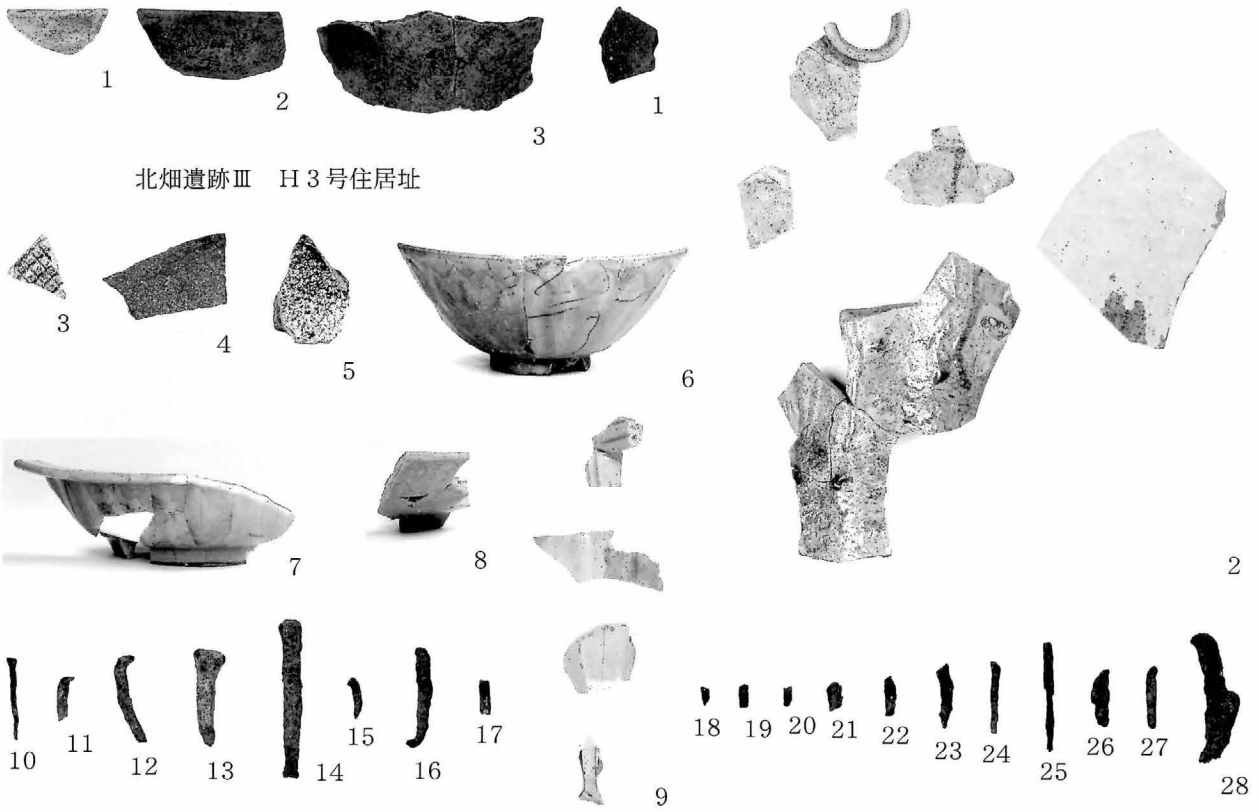
北畑遺跡Ⅲ 全景（南から）



北畑遺跡Ⅲ H1号住居址

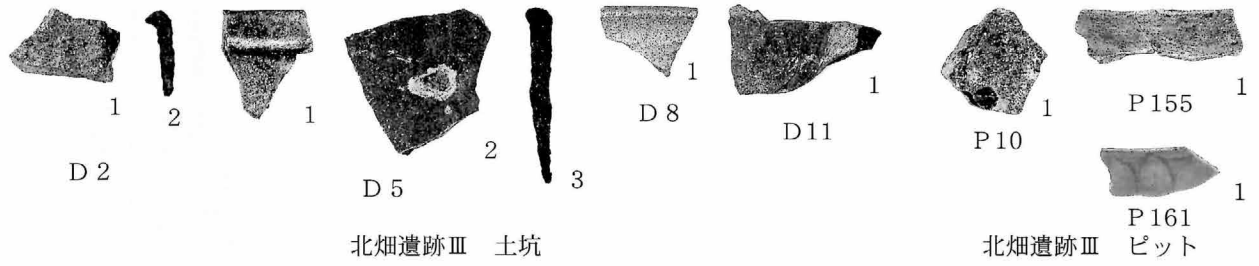


北畑遺跡Ⅲ H2号住居址



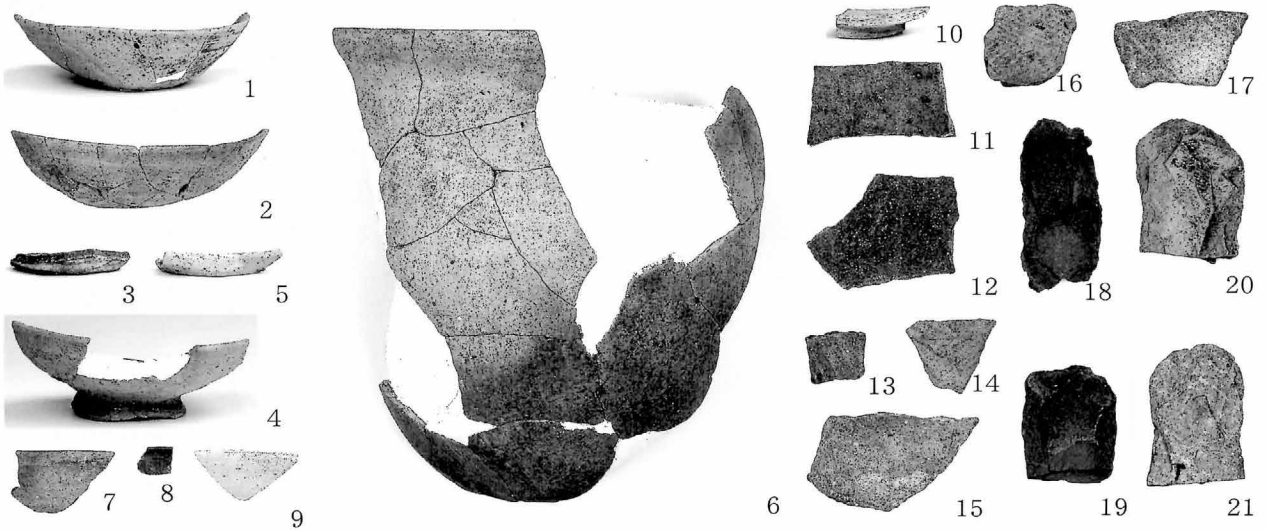
北畑遺跡Ⅲ H3号住居址

北畑遺跡Ⅲ Ta1号竪穴建物址



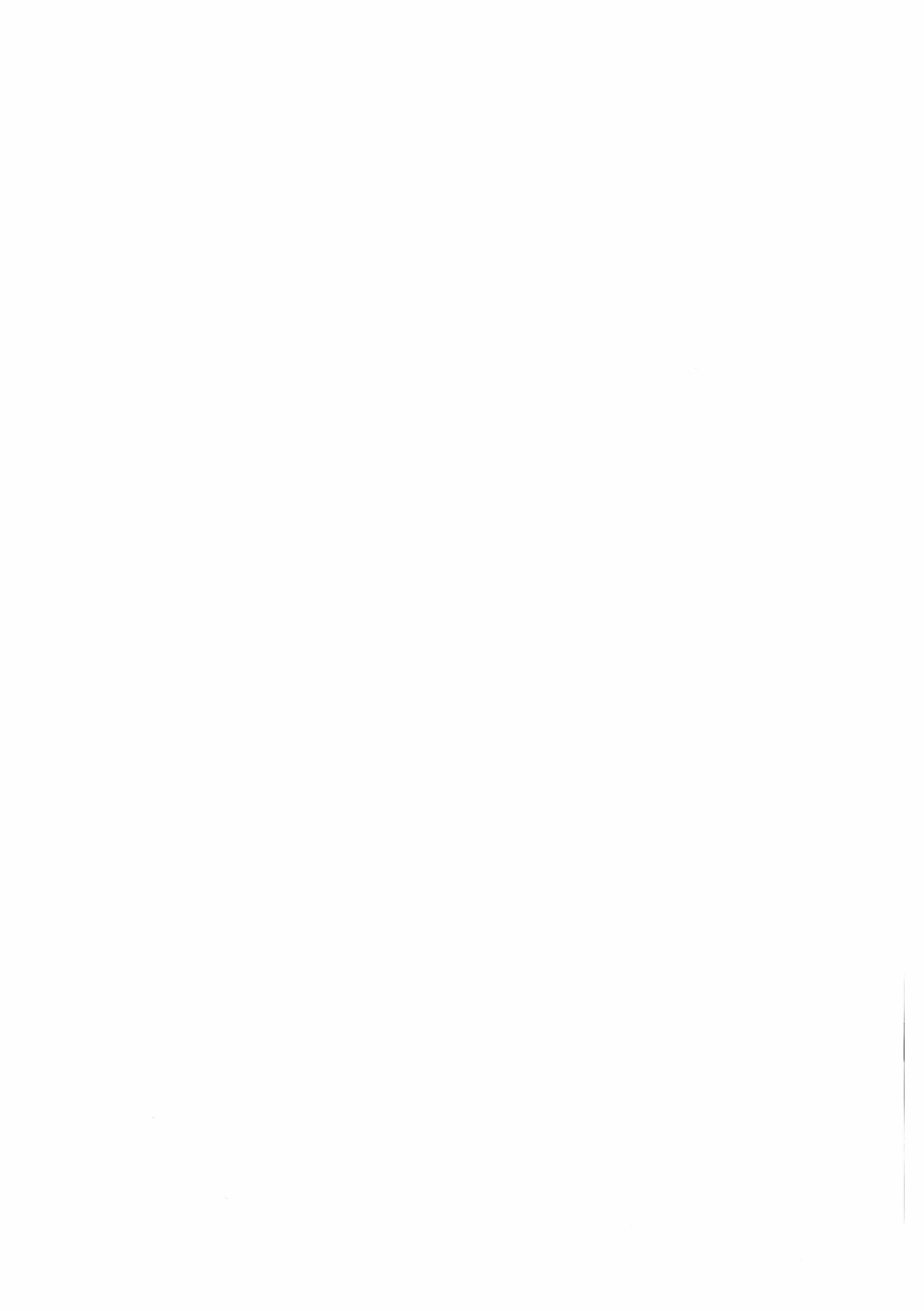
北畑遺跡Ⅲ 土坑

北畑遺跡Ⅲ ビット



北畑遺跡Ⅲ 遺構外出土遺物





## 報 告 書 抄 録

ふりがな 書名	いちみち　　へいまづか　　きたうら　　みやうら　　きたばたけ 市道遺跡Ⅴ、平馬塚遺跡Ⅱ、北裏遺跡Ⅱ、宮浦遺跡Ⅰ、北畑遺跡Ⅲ
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書 第219集
編集者名	小林真寿
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	20140331
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
ふりがな 遺跡名	いちみち　　へいまづか　　きたうら　　みやうら　　きたばたけ 市道遺跡Ⅴ、平馬塚遺跡Ⅱ、北裏遺跡Ⅱ、宮浦遺跡Ⅰ、北畑遺跡Ⅲ
ふりがな 遺跡所在地	ながのけんさくしいずみの・さくらい・ともの 長野県佐久市泉野・桜井・伴野
遺跡番号	417　　324　　318　　322　　321
北緯	36.14.9
東経	138.26.43
調査期間	20061002-20061212、20070416-20071016
調査原因	国道142号改良事業
調査面積	7,400㎡
種別	散布地・集落遺跡
主な時代 遺跡概要	弥生時代前期・中期、古墳時代前期・後期、奈良・平安時代、中世 遺構－竪穴住居址27(弥～平)、掘立柱建物址4、土坑35(弥～中)、ピット295(弥～中) 竪穴建物址2、溝址11、水田址1 遺物－縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器、石器、鉄器
特記事項	弥生前期～中期中葉の遺構・遺物が検出された。

---

---

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第219集

三千束遺跡群 市道遺跡Ⅴ  
平馬塚遺跡群 平馬塚遺跡Ⅱ  
北裏遺跡群 北裏遺跡Ⅱ  
宮浦遺跡群 宮浦遺跡Ⅰ  
北畑遺跡群 北畑遺跡Ⅲ

平成26（2014）年3月

編集・発行 佐久市教育委員会  
〒385-8501 長野県佐久市中込3056  
社会教育部 文化財課  
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953  
TEL0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限公司

---

---

